
「S」(エス)

智井 宇癒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「S」（エス）

【Nコード】

N05200

【作者名】

智井 宇癒

【あらすじ】

日ごろから小説「S」をかわいがって頂きありがとうございます

^^

読まれる側としましては、読者の男女比も非常に興味がある次第です。

前回公表した際（2006年）、には圧倒的に20代男性が多く、とてもうれしく感じた思いがあります。^^

今回も皆さんの感想をお持ちしています^^
よろしく願いいたします。

コンタクト

1

夜勤の夜

修一はアパートの一室で、たった今ドラマの最終話を終えたテレビ画面を見ながら呆然としていた。最近流行のトレンディドラマを修一は楽しみにしていた。毎週土曜の9時にコーヒーを飲みながら画面に向かっていった。

主演女優の“浪野みずき”はデビュー3年目の人気アイドルだ。今ではその演技力も注目され一女優の風格も見え始めている。お嬢様風貌で目に涙する演技が良く似合い、清楚かと思えば野原を素足で駆け巡る様なスポーツドリンクのCMにも登場したりと元気いつぱいの演出も見せたり・・・コンビニで立ち読みした雑誌のグラビアで目にしたときは大して感心も無かったが、そのハツラツさと笑顔が気になるようになり、いつしか彼女が出演する番組は欠かさず見るようになっていったのだ。

「・・・・・・・・」

コタツにうずくまるように入っていた修一はマイルドセブンを咥えようと中身を覗いたが、さっき吸った一本が最後だったと言うことに気が付いた。仕方なく灰皿の中から長めのシケモクを探し出して、焦げたタバコの先を指で筆取り、そこにまた火をつけた。

ドラマの中身は至って在り来たりな内容だった。ある有名な貴金属会社の社長令嬢と町工場で働く油まみれの青年が、親の反対を押し切り、いくつもの障害を乗り越え、最後には結ばれるといういわばトレンディドラマの王道とも言える内容であった。またドラマに出てくる油まみれの青年もこれまた美少年であり、修一はドラマの中の二人にはまっていた。客観的に、この年でアイドル女優を追い

かけている自分はアホだと自分で笑っているような気持ちもあった。毎回ドラマが終わると、自分なりに話の展開を予想した。毎週毎週、日が経つのがこんなに長いものかと思っていた。そのドラマが今日をもって最終回だったのだ。ドラマの二人はめでたくゴールインで終わった。さっきつけたシケモクのタバコが根元ギリギリまで燃えていた。

「クソ……」

修一はぼそりと言った。飲みかけだったぬるくなったコーヒーを一気に飲み干した。さっきまで食い入るように見ていたテレビ画面には、そのドラマに代わる次週土曜日の新ドラマの予告が映っていた。修一はもう土曜の九時にはまったく興味がなくなった。

仲代修一、三十歳。独身。人当たりは良いが、つまらない事もまじめに考える、俗に言う熱い男。友達の恋愛話も真剣に相談に乗り、高校時代では友達が彼女に振られたのを聞き付け、振った理由が納得いかないと言い相手の女性の家まで押しかけて話を聞こうとするような、一見危なくも見える男である。馬鹿が付くほど一生懸命で職場でも不器用で悪いことは悪いときっぱりと言い切ってしまうところかたまたまに傷。やさしさとはどういうものかを知ってるくせにそれを表現するのが下手な天邪鬼な男なのだ。

「なんか……せつねえなあ……」燃え尽きそうになっているオリジナル再生タバコをみて修一は言った。独り言にしては大きな声を出している自分がより一層切なさを増した。

タバコを消したときの煙が目にしみるのを右手でこすってこらえながら修一は浴室へ向かった。浴槽の折りたたみ式の蓋を開けて、洗面器でお湯を体に二、三回かけて浴槽にゆっくりと使った。熱めのお湯に一瞬こらえながら、やがて訪れる開放感を修一は待った。

「ふえ……」

目と瞑って入浴という習慣を根付かせた先祖に感謝した。口と鼻の間までお湯に浸かり目を閉じた。ドラマに出ていた浪野みずきの笑顔が自然と浮かんでくる。ドラマの中でのみずきは控えめな感じで、

それでいてすっかり自分を持っており、厳格な父親に彼との交際を反対され一度は諦めようとするが、家を飛び出し彼の元に向かうという行動力も兼ね備えた女性を演じてた。

ブラウン管から修一へ向けられる笑顔や涙顔、そして唇。ここまで来るともうオタクの世界と自分で危ぶみながらも、ブラウン管の中の彼女に引かれた。きつと日本中の何百人何千人の男が同じ思いを持っていることだろうと思うと、修一は自分を蔑んでしまう思いと切なさが入り混じり、なんとも気分の悪いものになっていた。浴槽から出て鏡の前に座る。いつも見慣れた顔がそこにはあつたが、今日は一段と冴えがなかった。

「これじゃなあ・・・」いつもの自分の不細工さを認めざるを得ないことに気が付き薄ら笑いを浮かべた。髪の毛の長さが二ミリ程度の坊主頭を最近シャンプーではなくボディソープで洗っている。あごには無精ひげを生やし、とても女性に一目おいていただけるようなビジュアルではない。

風呂から出ると缶ビールを空け、坊主頭をバスタオルでシャカシャカふきながらゴクゴクと二、三口食道へ流し込んだ。入浴する際に消したテレビはそのまま、修一はベットに向かい目覚ましをセットしようとした。修一は携帯のアラームを目覚まし代わりにしている。

「えっと、今は・・・十時か・・・」

家の掛け時計で時間を確認した後、タイマーをセットしようと携帯電話を開くと、一通のメールが来ていた。差出人は同じ病院で働く看護師、大村桃子からだった。

仲代さん。ドラマ良かったね！ハッピーエンドで終ったし。作者が作者だからってつきり彼女が死んじゃう結末かと思ったけど、二人が無事に付き合っていく結末で見てほしかったよ。でも仲代さん毎週楽しみにしてたから終わってがっかりかな？じゃあお休みZZZ・

・

浪野みずきが演じていた社長令嬢は体に病を患っていた。ドラマの原作者は必ず悲しみを綺麗に演出する作者で、毎回この作者のドラマはヒロインが亡くなるという設定が多かった。修一はフッフと笑った。修一は栃木県佐野市にある久明会総合病院に勤務する臨床検査技師である。この職種は世間的にはあまり知られておらず、修一自身、高校時代おしりにできた腫瘤を取るために入院するまでこの職種を知らなかった。検査技師とは患者から採取した血液や細胞の検査を行ったり、心電図や呼吸機能、超音波検査、細胞検査の検査に携わる専門技師の事だ。修一は臨床検査技師取得後、3回のチャレンジをして認定試験である細胞検査士を取得した。細胞検査士とは患者から採取した細胞をがん細胞か非がん細胞かを見分けるスペシャリストとされている専門職種である。修一は桃子に返信をした。

そうだね・・・来週から何を楽しみに生きていけばよいのかね・・・

すぐさま桃子からの返信。

仲代さん、アイドルに恋して許される年齢じゃないよ？。いくつだ
と思ってるの？ああキモイ！

桃子はたまに病院の喫煙所で修一とドラマの話をしていたので、修

一が浪野みずきをお気に入りである事は知っていた。いつもそれをネタに修一をからかっていた。

アホ！冗談に決まってるだろ！

大村桃子に凶星の事を指摘され反応的に返信した。病院の裏にある喫煙所で、昼休みに集まる看護師達とドラマの話をするのが最近の日課になっていた。男が女性と一緒にってドラマの話をしていることに修一自身なんとなく不自然さを覚えたが、彼女たちが浪野みずきを絶賛するので修一もみずきの一ファンとしてミハーハぶりを発揮していた。看護師たちはそんな修一を半分からかって楽しんでいた。

アホとは何よ！（笑）

桃子にそんな返信をもらい、まったく・と言わんばかりに軽く笑みを浮かべて修一はベットにもぐった。

「俺は・・・マジでやばいかも」

自らを笑いながら眠りについた。今年もあと十日で終わる頃だった。

翌朝、修一はいつものように出勤した。ロッカーで白衣に着替えネームプレートを首から提げ、院内PHSを持ちロッカーの扉に付いている小さな鏡を見た。

「さてと・・・」

一言つぶやくとロッカーの扉を閉め検査室へ向かった。機械の聞き

なれた音が響いている。夜勤明けの職員から深夜に来た患者の検体と申し送りを受け検査機器の校正を確認をし、九時から始まる外来患者の来院に備えた。校正とは各々の機械がそれぞれ正しい検査データが打ち出せるように、毎朝改めて決まった濃度のデータがきちんと出るように設定をすることである。例えば血糖値の値が予め九十と決まっているものが、昨日は90、今日は120、明日は250というように、ばらばらな値が打ち出されては、その機械で測った結果は不安定なデータという事になる。予め90の血糖値はいつ測定しても90でなければならぬ。検査機器はいくつもある。赤血球数、白血球数や貧血の指標であるヘモグロビン濃度等を測る機器。血糖値を測る機器。肝機能、腎機能、脾機能、血清中の脂肪各脂質成分等を測定する生化学測定機器。小規模病院とは言っても修一の検査室には一応の機械は揃っている。平日だろうが、休日だろうが規模が大きかろうが小さかろうが、全国の検査技師は決まって毎朝この作業を行っている。

久明会総合病院は年中無休である。二十四時間オープンで常に外科内科の医師を夜中も配置させ、検査科、放射線科も当直体制で夜中来る救急患者に対応できるシステムを持っている病院である。その日、修一は当直であった。今年もあと九日という頃になると、世間の慢性疾患を患っている人々は年末年始の準備もあるせいか、事前に薬を一週間分医師に出してもらうなどして年末に備えるため外来患者が減ってくる。修一の病院は開院してまだ二年目のため地域住民の久明会病院に対する認知度は低く、なおさらこの時期病院は閑散としてくる。

午前の勤務が終わり、職員食堂に向かう。職員食堂は最上階の6階にある。北に男体山、東に筑波山、南西に富士山と言う絶好のロケーションである。エレベーターで6階へ上った。扉が開くと食堂からほのかない臭いがした。

「おお・・・ラッキー」修一はつぶやいた。

今日はカレーライスだった。職員の食事は一食二百五十円。到底満

足もできないものもあるがカレーだけはほぼ全国共通な味である。カレーの日はちよつとうれしくなった。自分はやっぱり日本人だと改めて認識した。給水機からコップに水を注いでいる最中、背後に人の気配を感じた。

「よっ！」

振り向くと放射線科の綾部甫だった。

「おつかれ。いや？まいったよ。今日はＣＴフル稼働だよ・・交通事故とかも入ったりして・・そっちはどう？」綾部は給水機から水を注ぎながら言った。

「こっちは透析患者の定期検査さ・・まだ二十人くらいだからなんとかね。外来患者が少ないから何とか助かった。午前中来た救急車あれ事故だったんだ？」

「ああ。玉突きだつてさ。高速で５台。うち三人がうちに来てさ。

外来患者は少ないけど・・・救急は忙しい。何かバランス悪いな！

この病院は・・ははははっ！」

透析患者の検査は透析を行う前と行った後で検査し、前後の差を比較して、きちんと透析が行われ、血液中の物質がきちんと正常域になっているかどうかを調べるものである。

「それにしても最近患者減ってきたなあ・・・」お皿に業務用ジヤーからご飯を盛りながら綾部は言った。

「きつと年末のせいで外来患者が減ってるんだろうなあ・・インフルエンザの予防接種が無かったらもつと外来が減ってただろうね。」

先月の半ば頃からインフルエンザの予防接種が始まっていたのを綾部はそのときに気が付いたのだった。

「んじゃ予防接種が無かったらもつと閑散としてる訳だ・・・」

「でもさ、今年は出だし遅いよなあ。去年はもつと予防接種の患者が来るのが早かったような気がする。」皿のご飯にカレーをかけながら修一は言った。最後にコンテナーからサラダが入った小鉢を取ると二人は入り口に一番近い四人がけのテーブルに対面する形で座った。

「今年何気で暖かいしなあ・・・暖冬だね。」福神漬けをがりがり噛みながら綾部が言う。

「ノロウイルスで世間大騒ぎだから、今はインフルエンザが少なくていいかもな・・・。」修一が言う。医療系の職員は病気が無ければ用はなくなる。カレーを口に運んだスプーンを咥えながら食堂の一角に置いてある小画面のテレビに目を移した。そこには清涼飲料水メーカーのCMに出ている浪野みずきが映っていた。青空の下さわやかに製品を飲んでいる。修一はスプーンを咥えたままボーっと眺めていた。

「可愛いよなあ・・・お前浪野みずきが好きなんだよなあ？」綾部が薄ら笑いを浮かべ、修一を覗き込みながら言った。

「ドラマ終わっちゃってさ、楽しみなくなっちゃたんだよなあ・・・」修一は食べることを忘れてしまったように瞬きすることも無く画面をじっと見ていた。他のテーブルで食事をしている職員が修一を見てクスクス笑っている。周りの笑う声に気づき、修一はふと我に帰った。慌ててカレーを口に運ぶ。口の中でいつもよりジャガイモが大きめに切られているのを感じた。

「アイドル追っかける年じゃねえだろ？それより修一、最近ギターは弾いてないの？」

「全くギターに触ってないなあ。最近はメシ食ったらバタンキューだ。食ったら寝るだけ」笑いながら言った。

「そっか。実はさあ院内でバンド作ろうかって話が出てるんだ。お前やるだろ？」

「あ、そう。どうしょ・・・」修一は目を丸くして答えた。修一と甫は医療学校の頃からのバンド仲間でもある。臨床検査技師科の修一と放射線技師科の甫は学校入学時の新歓コンパで知り合った。お互い高校の頃にバンドをやっていた話で意気投合し、それからの付き合いだった。甫はベース、修一はギターをやっている。

「あれ。乗り気じゃない・・・。珍しいねお前。バンドの話くらいだったのに。お前がやる気を見せるの。」意外な反応に甫は困惑した。

「医事の松山にはもう話してある。奴はやる気満々だぜ。頼むよ修一。」

医事課の松山連は今年で入職三年目。久明会病院で唯一ビジュアルが整っており、何をやらせてもスマートにこなす女子職員の人気の的だ。当然ボーカル担当となる。多少の音程のブレは彼のビジュアルがカバーした。松山の入職した年の忘年会で一度バンドを組んで三曲披露したことがあった。そのときは松山の声かけでバンドが組まれた。彼は自分が相当イケテルのを自覚しているようだった。

「その話、どこから湧いて出たの？」

眉をひそめ、最後の一口を口に運びながら甫に問うた。

「池田……。」

「池田？誰だっけ……？」

「池田えりな。今年入った医事科の新人だよ。ほら、あの鼻筋の通った綺麗な子。ちよっとお水はいつてそうな。わかんる？あんな綺麗な子」

「ああ……アノ子ね……。」

二人はカレーを食べ終えテーブルで水を片手に歓談モードになっていた。

「でも何でまた池田さんが？」

「なんかね、職員から以前の忘年会の話を聞いたらしくてさ。松山さんが歌つてるところみたいなんですって直接言われちゃってさ」

「んで。お前返事しちゃったわけだ。」

「だってさ……」甫はそういうとコップから水をひと飲みした。

「お前もお人好しだなあ……かわいい子に弱い。」

「お前に言われたくないよ。」甫は少しムツとした顔で言った。

「松山の引き立て役か。まあ、いつか。最近面白いこと無いしね。」

「よし！じゃあ決まり！」

「で？曲は？何を？」修一がそういうと二人はお盆を容器返却口に運ぼうと席をたった。

「グレイ……。」

甫は言いにくそうに修一の顔色を伺うように小声で言った。

「は？・・・」

「だからグレイ・・・」

「俺たちがグレイなんかやれば病院職員どころか全国のグレイファ
ンから苦情の嵐だぞ！」

「どうせみんな松山しか見てないから大丈夫さ」

二人は笑いながらエレベーターへと向った。緑色の扉が開いて二人
を迎えた。修一は放射線科と検査科のある一階のボタンを押した。

「まあしょうがない。付き合っよ。」若干乗り気にもなってきた様
な言い回しで修一は答えた。一階に着くと修一は先に出るように甫
に手で促した。

「スコアブックは後で手配するよ。修一、今日の勤務は？」

「当直。お前は？」

「俺も。修一と一緒にじゃ今晚も眠れんか・・・」

「何だ、それ」

「お前知らないの？病棟の看護師の間では仲代が当直の日は救急入
院が増えるって噂されてんだぞ。」

「そんなに来てたかなあ・・・」

「ハハハ・・・まあ偶々だろ」

でも確かに自分の当直の日は入院が多いかもしれない・・・修一は
思い返していた。

「今晚暇だったらうちに（放射線科）お茶でも飲みに来いよ。杜仲
茶あるから。」

「杜仲茶？何でまた？」

「テレビでやってたろ。何やら無駄な脂質を便と一緒に体外に出す
って。お前検査技師の癖にそんな事もしらねーの？」

「そんなテレビみてねーし・・・って言うか別に興味ないし。それに
俺の場合、世の中の検査技師と違うから」

「何だよそれ。何が違うのさ？」

「字」

「字？」

「俺の場合検査技師の検は兼ねると書いて、査技師の部分は詐欺師と書くのさ」

「なるほど臨床兼詐欺師か。親父ギャグ炸裂だな。」笑みを浮かべて修一を見た。

「分かったよ。俺のせいで救急が来なかったらお邪魔するよ。」

「ああ。」

検査室の前で二人は手で合図をしながらそれぞれの持ち場へ戻った。

二人の心配は他所に、夜はとても静かだった。出番の無い全ての検査機器が静かに佇んでいた。その静寂を破って胸のポケットにあったピッチが鳴った。甫からの電話だった。

「修一、どう？今忙しい？」

「ああ。俺の当直のせいで大忙しだ。」

「マジ？外来も、救急も来とらんぞ？病棟の検査か？」

「嘘だよ。静かなもんさ。コレで俺の変な噂も無くなるってもんさ。」

「だな。暇なら来いよ。」

「はいはい・・・杜仲茶ね。杜仲茶。」

「あれ？何？その杜仲茶を馬鹿にしたような言い方？」

「嘘だよ。行くよ。暇だしね。」

「了解。」時計は夜の九時を回ろうとしていた。

（席をはずしています。御用の方は801まで）という不在の看板を検査室の引き戸の扉にぶら下げ放射線科へと向かった。久明会病院は百六十床の小規模の病院だ。大病院のようなセクシヨナリズムは薄く、わりと部署間同士、横のつながりがある。外来の看護師も病棟が忙しければ病棟へ駆け上がるし、その逆もある。比較的アットホームな病院だった。修一と甫の学生時代からの付き合いもあるが、検査科と放射線科は中でもつながりが強い。部署別の忘年

会や新年会などいつも一緒に行っている。

「お待ち度さん」修一が放射線科の扉を開けながら言った。

放射線科の中部屋の中央に机が四台並び、その周りに各機械の部屋がある。CT室、一般撮影室、MRI、そして制御室。中央の机で作業していても各機械をぐるりと見渡せるつくりになっている。四台の机は向き合うようにくっついて並んでおり、椅子も各机に一脚ずつ置いてある。入り口から一番遠い角の机に綾部ではない大村桃子が座っていた。

「あれ？どしたのお前。お前も泊まり？」

「あれ？来ちゃまずかったかしら？」

「いや別に構わんよ。ただまた一時間もお前のしゃべり聞くのかなあって不安になっただけだ。」

「何よそれ！」

仲代修一と大村桃子のいつもの調子の掛け合いが始まった。

「俺が呼んだんだ。」

パノラマ撮影室の中にある流し台の所から甫の声がした。机の並ぶ中央のスペースからは、甫の姿は見えない。奥から聞こえる甫の声と、修一桃子は会話をした。

「綾部さん、この人前からこんなに失礼なの？」桃子が修一を軽く睨みながら甫に問いかけた。

「違うよ！お前だからこういう話し方になるの！」修一が即座に答えた。

間髪いれずに甫が言った。

「そうだよ。修一は前から失礼な奴だ。」

「何だよそれ」

パノラマ撮影室から笑いながらトレイに三つのコーヒーカップを乗せてようやく甫が現れた。

「お待ちどおさん。はいはい噂の杜仲茶入れてきた」

「サンキュー。俺せんべい持ってきた。っていうかコレしかなかった。」

「ご馳走さまでーす。」

まだ空いてないしょうゆせんべいが二十袋はいった大袋を修一から取り上げ空けながら桃子が言った。

「何。お前は手ぶらなわけ？」修一が言った。

「何言ってるのよ？美女とお茶が飲めるのよ。ありがたく思いなさいよ。」

桃子が言った。もうすでにせんべいをほおばろうとしている。

「まあいいじゃないのよ」甫が割って入った。

「それにしてもお前たちお笑いコンビみたいだな。会話が絶妙だね。ははは」甫は半分呆れ笑いを浮かべながら言った。

「お前喧嘩売ってんのか？」

「そうよ！やめてよ綾部さん。せっかく綾部さんの入れてくれたお茶まぶくなっちゃう」

ぼりぼりとせんべいを砕く音を立てながら桃子が言った。

「ありやありや、それは失礼仕った。」ニコニコ笑いながら甫は言った。

「検体は出て来てないけど、夕診帯って何か来たの？」

せんべいの袋を空けながら修一は桃子に聞いた。

「うん、風邪で熱発が一人来ただけ。採血も無ければ、当然レントゲン撮影もオーダーは無し。」桃子が言う。

「そっかぁ・・・まあこんな夜もいいわな？」甫もせんべいを口に入れた。

「まあ知名度が上がるまではこんなもんだろうなあ」修一が言う。

「仲代さんそういえばドラマ終わっちゃったね。良かったよねえ。

ハッピーエンドで」

一足先に一袋目のせんべいを食べ終え桃子が言った。

「なんの話？」

言った後に甫は自分の入れた杜仲茶を啜った。

「ほら、あれよ。仲代さんの好きな浪野みずきのドラマ。綾部さん見てなかった？」

「ん。ラブコメだろ。俺は見ないなあ・・・修一が楽しみにしてたのは知ってたけど」

笑いながら甫が言った。

「俺、毎週見てた！キモイと言われようが何しようが！みずきはかわいい！」

修一は大きくうなずきながら言った。

「うん、それは私も認める。彼女結構女性ファンも多いと思うよ。嫌味無いし女性から見てもかわいいと思うもん。」

幾分恥ずかしさを感じた修一は席を立ち、パノラマ撮影室入り口の脇にあるパソコンが置いてある机の椅子に座った。

桃子がドラマのあらすじを甫に話しているのを横目に、脇にあったパソコンからインターネットの検索サイトにアクセスした。基本的には就業規則では院内のパソコンの個人的使用は禁止されてが、修一はたまにネットで最近のニュース、スポーツ、芸能トピックスなどカチカチクリックして覗いていた。一方的な桃子のおしゃべりが始まっているのをよそに修一は画面中のある見出しに目をやった。そこにはこう書いてあった。

“人気ドラマ「青いクリスマスストーリー」最終回。視聴率四十八%！”

修一は思わずクリックした。サイトにはドラマの名場面の写真をまじえて番組のストーリーや主役の浪野みずき、恋人役の三条幸太郎の撮影中のエピソードなどを載せていた。修一はドラマのさまざまな場面とそこに記されてあるエピソード記事の内容を頭の中でを一致させていた。甫は桃子のしゃべりに完全に捕まっている。サイト記事を全て読み終えてふと画面左すみを見ると「浪野みずき初主演映画撮影決定」と記されていた。修一はそこにカーソルを合わせてクリックした。するとその映画の公式ホームページへと画面が変わった。真っ黒な画面にしばらくすると銀色の文字で書かれた映画のタイトルが浮かび上がってきた。タイトルは「僕と彼女と地平線と・・・」と書いてあった。タイトルが全て浮かび上がると雪の結晶が画面上からパラパラと降り始めやがてそれが終わるとサイトメニュー

ーがタイトルと同じように、またゆつくりと浮かび上がってきた。メニューは他の映画の公式ページとあまり変わりは無かった。修一はまずメニューの中キャストと書かれているロゴをクリックした。主演は浪野みずきで、恋人役であろう準主役はまた三条幸太郎であった。なるほどドラマも映画に繋ぐ為の配役かと素人の推測をめぐらせた。浪野みずきと三条幸太郎は男性雑誌や女性のファッション誌等でも引つ張りダコの人気アイドルだ。当然視聴者は増えると思されれば、所属プロダクションに依頼が行くものであると修一は思った。まだホームページ全体が完成しておらず、映画の予告編はさすがに「工事中」と記されてあった。次に「ストーリー」の文字をクリックしてみた。

不治の病の彼女が一番綺麗な夕日が沈む地平線を見たいと彼に求める。彼は彼女を病室から連れ去りその場所へ連れて行く、というものらしい。おそらくそこで彼女は死ぬのだろうと修一は思った。あのドラマの二人がこの役を演じるのならさぞ綺麗な映画になるんだろうなと修一は思った。映画の試写会は無いかとメニューにまた戻り画面を見回した。するとメニューの一番右側に「募集！」と書かれたロゴがある。修一はクリックしてみた。そこには「映画僕と彼女と地平線と・・・のエキストラ募集！皆さんも今人気の浪野みずき、三条幸太郎と映画を作ってみませんか？」と書かれてあった。撮影に参加できるのか？浪野みずきに会えるのか？三十年間テレビとか映画とかは見るものであって参加するという発想は無かった。中学、高校とギター好きでロックばかり追いかけて、当然CDアルバムは洋楽、邦楽限らず男性ロックバンドばかり聞いていた修一には到底ありえない発想であった。修一は、桃子の話が長すぎて今にも助けを欲しがっている甫に向かって声をかけた。

「甫！お前忘年会のバンド俺に付き合えって言ったよなあ？」

「ああ、言った。何だよ。気が変わったのか？」

「違うさ！だから今度は俺に付き合えってことさ！」

「いいけど・・・何に？」

そういうと中央の机から席を立ち、サイトを見ている修一の横にコーヒークップを右手に持ちながら近寄った。修一の右側に並んだ。
「お前さっきから何見てんだ？」 甫は画面を覗き込んだ。

「なんだこれ？」

「ウシシシ・・浪野みずき今度映画やるんだって」

「へえ・・・」

そういうと甫は杜仲茶を一啜りした。

「で？何？」

「エキストラに出るの。お前も付き合え。」

「あそう・・そんなことか・・」

そういうと振り返ってまた机に戻ろうと歩き出そうとした。

甫は自分が何に返事をしていたのか数秒たって気が付いた。右手の杜仲茶を大量にこぼしながらまた修一の方へ振り向いた。

「はあ！？アチチチツ・・・な、何言ってるのおまえ！？気は確かか？」

「うん！確か！お前は浪野みずき主演映画のエキストラに俺と参加するの！」

「おいおい簡便してくれよ？！」

「何だ？嫌か？」

「当たり前だろ！・・だってお前・・マジで？・・」

二人の会話を中央の机で聞いていた桃子がせんべい片手に小走りで近づいた。桃子は修一の左側へ来てパソコンの画面を覗き込んだ。
せんべいはもう三枚目になる。

「あら！面白そうじゃない！」

「大村！あんまり煽るなよ？」

「んじゃ俺バンド出ねえぞ！」

「そう来ると思ったよ」

甫は中央の机にトボトボと戻りながら力なさそうに言った。

「私も行く！映画かあ・・！別に映らなくてもいいけど、撮影現場って興味ある！私も行きたい！女優としてオファーが来たりして。」

うふ。」

「安心しろよ。間違ってもそれは無い！」修一は間髪いれずに言い返した。

「フン！だ」

「さあどうする甫？？」修一は、してやっただりの顔で甫を見た。

「はいはい！分かりました。行きやいんだろ？行きやあ！」

「よし決定！」

そう言うとき修一は募集ページの「応募」と書かれてあるロゴをクリックした。

2

波野みずき

二〇〇七年元旦、浪野みずきは群馬県桐生市の自宅にいた。ハケ月ぶりの実家であった。きゅうりを主に栽培している農家を営んでいる。みずきには兄がいるが農家は継ぎたくないし大手コンピューター会社に就職し現在は中国の上海で支社を作るため現地調査に向かっている。今年の正月は早くとも一月の終わりに帰るようになるかも知れないと中国へ向かう前に自宅に連絡が入っていた。みずきは久々の実家のおいしや、母親の作る手料理にこんなに懐かしさを感じるものかと帰省する度に感じていた。

「毎日ちゃんと食べてるの？」母親が台所から雑煮を作ろうと餅を焼きながらみずきに言った。

「うん、食べてるよ。」スエットの上下にハンテンをはおりコタツ

に丸くなりながらみずきが答えた。とてもアイドルとは思えないリラックスぶりだ。

「そう・・・ならいいけど。」

「でもね、寝る時間が不規則で慣れるまで大変だった。」

「え？どして？」

「どしてって・・・撮影って全部昼間にやってるわけじゃないのよ・・・この前なんて朝の三時だもん。でもおかげでどこでも眠れるようになった。」

「あんたがグラビアやったり、まさかドラマとかに出るような子になるなんて私も父さんも思っていなかったからね。びっくりだわ。」

「うん。誰より驚いてるのはこの私だもん。」

「芸能界だもんね？。きゅうり栽培のこの家からね。」母がもちを返し、笑いながら言った。

「正月は？いつまで休めるの」

「うん。明日戻る。事務所の人を迎えに来てくれる。」

「えーっ！明日？」

「うん・・・七日から映画の撮影に入るんだ・・・この前電話で話したじゃん。」

「あらそうだったかしら・・・？」そういうと母はぺろりと舌を出して、できた雑煮を盆に乗せて運ぼうとした。みずきが手伝おうと台所に入った。父も含め三人いるはずだがお盆には二人分しか雑煮は用意されていなかった。

「あら？とうさんは？」

「うん・・・いつものところに釣りに行ってるみたい。」

母が起きてみると隣の布団には父の姿はもう無かった。母が玄関に靴を確認しに行くと、いつも釣りに行くときにはいている登山靴に似た長靴と釣竿の入ったバッグがなくなっていた。

「そっか・・・」

二人分の雑煮がのったお盆をテーブルのから持ち上げながら言った。父親は兄の仕事に関しては一言も文句は言わなかったが、みずきの

芸能界入りに関しては猛烈に反対していた。特にこんな女性になれと口うるさく言う父親ではなかったが、裸に近い格好でグラビアに出たり、DVDに出演したりと男の欲求を満たすような仕事をしやがってと言うような感じで、みずきが電話をかけた時には父親が出てもすぐに母親に替わってしまったり、実家に帰ってきててもあまりみずきの顔を見ようとはしなかった。寒い中の早朝からの釣りもおそらくそんなことだろうとみずきは察していた。

そもそもみずきが芸能界に入ったのはジャーマンプロダクションのオーディションに友達の付き合いで応募したのがきっかけであった。他の友人は第一次書類選考で敗れ無く落選したが、応募者約二千名の中、みずきはグランプリこそ取れなかったものの、審査員特別賞を手にした。それ以来グラビアから仕事を始めたが、その抜群のスタイルと清楚な顔立ちと元気な笑顔とのギャップがファンを魅了していた。中学、高校ではバスケットをやっており、高校時代は国体に出るほどの腕前であった。身長は163センチである。高校三年の時に、友人から「受験が終わったらオーディションに出たいの。みずきもやってみない？」と言われ、まあ写真送るぐらいならいいかという軽い気持ちでもう一人の友人と一緒に三人で応募した。二次審査の案内が来たのはみずきだけだった。誘った友人からはそれ以来連絡をとっていない。というより、取れなくなった。応募したのが高校を卒業した後。あれから三年近くになる。グラビアは最初の一年程度でその後はCM、ドラマ等の仕事が多くなってきていた。去年二〇〇五年にはCDも二枚出した。みずき自身も正直グラビアの仕事はあまり好きではなかった為、父親には引け目のようなものを感じていたが、今年は一月の七日から映画の撮影に入ることを父親に伝え、演技を本気でものにしようと考えてる今の自分の気持ちを分かってもらおうと帰省したのであった。

「お前が本気で何かを伝えようとすればきっと分かってくれるよ。伝えるのは言葉だけではないよ。演技で何かを伝えられるはずよ。本気でがんばっていればきっと。」

雑煮をコタツに並べ、最初に汁を飲むために箸で具を押さえながら母はみずきに言った。

「うん・・・そうだね。ありがと、お母さん」

実際この世界に入ってから父の事と、あのオーディション以来音信不通の友人がみずきには気がかりであった。母親と二人で雑煮を食べる途中、携帯電話の着信音が鳴った。メールの着信音だった。当たり前前の事だが、みずきは職業上本当に親しい友人にしか連絡先を教えていない。以前オーディションで交流を持つようになった友人がアイドルになったみずきの連絡先を知っていることを自慢して、男友達に飲み会の席でその連絡先を教えてしまったことがあった。即座にそれはみずきとは関係ない人にまで知れ渡ってしまい、身に覚えの無いメールアドレスの着信で悩まされた。今の携帯電話は三台目であった。メールの送信者は以前一緒にオーディションを受けた三人のうちの一人、宇都宮礼子だった。高校で浪野みずきと宇都宮礼子はあのオーディション後も親友としてお互い一番の理解者として連絡を取り合っていた。正月の帰省の話も七日からクランクインする映画の話も礼子には伝えてある。

元旦にごめんねえ。今日は家族団欒中かな・・・なかなか会えないしちよつと外出ない？

という内容が絵文字の方がいっぱい文章で書かれていた。

「プロダクションの人からかい？」母が言った。

「ううん、礼子から。」

「あそう。礼ちゃん今はなにしてるんだい？」

高校時代にはよくみずきの家にも遊びに来ていたので母もよく知っている。みずきが通っていた高校は地元でも有名な進学校の花山高校であった。

「うん、礼子今は大宮のシステム会社でシステムエンジニアしてるよ。」

「なんだいそれ？」

「うんとね・・・パソコンとかでいろんなことをできるようになる物を作っているというか・お兄ちゃんと同じような仕事・・・かな。」

「ああ・・・そっちのほうね。私はよくわかんないや。」

母はまた雑煮を食べ始める。

「かあさん。ちよつと出かけてもいいかなあ？」

「あんた正月に帰ってきたときくらい・・・でもまあ礼ちゃんとも積もる話もあるかねえ・・・」

母は少し呆れた顔を見せたがみずきの気持ちを考えることにした。親友に話ができる時間がこの子を支えているのかと思えば、笑顔を取り戻すのに時間はかからなかった。

「行つておいで。でも大丈夫かい？」

「何が？」

「何がって・・・あんまり分かるような格好だと危ないでしょ？」

「うん、絶対分らないような格好していくよ。」

今や売れっ子アイドルだ。周囲の一人にでもバレてしまえばたちまち人だかりになり、命も危なくなる。そういうとみずきは雑煮の中にんじんを一つ口に入れてコタツから出た。

「ごちそうさま」

「もういいの？」

「うん！」

返事をした頃は自分の部屋に向かおうと、もう階段に向かっていた。みずきの家は二階建てで、二階は三部屋に分かれている。“く”の字に曲がった階段を上り突き当りが両親の寝室。左側が兄の部屋、右側がみずきの部屋になっている。ほとんど自分のものは事務所近くのアパートに引越しの際運んでしまったが、小学校からずっと付き合ってきた机とベツトはそのままにしてある。服は帰省する日数

分持参してきた。変装用に黒ぶちの大きなダテめがねと薄いピンク色のニット帽も用意してきた。新幹線で帰省してきたので変装セットの効力は確認済みだ。服装は派手目だと目を引いてしまう。だからといってもし浪野みずきとバレテしまったときに恥ずかしい格好でもないけない。今日の服装は真っ白なセーターとデニム。薄い水色のコート。靴は最近買った「ニューバランス」のスニーカーといったって普通。身に着ける小物にちよっとお金をかけている程度。みずきは普通でばれないようにと気をつけながらも、アイドルとしての視聴者からの一方的なイメージも崩さないように気をつけていた。そんな風に誰とも分らない人々に気を使いながら行動や着る服を選ぶことは芸能界に入るまで皆無であった。かたやアイドル、女優として気持ち的に充実している風でも、実際、彼女自身等身大の自分とのギャップを感じ始めているのも事実であった。

着替えも終えて鏡に映る「浪野みずき」をチェックしながらみずきは礼子に電話を入れた。みずきは車の免許を持っていないので礼子がみずきの自宅まで迎えに来ることにした。十五分後家のチャイムの音が鳴った。みずきが芸能界に入ってからチャイムと防犯カメラが一体となったものに父親が変えていた。それを知っている礼子はカメラに思いつきり顔を近づけ鼻の穴を広げている。居間から玄関に向かう途中にあるモニターカメラで大きく鼻の穴を開けている礼子に苦笑した。

「礼ちゃん久しぶりね！」といいながら母親もみずきの後ろからモニターを覗いた。

「あらあら・・・ふふふ・・・相変わらずだわね。」

礼子は高校入学の4月の登校日に、話す人も無く周りの様子を伺うようにしていたみずきに最初に話しかけてきたクラスメートであった。

礼子はどちらかというとボーイッシュでいつも陽気で常に自然体。あまり体裁を気にしないような活発な女の子であった。そんな礼子にみずきは憧れに近い気持ちを持っていた。礼子がみずきに対する

気持ちも同じであつた。全くタイプの違うお互いではあつたが、それでこそお互いの存在の意味がある、そんな風なメールを交わしたこともあつた。それから遊ぶときも悩むときも一緒に時間をとみにしてきた友人である。かつてはその中にオーディション以来音信普通になつた友人もいた。モニターに映る礼子にもう一人の娘を見るようにみずきの母親は優しくに笑みを浮かべた。

「いらつしゃい。」ドアが五センチも開かないうちにみずきが言つた。

「みずき久しぶり！大女優にあえて光栄だ？！」

「もう！やめてよ！礼子にそんな風に言われたくないよ！」

「ははは！ごめん！冗談！・・・あ、おばさ？ん！お久しぶりです！お元気でした？」

礼子がみずきの後ろにいる母親に満面の笑みで言つた。

「礼ちゃん久しぶりね。なんか女っぽくなつたわね。彼氏でもできたかな。」

「いえいえ！まだ仕事も半人前だし！そこまで頭も体も回りません！」

このままいると会話に埒が明かないとばかりにみずきはスニーカーを履き始めた。

「礼ちゃんはたまには桐生に帰つて来たりしてるの？」

「ええ。先々週の土日はこっちへ帰つて来てました。」

「あら？そうなの？お父さんの具合はどう？」

「ええ！もうだいぶ良くなつて。ちよつと太つてきたみたいだし。」

「そう！良かったわね。」

「ええ。早期に見つかったから良かったってお医者さんも言つてました。」

礼子の父親は去年の二〇〇六年九月に市の健康診断で早期胃がんが見つかり、その後すぐ手術をした。幸い他臓器への転移は無く経過は良好であつた。

「そつえば私、礼子のお父さんにしばらく会つてないね。ごめん

ねお見舞いにも行けなくて・・・」申し訳なさそうにスニーカーを履き終えたみずきが言った。

「そんなあ！気にしないでよ。父さん病室ではテレビでみずきちゃんに会えるって毎週楽しみにしてたんだから！みずきががんばっているのを見るのが楽しみだって。全く誰の父親なんだかわかりやしない。はははっ！」

「礼ちゃん、みずきがいなくてもうちに泊まりに来てね！おばさんもういろいろ話したいわ。」

「はい！ありがとうございます。」

「全く誰の母親だかわかりやしない。」

三人は五分ほど玄関で話した。

「じゃあ行つてきます。」

「じゃあおばさん、大事な女優さんをお借りしますね！」

「だから礼子・・・！」

「はいはい分かった分かった！」

そういうと礼子とみずきは玄関を出てドアを閉めた。礼子の車はみずきの庭の真ん中にとめてあった。みずきの家は敷地の広い家だ。納屋も含めたら相当広い。二人が車に乗り込もうとすると家の釣りを終えたのか、門から父親が歩いてきた。

「おじさん、ご無沙汰してます。」

「ああ・・・宇都宮さん・・・？だっけ？」

「はい・・・。」

礼子も最近のみずきと父親の様子は伺っている。二人を目の前にして礼子は少し緊張し、上目遣いで二人を交互に見た。

「出かけるのか・・・？」父親はみずきを見て言った。

父親はちらりとみずきを見ていった。

「うん・・・。」

みずきも礼子同様上目遣いで答えた。

「そうか・・・宇都宮さん、また遊びに来てください。」

「はい！ありがとうございます。」

そういうと父親は二人の間を通って玄関に入った。

「行こ。礼子。」

「うん……。」

そういうと二人は礼子の赤いビートルに乗った。

頭から庭につつこんだ形に停めてあったビートルがユーターンするには浪野家の庭は十分であった。車を左回転でくるりと反転させて門まで行き、礼子は左にウインカーを上げた。

「よかったのかな？」

礼子が左右を確認しながらみずきに言った。さすがに元日では車も少ないようだ。礼子の車はすぐに門を出た。

「何が？」

「元日そうそう呼び出しちゃって」

「うん。別にかまわないよ。私も礼子の顔見たかったし」

「そうじゃなくて」

「え？」

「帰ってきてからお父さんと何か話した？」

「……。……。ただいまって……。それだけ言った。でもいいの……。無理やり会話しても、話……。こじれるだけだから……。」

「そうか……。まあ私も友達として……。たまに連絡するよ。みずきんちに」

「ごめんね。」

「ううん！みずきはブラウン管で私の父さん元気付けてくれたし。」

「ブラウン管かぁ……。なんか変だね。」

「何が」今度は礼子が問うた。

「私は何かしてあげてる実感が無いのに……。人を助けてるみたいに言われるの……。」

「そっか……。」

しばらく礼子は言葉をさがした。

「でもさ……。」

そういうと今度は右にウインカーを出した。しばらく続いた住宅街

の通りを抜けて国道122号に出た。

「みずきがあのオーディションで賞をもらって、芸能界に入って・そのとき私もちよつと驚いた。でも引つ込み思案のみずきがグラビアやドラマに出ることってすごい冒険だとおもったのね。それにみずきなら何か親しみやすい女優っていうか・．．．なんか暖かいものを伝えることができるんじゃないかって・．．．私はそう思った。

事実、私の父は毎週病室でみずきのドラマとか見たりして、死の恐怖からもわずかな時間でも忘れさせることができた。」

みずきは黙ったままだった。礼子は続けた。

「みずきの力って自分が思っているものよりもっと大きくなってるんじゃないのかなあ？少なくとも私はそうおもうなあ・．．まあ正直付き合いで受けたオーディションでもみずきが芸能界入ったときは女として嫉妬もしたけどね。」

そういうと礼子はペロツと舌を出した。

「うん・．．そつかあ・．．．」

そう言うともみずきは小さくため息をついた。

「ありがとう礼子・．．最近ジレンマになって・．．時間に追われる毎日で、自分が何をしていきたいのか分からなくなるときがあつてさ。」

「ははは！贅沢贅沢。あんたねえ。芸能界に入りたくても入れない人がこの世に何万人いると思ってるの？」

「うん。私がんばるよ！」

「でさあ！相手役やってた三条幸太朗ってどんな人？」

「ああ・．．三条さん？言っているのかなあ・．．？イメージ崩れたらなあ・．．」

みずきはわざとものつたいぶって景色を眺めながらにやけた。車は国道50号に乗っていた。そこからしばらく礼子の一方的なミーハーな質問が続いた。二人は高校時代のベランダで、石が転がっただけでも大笑いできるアノ頃の二人に戻っていた。しばらくすると左に桐生競艇の看板が見えてきた。

「お茶でも飲もうか？」

礼子がコンビニに入ろうかと左にウィンカーを出しながら言った。さすがに元旦のコンビニにはお客は少なかった。ガンメタリック色のゴルフが停まっているだけだった。

「もう一台ワーゲン車を並べてみましょう。」

ワーゲンが好きな礼子はそう言うと言った。高校三年の時に学校には内緒で免許をとり、親に頼んで中古のゴルフを購入し乗っていたが、就職してまもなく新型のビートルがデビューし、就職したら絶対に赤のビートルに乗ろうと決めていた。短大卒業後システムエンジニアとして就職した彼女は早速その赤いビートルを購入した。車を停めてサイドブレーキを引いた。

「みずき何にする？緑茶でいい？それとも浪野みずきCM出演のスポンソドリンクにする？キャハ！」

礼子はあるべくみずきが人と近距離で会わないよう気を使っていた。

「ううん。私も行くよ！」

「え・・・？大丈夫？」

「だって、本当は出かけること自体やばいジャン！ははは！」

「それもそうだね！はは。でも気をつけてね。」

「任せてよ！これでも一応女優よ」

みずきはそう言うと言をぺろりと出した。

「いや？出た！さりげない自慢」

二人は同時にドアを開けて車から出た。みずきはニットの帽子をかぶり直し、ダテめがねを少し押し込み、ややうつむき加減に歩き出した。中にはタバコとコーヒーの会計をしている男性が一人いるだけだった。

「いらっしやいませ」

アルバイトが初めてなのか、レジの使い方に四苦八苦している女の子が目線をレジから移すことも無く礼子とみずきを迎えた。

「ちよっとトイレ行ってくる。」

「うん、分かった。」

そう言うと礼子はトイレに向かった。みずきは自然と各社の新年特集号がいっぱい並んでいるマガジンラックへと足を運んだ。何気なくシネマ雑誌をばらばらと捲った。まもなく撮影クランクインのみずきも他の映画が気になる。今回が映画初主演なのだ。撮影予定の二か月分の台本はきっちり頭に入っている。撮影のオフアールが来てから原作の本も読んだ。自分が演じる不治の病におかされた女性が最後に彼氏のひざの上で、水平線から上る朝日を見ながら死んでいくというシュチュエーションがみずきの涙をそそった。最近の日本映画は充実期に入っていた。同時に韓国映画もヨン様から起きた韓流ブームで人気継続中だ。がんばろう。私も何かを残したい。みずきはそう思っていた。ばらばらとページを捲っていく。あるページでみずきはふと捲るのをとめて目をこらした。口紅の広告ページだった。今年の春の新作を宣伝する広告ページに見たことのある女性がつんと唇を突き出して口紅を下唇に当てている。喉に小さなほくった彼女がそこにいた。唇をつんと突き出し、腰に手を当てて、体をひねりながら目線を右下に下げている写真だ。久々に目にする彼女は美しさに磨きがかかっていてみずきはしばし写真の彼女を見つめた。

（沙羅・・・）

みずきはなんともいえない気持ちになっていた。しばらくすると緑茶の五〇〇ccのペットボトルを持ってみずきの右隣に現れた。

「冷たいのいい？」

そう言いながらみずきの顔を覗き込んだ。

「どしたの？」

礼子は真顔になった。

「これ・・・見て・・・」

「ん？・・・あ・・・」

礼子も言葉を無くした。三、四秒してからお互いの顔を見合わせた。

みずきはその雑誌を購入しようと礼子とレジへ向かった。店員がレジ袋に品物を入れようとしたが二人はそれを大丈夫だと言って断り、礼子はペットボトル二本、みずきは雑誌を手にとってコンビ二を出た。二人は赤いビートルに乗り、礼子は一本のペットボトルをみずきに渡した。

「いたね、沙羅がこんなところに」

礼子が言った。

「全く・・・どこで何してるのかと思えばさあ・・・！」

礼子は続けた。

「でもよかったあ・・・」

みずきは少し笑みを浮かべながら小さく言った。

「沙羅はずっとタレントになりたいと思っていたからねえ。彼女としてはなんでみずきなの？って気持ちでいたんだろうし・・・その証拠に連絡もぶつたりだもんね。」

礼子はペットボトルの蓋を開けながら言った。

藤元沙羅。みずきと礼子をオーディションに誘ったのが彼女だった。沙羅は高校の頃からいたってクールな女の子であった。すでに小学三年の頃からタレントになりたいという願望を持っており実際、その頃からボーカルレッスン、ダンスレッスンをずっと受けてきており、小学生時代も何回かオーディションには出ていた。高校の頃はスレンダーな体、長い手足、鼻筋が通ってパツチリと開いた目をしており、瞳の部分は幾分茶色がかっていて、一見外国人の血が混じっているような、そんな恵まれた容姿の持ち主だった。あまり話好きではなく、高校の頃も寡黙な美女として通っていた。高校一年の頃、みずきの席の隣に沙羅は座っていた。授業中、消しゴムを忘れたみずきがペンケースの中を探しているのに気づくと、沙羅は視線を正面の黒板から動かすことも無く、スツと自分の消しゴムをみずきに差し出した。みずきが教科書を忘れればまた視線を動かすこともなく黙って自分の机をみずきの机にくっつけた。言葉は少なくクールで、そのキャラクターが災いして周りの同級生から反感を買

つても自分をなくすことはない。しかし、みずきはみずきしか知らない沙羅のやさしさ、心配りにいつも温かみを感じていた。そしていつからかみずき、礼子、沙羅の交友関係が始まったのである。

「そだね！とりあえず生きてて良かった！」

礼子が言った。

「ねえ！初詣行っちゃおうか！」

助手席にいたみずきが体ごと礼子の方を向いて言った。

「えっ！大丈夫かな？」

礼子が怪訝そうに言う。

「大丈夫よ！だってこの格好で新幹線で帰ってきたけど全然バレ無かったもん！」

みずきはニンマリと笑いながら言った。

「なんだか私の方がドキドキしてくるよ。ホント大丈夫？」

「大丈夫！さ、行こ！行こ！」

「はいはい分かりました！全く大女優はわがままなんだから！」

赤いビートルはコンビニを出て、再び国道五十号に乗った。

3 初詣にて

修一の部屋のインターホンが鳴った。それもしつこい。元旦の朝に新聞の勧誘も無かうと、ドアの向こうにいる人物は想像が付いていた。布団から“リング”の貞子の如く這い出て二の腕辺りを両手で擦りながら、近くにあったジャージを肩に引っ掛けた。容赦なくインターホンが鳴り続ける。ドアの向こうに居る人物はおおよそ予測はついている。

「あの・・・すみません、元旦早々すごい近所迷惑なんですけど・・・お二人さん。」

修一はドアを開けながらぼそぼそと言った。

「おまえまだ寝てたの!？」

ドアの向こうには案の定甫と桃子が立っていた。

「やつぱりな・・・まだ寝てたの? って当たり前だろ・・・何時だと思ってるの? 元旦の朝に・・・」

修一は目を四分の一開けて言った。

「どうせ予定の無い一人暮らし三人衆じゃん」

「そうそう。お邪魔しまーす。」

そう言うと桃子ははずけずけと上がりこみ、勢いよくカーテンを開けた。病院は年中無休の二十四時間体制だ。元旦はたまたま三人が休みだった。三人は明日の二日が勤務だ。病院職員は正月三ヶ日を休えてからそれぞれ休める日に里帰りをする。特に独身者は三ヶ日、大体勤務に当てられる。独身組みもそれを嫌な顔もせず引き受ける。なぜなら正月三日の手当では割り増しになるからだ。

「おまえらそんなに何持ってきたの?」両目の目やにをこすりながら修一が言った。

「じゃじゃーん! おせち料理!」

桃子が自慢げに袋から出して修一に見せた。

「おお、似てる、似てる。ドラえもんそっくりだ。体ごと」

眠いままの修一はまだ冴えない顔で無表情に言った。隣で甫は笑いを堪えている。

「新年早々やつぱり失礼ね!」

桃子が言った。それにしてもまだ朝の八時半だ。新年の朝にしては早いのかも知れない。修一のアパートは和室六畳一間で小さな台所が付いてるような部屋だった。玄関を開けると一番奥に押入れがあり、畳が玄関前一メートルまである。畳の終わりから玄関入り口までの一メートルは板の間で、玄関開けてすぐ左側が小さな台所になっている。小さなコタツが一つあるが布団を敷くために一番手前に

押しやられていた。テーブルの上には缶ビールの空き缶と食べ終えた弁当屋の発泡スチロールの容器が置いてあった。それを手際よく桃子が片付けた。

「誰か片付けしてくれる人はいないんですかー??」

バカにしたように桃子は言った。

「いたらお前ら部屋に入れん・・・」

ようやく修一は正気に戻って来た。

「そりやそうだな。大体いれば俺も大村もここには来んね。俺そんなに無神経じゃねえ。」

「・・・どうだかねえ・・・」

「ん?修一・・・なんか言ったか?」

甫が布団を軽く丸めて押入れに押し込みながら言った。

「いや別に・・・ってかお前、人の布団ぐちゃぐちゃに押し込みすぎ！」

「だってここ“押入れ”だろ?」

甫が布団を押し込もうと両手と頭で押さえながら言った。

「まあ・・・そりやそうだ。」

修一はそれ以上反論するのをやめた。

二人が自分の座る場所を確保している間、修一は仕方なく着替えることにした。桃子が女性ということもお構い無しにギターのプリントが施されているトレーナーといつものジーンパン。修一は新年新年と騒ぎ立てるのはあまり好きでは無かった。甫と桃子は片付けが終わると角にあった小さな家具調こたつを部屋の真ん中に引き出し、コンビにで買ってきた一品ごとパッケージになっているおせち料理をところ狭しと並べた。

「コレ食ったら出かけるぞ!」甫がパッケージの蓋を次々と開けながら言った。

「行くってどこへ?」

「初詣!」

お茶を入れようと桃子が台所へ向かいながら修一の質問に答えた。

「仲代さん、急須なんて気の利いたものは無いよね？」

「お前よく分かったな。無いよ。」

「はいはい。でもコーヒーは飲みたいね。」

そう言うのと桃子はドリップ式のコーヒーに使うフィルター紙でお茶を入れようと考えた。

「これでいいや。」

しばらくしてお茶が入り桃子が運んできた。

「おまちどー。」

「はいご苦労さん。修一座れよ。」

「ああ。俺んちだから遠慮なく座らせてもらっよ。」

修一は笑いながら言った。

「新年明けましておめでとう！」

桃子がりモコンでテレビをつけながら言った。

「はい、どもども」

そう言うのと甫はコンビニでもらってきた割り箸を二人に配った。

修一は寝起きでまだ食欲はない。お茶を一すすり飲んだ。

「昨日は何してた？一人でビールか？」

「ああ。お前もそんなとこだろ？」

お茶の入った湯のみ茶碗を両手で持つて修一が言った。

「ああ。そんなもんだ。ダイナマイト見ながらね。」

最近の年末は紅白歌合戦よりも格闘技番組がはやっている。

「俺もだ。」

修一がやつと割り箸を割った。テレビには袴姿のテレビアナウンサーが年始番組を進行していた。お笑いタレントが各地からの新年のお祝いの模様をリレー式で中継していた。三人の職場のある佐野市は栃木にある。地元の佐野市に住んでいるのは大村桃子。修一は群馬県館林市の東武線沿線にアパートを借りている。甫は修一の住んでいる館林市の隣、群馬県太田市のアパートから通勤している。テレビでは栃木の日光からの中継が流されていた。二荒山神社の新年の様様だった。

「あ、日光だ。ここ行つたんだ。小学校五年の時の遠足で。」

桃子が栗きんとんを箸ですくいながら言った。

「へ？。よくおぼえてんな。」

甫も栗きんとんへ手を伸ばした。

「小学校五年の時つてどこ行つたかな・・・？」

そう言うつと甫はすくつた栗きんとんを口へ入れた。

「俺、忘れた・・・」

修一が返した。修一はかまぼこに手をつけた。

「なんかさ、わりと美味しくない？コンビにのわりに」口をもぐもぐさせながら桃子が続ける。

「仲代さん実家とかには帰らないの？」修一もともと甫と同じ大田に住んでいたが、三十に成つて結婚もしない息子に母親が口うるさくなり、少し一人を満喫したいと館林にアパートを借りて住みはじめた。父親は何も言わなかった。逆に父親自身、今まで修一に対し母親は確かに口うるさいと思つていたのも事実だった。ただ母親にはたまに連絡を入れるように父親は修一に言った。館林に住み始めたのは特にこの土地に思い入れがあつたわけではない。太田市の実家と久明会病院の中間地点辺りであるからだ。ここはつつじの里として知られている。五月上旬になればつつじヶ丘公園は観光客でいっぱいになる。おかげで日ごろは五分で行けるスーパーも、その時期は車の渋滞で三十分もかかる。館林に初めて住んでつつじの季節を終えた頃には自転車を購入していた。元旦に実家に帰らなかつたのは、翌日の二日は仕事であるためである。両親もこのパターンにはなれたもので、前月十二月の暮れには今年はいつ帰るのかと母親は修一に電話を入れていた。修一は成人の日に帰りその日から二連休が取れる事を話してある。

「うん。明日どうせ仕事だしね。実家には話してある。」

「修一、行こうぜ初詣」

「そうだなあ・・・考えてみりゃあ去年は良いこと全く無かつたしな。今まで神頼みもしたこと無いし・・・行つてみるか・・・！」

しばらく三人はこんな調子で独身三人の元旦の朝を送っていた。桃子と甫がいろいろ買ってきたおせち料理も半分は食べ終えていた。三人は話す事も無くなり、小さいコタツに三人が脚を突っ込んだまま無言でごろ寝をしてテレビを見ていた。時間は十時半を回り、朝七時からやっていた番組は終わった。どうせコマーシャルが終わればまた正月番組が始まる。

「ねえ、この部屋も飽きたから出かけましょうよ。」

桃子が切り出した。

「おまえさ。朝から人の家いきなり押しかけといてそりゃ無いだろ？」修一が薄ら笑いを浮かべて言った。

「いつものお返し。」

桃子はそう言うところ寝状態から半身起き上がり背伸びをした。

「さて・・・どこにしようか。初詣。」

甫がテレビを消しながら言った。それが合図かのように桃子と修一は上着を用意した。修一はアビレックスのエムエーワンジャンパーのポッケにタバコ、ライターを入れ、お尻の右側のポケットに携帯電話を押し込んだ。甫は寒がりの為、さつき部屋に入った時から革ジャンを脱いでいない。そのままスタートできる服装になっていた。

「大村、いつもどこ行ってるの？」

甫が聞いた。

「私はいつも関東の三大師、佐野厄除け大師。」

「俺あそこがいいな。」

修一が提案した。

「あそこってどこ？」

甫が珍しく行きたい場所に関して意見を出した修一に驚いて聞いた。

「足利のぼんな寺」

「へえ。何でまた」

また甫が聞いた。

「なんか子供の頃その寺でハトにえさあげていたのを急に思い出した。なぜか分からんが・・・」

「へえー・・・なんか初めて聞いた気がする。仲代さんの子供の頃の話。」

桃子が笑みを浮かべながら言った。甫と桃子はめったに出ない修一の意見を尊重してばんな寺へ向かうことになった。

ばんな寺は足利市のほぼ中心にある。地元住民には「大日様」で通っており建立約八百年の歴史を持っている。足利氏二代目の足利義兼が建久七年（一一九六年）に邸内に持仏堂をを建立し大日如来を祭ったのが始まりで、三代目足利義氏が足利一門の氏寺とした。寺の敷地はほぼ正方形で回りは土塁と堀で囲まれている。境内は公園もあり、幼い頃両親によくここにつれてきてもらい、公園にいるハトにえさをあげたり、ブランコに乗ったりして遊んだ。修一はそんな話を車の後部座席に乗りながら独り言のようにつぶやいていた。修一が自分の子供の頃の話をするのは高校からの友人である甫でさえ始めての事で、さほど聞き耳を立てるほどの話でもないのだが甫と桃子は黙って聞いていた。国道五〇号を西へ走らせ、次に国道二九三号に乗り換えようと甫は左にウイーカーを上げた。国道二九三号に乗り換え、街中まであと一キロのところまで車は止まった。渋滞になっていた。しかし甫が窓を開けて車の前方彼方を見てみるとどうやら初詣の為の渋滞ではなくスーパーマーケットの初売りの為の渋滞であることが分かった。五分で通過できる距離を二十分かけて通過した。田中橋に乗った頃、今度は正真正銘の初詣の渋滞が始まっていた。

「さすがに混んでるなあ・・・修一どっか抜け道はないの？」

「ここからは抜け道は無いな。ここから三十分かけて車に乗って行くなら、ほら、そこに停めて歩く方が早いよ。」

そう言う修一は橋の上から渡良瀬川の河川敷にある駐車場を指差した。ばんな寺の境内北側に駐車場があるがとも初詣の人々全てを受け入れられるスペースは無い。境内がいっぱいであると、ばんな寺を囲む堀の脇に縦列駐車することになる。それでも駐車スペースが足りないことは修一は知っている。ただ三十分車に乗っている

のは時間がもつたないからと二人を軽く説得して河川敷駐車場に停めるように勧めた。甫と桃子も納得して駐車場から歩くことにした。河川敷の駐車場は道路から一段低い場所にある。田中橋を渡りきり二九三号から河川敷へ向かう側道に入り駐車場に車を止め、今度は歩いて側道を登り二九三号を歩いた。

「この辺りさ、二年前にマラソン大会で走ったんだ。」

修一が辺りを幾分懐かしげに見回しながら二人に言った。

「へえ……」

甫が頷くと修一と同じように周りを見回した。修一は二年前に足利市の尊氏マラソンに参加し五キロコースを走った。三人が歩いている通りは丁度その辺りであった。駐車場から歩いて十五分下った辺りで修一は言った。

「ここだ……」

修一はそう言うのと幅四メートルの小道に入った。入ってすぐ百メートル先に堀が見える。丁度ばんな寺の南門、いわゆる正門から入る形になる。通りと門の間に堀があるが小さな橋でつながっていた。そこはすでに初詣客でいっぱいだった。

「へえ……結構大賑わいだね。」

境内に露天商が並ぶ様子を見て桃子は幾分わくわくしながら言った。「いやー……なんか懐かしいや。」

修一は境内に入るとまた懐かしげに周りを見渡した。決して全国的に有名なお寺ではないが、地元住民には長年愛されているお寺である。満員電車の様なぎゅうぎゅう詰めではないが、軽く肩が触れ合う程度のにぎやかさがあった。通りから小さな橋を渡って正門から入る。門からお寺の前まで石畳がずっと続いている。門から百五十メートルほどだ。両脇には露天商のテントが続いていた。前方から人の列がこちらまで続いている。鐘を鳴らそうとする人ための列だった。三人はその列を避け、列の左脇から寺の前にある賽銭箱まで向かった。綿菓子、お好み焼き、甘酒などの露天商すれすれに歩いて行った。百メートルほど歩いた所には大きな銀杏の木がある。破

魔矢を持つてる人、甘酒を手にして歩いている人、洋服を着せた犬の首輪に小さなしめ縄をつけて歩く婦人。混んではいるが皆のんびりと初詣を楽しんでいる。三人はお寺近くまで来ると人ごみを避けて、さらに少し脇に反れた。

「結構込んでるね。」

周りをきよるきよるしながら桃子が言った。

「修一、俺、鐘鳴らしたい。」

「また戻るの面倒じゃん。先に言えよ。」

「せっかくだし！俺戻って鳴らしてくる。」

「甫お前マジで言ってるの？」

「うん。まじ。お前のエキストラの話よりはましだろ？」

「ああ・・・そんな話もしたっけなあ・・・」

修一はこの時まですっかり忘れていた。そういえばあれから何の連絡もこないあとふと思つたが、自分で誘っておいて忘れてたとも言えずその場をやり過ごそうとはじめを鐘を鳴らすための列へと促した。

「んじゃあ俺たち先にさい銭して待つてるからお前はまたスタート地点に戻れよ。」

「おう！行ってくる。今年こそいい年にするんだ！」

そう言つと甫はくるりと振り返り列の最後尾へと向かう為、また元来た人ごみに戻っていった。

「お前は？甫と一緒に鐘でも突いてくるか？」

「私は鐘はいい。とつととお参りしてあれ飲みたい！」桃子は狛犬の横にある“甘酒”と書いてある露天商を指差しながら言った。

「お前必ず、何か飲むか食うかしてるよな」

「あらいいじゃない。こんなときでもないで甘酒なんて飲まないし。」

「いや別に構わんけど・・・また後で太ったなんだってうるさいからさ。飲み会の後でも必ず言うじゃん。お前。」

「あら・・・？そうだったかしら・・・？いいから早く行こうよ。」

「あいよ分かった。」

そう言うと二人は賽銭箱までの八段の階段を登った。上りながら二人は財布から小銭を用意した。

「仲代さんいくら？」

「五円……」

「安っ！」

「別にいくらだっていいだろう？　こういうもんは気持ちだよ気持ち！」

「でも……五円……？　五円で今年一年分仏様をお願い？」

「るさいなあ？　五円はご縁って言うだろ。」

「プツ……古っ！」

「なんだよ。そういうお前は？　いくらなんだよ。」

「……百二十四円」

「あ？　はっはは……何だそれ？」

「コンビニでおせち買ったときのお釣り。綾部さんのだけど」

「お前最悪やね。人の金かい？　まだ俺のたった五円の方がましや！」

修一の関東版大阪弁が炸裂した。二人は喧嘩をしながら八段の階段を上がり賽銭箱の前まで来た。目前には遠くからでもおさい銭が投げられるようにと賽銭箱の正面に網が張ってあったが、成田山でも川崎大師でもない小さなお寺では後ろからさい銭を投げる参拝者はいなかった。修一と桃子はどちらが合図をしたわけでもないが同時に合計百二十九円を投げた。二人は手を合わせ今年一年のそれぞれの思いを仏様に伝えた。先に桃子の方が手を下ろし目を開けた。二、三秒遅れて修一が手を下ろして目を開けた。後ろにまだまだ参拝客が控えている事に気づき、賽銭箱横にあるお守りや破魔矢には目もくれず階段の端からとっとと降り始めた。それでも男である修一は、アルバイトであろう巫女さんの顔は確認して降りてきた。賽銭箱がある場所は地面から一・五メートルほど高くなっている。八段の階段を降りようと正門の方へ振り返ると、さっきより幾分参拝客が増えたように思えた。鐘を突きに正門付近まで続く列に戻った甫の姿

は確認できない。というよりいつもどこかへ出かけると、甫は自分の欲求を満たすため集団とは別行動を取るのは毎度のことであった。甫とはぐれた時点で修一は最初から追いかけるつもりも無い。携帯もある。桃子を後に従えるような感じで八段の階段を降りた。桃子は階段を降り切っても止まらない修一にはぐれるかとかでも言うように常にぴったりついて回った。修一はどこかに向かっている様であった。

「仲代さん、どこ行くの？」

「うん。ほら、あそこに公園がある。子供の頃よくあそこで鳩にえさをあげたんだ。」

そこはよくあるジャングルジムやブランコがあるような普通の公園であった。少し広めの公園で、所々大きなクヌギの木が植えてあり、枝を見ると鳩が数羽止まっていた。二人は垣根から公園に入った。

「へえ・・・だいぶ鳩の数減ったなあ・・・昔はこんなもんじゃなかった。」

「ふーん・・・。」

幾分さびしげな修一の顔をあまり見ないようにして桃子が答えた。

「ああ・・・あのせいかもね。」

桃子が何かに気づいたように言った。

「え？」

修一が桃子の視線と同じ方向に目を向けると、そこには決してうまくない鳩の絵が書いてあり、その脇には赤い文字で“鳩に餌は厳禁”と書かれてあった。現在ばんな寺は大量の鳩で悩まされている。糞が遊具や建造物に大量に浴びせられてしまうのだ。現在検査技師である修一は鳩の糞がクリプトコックスの媒介になることを知っている。子供の頃は良くも平気で遊んだものだと思っていた。

「でも、仲代さんは子供の頃ここで遊んだんだあ・・・へえ・・・。」

桃子はゆっくりと自分の体を回転させながら公園全体を見回した。公園からは本堂と大きな銀杏の木が綺麗なコントラストで目の中に

入ってきた。桃子はしばらくそこで目線を止めた。修一は桃子と真逆の方向にある砂場を見ていた。自分の子供の頃の様に、二、三歳の子供が一羽の鳩に餌のふ菓子をちぎって与えていた。いつの間にか修一は笑顔になっていた。

「仲代さん、ここ良いね。何か落ち着く。今日はいっぱい人がいるけど、昼間のお散歩とか良さそう。」

桃子の言葉で我に返り、桃子の方へ振り返った。

「うん、夕方になるとね、西陽がああ大きな銀杏に当たって一枚一枚の葉がきらきら輝いて見えるんだ。すごい綺麗だよ。」

「へえ・・・でも何で足利のこのお寺を知ったんですか？」

「お袋の実家が病院と同じ佐野市でね。俺が生まれた時のお宮参りでここに来たのさ。気づいたら小学校の時の野球部の試合前とか、高校受験の時とか、何かにつけてお願い事がある時には自然にここに来るようになってた。最近は家族で初詣も無かったし、別に神頼みする用も無かったし・・・ほんとに久しぶりなんだ。なんかお前らが来て初詣の話聞いていたら自然と頭に浮かんだよ。俺も今日来て良かった。」

大きな銀杏を見ながら修一は話をした。また公園に体を向けた。ベンチに家族連れが露天商で買ったたこ焼きを食べていた。自分も空腹なのを感じた。

「なあ、腹減んない？」

「そうね。そういえば。」

「甫、鐘突いたのかな？」

「さつきからゴンゴン鳴っているけど音色じゃ綾部さんかどうか分かんないわ。」

「だな。俺たこ焼き買ってくる。あれ見てたら食べたくなった。」
「そっぴいながらベンチの家族を指差した。」

「じゃあ私、甘酒買ってくる！」

「んじゃ買物済んだらここへまた集合って事で。」

「綾部さんどうします？」

「いつものように自分の任務が達成できたらどっちかの携帯がなるさ！」

「そうですね！じゃあ私行ってきます。」

そう言くと桃子は正門付近で見た甘酒の的屋へと小走りに向かっていった。修一は桃子の方向とは幾分右に角度を変えて西門へ向かって歩いていった。修一が向かった方向には焼きとうもろこし、お好み焼き、クレープという順番にお店が並んでいる。修一はたこ焼き屋を探した。外からに西門に入った一つ目にたこの絵が描いてある垂れ幕を見つけた。

「あつた・・・」

修一は小さく呟いた。たこ焼き屋には焼きあがったものは全て売れてしまったらしく五十から六十台の男性が頭にタオルを巻いて啜えタバコをしながらまたたこ焼きを焼こうとしている。

「三つください。」

「はいよ！兄さん！今年の初たこ焼きだろ？今一番うまいたこ焼き作ってやつからなあ！」景気良く男性は言った。

「お願いします。」

修一はにこりとして答えた。男性がたこ焼きを焼くところの一部始終を子供の様に見ていた。もしかしたらこのオヤジさんも俺は小さい時に会っているのかも知れない。だとしたら人はほんの些細な関係が自分の歴史の一部となって、考え方や、行動が作られていくものなんだろうなあ。なんとも不思議な気分になっていた。男性がたこ焼きを焼いているのを見つめながら修一はボーっと考えていた。

「鰹節は？どうする？」

また景気のいい男性の声に我に返った。

「あ、お願いします。たつぷりと！」

「あいよ！」

男性はたこ焼きの上にたつぷりとソースを塗り、青海苔をふりかけ、荒削りの鰹節をたこ焼きが見えなくなるくらい乗せた、というより鰹節で蓋をしたと言った方が良いのかもしれない。無理やり気味に

パツクの蓋を閉めて輪ゴムで止めた。輪ゴムの間に十センチほどの大きな楊枝を挟んだ。

「三つだね？」

「はい。」

「あ・お兄さんごめんな。今袋切らせちゃつてよ。」

「大丈夫です！持っていていますから。」

「悪いな。んじゃ三つで千四百七十円！」

「え？一つ五百円でしょ？」

「袋無えからおまけだ！」

「え、すいません。」

「あんちゃん、なんか前に会ったよう気がするしなあ！」

「かもしれないね！おじさん、何年ぐらいやってるんですか？」

「三十年くらいかな？」

「じゃあきつと会つてます。子供の頃良く初詣にはここに来てましたから。」

「おう、そうかい！んじゃまた来年かな？」

男性はにこりと笑うとまたたこ焼きを焼き始めた。

「ありがとうございます。」

「あんちゃん、そりゃこつちの台詞だろ！また来年な！」

男性はまた修一に視線を向けてにこりと笑った。修一は軽く頭を下げてニコリと笑い振り返った。たこ焼き屋ののれんをくぐると、お昼を済ませたのだろうか、さつきより幾分人出が多くなってきたように感じた。三人分のたこ焼きを縦に三つ重ねた感じで両手で持った。正確に言えば二つは薬指と親指で持つて残り一つはその上にただ乗せていると言った感じた。二番目のたこ焼きの包みの輪ゴムに挟まっている大きな楊枝のせいで一番上のたこ焼きの包みが歩きたびに左右に揺れた。修一は両手の体勢を整えたいと思ったが一旦通路の真ん中に行ってしまうとそれが困難だと判断し、一番上のたこ焼きのパックに注意しながら西門から本堂へ向かう石畳の端っこを進んでいった。下ばかり見ていては危ないと三步に一度正面を見る

ように歩く。本堂まであと十五メートルの辺りになったところで一
旦人込みが緩やかになった。これから参拝しようとした客が修一が
向かう方向から右へそれていった。修一は公園に戻ろうと境内にあ
る駄菓子屋の前を通り左へ曲がろうとした時だった。駄菓子屋の中
から二十代前半の二人組みの女性が話しに夢中になりながら出てき
た。二人は修一に全く気づいていない。修一は二人に気づいて歩く
のをやめ、二人を先に通そうとしたが、二人は修一の前を通過しよ
うとしているのではなく、修一のいる方向へ歩いてきた。残り一メ
ートルになっても二人は気づかない。

「あ……！」

修一が小さく声を出した時はもう遅く、向かって右側の女性の左腕
の衝撃が修一の左腕に伝わった後であった。修一が持っていた一番
上のたこ焼きは石畳の上の落ちていた。同時に彼女達二人のうちの
どちらかの携帯電話がそのたこ焼きの隣に硬い音を立てて落ちた。
デイズニーキャラクターの猫のマリーのストラップが付いていた。
修一の後ろから歩いてきた風船ヨーヨーを持った四歳の女の子が三
秒後にそのたこ焼きを踏んだ。修一とぶつかった女性はお互いすい
ませんっ！とあわてて言うとすぐさま落ちた携帯を拾い上げて、修
一の横を通り過ぎようとした。修一はぶつかった女性の左肩にたこ
焼きのソースが付いていることに気づいた。

「あの！すいません！ソースが……ホントにすいません。」

「ごめんなさい。大丈夫です。それよりたこ焼き……」

修一の言葉にそう返してきたのはぶつかった女性ではなく、おしゃ
べりに夢中になっていたもうひとりの女性であった。

「ああ……良いです別に。それより彼女の服が……」

薄水色のコートに濃い茶のソースが横一文字の形で付いていた。お
そらくたこ焼きの入れ物と蓋の間にソースがにじみ出していたのだろ
う。修一はどうしようかと次の返事を待つ前に自ら言葉を発した。

「クリーニング代、出します。それ高いんでしょ？」

「いえいえ。大丈夫です。こちっそ。ホントにごめんなさい。たこ

焼き代、払いますね。」

そう言ったのはまたぶつかった方ではない彼女。ぶつかったほうの彼女は向こうを向いたまま俯き加減で左耳でこちらのやり取りを伺っている。

「たこ焼きなんか・・・これこそ大丈夫です。俺こそ、こんな混んでる所無理してたこ焼きなんか運んでたから・・・」

「ホントにすいませんでした。」

向こうを向いたままのぶつかった方の女性が呟いた。

「いえ。でもいいんですか？」もう一度修一は聞いた。

「はい。じゃああいこにしましょ。」

またぶつかっていない方の女性がそう答えた。彼女はにっこりと笑って軽く会釈した。薄水色のコートの女性も向こうを向いたままややこちらを向いて軽く会釈した。すると二人はさっきよりも足早に人ごみの中に消えていった。修一はしばらく不思議そうに二人を見送った。人が密集していて落ちたたこ焼きを拾うためのスペースが無いことは落とした瞬間に感じていた。迷惑と思い、拾うことは諦めて、無事に残った二つのたこ焼きを持って修一は公園を目指した。公園に近づくと桃子がブランコに揺られながら太ももの上に甘酒を三つ置いて待っているのが見えた。甘酒の方がよっぽど不安定なのにと修一は思ったが、甘酒が三つとも無事なところを見ると、たこ焼きを一つしくじった修一に桃子の罵声が浴びせられるのが予想された。桃子の横で辺りをききよるききよる辺りを確認している男がいた。鐘を突き終えた甫だった。

「遅いよ修一。まさか大阪まで買いにいつてきたんじゃないかな？」

「あれ？良く分かったな。」

「しかも二つだし。」

早速桃子が突っ込んだ。

「おう・・・ちよつといろいろあつて一つ駄目になった。一番上は桃子のつて俺の中で決めてたからこの残った二つは俺と甫のだ。」

「えーっ！なにそれ？」

いつもの様に言葉の小競り合いが始まった。いつもの様に甫が割つてはいる。

「いいから食おうぜ。俺腹減ったよ。さすがに鐘鳴らしは。」

「おまえ何回打って来たんだよ？」

修一の標的が甫に変わった。三人は近くのベンチに場所を移して二つのたこ焼きを三人で食べ始めた。数が減ったはずの鳩だったが、ジャングルジム付近の楓の木には十数羽の鳩が停まっていた。不意に桃子が修一に言った。

「そういえば何でたこ焼き駄目にしちゃったんですか？」

「そこに・・・ほらあそこの紺と白と赤のビニールのテント見える？」修一は駄菓子屋を指差した。

「あそこ？」

「そうそう。あそこの店から二人の女の子が出てきて、彼女たちとぶつかって一番上のたこ焼きが落ちちゃってさ。」

「人いっぱいだもんね。」

今度は桃子が逆にフォローを入れた。

「まあね。それは仕方ないんだけどさ・・・」

少し修一が顔を曇らせた。それを見て甫が問う。

「どした？何かあった？」

「うん。たこ焼きのソースが片方の女の人のコートにくっついちゃって・・・」

「あ、そう・・・何か騒がれたのか？」

甫がまた問う。修一が答える。

「いや、そんなんじゃないんだけどさ。ソース付いたほうの人は向こうを向いたままうつむいてるだけで、もう片方の女の人が全部受け答えしててさ・・・ちゃんと顔見てあやまれなかったから、本当は怒ってんのかなあってさ・・・」

「そっか・・・修一変にまじめだからなあ。その人具合でも悪かったんじゃないのか？」

「具合悪くて初詣来るか？」

「分かんないぞ。初詣マニアかも知れないし。」

「お前まじめに聞けよ、人の話。」

「私だったら、キレるね。いい男なら出会いになるけど！うふっ」
桃子がいたずら気ににやけながら言った。

「でも普通文句の一つでも言われるよな？なんか気になってね。」

「そっか。でもまあ怪我させたわけでも無いし、心の広い人と思つて神に感謝したら？」

一旦悩みだすとしばらく引きずる修一の性格を知ってるからこそ言える甫の言葉だった。

「うん・・・」

修一はそう言うと言酒をひとすすりした。

「俺、たこ焼きにはやっぱりビールがいいな。」

ポツリと言った。

たこ焼きを食べ終えてしばらく公園のブランコに軽く揺れながら三人は参拝客を見ていた。時計は二時半を回っていた。その日の夕方、三人は早めに別れた。一旦修一の家に戻ったが、お互い明日の勤務もあるので自然と修一の部屋には上がらずに個々の家に戻っていった。部屋に戻ると修一はテーブルの上にキーホルダーと携帯電話を幾分放り投げるように置いて部屋の真ん中にごろりと大の字になった。薄水色のコートの女性が気になって仕方なかった。あの後、彼女はコートのしみをどうするんだろう。いいとこのお嬢さんだったらそんなコート捨てて新しいものを買うのか・・・クリーニング店は正月だからやってないだろうなあ・・・そんなことを考えていた。しばらく天井を見つめていた。心地よい疲れを感じながら瞼をゆっくり閉じた。その数秒後、静寂な部屋の空気の中、携帯のメール着信音がバイブを伴いながら鳴った。修一は一瞬ビクツとし、上半身を起こし右手をテーブルに伸ばした。携帯を開くと一通のメールを確認した。それは浪野みずき主演映画のエキストラ応募に関する

る出演依頼のメールだった。

（この度、浪野みずき主演映画「僕と彼女と水平線と」のエキストラにご応募いただき、誠に有難うございました。撮影は一月七日からクランクインとなります。ご希望の東京近郊の撮影は四月十二、十七、二十一と決定いたしました。可能な日程がございましたら、このメールアドレスまでご返信いただくか、下記の番号までお電話をお願いします。皆様のお力で撮影現場を盛り上げていただきたく、よろしく願いいたします。）

「へえー・・・こんな感じで連絡が来るんだ・・・」

修一は特にあわてることも無く何度もメールを読み返した。

「四月十二、十七、二十一かあ・・・」

病院の勤務は上司が作る勤務表によって計画が立てられる。希望したい休みの日があれば前もって申請することが可能だった。しかしノリで応募したあの夜とは違い、なんとなく今はどうでもいいことになっていた。

次の日の二日、三人は病院にいた。修一は血液検査で使う測定器の校正を行っていた。とは言っても今日は元旦二日目だ。朝の外来の患者が待っているわけでもないため早めに出勤することも無く通常通り出勤しのんびりと各機械の校正を行っていた。八時には病院に入り全機器の校正取りには四十分かった。修一は自動販売機でブラックの缶コーヒーを買い放射線科に向かった。向かったと言っても隣だ。右手に二本、左手に一本の缶コーヒーを持っていた。

「おつす。昨日はどうも朝から押しかけていただいてありがと。」

「よう。」甫が眠そうに答えた。

「あれ？何だよ、昨日はあんな朝早く押しかけといて。結構笑えるんだけど」

「お前、やっぱり仕事で朝迎えるのとプライベートは別でしょ。あややる気無い・・・」

「ま、そうだな。昨日病院はどんな感じだったんだろう？」修一が

甫に缶コーヒーを渡しながら言った。

「お、サンキュー。」甫は修一からコーヒーを受け取り続けた。

「日勤帯では熱発の子供が一人来ただけ。あとは夜中にアル中が一人救急車で運ばれたって」

「まあ元日のパターンって感じかね。今日は医事課の当直は誰？」

そう言うとき修一は缶コーヒーを人のみした。

「今日は松山」

「はいはい、色男さんね。」

「おはよー！」いつも同様甲高い声が響いた。入り口を見ると桃子が右手に二本左手に一本のブラックの缶コーヒーを持っていた。

「お前今日は朝から俺とかぶるね。ほら。」修一はそう言うとき自分が買ってきた缶コーヒーの残り一本を桃子に差し出した。

「あら、今日は私の分もあるんだ！」

「何言ってるの！いつも買ってきてるじゃん」

そんな会話をしている二人をよそに、甫は桃子が持っていた方の三本の缶コーヒーを受け取り、角にある小さな冷蔵庫にしまった。

「まあ違いと言えば大村は冷たい缶コーヒーを買ってきたっていう違いだな。」そう言うとき甫はにこりとして冷蔵庫の扉を閉めた。三人の二〇〇七年の仕事がスタートした。

4 コンタクト

二〇〇七年四月、三人は大宮の駅にいた。四月二十一日、土曜日の午後二時の大宮駅の構内をオフの人々が縦横無尽に歩いている。
「修一、どこだっけ？撮影場って？」

甫は切符販売機の上に大きく貼られている駅近郊図に目をやりながら修一に聞いた。

「川越・・・」

「川越って・・・どっち？川越駅？川越市駅？」

「川越市って言ってたたかなあ・・・？」

「おいおい大丈夫かよ？」

「おう・・・多分」

成人男性二人が迷子の子供のように頭を上下させながら駅近郊図をキョロキョロと見ているのをクスクス笑いながら桃子が近づいていた。両手に紙袋を抱えて。

「なんだかもぐらたたきのもぐら見たい。」

「・・・お前どこ行ってたの？」

甫の視線は近郊図のままだ。

「おなか空いたでしょ？そのパン屋さんで買ってきた。」

「気が利くじゃん・・・」

そう言うとき修一はチラッと紙袋に目をやった。

「あつた！川越市駅。」

甫の言葉に修一も近郊図に視線を戻した。

「あ、本当だ。埼京線で川越まで行つて・・・へえ・・・乗換えなんだなあ。東武東上線で川越市駅かあ・・・」

修一が言った。

「俺も修一も殆ど移動は車だからなあ・・・電車はあんまりな」

「とりあえず俺まとめ買いしちゃうな。」

そう言うとき修一は川越駅までの切符を三人分買った。

「やっぱり車のほうが良かったんじゃない？」

「そうなんだけどさ、埼玉の地理あんまり詳しくないから。絶対迷うと思ったからさ。」

買った切符を三人に配りながら修一は桃子に答えた。

「ナビ使えば良いじゃん」

桃子が持っていた紙袋を修一に渡しながら言う。

「・・・付いてないんだ・・・ナビ。」

紙袋を受け取りそう答えると修一はくると方向を変え足早に歩き出した。

「はははっ!」

甫が噴出しながら笑った。

この日、三人は埼玉県川越市にある駄菓子屋横丁へ向かっていた。今から約一ヶ月前の三月二十日の火曜日、医学書を買おうと、久々取れた休暇を使い新宿まで行く途中、久喜駅のホームで電車を待っている途中、修一の携帯が鳴ったのだった。

「誰だろ・・・?この番号・・・」

不審に思いながらも、病院からの緊急連絡の可能性も考え電話に出ることにした。

「はい・・・もしもし?」

「あ、あの。突然失礼します。こちら浪野みずきの主演映画（僕の彼女と地平線と）のエキストラ担当のものです。ネットに応募なさった仲代修一さんでしょうか?」

聞き覚えの無い若い女性の声だった。そういえばネットでエキストラ参加を申し込んだ時に携帯の番号も入力した事を修一は思い出した。

「えっ?あ・・・はい。えっ?」

修一はホームで意味も無くキョロキョロしながら電話を続けた。他から見れば挙動不審に見えた。

「実は、エキストラの人数がもう少し必要なんですが・・・今回観光地でのデートシーンを撮るので観光客役などで二百人は欲しいんですが・・・ご都合付きませんか?」

相手の言っている意味は分かったが、正直、随分胡散臭いとも思った。

「あの・・・ネットで自分の他にあと二人応募してるんですけど・・・」

「何かあってもあの二人がいれば何とかなるだろう、そう思った。」

「はい!是非!大歓迎です。助かります。」

「場所はどこなんですか？」

「今回は川越市なんです。川越市のある場所でのロケなんです。」
「いつですか？」

「四月二十一日の土曜日です。午後四時からの撮影になるんです。」

「四時ですか・・・」

「夏の夕方のデートのシーンなので・・・。」

「分かりました！参加させていただきます。」

一ヶ月先の休日希望ならまだ間に合う、修一はそう思った。甫と桃子の意見は聞かずに、すでに頭の中では付き合わせるつもりでいた。「有難うございます。集合場所は川越市駅前になっておりますが、詳細はまた私の方から連絡を差し上げますので。私、榊原と申します。また何かあれば先日携帯にメールさせていただいた連絡先にお申し付けください。それと季節は夏という設定ですので服装の方もそれなりに準備してきてください。」

「分かりました。よろしくお願いいたします。」

「こちらこそ、では失礼いたします。」

最後の声を確認して、修一は電話を切った。

その翌日の昼休みに、修一はいつもの喫煙所で桃子に会った際にそのことを話した。イベント好きの桃子からは待つてましたとばかりの返事が返ってきた。応募してからしばらく時間が経っていた為、修一は桃子の返事がどんなものか心配したが、その心配は余計なものだった。当然甫にも付き合ってもらおうと話をしようと思ったが、その役を桃子にやってもらうことにした。桃子から話されれば甫も断るわけには行かない。気の優しい甫は桃子の言うことに拒否することはずな。応募したあの夜は無理やり付き合わせる形になったが、あれから時間が経っている。修一も本気であるまいと甫は考えているに違いない。桃子から甫に話きた夜、甫から修一へ連絡が入った。

「お前、マジで行くつもりかよ？」

甫が電話の向こうで笑いながら言っている。

「すまんなあ！聞いた通りだ。」

修一も笑いながら答えた。

「んじゃ四月二十一日に休日を希望しておけば良いわけだ？」

「そうそう。よろしく頼むよ。」

「何がよろしく頼むよだよ。」

そう言う二人で笑った。しかし、その日二十一日は三人とも休日が取れず、半日勤務になってしまった。修一の病院は一ヶ月の週休の数プラス二日休暇をとっていいことになっている。半日であれば0・5日休みと言う計算になる。

そして今日、三人は半日勤務の仕事が終わると一緒に病院を出て佐野駅へ直行した。その日は希望通りの休暇はもらえなかった。考えて見れば、別に休日を一日とらなくても夕方からなら、半日休日で十分だと修一は思った。どこへ行くにも車で行くのが修一であったが、さすがに土地勘の無い場所まで迷わずに行く自信は無かった。旅行であれば寄り道をしながら目的地に着けば良いが、今回はそうは行かない。電車で行くのが懸命と修一は考えた。案外まじめな男であった。

修一は桃子の買ってきたパンの入った袋の良い香りを嗅ぎながら埼京線のホームへ向かった。甫、桃子も後を追うようにについて行った。

「まだあと十分ある。あそこのベンチで桃子の差し入れ食べよう。」

「だから差し入れじゃくて割り勘でお願いします！」

「ははっ。分かってるよ。」

その会話の後ろで甫はあはあと息をきらせて両手を膝につけていた。

「なあ・・・君たちってこんな脚速かったっけ・・・？」

「あれ？甫。何バテてるの？エキストラが走る役だったらどうすんの？」

「そうよ綾部さん。ははは」

修一は小学校、中学校とサッカーを、桃子は陸上の経験の持ち主で

あることを二人と距離が開いていくうちに思い出した。

「とりあえず甫、座れよ。」

まだ息を切らせている甫が少し可愛そうになり、甫の左腕を取ってベンチへ促した。

「ごめん、ごめん甫。ほれ、これでも飲んで。」

そう言うのと浪野みずきがCMをしているスポーツドリンクを手渡した。甫はそんなことはお構い無しに蓋を開けゴクゴク飲んだ。

「おまえさ、電車余裕じゃん。走ることねえじゃん。」

「ははは、すまんすまん。ちょっとでも早い電車があればと思って。」

「でも綾部さん、そんな息きらせる程の距離走ってないですよ。ははは。」

笑いながら桃子が続けた。

「でも、私たちって結構ベンチで食事すること多くないですか？お正月といい、去年の夏といい・・・。」

「ああ・・・夏か。花火の時ね・・・。」

やっと甫が会話に入ってきた。甫が続けた。

「確かさ、あの時も半日仕事で花火の見学場所キープ出来なくて。花火会場付いた頃はいっぱいだね。確か織姫山の上から花火見たんだよね。」

「そうそう、でもあそこも仲代さんが案内してくれたんだよね？」

「そうだった。綺麗だったろ？空には花火、下は町の夜景で。」

「うん。綺麗だった。」

「修一結構そういうところ知ってるんだよね。意外とこいつはロマンチストなんだ。」

そう言うのと甫はまたぐくりとスポーツドリンクを飲んだ。

三人はやつと落ち着いてパンを頬張り始めた。まだ暖かい。どうやら桃子は上揚げたてのカレーパンを買ってきたようだ。修一も甫もカレーパンは好物なのを桃子は知っている。

「カレーパン買ってくるあたりが流石だねえ！」

「まあうれし！仲代さんに初めて褒められたような気がする。」

「しかし三人ともジーンズ姿じゃあ笑えるね。」

疲れた甫が一番最初に食べ終わり、ドリンクを一口飲みながら行った。

「うん。二人がデートするシーンなんだって。特に難しい役とかは無いみたい。あ、そうそう夏服とか用意してきた？」

「用意って言うか中にそれ専用のＴシャツ着てる。」

「私もそうした。シャツのしたにＴシャツ。」

「よしよし。」

そう言うとき修一は説明を続けた。

「今日のシーンは映画の二人が始めてデートする設定で、季節は夏だからね。」

夏のシーンを春やるのは耐えられるが、冬にやるのはキツイなあ・・・映像関係の仕事は大変だなあ・・・と改めて連絡が来たときに修一は感じていた。

電車を待つ間、ホームのベンチで桃子が買って来たカレーパンを頬張った。気づけば朝から何も食べずにいた。仕事を半日勤務して三人で駅に直行だ。時間に間に合わないと感じ三人して昼食抜きで駅へと向かったのだ。時間は午後二時半を回っていた。丁度食べ終えた頃、川越に向かう埼京線の電車がホームへ入ってきた。毎朝は通勤で押し寿司状態の埼京線であるが、土曜の午後でしかもこの時間の下りとなれば電車の中はガラガラであった。三人は電車に乗り込むと慌てる事も無く三人が座れる席を探し、ゆっくり歩いていた。扉が閉まり電車がゆっくり進んでいった。

「ねえねえ、仲代さん。撮影どんな感じなのかしら」

「いやいや、誘っておいて申し訳ないんだけど俺も初めてで勝手が分からん。」

「そりゃそうだよな。ただのアイドル好きのおじさんだものな」

「おじさんはねえだろ。」修一は笑いながら言った。しかし実際修一はわくわくしていた。画面で見ている浪野みずきに会えるのである。

る。実際イメージ通り清純でありながら活発で、素直なキャラだったらなあといういろいろな妄想が頭の中をめぐっていった。こんなにくわくするのは、技師学校時代、甫と文化祭でたった二曲披露する時の、あの気持ち以来久々のものであった。一駅、また一駅と近づくにつれて若干緊張してきた。誰も修一に完璧な演技などは求めていないのに、もし演技を振られたらどうしようかといらぬ心配をしていた。確かにあるテレビドラマのパーティーシーンで来賓客役のエキストラに演技指導を加える監督もいる。見た目によらず結構いらぬ心配をするのが修一の性格であった。子供の頃から少々何でもこなしてみせるという負けず嫌いも手伝っている。修一はこのわくわく感を大事に感じていた。左隣で甫と桃子はもしこんな役が来たらどうしよう、NGを連発させたらどうしよう、と本人たちにはありそうも無いような事を冗談で言って盛り上がっていた。ひょんな事から始まったこのエキストラの話に、二人もまんざらでも無い様子だった。修一は窓から景色をボーッと眺めていた。次第に演技がどうのこうのと言うよりも妙な緊張感が修一の中にこみ上げてきた。窓を過ぎる景色の速度が落ちたことで修一は我に帰った。

「仲代さん！着いたよ！」

電車は川越市駅に着いた。三人はそれぞれの家からさほど離れていない土地ではあるが訪れるのは初めてだった。電車を降り周りをキョロキョロしながら改札を出た。菓子屋横丁は蔵造りの町並みの一角にある、ほんの二〇メートルほどの通りに昔懐かしい駄菓子屋が並んでいる。川越市のこの辺りは蔵造りゾーン、博物館ゾーン、喜多院ゾーンと言う三区画の観光スポットがある。三人は蔵造りゾーンに向かった。駅を出て一〇分くらい歩くと黒い壁に覆われた蔵様の建物が並んでいるのが見えてきた。明治から大正にかけての雰囲気漂わせる、まさにタイムスリップという言葉がぴたり当てはまる様な風景だった。

「へえ・・・いいねえ」

桃子が笑みを浮かべながらその風景を懐かしむように見ていた。

「えっと・・・駄菓子屋横丁は・・・っと」

修一は多少無理やりつき合わせてしまったという気持ちからか、先頭で行き先を探った。大通りには沢山の名所に向けて小さな案内標識がいくつ也表示されていた。

「修一！あそこだ！」

修一と桃子が甫のかざした指先の方向に目を向けると、菓子屋横丁と書かれた標識があつた。その標識の矢印方向に三人が目を向けると、此处で何か行われてますよと言わんばかりに人だかりが出来ていた。三人は小走りに走って行った。その大通りから右に少し入った小さな通りだった。そこには通行禁止のポールが置かれガードマンらしき人物と撮影スタッフらしき人物が首からネームプレートを下げてそこに立っていた。三人はポールを避けて中に入ろうとした。「すいません、しばらく通行禁止になってます。ご協力ください。」ガードマンの一人が言った。

「あの、エキストラで応募したもののなんです。」

修一がそう言うのと、そのやり取りを聞いていたスタッフらしき人物が駆け寄って来た。

「ご協力有難うございます。こちらです。」

何人ものエキストラを案内しているせいか、てきぱきと集合場所の説明を三人に話した。

撮影区域のその場所には同じエキストラで応募した人々がいた。三人はその人の塊に混じった。修一はしばらく気後れをしていたが、二、三メートルの間に置かれている撮影機材を見て、撮影現場に来たことを認識して興味深くその辺りを見回した。しばらく見ているうちに浪野みずきの映画撮影現場ということを出し、憧れの浪野みずきの姿を探した。

しかしどこにもいない。やがて右手に拡声器を持った二十代後半と見られるめがねをかけた男性が、何かのファイルを反対の左腕の脇に挟み、右手で拡声器を持ち走ってエキストラ集団に近づいてきた。「みなさん！本日は有難うございます。皆さんのにはこの菓子屋横

丁で観光を楽しむ観光客の設定でお願いします！皆さんがいつも観光地で楽しんでいるような感じでいてくだされば結構です。皆さんに演技をお願いするのは可愛そうですから！」

エキストラの緊張をほぐす目的で軽い冗談を飛ばし笑いを誘った。その後の説明を聞くと浪野みずきと三条幸太郎が、この菓子屋横丁をデート中に観光客の一人の男性が胸を押さえて倒れる。二人がその男性に駆け寄り手を貸す。実はその男性は三条幸太郎扮する男性が幼い頃生き別れた父親だった。という設定らしい。菓子屋の一角からカメラを移動させるためのレール、大きな音声マイクなど、修一たち三人に撮影現場であることを再認識させるには十分なレイアウトであった。案内をしていた男性が、準備はどんなものかと、遠くにいる同じ撮影スタッフに目線を送りながら、大きな手振りであるんな合図を送っている。しばらくその男性がやり取りを終えたのか、菓子屋横丁内の一角にいる女性スタッフに両手で大きな円を描いて何かの許可を得たようだった。すると一角にいた女性スタッフがこちらに駆け寄ってきた。赤いふちのめがねをかけ、短めの髪の毛をポニーテール様に髪を束ね白いポロシャツにジーンズ、左手には緑色の腕章をつけていた。周りを見ればスタッフらしき人物は皆左手に同じ腕章をしている。腕章をつけている人が撮影関係なのかと修一は今更気が付いた。

「なんか・・・やっぱり独特な雰囲気ね・・・私緊張してきちゃった。」

「らしくないな。」

桃子も甫も各々現場の雰囲気を楽しんでいるようであった。

駆け寄ってきた女性が何やらエキストラに伝えようとしたが直ぐにやめ、さっき案内していた男性から拡張期を手渡された。自分の声量では全員に声が届かないことが分かって自然と男性から拡声器を受け取った。

「ではみなさん！ご紹介します！本映画監督の福谷真吾です！」
おおっ！っというどよめきがおきた。当然その中に修一たちの声も

混じっている。福谷といえばラブコメ映画から、子犬を主人公にしたアットホーム映画、サスペンス映画まで幅広く活動している、まさに今、駿の若手映画監督だ。本人の中に満ちている自信がオーラとなつてにじみ出ている。福谷は迎える拍手の中、軽く会釈しエキストラに向けニヤリと笑みを浮かべ、軽く右手を振って答えた。ポニーテールの女性は続けた。

「では続きまして！俳優陣です！」

修一の心臓はどくどくと鳴っていた。久明会病院の面接試験の時以来だ。

「主演の浪野みずき！三条幸太郎です！」

撮影スタッフ、エキストラ全員からの拍手で二人は迎えられた。エキストラの中の女性の、いわゆる黄色い声援を悲鳴が響いた。三条幸太郎に向けられたものだった。修一もみずきに黄色い声援を送りたいくらいだった。

「続いて、三条幸太郎の父親役となります、徳山功です。」

ポニーテールの女性の声はもう修一の耳には入っていなかった。修一の中ではもう他の俳優は問題ではなかった。修一の目には浪野みずきしか映っていない。あの浪野みずきが目の前にいる。グラビア、CM、ドラマ、憧れていた浪野みずきがそこにいる。太陽光線までも美しさの材料としてしまう髪、吸い寄せられるような瞳、グリスの効いた瑞々しい唇、透き通るような白い首筋、グラビアではやや豊満さをみせた胸・・・どれもこれも全て本物の浪野みずきが目の前にいるのだ。今までの憧れの気持ち走馬灯のように脳裏を駆け巡り、同じ空間に今自分がいる、今、浪野みずきと同じ環境で同じ空気を吸っている。修一は気の遠くなるような感覚になっていた。

「おい！修一、おい！」

「えっ？あ？・・・何？」

甫の言葉で我に返った。甫の隣で修一の様子を見ていた桃子が、大声で笑いたいのを必死で堪えている。監督の福山真吾がスタッフを呼び集め何やら打ち合わせを始めた。修一の目は浪野みずきに釘付

けだ。時計は午後四時を回っていた。少し肌寒くなつて来た事も修一は感じずにいた。しばらくするとまたさっきの男性がこちらに向かって走ってくる。

「では皆さん、適当で構いません。菓子屋横丁のこの区域で観光に来て楽しんでる様に適当に散らばってください。カメラリハーサルになります。」

「だって！どうするどうする！？」弾んだ声で桃子が言った。

んじゃあそこに行こう。三人は菓子屋横丁の一番北側の入り口にある駄菓子屋へ向かった。他のエキストラもそれぞれいろんな駄菓子屋へ広がっていった。幾分エキストラの分布に偏りがあつたのか、さっきのめがねの女性が何人か西側の方へ人を誘導していた。浪野みずき、三条幸太郎は修一達の向かいにある駄菓子屋へ入っていた。手には水あめを持っている。デートシーンの小道具らしい。この日のみずき、幸太郎の衣装はデートシーンと言うこともあつていたってカジユアルな服装であつた。幸太郎は大きな白地に胸に黄色い星が胸の真ん中にプリントされているＴシャツに下は薄茶色のチノパン。みずきは薄いレモン色のキャミソールワンピースだった。

当然今の時期日暮れ時は肌寒く、その上から足首丈もあるスポーツ用のベンチコートを羽織っていた。徳山功はなんと三人の駄菓子屋へ入ってきた。どうやらセッティング的に向かい合わせの駄菓子屋から出てくるところで幸太郎と徳山

がお互いの存在に気づき、そのときの興奮で徳山功が急に胸をおさえて倒れる、ということらしかった。監督はカメラの後ろにすでに陣取っている。スタッフがエキストラの服装を一人一人チェックしていく。

「すいません！ではリハーサルです。皆さんおねがいします。」修一たち三人を案内したさっきの男性が爪先立ちで自分の身長を僅かに伸ばしながら大きな声で言った。

続いて監督の福山が叫んだ。

「はい！ではいきまーす！・・・まだリハーサルですがー！本番の

様をお願いしまーす！」

修一、甫、桃子の顔は間違っても自然なものではなかった。

「どうしょ！」

「自然にな！自然に！」

わくわくしてにやけ顔が戻せない桃子に、決して自然ではない修一が言った。

「はい！よい・・・スタート！」

あれがカチンコかあ・・・一番冷静なのは甫だった。三人は無難に観光客を装った。駄菓子屋でベーゴマやブリキのおもちゃ、酢もも・・・店の中にあるものを手にとって物色しているふりをする。三人の背後では徳山功が駄菓子屋を出るところで昔ある事情で別れた自分の息子に気が付きその後胸を押さえて倒れるシーンを演じようとしている。そのとき、桃子に一般人として当たり前の興味が湧きだした。自分たちの背後にいる徳山功に自然と振り返ってしまった。

「カーツト！」

当然監督からストップがかかった。拡声器がこちらに向き声が発せられた。

「すいませーん！エキストラの方！徳山が倒れてから様子がおかしいと感じ振り向く、ということをお願いします。芸能人が後ろにいるので普通の興味が湧くのは十分承知してますが、撮影終わったらサインでも何でもどうぞ！」

現場は笑いに変わった。とてもいい雰囲気撮影現場である。みずきもこちらを見て笑っていた。自分に向けられている訳でもないのに修一はニコリとした。桃子の顔はこれ以上ないというほど赤面していた。その和やかな雰囲気反して三条幸太郎の顔は演技向けの表情から、眉間にしわを寄せ不機嫌そうな顔色に変わっていた。周りの反応を確認するほど桃子には余裕は無かった。

「さすが大村は大物だ。」甫が笑いながら言った。

その後リハーサルは5回ほど行われた。桃子の失態の後は無事にリハーサルは進んだ。徳山功リハーサルの回数だけ胸を押さえ倒れた。

そのたびにスタイリストが駆けつけ何度も服装をチェックしていた。当然ながら三人は徳山が倒れるたびに振り返り、「どうしたんだろう」というような表情を出そうと三人なりにがんばっていた。

一回一回撮影スタッフや出演者が撮影した映像を確認しようとモニターへ集まった。その風景を見て修一は映画撮影の真剣さを感じていた。ある者は画面を指差し、ある者は腕組をし・・・何度も何度も繰り返し画面を確認している。監督の指示が出たのだろうか、一台のカメラの位置を変えるために三人のスタッフが向かった。しばらくして改めてセッティングを終え監督が叫んだ。

「では！本番入りまーす！」

「おい！本番だつて！本番！」甫が言った。

「聞こえてるよ！」

修一が笑いながら言った。三人はまた元の位置に戻った。徳山功もこちらに戻ってきた。みずき、幸太郎も向かいの駄菓子屋へ入って言った。撮影現場全ての状態を確認し監督がまた拡声器で叫んだ。

「拡声器があるんだからあんなに大声出さなくても・・・修一は思った。『はい！いきまーす！はいよーい！・・・スタート！』」

カチンコが鳴った。三人はリハーサルと同じ演技をした。いろんな駄菓子屋、おもちゃを物色し楽しんでいるふりをした。向かい側のみずきと幸太郎が駄菓子屋から出てくる。同時にこちら側では丁度桃子の後ろで徳山功が駄菓子屋を出ようとしたら目の前に別れた自分の息子を見てハッとする演技をする。幸太郎のこちらをみてハッとする演技をし、二、三步こちらへ歩きだそうとする。そのときリハーサルと同じように徳山功が胸を押さえて倒れた。修一達は後ろの徳山の様子を伺う演技をしている。

「カーット！！はい！OKです！モニター確認しますので！！」そのとき、OKが出てても徳山功は起き上がりうとはしなかった。というより起き上がれずにいた。苦悶の表情をうかべている。

「ぐぐっ・・・うううつっ・・・」

徳山功は眉間にはしわがより下唇をかみ締めている。「うううつっ

っ！！！ぐっ……」

徳山は4、5秒苦しんだ後仰向けになりだらりと両腕を地面に置いた。修一は直ぐに徳山功の様子がおかしいのが分かった。

「大村！甫！」

三人は徳山功へ駆け寄り、立ち膝のような格好で据わり徳山功を囲んだ。大勢のエキストラがさらに三人をぐるりと取り囲んだ。後から監督の福山とみずき、撮影スタッフ、徳山のマネージャーと思われる男が修一たちを取り囲むエキストラを分け入る様に入ってきた。

「徳山さん？徳山さん？」

倒れた徳山の両肩と叩きながら桃子が大きな声で問いかける。

桃子はBLSの講習を受けていた。BLSとはBasic Life Support（第一次救命措置）の略である。

「徳山さん？徳山さん？」

もう一度桃子が呼びかける。すぐさま胸に耳をやり心拍を確認した。

「脈が無い！」

「AEDないか！？」甫が言った。

「こんなところにAEDなんて無いだろう。」

修一が徳山の顔を見ながら、緊迫した顔で言った。AEDとは小型の除細動装置のことである。現在では緊急に対応できるように、ゴルフ場やホテル等には常備されつつあるが普及率はまだ完全ではない。

「どなたかAEDがあるところご存知の方いませんか！？」

医療系人間でない人がAEDが何かを知るはずも無いか、修一は叫んで直ぐ思った。

「救急車を！」間髪いれずに桃子が言った。

徳山のマネージャーらしきベージュ色のスーツを着た男が携帯電話で直ぐに連絡をつけようとしていた。

甫は徳山の顎を引き上げ、さらに口を開けて異物が詰まってないかどうか、口腔内を確認した。

修一は自然と両手の平を下に向けた形で組み合わせ徳山の胸に置い

た。

「まさか大物俳優の心肺蘇生をやるとはなあ！」

まだ何もしていない修一だったが、額には汗がにじんでいた。

「行くぞ甫」

「おう、俺も大物俳優とキスするとは思わなかったね」

「疲れたら交代しよう」そういうと修一は徳山の上にまたがるような形で、さらに両手の手のひらを胸に当てた。

心臓マッサージは長く続けると二の腕がぱんぱんに張ってくる。それは三人とも職場の救急外来で何度も経験済みだった。

「いくぞ！1！2！3！4！5！」

「フリーーっ……」

「1！2！3！4！5！徳山さん！徳山さん！」

「フリーーっ……」

「1！2！3！4！5！徳山さん！しっかりして！」

「フリーーっ……」

修一は正直心臓マッサージをしながらも倒れている徳山が演技でもしているような錯覚を覚えた。今心臓マッサージをしているのはあの俳優の徳山功なのだから……

「1！2！3！4！5！」

「フリーーっ……」

修一の額には汗がにじみ出てきた。

監督、みずきと他のエキストラも心配そうに周りを取り囲んでいる。幸いロケ現場は外部からの交通がストップされている。野次馬が集まり交通渋滞になることも無い。修一は心臓マッサージを続けながらそう思った。徳山が倒れてから10分が経過していた。

「修一、代わろう。」

「頼む！」

修一と甫はお互いの処置を入れ替わった。

「大村、救急車はまだか！」修一が言った。

「うん、まだ。サイレン聞こえてこない！」

「観光地だしな・・・よし、甫！続けよう！」

「了解！」

「1！2！3！4！5！」

「フーーーーーっ・・・・・・・・」

「1！2！3！4！5！」

「フーーーーーっ・・・・・・・・」

「1！2！3！4！5！」

それからさらに5分たった頃、遠くにサイレンの音が聞こえてきた。現場スタッフが救急車を誘導するために円陣になっているエキストラ達を切り分けた救急車に向かって桃子が背伸びをして懸命に手を振っている。救急車はエキストラの人ごみ中へサイレンを消してゆっくり侵入し、救急隊員は倒れている“男性”のすぐ脇に救急車を止めた。

「関係者の方！こちらへ！」

救急隊員よりも先に大村桃子が叫んだ。慌ててベージュのスーツを着た四十代半ばの女性が駆け寄ってきた。桃子は続けた。

「徳山さん、お年は？」

「62歳です！」

三人の救急隊員は俳優の俳優徳山功が倒れていることで多少同様しているようだった。さらに桃子が続けた。

「62歳男性！意識消失！映画の撮影中に胸を押さえたまま、悶絶しながら倒れました。呼びかけにも反応していません。倒れてから二十分心臓マッサージを続けています！」

この対応に救急隊員は桃子がその種の職業の者であることを察した。

「ご苦労さまです！今病院に連絡してます。失礼ですが・・・」

何者ですか？という言葉が続きそうであった。病院に連絡をつけた隊員と救急車を運転していた隊員の二人が救急車からストレッチャーを出し、修一と甫の方へ向かっていった。四人で徳山をストレッチャーに乗せた。救急隊員は徳山の頭側と足側でストレッチャーを転がし救急車へ運んでいく。修一はストレッチャーに乗った徳山に

心臓マッサージを続けながら、桃子と話している救急隊員に向かって少し大きめの声で言った。

「栃木にある久明会病院の者です。今お話しているのは当院で看護師をしているものです。」

「そうでしたか！ご苦労さまです！では病院へ搬送します。どなたか！関係者で事情の分かる方！ご同行ください。」

「わ、分かりました！」

さっきのベージュの女性が慌てて救急車へ乗り込んだ。

救急車はまた大きなサイレンを流して、人ごみの中をゆっくり出て行った。現場は騒然としていた。

「ふえ・・・」

修一は両手を腰に手をやり軽く頭を下げ、大きく息を吐いた。監督の福山が三人の方へ歩み寄ってきた。

「すいませんでした。ご苦労さまでした。」

監督が話しかけた時に、三人はここが撮影現場であることを思い出した。

「あ、いえ・・・」

修一が言った。また言いくそうに監督は修一に話した。

「で、どうなんですかねえ？」

「はい？」

「徳山さん、どんな病気なんですか？」

「いや、われわれは医者ではないので・・・」

「そうですか・・・」

「ただ、見た感じ急性心筋梗塞かなあ・・・と・・・後は病院でどうなるか・・・」

修一は監督の顔を伺いながら言った。

修一には話しても良かろうと思ったのか、事情を話し始めた。

「徳山さんは今日がこの映画の撮影初日だったんです・・・」

なるほど、そういう事かと修一は察した。監督用の答えを探した。

「助かって、しばらくはお仕事無理かと・・・先ほども言いまし

たが我々は医者ではないので無責任にはお話できないんです。当然
医者より知識は無いですから・・すいません。」

「いえ・・こちらこそ。あなた方がエキストラにいて良かった。今
日は撮影中止にします・・。」

参加したエキストラは、まだしばらくその場を離れずにいたがスタッ
ッフが拡声器で撮影中止の声を聞くと、ぱらぱらと人ごみを散らせ
ていった。

三条幸太郎はすでに現場にはいなかった。浪野みずきはスタッフ
何人かと控え室用に借りていた駄菓子屋へ消えていこうとしていた。
ちらりと救急処置を行った三人の方を見て部屋の中へ消えていった。
修一、甫、桃子の三人はみずきの視線には気づいていなかった。

三人はさらにしばらく現場に残ったが、やがて来た時の格好に戻
り帰途についた。駅に着いたとき改札にある大きな液晶のテレビモ
ニターにニュース速報が流れた。徳山功死亡の速報だった。三人は
黙って顔を見合わせた。

第二救急室

あの撮影の日から約三ヶ月がたった。あの四月二十一日の帰り道、修一はとても疲れていた。他の二人も同様であつたらしく、いつもであれば何かイベントがあるたびに三人で食事して帰宅するのが定例であつたが、その日だけは三人がそれじゃあと言交わして各々自宅に向かった。あの撮影の翌日、スポーツ新聞の一面には「徳山功死去」と刷られていた。各テレビ局では追悼記念番組や、徳山功の主演した作品を放映していた。その後撮影は代役を立てて続けられた。あの撮影の日から二週間後に再び同じシーンの撮影が行われた。三人は二回目の撮影には参加はしなかった。

七月二十一日、今日から殆どの学校は夏休みになるこの日、仲代修一はいつもの様に検査業務についていた。午前診最後の患者の血液検査を終えて、向かいにある外来の中待合室へ行った。カウンタ―には外来看護師長と大村桃子、クラークの女性の三人がいた。診察の終わったカルテを整理しているようだった。

「食事してきますんで・・・緊急の検査依頼が出たらピッチで知らせてください。」

「はい了解。ごゆっくり。」

そう言ったのは大村桃子だった。

「あ、そうそう」

食事に向かおうとした修一に何かを思い出し、桃子が声をかけた。

「仲代さん、今日勤務は何？」

「不思議だね。お前がそう聞くときは俺は当直の事が多い。」

「あらまあ！それはそれは・・・私も今日当直なんだ。夕飯出前に

する？食堂にする？」

「出前にすつかなあ・・・」

「分かった。じゃあ七時半頃にピッチならすね。」

「あいよ！サンキュー」

そう言っていると修一は食堂へ向かった。

時計の針は午後七時半を回った。最後に夕診受付をした患者の診療を終え外来待合室の明かりを消した。大村桃子は診察を終えたカルテを束ね、医事受付に返却した。

「さてと・・・」

胸元のポケットに入っているピッチを取り出して修一にコールした。

「もしもし・・・」

「おう、終わったか？」

「うん、仲代さんは？」

「病棟は落ち着いたもんだし、大村が終わったんなら、外来依頼の検体は終了ということだな。」

「はは、そっか。で？どうします？かつどん、ラーメン、中華丼、・・・」

「あれにしよう！近くに配達もしてくれるカレー専門店できたら？」

「ああ！はいはい！この病院と同じくらいにできたところね！でもメニューがわからない・・・」

「あの店全国チェーンだろ？携帯で検索してみる！」

「ああ！なるほどね！さすがオタクですね！」

「・・・だからオタクじゃねえし！」

「すみませーん！今そっちに行きますな！」

「あいよ！しょうがねえから入れてやるよ。」

一分もしないうちに桃子の甲高い声が聞こえた。

「こんばんはー！！」

「お前早っ！いうえにうるさっ！」

「だっておなか空いちやって！それにうるさいのは今始まったことじゃないでしょー！」

「んだな。んで、お前何にする？うまそうだぞ！」

修一は携帯を覗き込みながら桃子に問うた。

「仲代さんは？」

「俺はこれ。」

そう言うとき修一は画面に映っている一品を指差した。

「納豆カレーにチーズトッピング！」

「じゃあ私はそれ以外にしよう・・・えつと・・・」

「お前相変わらず憎たらしいな。可愛げないつつつか・・・」

「えへ！・・・私これ！ほうれん草カレー」

「へいへい。ヘルシーやね。」

修一はオリジナル関西弁で答えた後、電話で注文をした。

「注文お願いします・・・えつと、納豆カレーにチーズトッピングを一人前とほうれん草カレーを一人前。・・・はいそうです。はい・・・はい・・・そうです。久明会病院の外来スタッフ控え室までお願いします。・・・あ、でしたら受付で仲代の名前言っていただければ・・・はい・・・お願いします。」

そう言うとき修一は電話を切った。

「今日は混んでて配達まで四十分かかるってさ」

「そうですか。じゃあ仲代さん外来の控え室に場所変えましょ。お茶入れるから。」

「おつす！・・・サンキュー」

外来スタッフの控え室には検査科に置いてあるものよりも画面の大きいテレビがあり、看護師の人数が多い分部屋の広さも検査科の控え室よりも広い。修一は携帯をポケットにしまい、桃子と一緒に外来へ向かった。

部屋について、桃子はお茶を入れ始めた。修一はテレビのリモコンを探し出しテレビをつけボリウムをやや絞った。

「はいどうぞ。」

桃子は熱い湯飲み茶碗を左手の人差し指と親指でつまむようにして修一の前に置いた。自分の湯飲みは右手で同じようにつまむように持ちながら修一の真向かいに座った。

「仲代さん、最近は何見てるの？ドラマ・・・」

「見てない・・・興味あるのが無くなった。」

「へえ・・・そうなんだあ。仲代さん男の癖に結構いろんなドラマ見てるよねえ」

「そうかなあ・・・」

「ね、そういえば・・・映画、ほらエキストラで行ったやつ・・・あれいつ公開だっけ？」

「来春三月予定とか言ってたな。確か。」

「なんか撮影つてより、仕事行つたみたいだったよね。」

「ああ・・・まさかあんなことになるとはな・・・徳山功亡くなつて・・・まさかな・・・」

「うん・・・」

お互いがあの状況を思い返していた。しばらくして桃子がまた話し出した。

「浪野みずきって最近テレビ出無いね。CMでは見るけど。うちの実家今浪野みずきがCMしてる大型テレビを買ったのよ。はは・・・」

「

「へえー。この前テレビ週刊誌見たら記事載ってたなあ・・・」

今度はあれ・・・西遊記のリメイク版やるみたいよ。ほら、俺たちが小学生の頃夏目雅子が三蔵法師で堺正章が孫悟空役でやってたろ？あれ、あれ。」

「ああ！はいはい！で？・・・いつから？」

「この秋みたいだぜ」

「おお・・・さすが浪野オタク！」

「だからオタクじゃねえって！ファンと呼んで欲しいなファンと」

「あい。すいません。・・・でもさ、撮影つてあんな感じなんだね。なんかいい経験した。」

「な。俺もそう思う。たまには変わったことすると面白いよね。」

「でも私無理だなあ・・・」

「何が？」

「台詞とか覚えるの。」

「安心しろ、お前にオフアーはこねえから。」

「あら！分からないわよ！後からスカウト来たりして！」

「いいなあ！お前前向きで。そこは見習うわ、マジで」

二人はしばらくいつもの様に掛け合い風な会話をしていた。合間にテレビをボーッと見ていたりした。テレビには番組と番組の間の紳士服の長めのCMが流れていた。その間しばらく沈黙がつづいた。疲れていたせいか、修一の目が閉じそうで閉じない、そんな動作を繰り返していた。

「今日の夜は静かだといいわね。」

「んだな・・・」

修一は目を擦りながら言った。そのとき桃子のピッチが鳴った。

「はい外来大村です。・・・はい・・・はい・・・えっ？分かりました。年齢は？はい・・・二十二才女性・・・症状は？はい・・・胃痛・・・はい・・・いつごろからですか？・・・朝から・・・そうですね？分かりました。何分後ですか？・・・はい、二十分後ですね？分かりました。あ、先生、第二救急室でいいんですよね？・・・はい。分かりました。」相手のピッチは切れたようだが、桃子はしばらく耳にピッチを当てながらメモが書き終わるまでその格好のまままっていた。

久明会病院は救急隊の電話を医師が受けることになっている。その後その医師が外来スタッフに連絡し準備を要請するという運用形態をとっている。今日の当直は院長だった。

「ん？何が入るんだ？」

「なんか過労で倒れた人みたい。胃痛もあるんだって・・・」

「朝から？」

「うん。朝からだって・・・」

「んなもん、朝来たら良かったのに。ずっと我慢してたんかね？」

「わかんないけど・・・病院が嫌いな人なのかもよ。我慢できなくなつたとか・・・」

「・・・んで？それが二十分後？」

「うん、そうだって。」

「カレーが到着するころだなあ・・・！また今日も晩飯が十一時頃かあ・・・?!」

「はは、かもね。・・・でさ、第二救急室を空けろって」

「第二？院長が？」

「うん・・・」

「だってあそこの部屋、開院以来まだ使って無いじゃん。間違いないの？」

「でも確認したら再度第二救急室って言ってる。」

「へえ・・・なんだろうな・・・まあいいや。行くか大村・・・」

「あいよ」

そうすると二人はスタッフルームを出て第二救急室へ向かった。まだ使用していないこの部屋は救急の件数が増えて来たら使用する予定だった。まだ救急搬送される人数も限られているため第二救急室は使用されないでいた。桃子と修一はまだビニールに覆われている機材を使用できる形に配置し、ビニールを取った。作業をしている間に遠くから救急車のサイレンが聞こえてきた。同時に院長が救急室へやっしてきた。

「大村君、仲代君、事情は後で説明する。とは言っても、患者が来れば各々事情を把握してくれると思う。とりあえず準備をしてくれ。レントゲンの当直者は呼ばなくていい。写真やCTは必要ないだろうからね。」

「はあ・・・分かりました。」

遠くに鳴っているサイレンを迎えようと三人は救急外来の扉を開け

た。夜とは言えムツとする熱さだった。クーラーはやっぱり快適なんだなあと修一は思った。

病院の外門に入った辺りで救急車はサイレンの音を消した。赤いパトランプだけをくるくる回し、救急車が救急外来入り口を少し越えるような形で横付けで停まった。同時に運転手側、助手席のドアが開き隊員が降りてきた。修一は救急車はサイレン音がないと少し間抜けだなあつと日頃感じていた。このときもそう思っていた。

「ご苦労さまです」

院長が言った。

「お願いします。」

救急隊員は三人に一礼するとすぐさまハッチを開け、患者の乗ったストレッチャーを下ろそうとした。ストレッチャーは患者の足から降りてくるようになっていた。ハッチを空けるとストレッチャーに乗っている患者の足が見えた。足というより、足袋が見えた。よく見ると白い着物のようなものを着ている。ストレッチャーが車から出されるにつれ患者の全貌が見えてくる。

「奥の第二救急の部屋にお願いします。」

「分かりました。」

そう言々と救急隊員はストレッチャーを完全に安全に救急車から出し終え、言われた部屋に向かおうとストレッチャーを転がし始めた。修一と桃子は自分の目で患者の足袋の部分を確認した段階で、第二救急室へ向かって行った。桃子は血圧測定器や点滴台、修一はいつ要請があってもいいように心電計の電源を入れていた。

「すみません！お願いします。」

救急隊が二人に声をかけた。

修一はいち早く反応し後ろを振り返った。そのとたん、修一の口が開いたままになった。

「えっ？・・・えっ？・・・」

修一の驚きに桃子も直ぐに反応し点滴台を押しながら患者の頭側にやってきた。

「えっ!!・・・うそ・・・」

見るからに撮影衣装とも言わんばかりの着物を身に着けた浪野みずきが苦しい顔をしながらストレッチャーの上に横になっていた。修一、桃子は異次元にでもいるのではないかという錯覚さえ覚えた。

救急車から降りてきたスーツ姿の三十代半ばの女性が院長に今までの経過を話始めた。手には大きな赤い手帳を持っていた。

「よろしく願います。」

「はい・・・。」

そう言っていると院長はストレッチャーに乗るみずきの頭の右側に歩み寄り、聴診器をみずきの心臓辺りに当て始めた。

「・・・で・・・という経過だったんでしょうか？」

院長は耳から聴診器のイヤホン部分をはずしながら言った。

「はい・・・実は朝から調子が悪かったんです。時折立ちくらみでふらついてたんですけど・・・撮影の予定が若干遅れてて、調子が悪いの推して撮影を続けていたんです。五時ごろ胃の辺りが痛いと言い出して・・・しばらく休憩していたんですが・・・だんだん痛みがひどくなってきたようで・・・。」

「五時というのは十七時ということですね？」

「あ、すいません。そうです。」

それを確認すると、直ぐ脇にある事務机でカルテを取り出し力リカと説明されたことを記載した。

「ふん・・・。」

院長は重く頷くとまたみずきの右隣に歩み寄った。

「えっと・・・本名も同じでいいんですか？」

「あ、はい。」

修一と桃子はその光景を呆然とみていた。

「おい、君たち何してる。バイタル。」

その言葉で二人とも我に返った。

「あ、はい!」

桃子はみずきの左腕に血圧計を巻き始めた。

院長は続けた。

「浪野さん。痛いのはどこですか？この辺りですか？」

そう言うともみずきの溝落ちあたりから臍の上辺りまでを右手で深く押し始めた。」

「う……はい……痛いです……。」

「吐き気は？」

「……それは……あまり無いです……う……。」

「……無理させすぎたんじゃないですか……？」

院長はお腹を押し、みずきの様子を伺いながら目線を動かすことなくスーツ姿の女性にやや冷たい口調で言った。

さらに院長は支持した。

「大村君、病衣に着替えさせて。」

そう言うのと院長は救急室内の仕切りカーテンを閉めようとした。修一は察してカーテンの外へ出た。

何か出来ることは無いかと修一は救急室を出ることもなく、院長がスーツの女性に病状の説明をするのを一緒に聞いていた。

「で……？あなたは彼女とどんな関係ですか？」

「はい。彼女のマネージャーです。」

そう言うのと彼女は手帳の中に数枚はさんであつた薄い水色をした名刺を院長に差し出した。

「ジャーマンプダクション……辻本……佳織さん……」

修一は院長の右後ろからそつとその名刺を覗き込んだ。

「で……先生……みずきの様子は何なんでしょう……？」

「疲労からくる、胃腸炎かと思います。検査入院しましょう？」

「入院……ですか……？」

「どの道今日お返しするわけには医師としては出来ません……週間ぐらい入院してみたらいかがでしょ……？」

「……はい……分かりました……。」

院長は辻本佳織の返事を確認してカーテン越しに大村桃子に向かって言った。

「大村君！」

「はい！」

「ソルラクトにビタミンジーンバイアル、それにブスコパン１アンプル」

「分かりました！」

院長は続けた。

「それと、採血。血算、生化学、それと念のため感染症も・・・」
「マネージャーの辻本は涙ぐみながらみずきを見ていた。

それに気づいて院長はマネージャーに向かい、さつきとは違うやさしい口調で言った。

「明日、念のために内視鏡検査をやりましょう・・・見てみないとほんととも言えませんが、命にかかわる可能性は薄いでしょう・・・」
「・・・ありがとうございます・・・ちよつと事務所に連絡してきます。」

「分かりました。」

そう言うともマネージャーは小走りに第二救急から出て行った。

浪野みずきが運ばれてきて二十分ぐらいたった。みずきは薬が効いてきたせいか眠りに入った様だった。院長はさっきの事務机に座っていた。カルテを書き終え一通り処置や検査をやり終えた修一と桃子に向かい小さく手招きして二人を呼んだ。

「こういうことだ・・・。救急隊から連絡が入ったときはさすがに私もびつくりした。この病院に芸能人が運ばれて来るのは初めてのことだ。この子今人気何だった？」

「はい・・・」

修一が小さく返事をした。

院長は続けた。

「今日は旧葛生町の石灰採掘場でのロケだったらしい。救急隊から電話を受けるときに説明を聞いた。とりあえずマスコミには余計な詮索をされたくないということで取り計らってもらいたいと患者側

から要請が来てね。」

「そうだったんですか……うかうか病気にもなれないんですね。」

桃子は院長の目から幾分視線を下げながら言った。修一は振り返り眠っているみずきに目をやった。

黄色い袈裟の衣装からすぐさま西遊記のロケだということが分かった。修一はまた院長の方へ振り返り、心配げに院長に話しかけた。

「先生……入院ですよ？どうするんです？」

「我々には守秘義務がある。患者のデメリットになるような事は出来ない。明日病棟看護師長と各部署の所属長を集め説明しよう。」

「入院はどこに？」

桃子も心配げに院長に聞いた。

「三階の個室にしよう。とりあえず三階病棟のスタッフには伝えないとな……。」

「分かりました。」

桃子はピッチを取り出した。それを見て院長は付け加えるように言った。

「それと、三階の夜勤のリーダーをここへ呼んでくれ。」

「分かりました。」

桃子はピッチで三階病棟の番号を右手の親指で押しながら返事をした。

「もしもし……大村です……一名入院です。二十二歳、女性……。」

桃子が病棟へコールして約三分で病棟のリーダーが来た。院長から患者が浪野みずきと聞かされたたん一瞬驚きストレッチャーに乗っている女性に目をやった。院長は二人に説明した事をもう一度リーダーに話した。

「……ということだ。師長には明日朝伝えるから。くれぐれも患者には余計な情報を流さないように注意してくれたまえ。」

「わかりました。」リーダーはそう言うのと桃子に目線を合わせ、意

思を統一したかのように二人はコクリと頷いた。そしてみずきの乗ったストレッチャーを転がそうとした。

「仲代さん、手伝ってください。かawaii二人じゃみずきちゃんベツトに動かせないよ。」

桃子の小さな気配りだった。

「お・・・おう・・・」

何故だか修一は少し気兼ねしたようだった。というよりあの浪野みずきが自分の目の前にいて、しかも自分の病院に入院することがまだ半信半疑だった。

みずきは特別個室321号室へ入院となった。

注文したカレーは受付に預けられていた。すっかり冷めたカレーを二人で頬張った。桃子は第二救急室での修一様子を再現しけられ笑った。みずきの搬送依頼その日の救急外来は来なかった。

しかし、修一は眠りにつけぬまま宿直部屋に横になっていた。

採血室にて

翌日、院長は各科病棟看護師師長、各医療技術部長を四階の会議室に集合させた。時間は朝八時半、スタッフの始業時間であった。この時間にわざわざ各所属長が呼ばれるとは何事であるかと病院職員の間には僅かにざわつきが起きた。大抵、経営会議か、運営会議、最悪は、ある時期連日放映されたような医療ミスによる事故か何かと、職員の詮索はお決まりのルートをたどる。その中のいずれでもなく、これから明かされる内容は、昨日の夜勤スタッフにしか分からない事であると修一は感じていた。修一はあえて一言も発せずにいた。というより発しないほうがいいと思った。無責任な自分の一言でスタッフの勝手な憶測が始まり、それに尾ひれが付けば浪野みずきにとってマイナスになると思った。夜勤明けの修一に、周りの何名かのスタッフが何か知らないかと問いかけてきたが、修一は余計な事は何一つ発しなかった。大村桃子も同様であった。浪野みずきのあんなに苦しそうな顔は演技でも見られない。本人にとっても見られたくない、イメージされたくないに違いないと思っていたからだ。修一は夜勤帯に桃子が言った「おちおち病気にもなれないんだ」という言葉を思い返していた。

一方、会議室では院長から浪野みずきが入院している事が告げられた。年配の看護師長クラスの者は“浪野みずき”という名前では誰なのかわからない者もいた。各々が隣の者に清涼飲料水のCMの話や、恋愛ドラマの題名を聞いて驚き、一般市民的なりアクションを見せた。院長は予想通りの反応を見て、一通りのざわつきを鎮めてから話を続けた。

「芸能人が入院してきたからと言って、我々のやるべき事は変わりません。ただ浪野さん側にとっては病気になる入院したことでマスコミ的いろいろな弊害が起こり得ることが考えられます。ただの興味本位でいろんな詮索はしないように各階のスタッフに伝えてく

ださい。我々は医療人です。皆さん肝に銘じてください。それと入院患者、外来患者に関しては積極的にこの話をするのは控えていただきたい。特に三階病棟のスタッフにはくれぐれもお願いしたいです……。あ、それと」

そう言うと、三階病棟師長に目を向けた。

「浪野みずきさん、本日内視鏡検査を行います。本来であれば内視鏡室で行うところですが、お話した通りの事情により病棟で行います。内視鏡カメラ一式を327号室に運んでおいってください。処置台は病棟の物で結構です。」

「わかりました。で、開始時間は？」

「九時半にお願いします。」

「分かりました。」

師長は返事をした後、唇をきちつと閉じて院長に理解したことを表情で伝えた。

「話は以上です。何か質問は？」

「……」

本来であればいくつか質問をするべきことはあるはずなのは分かっているのだが、スタッフは初めての経験でこの先なにが起きるのか正直分からなかった。

「では、以上です。皆さん職場に戻ってください。」

院長の一声で各所属長は院長に向かって一礼し次々と会議室から出て行った。

その日、予定時刻を十分過ぎた九時四十分からみずきの内視鏡検査が施行された。胃潰瘍が二ヶ所発見された。がんの可能性があるかないかを調べるために、潰瘍の箇所からいくつか胃粘膜を採取し、病理検査へと提出された。検査を終え、みずきの口腔から内視鏡カメラが引き抜かれた。

「はい、波野さん良くがんばりましたね。検査は無事終了です。お疲れ様でした。」

院長は軽い麻酔でボーツとしているみずきに優しく言った。引き抜いたカメラを補助にしていた看護師に手渡し、滅菌手袋をはずしながら同室にいたマネージャーの辻本佳織の所へ歩み寄った。

「有難うございました。それで、具合はどうなんでしょう・・・？」

「やはり、過労とストレスですかね。潰瘍がありました。胃というものは、胃酸から胃を守るために胃粘液を分泌して胃粘膜の表面を覆っています。通常であれば胃酸の分泌と胃粘液の分泌とはバランスがとれています。過労や精神的なストレスで自律神経の働きが乱れると、そのバランスがくずれて胃酸が多すぎる状態、よく言う胃酸過多の状態になります。すると胃酸が自分の胃の粘膜を傷つけて潰瘍ができるんです。ガンの所見ではないと思いますが、念のため粘膜をいくつか採取しました。結果がでるまで一週間かかります。でも心配ないと思いますよ。」

「良かったです・・・！有難うございました。」

院長は辻本の表情が本当にみずきの“体”を心配している事を伝えるものに思えたので、それ以上言うのは必要ないと感じた。それに辻本への説教はみずきが搬送されたときに既に終えていることも分かっていた。

「今弱い麻酔がかかっている状態にあります。しばらくボーツとしています。もう少しすれば普通に帰ります。」

そう言うと院長は部屋を出て行った。少ししてカメラ機器や処置台を転がし看護師二名も部屋を出ようとした。

「何かあったら枕元の緑のボタンを押してください。あ、それか内線電話でも構いません。我々のスタッフルームは321番です。あ、丁度このお部屋の番号と同じです。」

この特別室には病院全部所につながる内線電話が引かれていた。

「分かりました。本当にいろいろご面倒をおかけします。」

「いえいえ。また元気になって早く活躍していただきたいですし。では・・・。」

二人の看護師はニコリと笑って静かに特別室を出ていった。

しばらくしてみずきは目を覚ました。時計は１１時１５分を少し過ぎた所だった。みずきは時計に目をやり、検査後自分は眠りについていた事に気が付いた。そして自分の寝ている枕元からベットへと視線をだんだん部屋中にひろげ辺りをキョロキョロみまわし辻本佳織の姿を探した。自分の寝ているベットの左斜め前方にある小さなソファで右手に携帯電話を持ちながら眠っていた。眠っていてもみずきの視線に気づいたのか、辻本佳織は小さくぱちぱちと瞬きをし、みずきの方へ目を向けた。

「あ、みずきちゃん！気分はどう？大丈夫？」

「うん、大丈夫。検査したのは覚えてるんだけど・・・なんだかぼわーんとしてうつらうつらしてて・・・気が付いて見たら今起きたって感じ。」

「よかった。やっぱり疲労だつて先生言つてた。ごめんね・・・疲れてるの分かつてたのに・・・私・・・」

「ううん。だつて私が自分で大丈夫って言つて力オさんをお願いしたんだもの。」

「でもさ・・・」

みずきはデビュー当時から辻本佳織と一緒に仕事をしてきた。少し垂れ下がった目じりに優しさをを感じ姉のような気持ちで辻本に接するようになった。実家へ帰る時以外、買い物も食事も身の回りの事も殆ど辻本佳織と行動を共にしていた。都会に知り合いもないみずきにとっては一番信用でき、甘えられる存在であった。

「撮影はどうなったのかな？」

「うん。大丈夫。あまり心配しないで。少し休みとりましょ。ここんとこ撮影も夜中になることが続いたし神様が与えた休暇と思つてさ。撮影関係者にはみんな連絡したし。」

「どのくらいここにいろの？」

「検査入院で一週間つて・・・先生が」

「一週間かぁ・・・」

「今日の朝、採血したでしょ？で今内視鏡検査終わって、夕方四時に今度はCTだって。」

「えーっ？まだ何かやるの！？・・・痛いのが我慢すれば良かったー！」

「ふふっ！何言ってるのよ。本当に痛いときは無理よ。昨日で懲りたでしょ？」

「・・・はい・・・わかりました・・・ふふっ・・・」

二人の会話は症状が良くなったみずきが明るく話せるように戻ったことのでいつもの二人の会話に戻った。

みずきが入院した特別室は、床はベージュの絨毯張りでバストイレつき。小さいといっても大人二人は座れる白いソファが置いてあり、下手なビジネスホテルより高級感がある。ベットに横になると頭の上にはB4サイズほどの液晶モニターがあり横になった状態でもテレビを見ることが出来る。思わずみずきは頭を枕に戻し、モニターを目の前に引き寄せ、テレビのスイッチを探し電源を入れた。

「へえ？・・・すごいね。」

すっかり22歳の女の子に戻ったみずきはものめずらしそうに画面を覗いた。今まで病気とは無縁のみずきが病院に入院となれば目に入るもの全てが興味を持たせるものになる。

モニターに画像が映し出されると画面下の右側からテロップが流れてきた

「久・・・明・・・会・・・病・・・院・・・より・・・おし・・・らせ・・・」

久明会病院ではテレビモニターを通じ、病院の案内や注意事項を表示していたのであった。

「ここ、久明会病院っていうんだ・・・？」

「うん。佐野市だよここ。昨日のあの状態じゃわからなかったわよね・・・。」

辻本は昨日の事を懐かしげに微笑みながら言った。昨日の苦悶の表情は嘘のように消え、生き生きと自分の疑問を口に出すみずきに安

堵した。昨日の苦悶の表情以前に、この世界に入ってきたみずきをも思い出していた。あまりにも控えめ過ぎるみずきを担当した当初、こんなに真つ直ぐで素直過ぎる子が果たしてこの世界でやっていけるのだろうかと思えた。しかし、一つ一つ人前で表現していく度にみずきは変わって行った。

その日の夕方みずきにＣＴ検査が施行された。ＣＴ画像上、特に所見も無く異常なしと判断された。夕方四時に検査が行われたのは、外来検査予約の患者、病棟検査予約の患者の全てを終了した後の方が人目に付きにくいという院長のはからいであった。出歩くと目に付くため、ベットに寝たまま布団を深めにかぶった形で放射線科に入室したのであった。検査は移動も含め二十分程度で終わり、また同じ格好で病室に戻ってきた。

「ねえねえ力才さん。」

「ん？何？」

横になるみずきのベットの脇にお尻の半分だけを乗せた形で座りながら辻本佳織は答えた。

「夕食ってどうするの？」

「入院してる間は病院の食事よ。先生が食事考えてオーダーしてくれてるみたいよ。」

「そうなんだ。」

「胃が悪くて入院してるんだもの。しかたないわよ。」

辻本は子供でも見るような目でやさしく笑いながら言った。

「うっん。そうじゃ無くて。私、入院なんて初めてだから病院食って興味があつて！」

「ははは、何だ。それじゃ良かったわ。」

時計が六時を回り、みずきの元に看護師が食事を運んできた。ニコニコしながらみずきは看護師が運んでくるトレイを見つめていた。

「あら？随分な笑顔ですね？」

みずきの笑顔につられニコニコしながら看護師は言った。

「はい！初めてなんです！病院食！」

「はいはい、ではどうぞ？」

看護師はみずきの配膳台におわんや小鉢が乗ったトレイを置いた。

「では、召し上げね」

そう言うとき看護師は笑みを保ちながら病室のドアを閉めた。

看護師が部屋を出るのをベットから見送り、直ぐ配膳台の上に置かれたみずき用食事が乗ったトレイに目をやった。

「・・・へえ・・・」

みずきは小鉢の蓋を開け、汁椀の蓋を開け、ご飯椀の蓋を開けた。

「おかゆ・・・？おかずは・・・なんか細かく刻んである・・・」

「

「なんせ胃が悪いんだから、仕方ないわね。」

「そっか・・・では、いただきます。」

「わたし、お茶買ってくるね」

「あ、ありがとう」

今度は辻本の顔をベットの从上から見送った。

「へ・・・」

一つ一つのおかずを物珍しそうに味を確認しながら一品一品口へ運んだ。みずきには入院一日目でまた新たな経験をしたのだった。

ピンポーン！ピンポーン！

「・・・ああ・・・あい・・・」

修一は元日の朝のように無愛想にドアを開けた。

「おっす！起きてたか！」

「・・・なんだよ。お前か・・・起きてたんじゃないくて、たった今お前に起こされたんだ・・・」

「そうともいうな。上がるぞ」

「はいはい・・・」

夜勤明けの修一は頭をぼりぼり掻きながら目を半開きにして答えた。無造作に靴を脱ぎ、途中で修一を追い越し修一よりも先にテーブル

に着き持ってきたコンビニの袋からビールやらつまみや五品六品取り出した。

「なあ！修一！昨日は大変だったなあ！いろいろと！」

修一は何も言わず台所で顔を洗っていた。

「まさかお前が夜勤の時に、あの浪野みずきが入院してくるなんてなあ！」

「ああ。」

顔を洗い終え、新聞の勧誘時にもらった白いタオルで顔を拭きながら修一は答えた。

夜勤明けの修一は午前11時にはアパートに戻っていた。みずきの入院処置が終わった後、なかなか寝付けないまま病院の宿直室で朝を迎えた修一は、アパートに帰ってきてても寝付けずに、しばらく仰向けで天井を仰ぎながら横になっていた。救急車からみずきが運ばれてから入院までのことを思い返していた。真に痛みに喘ぐみずきの顔、そのときの衣装・・・袈裟に足袋かあ・・・きつと三蔵法師の役なんだろう・・・でも頭が坊主ではなかったなあ・・・そつか・・・あんな時カッラぐらいははずしてくるか・・・そういうえば・・・軽くウェーブがかって・・・以外に黒髪だった・・・そんなどうでも良いようなことをただぼーっと考えていた。キヤンダルなことから体調の事まで、自分の全く関係ない人から全部を見られているのか・・・一度のきっかけで人の生活って世界が変わるんだなあ・・・いろいろな事が頭をよぎっていた。いろいろ考えていることが理由ではないが、昼食も摂る気にはならなかった。修一はなんだかひどく疲れていた。そうしているうちに万年床に体がもぐりこんでいたようだ。甫に起こされ布団から這い出るときに修一は気づいた。

「んで？どうだったんだよ・・・？そのときのお前の様子は？」

「どうって・・・そりゃびっくりしたさ・・・何がなんだか・・・でもびっくりした。マジに。」

「だろうな！今日夕方ごろうちに来たよ。CTやりに！やっぱ可愛

いな！」

「なんだよお前、撮影ん時は乗り気じゃなかったくせに！」

「それはそれ、これはこれ。人の気持ちは変動するのさ！」

そうだな・・・確かに変わるもんだと修一は思った。お腹を痛がっているみずきの表情を思い返すと浪野みずきも人間なんだなあと、ブラウン管での浪野みずきに対する気持ちと、今では少しだけ思いの角度が变つてきている自分の気持ちを客観的に考察していた。なんだか変な感じがした。自分が今どんな次元にいるのか分からなくなっていた。少しいろんな事を考えるのはやめようと修一は思い甫に言った。

「甫、たまには外飲みに行くか！」

「え？珍しいな。いつも外に出ようと言うと面倒くさいとか言うくせに」

「お前今人の気持ちは変動するのさ！とか言ってたじゃん。」

「ははっ。そだな。いいよ。行こう・・・大村も呼ぶか？」

「ああ、かまわんよ。でも寝ていたら無理にはよそう。」

「そっか、あいつも夜勤明けか・・・」

大村桃子にも連絡がつき、三人は修一のアパートの近くの居酒屋でいつもの三人漫才を繰り広げた。その夜、修一はぐっすりと眠りに付いた。

浪野みずきが入院して二日目の朝が来た。厳密に言えば搬送された日から数えれば三日目ということになる。病院の朝食もまた昨晩の夕食同様一品一品楽しみながら食した。ホントに胃潰瘍とは思えないと、配膳トレイを下膳をしに来た看護師がニコニコしながら部屋を去っていった。その日、マネージャーの辻本佳織は朝みずきの顔を見たら東京の事務所ジャーマンプロダクションへみずきの現状報告の為向かう予定だ。本来病院の面会時間は午後二時から午後七時までと決まっているのであるが、辻本佳織は特別許可をもらって

いた。パウチされた赤い“特別面会許可書”を首からぶら下げるのが条件だった。朝九時に辻本佳織は特別室321号室に現れた。

「おはよー。どう？具合は？」

「うん。なんかよくわからないけど・・・痛くない」

「そう。良かった！」

「ねえねえ力才さん。」

「ん？何？」

辻本は両方の眉毛をあげながら振り向いた。小さなひまわりの花を花瓶に生けようとしていたのだ。

「病院の中見てみたいなあ・・・とか思っただけど・・・」

「無理！っていうかその前にまだ動かないほうがいいんじゃないの？」

「だよね。でもだんだん退屈になってきた。」

人気アイドル女優という点を除けば現代の二十二歳だ。初めて入院ともなれば今自分がどんな場所にいるのか興味が出てくる。と同時に体調が回復に向かっている証拠でもあった。みずきにとってはこの部屋だけでも興味いっぱいと感じれば、この扉の向こうはどんな世界なんだろうと興味が湧くのは当然だった。

「なんか欲しいものとかある？」

「ううん。特にない。大丈夫。」

「そう。じゃあ私今日事務所に行ってくるから。」

「うん。大丈夫だからってよろしく伝えてください。」

「分かったわ。じゃあ行ってくるから・・・夕食には間に合うように来るからね。くれぐれも大人しくしているように。」

辻本はいたずら気に微笑みながら言った。辻本は病院近くのホテルに泊まっていた。昨日はみずきの夕食が食べ終えるのを確認してホテルに戻ったが、辻本自信もみずきの入院で疲れていた。ホテルに帰るシャワーも浴びずにコップ一杯の水を飲むと事務所に連絡を入れることも忘れシングルベットに倒れこむように眠ってしまった。朝目覚めたら朝の五時半だった。ホテルに着いたのが夜の八時半。

たつぷり九時間は眠っていた。

連絡を忘れた分、事務所に戻り細かい報告もしようと思い、朝八時頃病院に電話を入れ診断書を書いてもらうように依頼をしておいた。みずきの顔色を確認したら、ナースステーションに寄って診断書をもらい事務所へ・・・辻本佳織の朝の一発目の仕事であった。

「行つてらっしゃい。」

みずきの声に振り向くと閉まろうとするドアの隙間から小さく右手を振つて答えた。

辻本佳織が部屋を去った後、みずきは横になりテレビモニターを顔の前に引き寄せた。朝のワイドショー関連にはまだみずきの入院は報道されていない。一時間もすると各テレビ局も芸能関係のコナーから特集コーナーへと変つて言った。見ていたテレビ局は千円激安高級ランチの店の特集だった。

「はあ・・・」

さすがのみずきも退屈になつてきた。布団をめくりピンクのスリッパを履いてソファ―脇に置いてあつたみずきのバックを取り出した。「コレじゃまずいかなあ・・・」

いつもの変装用の黒ぶちのダテめがねを取り出すと窓に映る自分の顔と確かめた。めがね以外は化粧を落とし、柔らかなウェーブのかかったスツピンの浪野みずきがそこにいた。

「・・・」

また鞆をこそそ探り、今度はピンクのゴムを取り出し、髪を編み下げにしてみた。

「うん・・・いいかも・・・」

そう言うとは今度はハンドバックから花粉防止用のマスクを取り出した。みずきは花粉症なんかではなかった。無論返送用の軽装備グッズと言つたところだ。確かにここまですれば誰もあの“浪野みずき”と分らないまであつた。

「ごめんね。力才さん・・・」

一人で小さく辻本佳織に詫びて静かに病室のドアを開けた。引き戸であるドアをゆっくりと静かに開け頭だけを出しキヨロキヨロ廊下を見渡した。みずきが入院した特別室321は特別室ばかりが並んでいる並びの中にある。一般病棟や集中治療室等ではなく比較的人通りも少なかった。みずきはそれを確認すると裏エレベーターから1階へ降りた。エレベーターが着くと開いた扉から配薬の為のカートを押した白衣を着た女性が乗り込もうとしていた。みずきは慌てる事も無く視線を下にしてエレベーターを降りた。白衣の女性はエレベーターにカートを運ぶとさっさと行先階ボタンを押し、扉を閉めた。みずきは軽いため息を付くと、スリッパの音を抑え目にしようと気をつけながら歩き出し突き当たり廊下を右に曲がった。廊下は突き当たりになっており右側は外来待合、生理検査、内視鏡検査、採血室、左側は小児科、口腔外科、泌尿器科と書かれてあった。

「・・・・・・・・・・」

みずきは戸惑いながらも突き当たりを右に曲がった。

曲がって直ぐ、廊下は広いフロアへと形を変えていった。外来受付のスペースになっていた。そのフロアからさらにその先に廊下が続いており、廊下の左側が外来中待合室、右側が採血室、その隣が放射線科となっている。みずきは受付フロアをやや小走りで通り抜け外来中待合室入り口の辺りで足を止め中を覗き込んだ。そこにはみずきのようにマスクを着けて咳き込んでいる者、体温計を脇に挟みながら一転をボーツと見つめているもの、右足をギブスで固め車椅子で順番を待っているもの、様々な患者が診察を待っているところであった。

「・・・・・・・・・・」

みずきは今自分がいる病院の中をまじまじと見ていた。すると向かいの部屋から大きな子供の泣き声が聞こえて来た。みずきは思わず後ろを振り返り“採血室”と書かれている部屋の入り口へ向かうとした。

「やだ！やだ！やだ！」

思わずみずきは足をとめ、中待合入り口脇に立つたまま採血室に目をやった。大きな声で目から涙をいっぱい流しながら四、五才くらいの男の子が採血室から走り出してきた。見事なロケットスタートと言った感じた。

「卓真！こら！待ちなさい！仲代さんなら我慢するって言ってたでしょ？」

そう言うとう母親であろう女性が慌てて男の子の後を追って採血室から出てきた。廊下にいる患者は子供と母親の姿をにこやかに目で追っていた。しばらくすると白衣を着た坊主頭の男がニコニコしながら同じ採血室から廊下に出て二人の親子を目で追っていた。首には“仲代”と大きく書かれたネームプレートがぶら下がっていた。

「あ！あの人・・・！」

みずきはハツとした。

同時に修一もダテめがねに編み下げの女性に目をやった。修一には直ぐにそれが浪野みずきであることに気が付いた。

「え！そりやまずいでしょ！」

二人ともお互いに驚きながら口をぽかんと開けて、廊下の向こうとこちら側でお互いまなざしを動かせずにした。

チャーシューメン

二人はお互いポカンと口を開けたまま硬直状態であった。我に返ったのは修一の方が先だった。修一は周りをキョロキョロ見回すと小走ってみずきに近寄り、患者を採血室に促す様な格好で、みずきの左肘辺りに手を添え室内へ導いた。みずきも一緒に小走りなり、修一が導くままに採血室へ向かった。二人の体が部屋に入った辺りで、修一は自分の手がみずきの左肘に手を添えている事に気づきはつとした。

「あつ、あつ……すいません。つい……ごめんなさい。」

「あ、いえ……そんな……大丈夫です。」

「でも！みず……じゃなかった浪野さん！駄目ですよ。まずいですよ！」

そう言うのと修一は採血室から顔だけを出し、キョロキョロと辺りをうかがった。外来は午前診療中だ。当然採血オーダーの患者がいつ来るか分からない。修一の方がドキドキしていた。

「ご、ごめんなさい。でもエレベーターですれ違った人いましたけど、気づかれなかったし……。」

「いや……いいですけど……でもちよつと危ないです……危ないって言うのも違うあ……でも、病室へ戻りましょう。」

自分よりも慌てている修一にみずきはクスクスと笑った。

「ごめんなさい。」

修一はクスクス笑う“アノ”浪野みずきに一瞬またポカンとしたが直ぐまた我に返った。

「いや……あの……別にいいです……あ……でもあまり良くないです……。」修一は自分で何をどうしたいのか分からなくなっていた。二人がごちゃごちゃしている時にさっきの母親が採血室に戻ってきた。

「どうもすいません……今度は大丈夫です。いつもいつもすいませ

ん。」

母親の声が聞こえた瞬間にみずきはうつむいて壁際に身を寄せた。

「いえ、いえ、良いですよ。じゃあ岸岡さんはこちらの椅子にお座りになって少々お待ちください。」

とつさに機転を利かした修一は、みずきを壁際にある三つあるうちの一番内側の椅子に案内した。みずきは修一の気遣いに気づき、黙ってコクリと頭で返事をして言われた場所に座った。今だけ私は岸岡なんだと思った。

頭を下げた詫びる母親の後ろから、さつき採血室から飛び出した幼児が入り口から泣きべそをかきながらこちらを覗いていた。

「えらいなあー、卓真君！出来るんだ？すごいね！そうだよねもうお兄ちゃんだもんね！」

「……………」

母親と修一が卓真と呼んでいる少年がグスングスンとべそをかきながら採血室に入ってきた。

「仲代ちゃん…………痛くない？」

「うん！痛くしないようにがんばるよ。だから卓真君もがんばる！ね？」

修一はニコリと微笑んだ。

「わがった…………グスン…………がんばる…………グスングスン……………」

修一はニコニコと微笑みながら、最近の戦隊ヒーロー物の話を始めた。

「卓真君は日曜日仮面ライダーとか見てるん？ん？」

「うん…………みちえる……………」

「そっかあ…………かつこいいよね！」

修一は会話で子供の視線を自分の顔に向けさせ、手元で注射針とシリンジを用意した。

「なんていう名前だっけ？」

「仮面ライダー霸王」

「あ、そうそう！あれかつこいいよねえ！」

「うん！ぼくね！くちゅ買ってもらったんだ！」

「おお！いいなあ！今度おにいちゃんにも見せてよ！」

「うん！いいよ！今度はいてくる！」

「おし！兄ちゃん楽しみにしてるからな！」

修一はそう言うと出来た採血管を机の上に置き枕と駆血帯を用意した。針をつけた注射器は採血台の引き出しにそっとしまった。

「じゃあ卓真君こっち見ないで後ろのお母さんのお顔見てようね。」

「・・・うん！」

「今度は親指さんの中に入れてグーを作ってみようか。」

「うん・・・。」

「よし上手だ！ちよつとゴムで腕縛るね。ごめんね。」

修一はさつさと駆血帯で上腕を縛った。子供の気が変わらないうちに採血をしてしまいたい。さつき隠した注射器を、引き出しを開け取り出した。

「じゃあちよつとだけチクンってするよ！」

「うん・・・うぐっ・・・。」

また泣き出しそうになったが、一生懸命堪えていた。

「おお！すごいじゃん！もう少しね！がんばって！」

「うぐっ・・・うう・・・。」

子供は目にいっぱい涙を貯めて堪えていた。

「はい！よーし！終わりだよ！すごいじゃん！！できたね！えらかったね！！」

子供ながらに今まで泣いていたことが恥ずかしくなったのだろうか、涙の跡が残っている頬を今度は笑顔でパンパンにした。母親も後ろでニコニコ笑っている。

「はい！終わりだよ！よく頑張った！・・・で、お母さん？」

「はい・・・。」

今度は母親が修一に呼ばれた。母親はニコニコ笑っている子供の隣にお辞儀をしながら立った。

「今日取った血液で調べる項目の中で院外に外注しなければならぬ項目があるので、結果が全部揃うのに三日かかります。次の診察の予約とかはありますか？」

「ええ。来週の火曜の同じ時間に・・・」

「そうですか。ではそのときには全部検査結果が出てると思いますので、先生からご説明あると思います。」

「分かりました。いつもお手数かけてすみません・・・」

「いえいえ・・・じゃあ卓真君！今日はえらかったね！気をつけて帰ってね！」

「うん！おにいちゃんも上手だったよ！」

「ありやま！こりやどうも！」

採血室は和やかな雰囲気になっていた。傍らでその光景をうつむいたまま見ていたみずきも笑みを作らずにはいらなかった。

「おにいちゃんバイバイ！」

「はい！バイバイ！」

そう言うとき修一は右手を小さく振って母子を見送った。

「ふえー・・・！」

そういえば浪野みずきの前だったと急に思い出した。

「あつ・・・」

そう言うとき修一はみずきにニコリと笑いかけた。

「やっぱり慣れてるんですね。あんなに素直に言うこと聞いて。」

「いえいえ、ここまで来るのだから大変ですよ。あの子常連さんなんです。本来お子さんは小児科の看護師さんに採血されるものなんですけど、以前小児科のドクターに用事があつて診察室に行ったら隣のベットルームであの子が採血されてる場面に出くわして・・・泣き止まずに採血させないことで看護師さんが困ってて、ちよつとお手伝いしたんです。そしたら、今度は俺・・・じゃなくて私があの子にご指名されることになって・・・あの子だけここに採血しに来るんです。とは言ってもいつもあんな感じで・・・最初はわんわん泣いて説得するのに大変で・・・。」

そういいながら修一は優しい笑みを浮かべた。みずきはニコリと笑いながら首をかしげて修一の話聞いていた。

「でもここまですんなり来たわけではないんですよ。初めての子供の採血なんてそりゃあドキドキで」修一は話の相手がみずきと言うことをすっかり忘れ、修一のその当時の自分に戻って熱くなるうとしていた。

「あ、すいません！俺・・・」

「いえ、何か・・・新鮮です！こんな言い方いいないかも知れないけど」

そう言うともみずきはダテめがねの奥の大きな眼をぱちぱちとさせた。そしてもう一度修一の首から下がっているネームプレートに目をやった。

「仲代・・・さん・・・？」

「は、はい。」

散々毎週見ていたドラマのアイドル女優が、自分の名前を呼んだことで正直頭の中がパニックになりそうだった。名前を呼ばれただけなのに手のひらは汗でいっぱいだ、背中も汗ばんでる感じがしている。また心臓がバクバク言い出している。アイドル性頻脈だ。

「もしかして・・・仲代さん・・・私と会ってますよね？」

「みず・・・じゃなかった浪野さんが救急車で来たとき夜勤してたのが俺・・・じゃなくて私です。」

「いえ・・・それは・・・すいません・・・私、分かりませんでした・・・病院に来たときはもう痛くて痛くて・・・そのときじゃなくて・・・映画の撮影の時に・・・エキストラで参加してもらってませんでした？」

「えっ！？覚えてるんですか？」

「ええ。徳山さんの手当てを仲代さん達何人かで・・・ですよね？」

「いや・・・覚えていてもらったんですね・・・俺・・・いや私たちに出来ることはあんなことぐらいで・・・でも亡くなられたのをあの日の帰り、駅のテレビモニターで知って・・・残念でした。」

」。

「ええ……徳山さんは撮影以外の事でいろいろなスタッフに気を使って……お父さん、見たいな感じの方でした。私もシヨックでした……でも、あの時の皆さん……なんかすごいなあって思いました。何も分からない人ばかりだったら、あの状況でどうして良いのか……そう思うとすごいなあ……って。他にも何人かいましたよね？お友達ですか……？」

「ええ！二人ともこの病院の職員です。一人は隣の放射線技師の綾部甫、もう一人はみず……じゃなかった浪野さんがさつき覗いていた向かいの外來担当の看護師、大村桃子と言います。ネットでみず……じゃなかった浪野さんの撮影のエキストラの話を知って……ノリで三人が夜勤の晩に応募したんです。俺！みずきちゃんの映画やテレビは必ず見てました！……あ……すいません……」

徳山が倒れた時の救急処置、今の幼児の採血の時とは打って変わっての修一の様子がとても滑稽で、みずきは右手の人差し指を鼻の頭に当てクスクス笑った。

「あ……あの……それより、早く部屋に戻りましょう？その方がいい……」

さつきまで普通の音声ボリウムで話していた修一は、まだ採血室に誰もいないのにもかかわらず、小声で話始めた。それがまた、みずきの笑いを誘った。

「はい……分かりました。」

みずきは軽く頭を下げて言った。採血室を出ようと二、三歩歩き出したがまたクルリと修一の方へ向き直った。

「すいませんでした……でも楽しかったです。ありがとうございました。」

「いえ……俺は別に何も……」

「あの……」

「はい？……」

「今日は夜勤じゃないんですか？」

「昨日夜勤明けです。毎晩夜勤したら死んじゃいます、ははは・・・
今度の夜勤は明後日です。」

そう言うと修一はニコリとしてみずきを見た。

「あ、そうですね・・・知らなくて・・・ごめんなさい。」

「いえいえ。あの・・・」

「はい？」

今度はみずきがきょとしたまなざしで修一を見た。

「お話してもらって・・・うれしかったです・・・ミハーっばくなっちゃいますけど・・・」

「いえ、そんな・・・私こそ」

みずきは目じりを下げ笑みを修一に与えた。

「じゃ・・・ばれない様に・・・ね？」

修一は小声で言った。

「はい！分かりました！」

みずきも小声で元気良く答えた。そう言うと今度は採血を出て広い廊下へ小走りに出て行った。

その日修一はとても満たされた気持ちで一日働いた。一日優しい気持ちでいることができた。職員食堂での昼食も、いつもよりも美味しく感じられ、食後の一服も格別だった。廊下を歩きたびに、またみずきが病院探検をしてはいないかと楽しみだった。いては困るがしかし、またどこかでみずきに会えないかと目を泳がせていた。会話をしたときのあの気持ちをずっと抱きしめながら仕事をしていた。終業の時間になっても意味も無く病院をうろろしていたが、いよいよみずきは日本中注目のアイドル女優だという現実に気づくと、ちよつと早い夕食をとろうと一人で病院近くの小さなラーメン屋へ行った。

ラーメン屋に入ると入り口近くにあるカラーボックスから雑誌を取りカウンターへ座った。手にした雑誌は半年前の漫画週刊誌だった。漫画雑誌の表紙を開くと、そこには半年前の浪野みずきのグラ

ピアがあつた。グラビアで満面の笑みを浮かべる浪野みずきを見てこう言った。

「すいません！チャーシューメン！大盛りで！」

修一はまたグラビアに目をやり今度は懐かしげにみずきの笑顔を見ていた。

修一とみずき

七月二十五日。浪野みずきが入院してから四日目。時計は午後七時半を少し回りかけていた。

「はー・・・つかれたあ・・・」

この日夕方の診療は患者が多く診察時間が少し食い込んだ。今日一日の全ての検査業務が終わった。これから救急患者の体制時間に入る。忙しさのあまりみずきが入院している事も忘れ、昼食も抜きで一日働き詰めだった。いつもなら全ての残検体を片付けてから夕食を摂るのであるが、いい加減空腹が修一を襲った。

「腹減ったなあ・・・」

大村桃子が綾部甫がいれば夕食時間前に今日は出前にするかとピッチの呼び鈴でも鳴るが、今日は二人とも夜勤ではないことを、七時半を回った今、ピッチがならないことで察した。と言うか今日は一日二人とも院内で見えていないことに今頃気が付いた。

「あいつら休みか・・・」

修一はずっと以前から甫が桃子を思う気持ちに気づいていた。敢えて甫にこのことを問いかけることもせず、ずっと見守っていた。三人で食事をしたり、飲みに行ったり、様々なシュチュエーションがあり、たまに修一を抜きにして二人で話が盛り上がるのがあって、もそれはそれで良かった。というより、甫が一生懸命に桃子に話しかける姿に男の不器用さと純情さを見ているようで修一には心地良かったりもした。と同時に甫の気持ちに気づいているのかいないのか桃子に軽い苛立ちを感じていたりもした。あの映画の撮影以後、そう言えば三人で飲んでないなあと思っていた。

検査室内の照明を蛍光灯二つだけを残して六台検査機器、五台パソコンの電源を落としていった。

「はい、本日は閉店・・・」

ぼそりと独り言を言った。

「さて、飯・・・マジ腹減ったあ・・・」

そう言々と事務机から鍵を取り出し、検査室の鍵を掛け六階の食堂へ向かった。最近は個人情報漏洩防止の為部屋を空ける場合は少しの時間でも施錠をすることになっている。誰もいない真つ暗な職員食堂に着いた。

「暗つ・・・」

暗いところが苦手な修一は右手でドアノブをひねり、手の平が入る分だけ開けて左手を室内に入れ、入り口の直ぐ脇にあるスイッチを探り当てぱちつとつけた。食堂に入ると直ぐに小型テレビのスイッチを入れた。つけたテレビには目をやらずにさつさとコップにお茶を注ぎいれテーブルへと運んだ。

「今日の飯は・・・と・・・」

食事のメニューは中華丼だった。というより職員食堂の中華丼は“あん”の部分とごはんが別々にトレイに準備されている。あんをご飯にのせれば中華丼になるわけである。昼食の時とは違い、夕食の場合は個人個人の分トレイの上に全てのおかずが乗せられている。

「うん、いいじゃん。」

お腹が減っていた修一には一気に口の中にかきこめる今日のメニューに満足した。トレイをテーブルに置き、テレビのリモコンを探しに辺りをくるくる見回した。今日はサッカーのオリンピック予選の試合がテレビ中継される日だった。

「さて、試合は・・・と」

リモコンのスイッチを入れながらぼそりと言った。試合は前半の三分の二を終えたところだった。試合は対〇で日本が勝っている。

「よしよし・・・」

画面を見ながらあんをご飯にかけた。サッカーの試合は日本が押しており、今まさに日本チームのコーナーキックをまさに蹴ろうとしている時だった。

「よし・・・頑張れ・・・」

修一は中華丼に仕上がったご飯を口に入れるのを忘れ画面を食い入

るように見ていた。

「あー……ああ……！！」

コーナーキックで蹴られたボールは直接ゴールに向かったが、キーパーがパンチングで上手くはじき返し相手国の選手が大きくクリアした。その瞬間実況のアナウンサーがCMに入ることを告げた。

そこで修一は初めて中華丼を口の中へ二口、三口かき込み始めた。一口のかきこみの量が多かったのか喉に詰まりかけあわててお茶を飲んだ。味を楽しみながら食すると言うよりも、生きるために食う、そんな感じだった。喉が再開通し、またかきこもうとしたところで修一の耳にテレビの音声が入ってきた。それは今秋から放映される新番組、浪野みずきが出演する西遊記の番組CMだった。テレビ画面には主役四人がそれぞれのキャラクターに扮し、番組を見てねと呼びかけているものだった。また修一は箸を止めて画面を見ていた。

「あの衣装で運ばれてきたんだあ……」

画面には三蔵法師の格好をした浪野みずきがいた。

「………」

今、病室でみずきは何をしているのだろう、もしこのCMを見ていたら、また早く現場に戻つてと気持ちが逸つてしまうのではないのだろうかと心配になった。テレビは二分間のCMを終えまたサッカ―の中継が始まった。修一は音声だけを耳で追ったが画面は見ずにもくもくと中華丼をかきこんだ。

「………ご馳走様……」

一人で食べるにはあまりにも広い職員食堂に、ぼそりと言っただけの一言が響いた。お茶を最後の一滴まで飲み干し、椅子を引きずりながら席を立った。

夕食を食べ終えた修一は階段を使って検査室へ戻った。夕方診療が終わると同時に病院内のエレベーターは止められることになっている。節電のためだ。靴の音を響かせながら階段を六階から一階まで降り検査室へ戻った。食事を終えてから検査室へ戻るまでみずき

の事で頭がいつぱいになっていた。というより、救急で運ばれて来たみずきの演技ではない苦痛の表情を思い出し、また同じことの繰り返しになるのではないかと心配になった。階段を一階まで降りると直接検査室へは戻らずに自販機へ向かい缶コーヒーを買った。

照明が消された薄暗い廊下を歩き検査室へ戻る。新基準で建設された外来の廊下はとても広い。ストレッチャーが二台擦違うのには十分なスペースがある。修一は右手で缶を空中に軽く回転を付け投げながら検査室へ向かった。

修一は検査室へ戻ると作業場の照明は落とし、検査室奥にある休憩室の照明だけをつけ四つある椅子の中で一番テレビの見やすい場所へ座った。さっき買った缶コーヒーのプルトップを開け一口だけ流し込んだ。

「ふう・・・」

これからは救急対応の時間になるが一旦一息入れることにした。検査室の休憩室は六畳あるかないかのスペースに四人がけの椅子、テーブルが置いてある。小さな流し台と十リッター程度の冷蔵庫、十四インチほどのテレビが置いてある。修一はサッカーの続きを見ようとテーブルに置いてあるリモコンを手にとった。テレビを点けようとリモコンをテレビに向けスイッチを押そうとした瞬間。血液検査機械の脇にある電話が鳴った。

「もう・・・少し休ませてくれよ。」

誰に言うわけでもないが疲れた体の口から出てくる自然の言葉を吐きながら小走りで電話へ向かった。電話はナンバーディスプレイの電話だ。

「へ？何だ？この番号・・・」

今まで見たこともない番号だった。二年もすれば検査室にかかってくる番号はほぼ頭に入っている。外来でもなければ救急外来からでもなければ各階の病棟でもない。

「リングの電話だったりして・・・なんてね・・・」

自分で言った冗談におびえながら電話に出た。

「はい・・・検査科、仲代ですが・・・」

「あの・・・私です・・・」

「はい・・・？」

「みずきです。」

「・・・えっ？」

「浪野みずきです・・・。」

「はあっ!？」

修一の心臓は一瞬で頻拍になった。胸骨は心臓に押されて飛び出そうになっている。

「あの・・・？仲代さんですか・・・？」

「はい！そ、そうです！・・・どうしたんですか？」

「この前明後日夜勤だつて・・・言つてましたよね・・・？」

「あああ！はい。良く覚えてましたね。」

修一は笑みを浮かべながら受け答えた。

「具合どうです？大丈夫ですか？」

「はい。もう痛みはないんです。」

「でも、この電話の番号・・・これ、どこからですか？」

三階の特別室からです。

「ああ・・・なるほど。どおりで見たことない番号のはずだ・・・はははは」

「すいません、驚かせちゃいました？」

「いえ、いえ、リングの貞子だったらどうしようかと・・・ははは」

「まあ！ひどい・・・ふふふ」

「ははは、すいません。俺・・・じゃなかった私、こう見えて結構怖がりなんです。」

「あら！やつぱり驚かせちゃいましたね・・・！」

「いえいえ、電話の声がみずきちゃんなら全部すつ飛んじゃいます。ははははっ！」

そう言うのと本題に入ろうと修一は真顔に戻った。

「で・・・？何か？」

「いえ・・何でもありませんが・・・あの・・病院の中見てみたいなあ・・って思ってた。」

「ずっと病室の中じゃ・・・やっぱり退屈・・ですよネ？」

「すいません・・さんざん痛がつて入院した癖に・・」

「いえいえ！そんな人間なんてそんなもんです・・」

軽くみずきを慰めながら修一は続けた。

「案内しましょうか？」

修一は小声で言った。実際この時間の病院に外来患者はいない。みずきの入院する三階の看護師に多少話が分かる者もいる。みずきを開放してあげたい修一の気持ちがこの一言に変わった。

「いいんですか！？」

小さいながらも弾んだみずきの声が聞こえた。そんな、願ってもない・・修一は心で呟いた。

「お部屋は三階の特別室ですよネ？」

「そうです。」

「じゃあ、裏にエレベーターあるの分かりますか？」

「はい。実は仲代さんに見つかったときそのエレベーターで降りたんです。」

「ははは！そうですか！じゃあ・・一階の裏エレベーターの前で待ってます。一応みつからないようにね。まあ見つかったも院外に出るわけではないし、叱られる事はないと思いますけど・・・」

「はい、分かりました。じゃあ・・今から行きます。」

そう言うのと電話は小さく切れた。電話が切れると修一は鏡で一応顔をチェックした。覗いたところで顔が変わらないことは分かっている。電気シェーバーぐらい持って来ればよかったと初めて思った。軽く自分の顔をチェックすると裏エレベーターへ向かった。裏エレベーターというのは主に荷物運び用のエレベーターで、厨房に食材を運んだり、医療消耗品を資材へ運んだり、入院患者が使用する毛布やシーツなどの運搬にこのエレベーターが使用される。表側のエレベーターは三機あるが、裏エレベーターは一機だけである。職員は裏

エレベーターの方が使用する者が少ないのを分かっているのでは
しば使用する。みずきが院内探検をするときに擦違った薬剤師もそ
うだった。

修一はエレベーターの前で3Fから点灯した数字を目で追った。
このエレベーターに浪野みずきが乗っている。2F、1F・・・暗
いエレベーターホールでオレンジの数字だけが煌煌と輝き行先を示
した。スペースシャトルの打ち上げを待っている様だ。しかし修一
の心臓は不思議とさつき電話で話をしたときより落ち着いてきてい
た。ピンポンという到着音と共にエレベーターのスライドドアが
開いた。ドアが完全に開いたときにやっとみずきの姿が見えた。み
ずきニコリと笑いながら降りてきた。

「すいません・・・大丈夫なんですか？」

「ええ！救急も着てませんし、それに・・・ほら、何かあればこのピ
ツチが鳴るし」

そういつて左胸のポケットに入っている医療用のPHSを右手の人
差し指でちょんちょんと触りながら言った。

「じゃあ・・・こっちから案内します。」

そう言うともずきはみずきが初めてこの病院に来た救急外来を案内し
ようと思った。

「見つからなかった？」

「はい。大丈夫だと思います。でもきつと看護師さんより力才さん
の方がうるさいかも・・・」

「力才さん？」

「あ、私のマネージャーさんです。」

「ああ・・・スーツ着てた人？かな？」

「・・・？」

「ほら、みず・・・じゃなかった、波野さんが運ばれてきた時、一
緒にいた人」

「ああ！そうです。そうでしたね。あの夜仲代さん夜勤だったって
言っていましたよね？」

修一が普通のテンションで話が出来る様になった頃、二人は外来の広いロビーまで来ていた。時間も夜の八時半にもなると受付前の椅子には物陰すらない。

「まずここが受付。外来の患者さんはまずここで受付するの。」

「はい・・・ここから仲代さんに見つかったところまでは昼間見えます。」

「あつ！そつか！・・・ははは・・・」

みずきはニコリと笑った。修一はその顔を見た瞬間恥ずかしくなり、直ぐみずきから顔を反らしまた正面を見て歩き出した。

「じ、じゃあ・・・こつちへどうぞ」

みずきは修一のしぐさがおかしくなりプツッと吹きそうになった。

みずきが言ったとおり採血室、外来待合室は通り過ぎて放射線科の前に差し掛かった。

「ここは浪野さんが検査したＣＴのある放射線科。レントゲン写真とかMRIとかの検査をしている場所です。ここにいる綾部と一緒にエキストラに参加したんです。」

「その人、今日は？」

「綾部は今日休みなんです。エキストラの時無理やり誘って、気乗りしてなかった癖にみず・・・じゃなかった浪野さんがＣＴ検査受けに来たときは可愛いな！と言っちゃって調子のいい奴です。」

「あの・・・」

みずきは甫の話を聞いた後に、ニコツとしながら言いにくそうに言った。

「呼びやすい方で呼んでもらっていいですよ。」

「えっ！？あつ・・・えと・・・」

「みずきちゃんて良いですよ。」

修一は赤くなり下を見てさつさと歩き出した。それを見てまたみずきはプツと噴出した。修一は突き当たりの救急外来へと進んだ。

「ここが・・・みず・・・きちゃんが来た救急外来・・・です。正確にはその奥にある第二救急室なんだけど。」

「ああ・・・そうなんだ・・・ここかあ・・・」

修一は患者が誰もいないのを確認するとスライド式のドアを開けて見せた。

「すごい・・・」

入院したときは何も目には入らずにいたが、あらためて見ると様々な機器や道具から緊迫感が伝わってくるのを感じた。

「次、行きましようか？」

「はい！」

扉を閉め、クルリと振り返り元きた廊下を受付フロアまで戻ることにした。

「歩き回ってふらふらしない？大丈夫？」

「はい！全然！」

修一はみずきの様子を見て状態はよさそうだと思った。続けてみずきに病棟での事に関して質問した。

「みずきちゃん、担当のナース・・・誰だか分かる？多分何人かいるとは思うんだけど・・・」

「・・・えつと・・・今日夕食後のお薬持ってきてくれて人は・・・」

「うん？・・・」

「ここに」

そう言うとき修一の首から下がっているネームプレートを指差した。

「コウサカって書いてありました。すらっとした感じで・・・綺麗な人・・・」

「よっしゃ！ラッキー」

修一は部屋にみずきがいないと騒ぎにならないように、頼める看護師であれば予め電話を入れておこうとおもったのだ。

「ちよつとここに座って待ってもらって良いですか？」

「あ、はい。」

受付フロアまで戻ったところでみずきを受付カウンター前の椅子に座らせた。修一はその横で立ったまま胸のポケットから院内用ピッチを取り出して321をコールした。

「はい。三階病棟、香坂です。」

「おお！さらにタイミングがいい！」

「なんだ仲代さんか。用が無いなら切ります。」

「ああ！ちよつと待った。まだ何も言つてない！」

「あれ？そうでしたっけ？」

「あのさ？どうしていつも俺にはそう冷たいかね？」

「はは！ごめんごめん・・・で何用でござる？」

「お前いつから風車のヤシチになつてんだ？」

「何それ？」

三階外科病棟の香坂幸子は修一より六歳年下である。修一はいつも何かにつけてオヤジ扱いをされている。

「・・・ん・・・まあいいや・・・」

「んで？」

「あのみずきちちゃん・・・じゃなかった・・・波野さんいるでしょ？」

「ああ・・・サインなら自分で交渉してくださいよ。」

「じゃなくて・・・今俺、波野さん病院案内してるんだ。」

「えーっ！誘拐ジャン！いつの間に！だめよ。仲代さん、いくらお宅でも！かなわぬ恋はつらいわ！悪いことは言わない。話は私が聞いてあげるから！」

「お前アホか・・・？ちよつと病院の中案内したいなつて思つてさ。いいかな？」

「うそうそ。ははは。言いたいことは分かりました。大丈夫ですよ。あつ、あの、お薬飲んだかどうか確認していただけます？」

幸子がそう言うと修一はみずきに問いかけた。

「お薬のんだ？」

「はい。飲みました。」

修一はニコリとして小さく頷いた。

「飲んだつて！」

「薬飲んだの確認しただけで、なんでそんなにはしゃいでるんすか？？」

「あ・・浪野さんは飲んだそうです・・。」

修一はわざとらしく言いなおした。

「ははは・・ならいいです。でも仲代さん、無理させないようにね。それと今日のこのリーダーは私なので、何かあったらナースステーションではなく私のピッチにかけてください。あと、なるべく短時間でお願いますね？。念のため」

「うん。もちろんそのつもりだよ。サンキュ。」

「はいはい。ではでは。」

幸子の最後の返事を聞いて修一は笑顔で右手のピッチを切った。

「ごめんなさい。」

「いや、まあ念のためです。ははは。大丈夫ですよ。三十分位で戻りましょう」

「はい！」

「じゃあまた裏エレベーターで」

そう言うのと二人はまた元来た道をたどり裏エレベーターで二階へと上がった。階段でも良かったのだが、みずきの体を気遣ったのと、階段で昇ると靴の音が響いてはまずいと思ったのだ。

「んじゃ・・・こつちへ・・。」

エレベーターの扉が開くと右側へ案内した。

「二階はあまり見るところは無いですけど・・・こちらへ。」

そう言うのと真つ直ぐに伸びた廊下を東へ歩き始めた。

「なんか・・夜の病院って静かで怖いような気がしますね・・。」

「そうですね・・・実はいくつか七不思議がありました・・。」

「・・・・え・・・？」

「な？んてね・・うそうそ・。」

「そんな話聞いたら私眠れなくなります！」

「大丈夫！無いですそんな話！」

声が廊下に響いていることに築いて、修一は笑いながら人差し指を口に当て静かにするように促した。廊下を二十メートルほど歩くとやっと部屋らしきものが見えてきた。

「ここがオペ室です。無菌エリアまでなら大丈夫です。」

そう言くと修一は入り口の扉の前に立ったみずきに尋ねた。

「さあ、みずきちゃん問題です。この扉はどうやって開けるでしょうか？」

「ええーっ？・・・えっと・・・」

みずきは扉の隅々を眺めた。取っ手は無くただの銀色の一枚板がみずきの前に立ちはだかっていた。とうとう分からなくなったみずきは銀色の板の隙間に人差し指と中指の先を突っ込んで無理やりこじ開けようとした。修一は爆笑したくなるのを必死に右手で口を押さえてクスクス笑っていた。

「はいはい！残念でした！正解はこうです！」

修一はそう言くと銀色の扉の右下にある四角いくぼみの中に足先を突っ込んだ。“ウィーン”という音と共に銀色の扉が左にスライドした。

「なーんだー！へー！すごいー！」

目を丸くして素直にみずが反応した。綺麗な瞳に月明かりの反射が映りうるんで見えた。修一は優しい笑みを浮かべみずきを見ていた。「ね？すごいでしょ？ちよつとだけ中にどうぞ」

「はい。」

修一は扉から二、三步みずきを歩み入れた。

「右からぐるりと第一、第二、第三手術室っていう具合で全部で五部屋あります。」

「へー・・・すごいですね！」

「下手したらみずきちゃんもここでオペしてたかも知れなかったんだよ。」

「そうなんですか・・・」

「でも・・・その必用も無いみたいですし・・・良かったね。」

「はい。よかった。本当に。」

「もうあんまり無理しちゃ駄目ですよ・・・。」

「うん。」

修一はいつの間にか少し気取っている自分に気が付き、照れくさそうに頭をかきながらクルリと背を向けて言った。

「んじゃ次！」

個人情報関連もあり部屋に入らずに案内する箇所が殆どであったが、一応病院らしい箇所は見せて回った。二人はいつの間にか見学よりも会話に夢中になっていた。香坂幸子に電話をしてからそろそろ二十分が過ぎようとしていた。二人はまた外来受付前まで来ていた。

「まあぁ・・・ざつとでしたが・・・この病院はこんな感じです。少し休みましょう。」

そう言っていると修一は受付前フロアにある四つの椅子がついているテーブル席に案内した。

「お茶なら大丈夫かな？ちょっと買ってきます。」

修一は自販機まで走った。

「すいません。」

みずきは修一を笑顔で見送った。受付フロア全体が月明かりで怪しい薄青色に光っていた。

受付の角の見えない場所からゴトンゴトンと自販機の缶が落ちる音がした。二、三秒後に二本の缶を持った修一がこちらへ走ってきた。

「良かったらどうぞ。でもいらなかったら無理して飲まないでね。」

「いえ、喉渴いたし、いただきます。」

「うん！どうぞ！」

そう言っていると修一はテーブルを挟んでみずきの正面に座った。

二人はプルトップを開け二、三口飲んで小さく息を吐いた。

「入院生活どう？」

「病院に入院するなんて、私初めてだったから・・・いい経験でした。」

「そっか。じゃあヒロインが入院するシーンはいいものが出来そうですね。」

「ははは・・・そうですね！」

四、五秒の沈黙の後、修一は軽く天井を見ながら話始めた。

「浪野みずき。昭和六十一年七月八日、群馬県桐生市生まれ。高校は名門花山高校・・・」

「・・・？」

みずきはきょとんと修一を見ていた。

「何か変だよね・・・はははっ」

「え？何がですか・・・？」

「みずきちゃんの事俺は知ってるわけじゃん？でもみずきちゃんは俺のこと知らないでしょ？日本中の人がみずきちゃんの事知ってるけど、でもみずきちゃん知らない・・・」

「ああ・・・そうですね。あんまりそういう風に考えたこと無かった。そうですね・・・言われてみれば不思議・・・」

「そっかぁ・・・そんなもんかぁ・・・」

「でも、少し知りました。仲代さんの事・・・」

「え？うれしいな・・・でもまだ何も明かしてないけど・・・」

「うん。でも優しい人というのはなんとなく伝わってきます。」

「・・・そっか・・・自分じゃ分からないけど・・・でも嘘みたいだなあ。」

「何が？」

「いつもブラウン管で追いかけてるアイドルにそんなこと言われて・・・うれしいです。」

「・・・たまにジレンマになることがあるの・・・」

「みずきちゃんが・・・？」

「なんか、みんなより先に時間を走ってるみたいで・・・」

「ごめん・・・良く分からないかも・・・」

「映画とか・・・ドラマとか・・・みんなが見ているものは私が参加している作品かも知れないけど・・・みんなが見ているのは既に昔とまでは言わないけど、ちょっと昔の私ですよね・・・」

「・・・。。。」

修一は黙ってみずきの話を聞こうと思い、お茶の蓋を閉めた。

「私の友達のお父さんが・・・入院していたんです。お父さんは無事に手術も終えて元気になって退院したんですけど・・・。」

「・・・?」

修一はみずきを覗き込んだ。

「その友達に言われたんです。おとうさんいつもみずきのテレビを見て元気出してるって。ありがとうって・・・。」

「・・・そっか・・・。」

「・・・なんか不思議だなってそのとき思ったんです。」

「どういうこと・・・?」

「なんか・・・私には何かしてあげたっていう実感が無いっていうか・・・。」

「・・・?」

修一は目線をみずきの顔からお茶を持つ自分の右手に落とした。

「今の仲代さんの話を聞いてふと思いました。」

「でも、元気付けられてるのは事実ですよ・・・。現に俺だって・・・みずきちゃんのCMで何度嫌なことを忘れられたことが・・・。ははは！」

修一は軽く笑った。

「でも、ここは違いますよね・・・。」

みずきは誰もいない外来受付をぐるりと見渡しながら言った。

「うん?」

「病院・・・。ここは違いますよね。」

「まあ・・・確かにそうかも・・・撮影みたくテイク2は無いしね。」

「・・・?」

「ドラマや映画の撮影はNG出しても取り直しができるよね・・・でも病院・・・っていうか医療は小さい場所でも大きい場所でも・・・NGは出してはいけないのが前提だね。」

「そっか・・・。」

「人助けっていう部分で考えれば、いろいろあるしさ。俺は医療・・・」

とは言っても本当に裏方だけ……」

「仲代さんって血をとる人？」

「本来は細胞検査士っていつて、顕微鏡でがん細胞探するのが本職。」

「あの日あったときは採血？」

「うん。臨床検査技師って言うんだけど、一口で言っても分野が広いんだ。この病院はローテーションで採血やったり、血液検査やったり……いろいろやるんだ……」

「へえ……私、病院ってあまり知らないからお医者さんと看護婦さんくらいしか知らなかった。」

「うん、まあそんなもんだよ。さっきの話に戻るけど……みずきちゃんはやんメディアを使って人を助けてるんだよ。そういうことなんじゃない？だからその友達のお父さんも本当にみずきちゃんに助けられたんだよ。俺そう思うよ。」

「うん……そっか！」

「さて……そろそろ部屋に戻ろう。また香坂に怒られる。ははは……！」

そう言うとき修一は椅子からゆっくり立ち上がった。本当は出来ればこのままもう少しと思う気持ちがあったが我慢した。みずきの足元が大丈夫なのを確認してニコリと笑ってエレベーターの方へ左手をかざした。

元来た廊下を歩いて一階の裏エレベータに着いた。

「仲代さん……有難うございました。」

「いえいえ。こちらこそ。アイドルとお話できて良かったです。」

そついうとき修一は三階のボタンを押した。微笑みながらエレベーター乗るみずきに問うた。

「退院はいつなの？」

「先生は明後日にはいいですよって이었습니다。」

「そっかぁ……そろそろお別れだ。でも良かった元気になってまたテレビで会えますね。」

「・・・はい・・・」

みずきは幾分目線を下げながら答えた。

「じゃあ・・・」

修一は胃の上辺りが痛くなるのを感じていた。

「有難うございました。」

みずきはニコリとして礼を言った。二人を静かにさえぎるようにエレベーターの扉が閉まった。一階、二階、三階とさつきとは逆に登っていくランプの光を目で追った。三階に着いたところを確認して修一は検査室に戻ろうと廊下を歩き出した。

「・・・・・・」

修一の胃の上辺りはまだきゅんと痛みを残していた。修一自信久々の感触であった。その夜勤の晩、また眠れぬ一夜を過ごした。

その二日後の七月二十七日。浪野みずきは退院の朝を迎えた。朝からとても蒸し暑い日になった。とうとうマスコミにも情報が回った。昨日二十六日のスポーツ新聞の一面トップにみずきの入院がでかでかと報じられていた。“みずき入院！疲労によりダウン！”修一はその日の朝の情報番組でそのことを知り、いつもより一時間早く起きて、最寄のコンビニで各社のスポーツ新聞を買い集めた。記事を読むと各社とも非常に同情的な報道をしていた。“頑張りすぎる”“多忙スケジュール”どれもこれも疲労で倒れたみずきを心配する書き方で報じられていた。実際のみずきは非常に気さくで、明るく、礼儀正しいと病院職員の間でも人気度、高感度は評判になった。みずきを知らない年配の職員でさえテレビを見れば「ああ！この子！」と言った具合だ。そして今日みずきは退院を迎えた。

病院玄関にはカメラ、音声マイク等の機材と、各社のテレビクルー、アナウンサーがみずきが出てくるのを今か今かと待っている。午後一時半。浪野みずきはメインエレベーターから、マネージャーの辻本佳織と事務所関係者二人と共に降りてきた。メインエレベーター

ターのホールからマスコミ関係者が待つ自動ドアの向こうまで約二十メートルはあった。その玄関までの道筋を病院職員が両側に並びみずきを送り出す体系に並んでいた。「みずきちゃんおめでとう！」「よかったね！」「がんばってね！」という応援の声の間をみずきは玄関まで進んでいった。みずきは両サイドの職員にぺこりぺこりと頭を下げ時には小さく手を振りその声に答えた。途中、みずきは歩みを止め遠くに目をやった。視線の先には列には並ばず、遠くからこちらを見ている三人の職員がいた。大村桃子、綾部甫、そして修一だった。修一は両腕で頭上に大きな円を作って、「よ・か・つた・ね・お・め・で・と！」と声を出さずに、口を大きく動かし、口の形だけでみずきに伝えニコリを笑った。みずきは三人に向かつて小さく手を振り、修一に視線を合わせて小さく笑い、コクリと頷いた。そしてまた周囲の職員に笑顔で答えながら玄関までまた進みだした。修一は大きく円を描いていた両腕を元に戻し、ポケットに突っ込んだ。

「さて・・・ちと遅い昼飯でも食いにいきますかー！」

修一はさびしい気持ちでいることを二人には知られたくないと思ったのか先に歩き出した。

「ラジャー！」

二人は敢えて修一を冷やかすのをやめた。

時間差のはじまり1

みずきが退院してから約一ヶ月がたった。みずきが入院していた久明会病院はいつもの様子に戻っていた。八月二十九日、来月から波野みずきの新しいドラマ「西遊記」が始まる。みずきが退院してから、修一は部屋で一人になると、あの夜、病院の中を案内した夜のことを思い返していた。月明かりだけが映し出した受付フロアで照明ではなく月光に反射するみずきの笑顔。思い出すたびに溝落ち辺りがキュンと痛くなった。そのたびに深いため息をついていたのだった。「俺、マジでやばいかも・・」その度に持つてはいけなみずきへの思いを受付ないではいられないでいた。昼間仕事に追われている間だけ、弱い自分を忘れることができたのだった。その日遅めの昼食を終え、休憩室ではかのスタッフ数名と休憩をとっているところ、電話が鳴った。ドアの向こうで新人の男性技師が電話を取り、はいはいと受け答えをしているのを休憩室で聞いていた。すると新人技師は休憩室まで仲代を呼びに来た。

「仲代さん、総務から電話で仲代さん宛てにお手紙が届いてるみたいです。」

「俺に？・・・誰だろ？」

そう言うとき修一は休憩室を出て総務へ向かった。

「何か・・・俺宛に手紙が来るとかで・・・？」

「はいはい・・・えっと・・・これです。」

そういうと来年定年を迎える年配の女性OLが、何枚もある封筒の中から一枚取り出し修一に手紙を手渡した。

「誰からですかね？」

「それが、差出人不明なのよ。」

「あ・・・そうですか・・・」

修一はそういうと手紙の封筒に差出人が確認できる箇所が無いかと確認しながら総務課の扉を開けた。ちょうどタバコも吸いたかった

修一は直接検査室には戻らず、病院裏の喫煙所へ向かった。検査科はいつも昼休みが遅い。午後二時ごろの喫煙所には誰もいなかった。封筒は薄い水色で四隅に小さな花の模様がついたものだった。どうやら試薬メーカーからのダイレクトメールではなさそうだ。修一は不信な表情を浮かべたまま、太陽に封筒を透かし、手紙の位置を確認すると封筒から七ミリ位の所を右手の親指と人差し指で丁寧にもしり切った。極薄いピンク色した便箋二枚が均等に三つ折になって入っていた。

（突然おたよりしてすいません。波野みずきです。怖がりの仲代さんに差出人不明の……）

「うそ・・・マジ・・・？」

最初の二、三行を読んだ辺りで、修一は手紙を読むのをやめ周りをキョロキョロ見回した。周りには誰もいなかったが、修一は手紙を読むのを止め、手紙を封筒に戻しポケットにしまった。手紙一枚で午後の仕事で動揺しなくなかったのと、みずきからの手紙を大事に読みたかったという思いからだ。建物の外にある喫煙所は夏の日差しが容赦なく修一を照りつけた。修一は知らないうちにドキドキしている胸をごまかすようにタバコに火を点けた。タバコが半分も燃え尽きるうちに修一の額には汗がにじみ出ている。気持ち落ち着け職場に戻った。何も無かったように椅子に座り、仕事の続きをしようと顕微鏡を覗いた。その日の午後、修一は手紙の内容を気にしないように勤め、なんとか一日の仕事を終えた。

仕事が終わるとコンビニで缶ビール二本を買い直つて自宅へ向かった。部屋につくなりエアコンをつけ、汗だくの体をシャワーで流した。レスポールギターのプリントが施されている白地のＴシャツと茶色のハーフパンツに着替え、坊主頭をタオルで拭きながら缶ビールを開け、一気に一口二口流し込んだ。そしてようやくもらっ

た手紙を取り出し、再び手紙を開いた。

（突然おたよりしてすいません。波野みずきです。怖がりの仲代さんに差出人不明の手紙が届くときつと怖がられるかな？もしかして読まれずに捨てられたりして・・・とか不安を感じながら手紙を書いていきます。あの入院の日から退院まで、久明会病院の皆さんにはいろいろお世話になりました。仲代さんにはあの夜勤の日、病院の中を案内してもらったりして、無理言っすいませんでした。でも私にとってはとても新鮮で、楽しかったです。あの夜、受付のフロアでいろいろお話ししましたね。女子高の後すぐにこの世界に入った私は、自分の気持ちや考えを男の人にお話したのは初めてだったかも知れません。っていうか初めてです。それも新鮮な経験でした。では、仲代さん、これからもお仕事がんばってください。）

P・S 来月から始まる西遊記是非みてくださいね！あと二週間西遊記の撮影が続きます。実は病院に運ばれたのは、第五話の撮影の途中だったのです。・・・それでは　　）

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

修一は懐かしがるように温和な笑みを浮かべ、そつと気持ちのよい小さなため息をついた。

「そつか・・・元気なんだ・・・良かった。」

修一はまたごくごくビールを飲み、畳の上でごろりと横になった。
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

修一は大の字に横になり目を閉じた。あの日の、みずきが入院してから退院までの時間を思い返していた。ストレッチャーの上で苦しそうにしていたみずき。昼間の病院を見学しようとして修一に見つかり後ろめたい表情をしていたみずき。夜の病院探検していたとき

の楽しそうな顔。月明かりを浴びたきれいで素直な笑顔。退院するとき修一に気がつき、コクリと小さくうなずいて病院を去って行ったみずき。たった一週間の事がまさに走馬灯のように静かに修一の脳裏を駆け巡った。またゆっくり起き上がり、手紙を手に取り、改めてながめていた。そういえば便箋は二枚入っている。一枚には文字が書かれているが、もう一枚は白紙だった。手紙の出し方のマナーとしては少なくとも二枚ほどで内容を締めくくることは昔母親に聞いたことがあり、そのためだろうと思っていたが、二枚目の裏側、右下に一枚目の文字の筆跡と同じもので、“あぶりだしです”と小さく書かれてあった。

「へっ？・・・」

修一はポケットの中からこそこそライターを取り出した。

「あぶり出して・・・小学校三年以来だな・・・」

そういうとカシュッと百円ライターで火を点け手紙の裏側に当て表側を覗き込んだ。

「ん・・・？」

アルファベットが二文字ほど浮き上がってきたが三文字目が半部ぐらい見え隠れしていた。一文字が二センチ四方で書かれていると判断した修一は横幅八十センチほどの立派なキッチンに向い滅多に使うことの無かったガスコンロのノブをひねった。みるみる文字が浮かび上がってきた。

「・・・@xxx.ne.jp・・・これって・・・」

そこに浮き出てきた文字列はまさに携帯電話のアドレスの洋であった。修一はもう一度一枚目の便箋を読み返した。何度読んでもそこには二人だけしか分かりえない内容である。誰かのいたずらとは考えにくかった。

「・・・マジかなあ・・・？」

頭の中は少々混乱をしていた。こんなとき修一はいつものように一旦その物事から離れようと台所から戻り二枚の便箋を封筒に収めようとした。あぶりだしをした後の便箋は少々焦げ付き破れやすくな

つていた。修一は丁寧にとつと折りたたんで便箋をしまった。本当なんだろう？ やっぱり誰かのいたずら？ でもあの手紙の内容・・・
・ だとしても迂闊にメールして出会い系にでもつながったらたまったものではない。ビールをまたごくごくと飲んで視線をまた手紙に向けた。

「そつか・・・」

修一は思いつき、部屋の隅にあったノートパソコンを取り出しネットをつないだ。修一は個人アドレスの他に、仕事用のフリーのサブアドレスを持っていた。

「なんだか試してみたいで、気が引けんなあ・・・でも・・・仕方ないよなあ・・・」

サブアドレスを持つホームページが開くと、“メール”と書かれた文字をクリックしてメールツールに画面を切り替えた。

「えっと・・・」

なんて書いていいのか検討もつかなかった。相手が本当にみずきの場合と誰かのいたずらの場合との共通のメール内容なんて、不器用な修一には思いもつかなかった。とりあえず自分の名前を書くのに苗字はやめておこうと思った。いたずらの場合も想定して、みずきの名前を出すのもやめようと思った。

（修一です。今とてもとまどっています。本物のあなたからの手紙なのか、いたずらなのか、見分ける為のいい方法が分からなくて・・・もし本物だったらごめんなさい。）

「どうしよ・・・こんなんでいいのかなあ・・・」

たった二行の文面を四、五分も見直して送信ボタンを押した。そのままノートパソコンはつけっぱなしにしておいた。複雑な気持ちでまたビールをゴクリと飲み、またごろりと横になった。

しばらくして部屋のチャイムが鳴った。

「・・・・ん・・・・？ また来たか・・・・」

いつしか修一は眠りについていたようだった。時計に目をやると七

時半を少し回ったところだった。

「はあ．．．い．．．開いてます．．．」

何回もチャームを押す客なんていつものやつらに決まってる。

「よっ！修一のもうぜ！．．．って先にやってるみたいね。」

「あら？またまた安眠妨害しちゃったかな？」

甫と桃子だった。手にはまたコンビニで買ったビールとつまみが入っていた。

「あのさ．．．お前ら．．．いつも俺の安眠妨害してくるなあ．．．」

「失敬だな君は！ほんと待ってたくせに．．．違うか？」

「ありえねえ．．．」

「あら？」

テーブルの上につけばなしのノートパソコンに気づき桃子が言った。

「仲代さんつけばなしで寝ちゃったの？」

「ん？ああ．．．それな．．．ちよつといろいろあつて．．．そうだ！ちよつと二人ともここに座れよ」

自分の頭の中にあるもやもやを話そうと、急に真顔になり二人に言った。

「おお．．．どした？」

「お邪魔します。」

二人とも部屋にあがりコンビニの袋をテーブルに置いた。二人は修一の真向かいに並んで腰を下ろした。修一は二人が腰を下ろすのと同時に封筒をテーブルの上に置いた。

「これ．．．」

「．．．なんだこれ？何かの請求書か？金なら無いぞ俺。」

「お前に金が無いのは十四年前から知ってるよ！．．．ちよつと話を聞いてくれよ．．．」

「どうしたの？仲代さん」

桃子がやや大きく目を広げて修一に問うた。両手はコンビニで買い

物してきたものをテーブルに広げている。修一は仕事中に総務課で手紙を受け取ってから、まだ誰だかわからない相手にメールをするまでのいきさつを二人に話して聞かせた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

三人は黙って手紙を見つめていた。

「本物じゃないのか？」

「わたしもそう思う。」

二人の反応は修一の予想とは反していた。冷やかしも茶化しも何も無かった。

「マジで・・・？そう思う？」

「本当に新鮮だったのよ。彼女にしたら・・・」

「メールの返信は？」

甫がノートパソコンを右手の親指で指しながら言った。修一は画面を自分の方へ向けて新着メール確認のボタンをクリックした。

「うん・・・何も無い・・・。」

「そっか・・・でも相手はアイドルだぜ？年中携帯持っていられないんじゃないの？」

「うん・・・っていうかメール送ってからまだ一時間くらいしか経ってないし。」

「そっか・・・」

二人の会話をよそに桃子はじつと封筒を眺めていた。

「しばらくの間返信まってみたらいいんじゃないですか？もし本当にみずきちゃんなら返信してくれるとおもうし。この手紙を書いた気持ちを持っているなら、メール来たらうれしいと思うし。それに女の子なら初めてのメールの返信ってなんて書いていいのか困るところもあるし・・・。」

「そっか・・・そんなもんかな・・・」

桃子の言葉で、これから何日間かの気持ちの持ち方が分かって少し心が晴れやかになったのを感じた。その後、やはりいつものように

二人はみずきをネタに修一を茶化し始めた。甫と桃子が買ってきた間ビールが、一本、また一本と空けられていった。

「じゃあな。考え込んでまた寝不足するなよ。お前考え事ができると、人のことでさえ眠れなくなるほど考え込むからなあ。」

小さな玄関で靴を履きながら甫は言った。

「おう・・・でもこればかりは性分みたいだからなあ・・・。」

「まあ、考え込むならいいイメージを思いながら休んだほうがいいですよ。夢でみずきちゃんに会えるかも。ウフ。」

「お前帰りがけに俺を茶化すか？」

「あい、すいません。ハハ・・・」

「んじゃ、邪魔したな。」

「おう、毎度。今度はおまえらの話で酒飲もうぜ。」

「ん？なんだそれ？」

「ははは、いや別に。」

「感じ悪・・・」

二人の会話を幾分聞きにくそうにしながら、早く出ようといわんばかりに桃子がドアノブを回し扉を開けた。

「じゃあ、仲代さんお休みなさい。」

「うん、お休み。」

「じゃあな」

やっと最後の挨拶を交わし二人は扉を閉めた。ドアの向こうで会話をしながら帰っていく二人の様子が伺えた。

「・・・ふう？・・・」

修一はまた部屋に戻り、自分の飲み残した缶ビールだけを残し、つまみや惣菜の入っていたポリ容器などを腰をかめながら片付けようとした。小宴会をしている最中に、桃子がある程度片付けながら飲んでいたのでほとんど片付けるものは残っていなかった。

「意外と女つぱいところあんのになあ・・・甫なにもたもたしてんだろ・・・」

修一のおせっかい根性がポツリと独り言を吐かせた。二人が来るまで買い物袋として使用されていたポリ袋が今度はゴミ袋として生まれ変わった。テーブルの上のごみをすべて袋に入れ、“ミニキッチン”の脇にあるゴミ箱に入れようとテーブルに背を向けた時、一瞬目に入ったパソコンの画面になにやら異変を感じ、また振り返った。画面から目を離すことなく袋を脇にガサツつと置いた。“受信メール（１）”となっている。修一の心臓はさっきまで平常に戻っていたが、また心筋が細かく動き始めていた。修一は受信メールをクリックしてメールの内容を確認した。

「あつ・・・着た！」

さっきまで疑っていた気持ちがかどこかへ消えてしまい、本物であるように祈りながらメールを読み始めた。

お久しぶりです。みずきです

突然の手紙で驚かせてしまったようで本当にごめんなさい。でもこれでどうかな？

文章はこれで終わっていた。しかし、文章の終わり方に何か意味ありそうなのに気づきメール画面を注意深く見ていると添付ファイルがあることに気づいた。修一はウイルスではないかと疑ったがファイルを確認したいという気持ちが勝り、恐る恐るクリックをした。みた。そこには写真があった。どこかの洋食店らしき背景に二人の女性が写っている。一人は波野みずき本人とその隣はあの時救急車でみずきと一緒に乗ってきた辻本佳織だった。ベージュのクロスが敷かれたテーブルの上で二人がこちらを向きながらグラスを傾けて写っていた。そのグラスの下でなにやら一枚の紙が同じようにこちらを向いて白い調味料置きに立てかけられていた。よく見ると手帳か何かを破って用いたようだった。よく見ると何やら文字が書いてある。

仲代さん、お久しぶり

元気ですか??

修一の疑いは晴れた。というより晴らしてしまえというのが本音だった。これは現実なんだと受け止めたい気持ちでいっぱいになった。さっき疑心暗鬼だった修一の顔にいつの間にか笑顔が戻っていた。修一はふとわれに帰り、返信ボタンをクリックしてメールを書き始めた。

疑ってごめんなさい

お手紙ありがとう。みずきちゃんのこのメールで昼からもややしていた頭の中がスーッときれいになりました。今頃うれしさがこみ上げて来ています。体の調子はどうですか?また無理しないでくださいね。お食事中に面倒な事させてごめんなさい。

修一は書き終えた文章を読み直し確認して送信ボタンを押した。うれしさとなんとも言えない安堵

感が修一を包んでいた。すぐに返信が来るかも知れないと片付け途中だったごみをさっさとゴミ箱に

押し込み、今度は正座をしてメールの返信を待った。さっき食事中に面倒なことさせてすまないと詫た

メールの内容とすぐに返信がほしいという期待を持つ自分の行動が一致してないことに気づいてはい

なかった。五、六回送受信ボタンを押したが何の応答もない。さっき返信してかから一分も経っていない

いことに気づき、桃子の言葉を思い出して修一はしばらく他の事で気を紛らわせようと、意味も無く腕立て伏せをはじめた。酔っ払った修一は十回もやるとすぐにばてた。やっぱり気になる修一は息が整わないまままた画面の前に正座し、また送受信ボタンを押した。受信メール（１）となっているのを確認し、メールを読んだ。

帰ったらまたメールします。

たった数文字の返信でさえ修一にはうれしかった。今度は返信を期待しないように自分の心に言い聞かせさらに返信した。

ありがとう。今俺が送っているのはP Cのアドレスなので、帰宅時はこちらにどうぞ

\$\$\$\$&&&@

.ne.jp

就職してから女つけの無い修一は女性に自分の携帯電話のアドレスを教えることは皆無だった。自分で記載したアドレスを送信前に何

度も何度も確認した。一文字でも間違つて全くの他人にでもみずきのアドレスが渡ったら大変だと心配した故の行動だった。画面上で送信が無事に済んだことを確認しノートパソコンを折りたたんだ。無事に送信され、さっきのみずきの気持ちに返信通りであれば今度は携帯電話にメールが来るに違いない、今度は言い知れぬ達成感のようなものを感じ脚を崩した。時計は夜十時四十五分を少し回ったところだった。アルコールが入った修一の頭にまた睡魔が襲ってきた。何とかメールが来るまでこらえようとがんばったがまた睡魔には勝てなかった。

今度はアパート近くの駐車場に止めてある車のエンジン発動音で目が覚めた。修一のアパートの住人で二十代前半の若者が住んでいる。大体夜中に仲間と出かけるようでも働いている風には見えなかった。きつと学生なのであろう。たまに夜中のエンジン音で起こされることがありその度にいい加減にしてくれよと感じていた。時計を見ると午前一時半を回っている。修一はむくつと起き上がり目を閉じたまま壁に身を預けていた。が、突然目を大きく開け、携帯電話を探した。画面を開け覗き込むと一着のメールが届いていた。

S u b j e c t : 遅くなってごめんなさい

反応的にみずきだと分かった。修一はメールを開いた。右上には一時0五分と書いてある。さっきのエンジン音が無ければ携帯を確認できることができなかった。いつもと違い、いつも騒々しい世間知

らずの若者に初めて感謝した。修一は目を擦りながらメールを読んだ。

さつきはメールありがとうございます。撮影を終えてカオさんと食事をしていた最中だったの

疑いが晴れてよかったです（笑）こんな時間に返信してごめんなさい。

メールが着信した時間から三十分近くたっていたが、修一は返信しないではいられないでいた。

お仕事お疲れ様でした。こんな時間までお仕事とは大変ですね。

俺少しタレントさんの仕事勘違いしていたかも・
・体資本ですね

それにしても・・・俺にアドレスとか教えて・
心配じゃ無かったですか？

辻本さんに怒られませんでした？

みずきはまだ起きていたらしい。今度はすぐさま返信をして来た。

実はあの食事中に仲代さんからメール来たときに初めて力才さんに言ったの

「まったく?!」って怒られた・・・あのときのロケ中の出来事とか夜病院の

中案内してもらったりしたこととか事情を説明して・・・そしたらそれじゃあ・・・

こうして・・・って言われちゃって・・・

当然修一は気になり返信した。

そうだね。普通怒られるよ・・・でなんて？

事情を仲代さんに連絡して、私も一応、仲代さんの連絡先を控えさせて・・・

一日猶予与えるわって・・・

そう・・・俺はかまわないけど・・・

ありがとうございます。ごめんなさい。それとね、
ちょっとお願いがあつてっていうか
提案かな・・・

提案つて？何？

何か病院の皆さんに恩返しできないかなあ・・・？
つて思つたんです。

私のできることで・・・何か無いでしょうか？

恩返しつて・・・俺たちそれが仕事だし、別にみずき
ちゃんだから特別治療したわけで
もないし（笑）。気にしなくても・・・

はい！それは分かったんですけど・・・みなさんのおかげで元気になれたわけだし・・・って言うか・・・私がまた皆さんに会いたいのかも知れません・・・駄目です
か？

・・・そうですか・・・うれしいお願いです！・・・ちょっと考えてみるね・・・

本当ですか！？ありがとうございます。遅くにすみませんでした。

みずきの返信に気づかされたように時計を見た。時計は午前三時を示していた。

あつ！もうこんな時間ですね。でも、うれしかった
です。お手紙もらったこと　　も・・・職員に
感謝してくれたことも・・・これからがんばってね！

いえ・・・それではお休みなさい。

うん。お休み。

まるでドラマのワンシーンのような時が流れた。カチャッと携帯の
ディスプレイを閉じゆつくりと腰を上げ簡単に敷布団だけを敷いて
ごろりと横になった。さて、みずきの提案になんて答えようかと、
当然修一は眠れずに考え続けていた。翌日の修一の目が浮腫んでい
たのは当然の結果だった。

時間差のはじまり2

七月終わりのあのメールのやり取りから約二カ月半が過ぎようとしていた。あの夜から二人は何気ないメールを交わすようになっていた。みずきは不思議と自分の仕事の内容を積極的に話すような事はしなかった。修一も当然芸能界について聞きたいことは山ほどあったが、敢えてそのことは触れずにおこうと気をつけるようにしていた。メールの交換を重ねているうちお互いの生い立ちや交友関係などお互いの生活環境についての話題が多くなっていた。

みずきは撮影や取材で夜中に帰宅することが多く、逆に修一は昼間の外来、夜の当直と、リアルタイムでお互いがメールを交換できることはほとんど無かった。みずきが夜中メールを送れば、修一は業務を始める二十分前にメールを返信したりとそんなやり取りが続いている。ドラマ『西遊記』はトップアイドル女優波野みずきを中心とした人気俳優人を揃えており、毎週高視聴率をマークしていた。

修一はみずきの番組の好調ぶりを何より喜んでいたが二人のメールの会話には余り必要なものでは無くなっていた。西遊記が残り四話を残して放送中の今、レコーディング、年末番組の収録、収録中に雑誌の取材と、トップアイドル女優の仕事に追われていた。

一方、修一は連日いつものように提出される検査検体に追われ、昼間の外来、病棟の検査業務、午後は細胞診の顕微鏡検査、日によつてはそのまま夜勤当直に突入し、さらに翌日の当直明けの日も日によつては一日残つて定時まで働くことも間々ならなかった。二人はそれぞれお互いのやるべき事を思う存分やってこなした。その原動力が日々交わすお互いのメールによるものであることがお互いの心の中に小さな暖かい塊の様なものとなっていたからだった。

そんな日が続いているある土曜の夜、の修一の返信メールに以前みずきの提案について修一の案が記されていた。この日の夜はみずきがオフであることを修一はメールでみずきから聞かされていた。

そういえばみずきちゃん、夏に言ってたみずきちゃんの提案の事だけど

考えが二つあるんだ。でも一つはちょっと無理そうなんだけど・・・

ホント！？どんなこと？

うちの病院ではみんなでやるイベントが二つあるんだ。一つは病院祭。

もう一つは忘年会。ただ、病院祭は一般のお客さんも来るから・・・

ちょっと難しそう・・・。

病院祭って？何？

早く言えば病院で縁日みたいなお祭りをやる

の。それで地域の皆さんが

病院を身近なものに感じてもらって、同時に自分の体の健康についても

興味を持ってもらおうという企画なんだ。

すごいね！でもそれが無理そうな理由って？

具体的に話すには携帯メールは不便だね（笑）みずきちゃんパソコンとか無い？

パソコンとかは事務所のもの使ってるし・・・
ねえ！話ができればOK何だよね？

まあ・・・それが一番早いよね。

これ 090*****

もういたずらか疑わないでくださいな（笑）

明らかに携帯の番号が記されていた。

みずきちゃん・・・大丈夫なの？また怒られるよ。

カオさんに・・・

うん・・・カオさんにはまた機会をみてお話します。でも、
教えていい相手かどうかは私にだ っ て判断できます。じゃ
なきゃメールだってしません。って言うか・・・もっと早くにこうす
れ ば良かった（笑）。ね！話しよ！

うん。かけるね！

修一の最後の返答が来てから二分くらいが経っていた。みずきの部屋は事務所敷地内にある二階建てのマンション風の建物の中にある。敷地内東側に四階建ての事務所ビルその隣の西側にみずきの住むマンション風の二階建てビルに入ってが立っている。コンクリート打ちっぱなしの建物で一部屋約二十畳ほどの部屋でモダンなキッチン、バスがついている。カーテンもリモートで開閉自由。来客はいくらタレント本人の知り合いでも事務所を通しアポなしでは絶対に入ることとはできない。業界に入って間もないタレントたちはここで何不自由の無い生活をしている。そこから部屋を出て、自分なりに部屋を借りるタレントもいるが、田舎育ちのみずきは内容的にも十分満足できる部屋であるし、仕事に関しても当然都合がよい。都会に一人暮らしは幾分怖さを感じるからずっとここで暮らしている。家具はおおよそ白色の家具で統一されている。その部屋で約一メートル四方の小さなテーブルの上に携帯電話を開けたままで、体育座りの格好でじつと修一からの電話を待った。

「遅いなあ・・・」

みずきは唇を尖らせ、色白の眉間に少ししわを寄せながら携帯の画面を見ていた。みずきが苛立ちを座った体を左右にゆすることで紛らわせていたその時画面が明るく光った。

「来た！」

画面が光って一、二秒後に着信音が鳴った。着信音は柴崎コウの「影」という曲のオルゴールバージョンだった。みずきは携帯をとり

数秒画面を見つめてから携帯に出た。

「あの・・・仲代です・・・しばらくです。」

「みずきです。しばらくって・・・いつもメールしてるじゃない」

「あっ・・・そうだね。でも声聞くの久しぶりじゃない・・・」

「そうだ、いつもメールしてるのに、なんで俺どきどきしてんだろ、みずきの声を聞いたとたん今までメールで話をしていた事が頭の中から飛んでいってしまった。」

「仲代さん元気でした？」

「それもメールで話してたジャン。なんか変だねハハハ・・・今まで
の事、また一から話してみる？ハハハ」

「そうだね。でも・・・声が聞けるっていいですね。なんか安心するっていうか・・・なんか・・・いいな。エヘ・・・」

「うん・・・俺も・・・いつもメールで話してるのに、俺今胸ドキドキしてるもん。」

「私も・・・でもやっぱり話できるっていいよ。」

「そうだね。うん・・・」

「あの・・・いつもごめんね。私のせいで、メール夜遅くなったり。今日も。」

「うん。どうせすることないし。よくあの二人がビールもって乱入してくるけど。」

「綾部さんと大村さん？いいなあ！なんか楽しそう！」

「ハハハ。あいつらはお互いの気持ちごまかすのに俺んち来てるんだから。」

以前修一は二人の事でみずきに女心を問うた日があった。待つタイプの女性はどこまで待てるものなのか、修一のお節介ぶりは相変わらずであった。

「二人はまだ進展はないの？」

「うん・・・そだね。でも俺はあの二人はずっと一緒にいるだろうな
って思ってるんだ。ドラマだとかという展開になるんだろ？女優さんはどう思う？」

「やめてよ、仲代さんフッフ・仲代さんとメールしてる時はまっさらなんですから。」

「うん、ごめんごめん・でさ、さっきのメールで話してた件なんだけどね・。」

修一はようやく本題について話始めた。

「病院祭って言うのは、病院職員が地域住民のために開くもので、焼きそばや焼き鳥とか縁日でよくある食材も職員が用意して調理したり、あと医療講演とかもやるんだけど準備もお客さんの誘導も職員がやるんだ。そこに今君が来たら大変な事になる。分かるよね。」

「・・・うん・・・でも楽しそうでいいなあ・・・」

「仕方ないよ。だって波野みずきが来るんだよ。君自分が今どんなものか分かってないでしょ？ハハハ・・・」

「フアンの人から手紙や贈り物は事務所にいっぱい送ってもらったり、ホームページにも応援のメッセージとかいっぱい書いてもらったり・・・たくさん見てくれてるんだあとかは思うけど・・・」

「でしょ？そのいっぱいの人が病院に来たら大変なことは分かるでしょ？」

「そだね・・・分かった。で？」

「うん。聞き分けが良くてよろしい、ハハハ。でね、十二月十四日に病院職員内で忘年会をやる予定なんだ。これは地元の結婚式場を借りて職員全員で楽しくやるんだ。ここならみずきちゃんの気持ちも伝えられるんじゃないかなあ？どう？」

「うん！それいい！」

「でもここで俺の方に心配事が・・・？」

「ん？なんだろ？」

「君のスケジュール・・・それにやっぱり事前に打ち合わせはしておかないと・・・」

「ああ・・・カオさんに聞いてみる。打ち合わせねえ・・・会えれば一番いいね。」

「・・・うん・・・打ち合わせが無くて・・・会えれば・・・い

いんだけど・・・」

「・・・私も・・・声聞いたらなんだか顔も見なくなるね・・・なんか、仲代さんて不思議な人だよな？」

「・・・ん？奇妙かな？俺・・・」

「フフフ・・・そういう意味じゃなくて。なんかね、あの日退院してから仲代さんて・・・なんていうのかなあ・・・よくさ、友達以上、恋人未満というでしょ？それとは別に仲代さんスペースみたいなのができる・・・みたいな・・・」

「友達でもなく・・・恋人でもなく・・・仲代さんスペース・・・かあ・・・なんか・・・難しいなあ・・・ハハハ。じゃあ今みずきちゃんは仲代さんスペースにいるわけ？」

「うん・・・そんな感じ。今では素の私の居場所っていうか・・・だから・・・」

「ん・・・？」

「その場所には・・・誰も入れないで欲しいの・・・」

「甘えすぎかな・・・？私」

「・・・ごめん・・・俺、女の人にそんなこと言われたことないからさ・・・あつたかいよ今の言葉・・・ありがと・・・そんな風に思ってもらえたのはうれしい。」

「ごめん、何いつてるんだろ私。ははは。どうかしてるね。」

「ううん。うれしい。ありがとう。・・・それにそのスペースに入ってくる人なんていないよ。」

「え？」

「だってそれはみずきちゃんが作ったスペースだもの・・・みずきちゃんしかいるわけ無いじゃん。他の人が入ってきたら、それは不法侵入だ。ハハハハ。」

「うん！ありがと・・・で、どうしょ？」

「そだね。みずきちゃんは一度辻本さんの聞いてみて。こつちもさすがに俺だけじゃなんともできないから、助っ人連れてくよ。」

「フフ、綾部さんの大村さんね。分かった。」

「でも、ちよつと俺楽しみ。」

「そうね。私も仲代さんが働いてる病院の忘年会見てみたい。」

「いや、そうじゃなくて・・・」

「え？」

「忘年会前にまたみずきちゃんに会えるわけだもんね。」

「うん！」

「あの・・・みずきちゃん・・・」

「何？」

「ほんと・・・ありがとね。」

「ううん・・・っていうか私がびっくりしてるの・・・」

「どうして？」

「今電話しながら・・・素直に今の自分の気持ちと話せてるから・・・自分ではちよつと意外だった。ちよつと熱くなってきた・・・ほっぺた・・・」

みずきは体育座りをくずして話をしていたが、また体育座りに直り両膝を抱きかかえていた。

「うん・・・そつか・・・」

「うん・・・」

「じゃあ・・・辻本さんによろしく伝えてね。」

「うん・・・分かった。何かあったらまたメールするね。」

「うん。何も無くてメールしてよ。ハハハ」

「そうだね。ハハハ。仲代さんもメールしてね。」

「あたりまえじゃん！」

「うん、じゃあ・・・おやすみ。遅くにごめんね。」

「そんな・・・気にしないで。またね。」

「うん、おやすみ。」

「おやすみ・・・」

二人の心には誰にも持ち得ない暖かい、とても暖かいもので埋め尽くされていた。目を開けたまま眠りにについているのかと思えるほど

意識が遠のき、二人はそれぞれの部屋で携帯電話を見つめ、お互いの声や言葉を思い返していた。夜になると秋風が吹き始めているこの季節だったが二人の体には吹き付ける事はできなかった。翌日、みずきからメールがあり、後日辻本から修一に電話が入るということが伝えられた。

病院祭があと三日後に迫った十月十九日の夜。修一の携帯電話がなかった。修一は久々の休日だったので久々なじみの楽器店へ行ってギターの修理を依頼しようと丁度店主に修理箇所を説明し終えたところだった。修一の携帯が鳴った事に気を使い、店主は店に流れているBGMのポリウームを下げた。修一は交渉を終え椅子から立ち上がり修理が終わるまで店の中にあるギターを物色しようとテーブルに背向けたが店主の気遣いに気づき再び振り返って左手を軽く上げて礼を言った。ジョーンズの右後ろのポケットで呼んでいる携帯を右手にとり電話に出た。電話の相手が辻本佳織であることはみずきのメールから予想できた。

「はい。」

「もしもし、辻本ですが・・・仲代さんですか？」

「あ、はい、そうです。」

「どうもご無沙汰してます。その節はいろいろお世話になりました。お元気です？」

「あ、はい。相変わらず忙しくやっています。」

「そうですか。大変ですね。がんばってください。」

「はい、ありがとうございます。」

「今、大丈夫です？」

「あ、ええ。大丈夫です。」

「そうですか。で、みずきに聞いたんですが。」

「はい、私が提案したんです・・・」

修一は、少し緊張しながら答えた。数多く並んでいるギターの中の一本であるかのように直立で動かなくなった。

「はい、何やらみずきの方からお願いしたようで・・・」

「いえ、そんなこと無いです。」

「それで、来週の火曜日の夜こちらにおいでいただくことはできませんか？」

「こちらって・・・ジャーマンプロダクションですか？」

「ええ、そうです。年末の番組の撮影が押していて、なかなか時間が無くて・・・」

年末番組の撮影が遅れていることはみずきに聞いていた。

「火曜日ですか・・・仕事終わっても精々早くて午後六時。そちらにつくのは早くて八時頃になってしましますが・・・。」

「はいはい・・・夜は何時でも大丈夫です。」

「そうですか。それと、もう一人連れて行きたいんですが・・・」

「ええ。みずきから聞いてます。みずきが運ばれたときに一緒にいた看護師の方でしょ？でもみずきからはあと二人って聞いてますが・・・？」

「ええ、今のお話ですと火曜日ということなので、おそらくその看護師は夜勤だと思っんです。」

「はい、分かりました。ではとりあえず余裕を見て八時半ということにしておきましょう。住所お教えます。」

「あ、大丈夫です。ホームページに記載されてれば確認していきま

す。」

「そうですか。分かりました。では、気をつけていらしてください。」

修一は少し緊張しながら話をしていたが、そろそろ会話が終わることの予想ができると少し安堵した。

「あ、あと・・・仲代さん・・・」

「はい・・・？」

また幾分修一の背筋が伸びた。

「日頃、みずきから仲代さんのお話は聞いています。」

「あ・・・はい・・・。」

「病院でお目にかかったときはお話できませんでしたが、今お電話でお話した限りでは私も好印象です。きっとあなたはいい人なのでしょう・・・。」

「修一の鼓動が幾分早くなった。」

「しかし・・・みずきは一般の女の子ではありません。ですので・・・」

「分かってます。」

話をさえぎるように修一は静かに答えた。修一の言葉が続きそうな気配を感じ辻本は黙っていた。

「余計な心配をかけて申し訳ありません。みずきさんの今の立場は私も良く分かってるつもりです。私自身彼女のマイナスの力にはなりたくありません。何か小さいところで力になればいい、いつもそう思っています。いろんな分野で彼女の活躍が見られればそれで・・・。」

「・・・そうですか・・・ごめんなさい。私余計な事を心配していたのかもしれないね。」

「いえ、ご心配なさるのは当然だと思います。こちらこそ、本当になんといつていいか・・・。もし何か悪影響でも感じられましたら是非またお電話ください。本当に申し訳ありません。」

「いえ、今の言葉でもう十分です。今まさに仲代さんの力はプラスに働いていますし、ぜんぜん問題はないんです。立場上どうしても伝えなくてはいけなくて・・・。」

「すいません。辻本さんにまで嫌な思いをさせて・・・。」

「いえ、私はいいんです。では、楽しい忘年会になるといいですね。ではお待ちしてますね。失礼します。」

「はい、わざわざありがとうございます。」

修一の最後の言葉を聞いて辻本佳織は電話を切った。

修一は携帯電話のディスプレイをたたみながら小さくため息をついた。しばらく携帯を見つめていた。電話のあとの様子が明らかに異なることに気づいた店主が後ろから修一に声をかけた。

「おいおい！なんだ？これか？お別れの電話か？」

椅子に座り修一のギターを膝に乗せながら右手の小指を立てて店主は言った。

「マスター、そんなんじゃないよ、ハハハ。俺にそんな人できるわけ無いじゃん。」

「ん？そうかなあ．．自分で自分の事をごまかしちゃってないかい？俺は高校の頃からお前の事見てんだぞ．．．なーんてな。」

「ハハ．．ありがと。でも本当にそんなじゃないから．．．。ねえマスター、このホワイトファルコン．．．ちよっと引かせてくれない？駄目？」

「おいおい、もう少し安いやつにしてくれよー。」

「だよね．．」

「ハハハ、いいよ。他に客はいないし、そのアンプにつなぎなよ。」

「ありがと．．．。」

そういうと修一はエフェクターを通さずに直でアンプへつなぎギターを鳴らした。

マスターの言っていることは凶星だった。みずきに近づきたいのに何かを恐れて踏み込めずにいる自分がいる。みずきは素直に気持ち伝えていゐるのに自分は怖くて、丁度いい距離にみずきを置き去りにしている。今まで自分の弱さから逃げていたのではないか、俺は今まで何をしていたのだろう．．．．そう思うと右手のピックが激しく六本の弦をたたいていた。

「あつ．．．！」

ピン！という音をたてて一弦が切れた。

「ごめん！マスター。」

そういいながら後ろを振り向いた。そこには静かに微笑んでコクリとうなづく店主の笑顔があった。右手には修理を終え生まれ変わった修一のギターを持っていた。

予感・・・

「ここかあ……」

甫は目の前にそびえ立つ円地色の大きな建物まじまじと眺めながら言った。

「さすがにでかいなあ……」

修一は甫の隣でつぶやいた。二人はジャーマンプロダクションのビルの前にポツンと立っていた。波野みずきの所属するジャーマンプロダクションは目黒駅から歩いて十分ぐらいのところにある。

二人は仕事を終えて最寄りの佐野駅ではなく、車で館林駅まで向かい、近くのコインパーキングに車を止め駅まで走った。佐野駅からの登り列車は一時間に数本と連絡が悪く、それならば館林まで車で向かおうと修一が判断したのだった。館林からさらに登りの駅まで向かわなかったのは、帰宅する車の渋滞を懸念しての事だった。甫は修一に夜付き合ってくれと言われただけで他に何も聞かされていなかった。とりあえず駅まで急げという修一の掛け声で車に乗り込んだ。それで今度は何事だという甫の質問にやっと修一は事情を話した。

「何とかいい時間に着いたな……」

ビルを眺め続ける修一の隣で甫は腕時計を見ながら言った。午後六時に病院を出だすことに成功した二人は車で飛ばしても館林発午後18時31分の電車に乗るのがやっとだった。目黒駅に着いたのが午後八時十九分。今立っている場所に午後八時30分だった。

甫の言葉に我に返り修一もパチンコの景品で得たタグホイヤーの腕時計を見た。

「……よし行こう。」

二人は大きな鏡の様な自動ドアに迎えられ中に入った。きれいなクリーム色した受付カウンターに本来はきれいな受付嬢といきたいと

ころだが身長二メートルもある様な大柄の四十代の男と、それとは対照的な白髪交じりの修一よりも四、五センチ背低い細身のそろそろ定年かと思われる男性が立っていた。すぐにガードマンと分かる服装で、全く業界関係とは無関係と分かる二人にでこぼこコンビガードマンの注意が注がれた。修一と甫の二人はすぐに自分たちに注意が注がれているのを感じていた。二人は横に並んで自動ドアから受付カウンターまでのおよそ十メートルを歩いた。カウンターにあと四、五メートルのところで二、三步修一が前に出た。自分が事情を話すことがスムーズと自然に感じていた。白髪交じりの男が話を聞こうとしてカウンター越しに修一に近づいた。大柄の方ではなかったことに、なぜだか二人はほっとした。

「あの・・・辻本さんにお会いしたいのですが・・・」

「お約束ですか？」

白髪交じりの男性は細々とした声をしていた。

「はい。あるイベントの打ち合わせといいますが。名前を言っただければ分かると思います。」

「そうですか。お名前は？どちら様でしょう？」

「徳明会病院の仲代といいます。」

二人が会話をしている最中、甫はおそろおそろ大柄の方の男を見ていた。修一の話で幾分警戒がほぐれたのか大柄の男は自分に恐怖感を抱いているような甫の様子ににっこりと笑顔を見せた。その様子に甫も笑顔で返したがその顔は親知らずが痛いのをこらえているような引きつった顔になっていた。

「ほう・・・病院勤務ですか？大変なお仕事で・・・少々お待ちを・・・」
そう言うとき白髪交じりの男はカウンターの真ん中に置かれている二台の電話のうちの修一たちから向って右側の電話の受話器を取り四回人差し指でプッシュボタンを押した。内線は四桁なんだと修一は思った。

「あ、もしもし。こちら受付ですが・・・辻本さんに面会です。トクメイカイ病院の仲代さんというお方ですが・・・はい・・・わ

かりました。」

男は電話を切ると、両方の眉毛をいっぱいに下げた笑顔で視線を修一へ向けた。

「お待ちしていたそうです。ではそちらのエレベーターから七階へ上がってください。エレベーターを降りるとそこにもう一人守衛がいますので、名前をお伝えください。」

「分かりました。どうも有り難うございました。」

修一はコクリと頭を下げた。甫も引きつった顔のまま大柄の男にお辞儀をした。二人はエレベーターの前まで歩き昇りのボタンを押した。決して大きくない品の良いチャイムと共にエレベーターの扉が開いた。すぐさま乗り込むと修一は7Fと書かれたボタンを押した。「あの、大きい方のガードマン、K1でもやれるんじゃないかあ？」格闘技が好きな甫が言った。

「うん、確かに大きかったな。」

修一はあつさりと答えた。そんなことはどうでも良かった。撮影が忙しいとメールでも知らされてはいるがもしかしたら、みずきの顔が見れるかも知れないと少しの望みも持っていたからだだった。高速エレベーターは病院の物よりも早く、七階にはあつという間に着いた。また品の良いチャイムの音と共に扉が開いた。エレベーターを降りると、すぐ目の前に小太りの男が、受付カウンターよりも三分の一ほどの小さなカウンターに椅子に腰をかけて座っていた。

「あの、仲代と言います。辻本さんをお願いします。」

受付を通ってきた物は関係者であると分かっているこの階の守衛は何の疑いもない笑みで二人を向え電話で辻本に連絡をした。守衛が会話をしている最中、修一は、受付の守衛とこの階の守衛の給料が同額なら少し不公平だなと考えていた。守衛は会話が終えると受話器を置き二人はこのまま待つように言った。

小太りの守衛がいるカウンターの奥に木目調でできた扉がある。十秒もしないうちに扉が開いて、中から辻本佳織が出てきた。病院で見たときより幾分きれいに見えた。

「どうも、お疲れ様です。お待ちしておりました。お久しぶりです。」

「遅くなりました。申し訳ありません。先日は電話ですいませんでした。」

「いえいえ、とりあえず中へどうぞ。」

そう言うのと辻本は二人を部屋へ招き入れた。中にはいるといくつもの机が並ぶ二、三十畳ほどの部屋で、壁には所属タレントや歌手の出演している番組のポスターやチラシが張り巡らされていた。中にはネームプレートをぶら下げた十名ほどの社員が残っているだけだった。辻本はツカツカとヒールの音を鳴らしながら颯爽に二人を連れて行った。修一と甫は辻本の後について辺りをキョロキョロ見回しながらいつもより歩幅を小さくしながら歩いた。いくつもの机が整然と並んではいるが、どの机も意外と煩雑で芸能プロダクションというよりは、雑誌の編集局のように思えた。壁に貼られているいくつものポスターの中から三人がエキストラで出演した映画のポスターを見つけ修一はニコリと笑った。先頭を歩く辻本佳織は後ろの二人を確認しようと振り向くと、にっこり笑っている修一を見つけ問うた。

「どうかしました？」

「いや、あれ・・・」

修一は照れくさそうに“僕と彼女と地平線と・・・”のポスターを小さく指差した。

「ああ・・・はい。来年三月上旬上映です。そうですね。あの映画からでしたね。さて、三人さんは映像に出てますかどうか・・・フッフ・・・」

辻本はいたずら気に笑った。

「そっかあ・・・」

そうだ、例えばエキストラで出演していても編集でカットされていて意味が無い。今頃修一は気がついた。まあいいかとまた辺りを見回しながら辻本について歩いた。

奥まで行くと、同じ大きさの扉が五つほどあった。扉には応接室1？5までの番号がふられている。辻本は応接室1の扉をあけて部屋の照明をつけた。

「こちらで待つていただけますか？今冷たいものでも用意します。何がいいですか？」

「いや・・そうですか？ではお茶系で何かあればそれで・・・」

「分かりました。ちょっと待つていてくださいね。」

「すいません。」

そういうと修一からソファに座った。

「うわっ・・すごっ。うちの院長室の椅子より凄いや。」

遅れて座った甫が黒革のソファに座るなり驚いた。

「そうだな、確かに高そう・・でも俺にはよく分からないや。」

修一が手のひらでソファをなでながら言った。二、三分してコンコンと軽いノックの音がして扉が開けられ再び辻本佳織が現れた。

「今日は遠くまですいませんでした。相変わらず病院はお忙しいですか？」

辻本がお茶をテーブルに配りおきながら二人に話しかけた。

「ええ・・でもそれが日常ですから。もう慣れてますし。」

修一が答えた。

「そうですか・・私たちも不規則ですけど、病院も大変なんですね。」

「いえ、でも私、芸能関係がどんなものか分かりませんが、タイムスケジュールとか大変そうですね。」

「ええ。まあ・・それこそ私たちも慣れてますから・・フフ」

二人が会話をしている間、甫はまだ落ち着かないようにで応接室の中をキョロキョロ見回していた。すっかり芸能プロダクションの雰囲気にはやられていた。

「あの、こいつうちの病院の放射線科の綾部です。」

修一は辻本がお茶と配り終えたのを見計らって再び立ち上がった甫を紹介した。自分の出番かと思い、一瞬遅れて甫が立ち上がった。

「あ、はい。みずきのＣＴ検査の時に・・・ですよ？」

「あ！ええ！そうです。」

甫は覚えていてもらえた喜びを笑顔で表現した。

「遠いところご苦労さまでした。さあ、どうぞおかけになって・・・」

立ち上がった二人をまたソファにどうぞと右手をきれいに伸ばして促した。全員が座るのを確認して、早速辻本は本題に入ろうとした。「で、みずきからお話は聞いていますが・・・具体的に・・・」

「はい。うちの忘年会に来ていただこうと思ひまして・・・それで・・・」

修一は説明を始めた。

「はい・・・」

辻本はいつもの手帳を開き修一の話の聞こうとメモを始めようとした。

「日時は十二月十四日です。そこでみずきちゃんの二枚目のシングル、フレンドリー・ラブをお願いしたいと思つてますが・・・いかがですか？」

「そうですね・・・最新の曲ではなくフレンドリー・ラブにするのは何か？・・・」

何か思惑があるのかと感じ修一に聞いた。

「実は、その日我々がバンド演奏するんです。まあ、盛り上げるツールが無いので無理やり出演するわけなんですけど・・・」

修一が説明している隣で甫が苦笑していた。

「そこで、音源は我々で用意しますのでみずきちゃんに歌ってほしいのです。」

「ああ、なるほど皆さんで演奏なさるわけですね？」

電車の中でその話は聞いてないと言わんばかりに甫が修一へ驚きの目線を送っていた。日ごろ楽器はいじっていても素人が一曲を完璧にするには一ヶ月はかかる。忘年会には二、三曲やることになっているのに、今からもう一曲なんて無理だ。甫は心の中で頭を抱えて

いた。

「いえ、演奏は私一人でやります。アコースティックで、しかもボサノバ風にやるとこの曲すごく温かみが増すんです。みずきちゃん
が病院の職員に感謝したいと思う気持ちにぴったりの曲か……」

「甫は隣でなるほどと思い頭を二、三小さく振って目の前にお茶を見つめていた。」

「なるほどね。」

辻本もメモを取りながら甫と同じように頭をうんうんと動かした。

「分かったわ。で時間は？」

「忘年会自体は六時半開始なんですが、実際歌う時間はそうですね・
・・八時半頃でしょうか・・・で・・・いかがでしょ？」

「ええ。年末年始の番組は十二月の第一週で全て撮影終了になります。その後は雑誌の撮影、取材ぐらいなんです。その日は午後から浦和スタジオでFMミュージック5の生出演があります。出演は六時三十分から十五分なのでそこから直で向えば間に合います。大丈夫でしょう。良かったわね。」

辻本は修一の計画を応援したい気持ちになっていた。

「おい！良かったな修一！」

初めて甫が口を開いた。

「うん！ありがとうございます。よかったあ……！」

修一は肩の力が抜けきちんと座っていた姿勢をやや斜めにくずしながら言った。淡々と話していた様で実は一番緊張していたのかと甫は思った。

「話は分かりました。場所はどこでしょ？」

「佐野市にある結婚式場でロマンスインマリアージュ佐野です。」
「ほっとしてうなだれている姿勢をまたキリリと元に戻し修一が答えた。」

「分かりました。何とか間に合うでしょ？」

「良かったあ……お願いします。」

そついうと修一はまた幾分姿勢をくずしソファの背もたれにもたれた。

「あの・・・」

修一とは逆に甫が身を乗り出して、辻本に問いかけた。

「ん？なんでしょ？」

初めて甫が自分に問いかける姿勢に辻本は興味を見せた。

「今日みずきちゃんはここには・・・？」

甫の質問の無いように修一は少し動揺をした。実はエレベーターに乗ったときからみずきさんの姿を探している自分に気づいていた。

「どのタレントもここにいないことは少ないです。今日もみずきは撮影に言っています。きっと明け方までかかるでしょう。」

「そうですか・・・」

修一の分も甫はがっかりしていた。

「仲代さん、みずきにはちゃんと伝えておきますから。安心してね。」

「あ、いえ、はい。よろしく願います。じゃあそろそろ失礼します。」

時計を見ると午後九時四十五分を少し過ぎた頃だった。席を立つと辻本が開いてくれた扉をくぐり事務所の中を出口に向って歩いた。

「あつ！ちよつと待つて」

辻本はもう少しで事務所の入り口にたどりつきそうな辺りで二人を呼び止めた。小走りに数多く並べられた机の中のある机へ行き、引き出しを開けて何やら品物を取り出し、また二人に向って走ってきた。

「これ。ストラップなんですけど・・・映画の撮影の時にスタッフだけに配られたオリジナルのＴシャツです。あまり物で何なんですけど・・・」

「うわあ！いんですか？」

修一は歓喜の声を上げた。

「すいません、こんなもので・・・」

「いえ！いい記念になります！ありがとうございます。」

まじまじとＴシャツを見ながら甫が言った。

「そんなに喜ばれると帰って恐縮しちゃうわ・ハハハ」

子供のように喜ぶ二人を見て辻本の中の母性本能が笑顔となって現れた。

「では・・前日にでも仲代さんの携帯に連絡させていただくこともあるかと思いますが・・」

「はい。ぜんぜん構いません。」

最後の挨拶を交わすと辻本は扉を開いた。

「では、よろしく願います。」

「はい。気をつけておかえりください。」

「失礼します。」

二人はもらったＴシャツを胸に抱えジャーマンプロダクションを後にした。

二人は目黒駅から帰途に着いた。電車は帰宅するサラリーマンでぎゅうぎゅう詰めだった。何とか二人はつり革に捕まり電車の揺れに習って体を揺らせていた。

「いつ思いついたんだ？」

「何が？」

「アコースティックの演奏・・」

「ああ・・あの曲が出たときから。甫も前に言ってたよな？なんかの洋楽を、これピアノで仕上げたらいいよなあ・・とか。」

「ああ・・クイーンかなんかだったかな・・？」

「同じ発想だよ。一度触りだけ引いてみたことがあったんだ。」

「ふーん・・そうなんだ。」

「うん・・」

しばらく沈黙が続いた。修一の目の前に立っている中年のサラリーマンは自分の体重を他の客に預けてたったまま眠っていた。器用だ

なあと思った。電車の中はつかれきつたサラリーマンが多いせいか、線路から伝わる音と振動のみが車内空間を響かせていた。修一はふと我に振り返りにいる甫に肘鉄を食らわせた。

「あ、そういえばお前、何余計な事聞いたんだよ！」

「あ？何？」

「ここにみずきちゃんいないのかとかさあ」

「だって、お前が聞けないだろ？」

「ああ・・・まあ・・・」

「だろ？本当は期待してたんだろ？」

「そつか・・・お前にはお見通しか・・・」

「何年一緒にいると思ってんだよ。ハハハ。」

「ハハハ・・・そうだな。」

「顔見たかつたんだろ？」

「おう・・・まあ・・・なあ・・・」

またしばらく沈黙が続いた。ふたりは外に流れる都会の照明を漠然と目で追っていた。

「甫、いつも悪いな・・・。」

「ん？なんだお前・・・気持ち悪いな・・・」

「うん・・・なんかな・・・病院の開院の頃とか思い出すとさ・・・なんかいろいろあつたなあって思ってたな。」

「そんなん、お互い様だろ。何だお前、気持ち悪いなあ。ハハハハ。」

らしくない修一の言動がむず痒く感じた甫は会話を切り返した。

「どうすんだ・・・？」

「何が？」

修一は窓の外から視線をはずすことなく質問に答えた。

「みずきちゃんとの事だよ。」

「・・・・・・。」

「・・・だよな・・・わかんねえよな・・・。」

「ああ・・・」

返事をしてからしばらくしてまた修一が話し始めた。

「この前、辻本さんから電話があった時に釘を打たれたというか・

」
「そっかぁ・・・」

「俺は、別に形をすぐに決めなくてもいい。ただこの時間が少しでも長く続いてくれたらなぁって漠然と思ってる。みずきちゃんは居心地がいいって言うてくれてる。俺はそれだけで満足っていうか、彼女が素でいられる時間が、俺と交わす電話とかメールとかの時間でいいなら俺はそれで満足だし。」

「みずきちゃんなんて？」

「んなこと俺からいちいち聞かないさ。」

「だよな・・・お前さぁ、まず相手の事ばかり考えるって言うか、気を使いすぎるっていうか・・・傍から見ると偶にいいように使われてるように見える時があるから、苛苛するときあんだよなぁ。全く・

・・・お前のせいで三年は寿命が縮まってるぞ。ハハハハ」

甫は修一にかかわる何かを思い出して懐かしげに笑った。

「フフフ・・・そっか・・・悪いな、甫。」

「だからキモイっての・・・！」

「ハハハっ！そっか。」

二人は窓に映るお互いの姿を相手に笑っていた。笑いの途中甫の顔が曇りだした。窓に映る修一が片目をつぶりさらに右手の人差し指でしきりに右目を擦り、また目を開け目を凝らして窓の外景色を必死に見ようとしている。修一が何度かそんな動作を繰り返し返していた。

「修一？どした？」

「おう・・・なんでもない・・・ちょっと目がかすんでさ・・・」

「大丈夫か？お前当直の夜中にとか顕微鏡見てんだろ？疲れてんじやないの？お互い三十代入っちまったんだから、これからいろいろ出てくんぞ。老化現象というやつが・・・」

「だな・・・」

実際、今日だけではなかった。何度かこの症状はあったが、決まって右目で、ひどい時には頭痛が起きるときもあった。当直の晩に起きるときもあったが、そんな晩は顕微鏡をのぞくのはやめ、当直室で休むようにしていた。しかしだんだんその症状が現れる間隔が短くなってきているのは修一にも分かっていった。目のかすみ具合もただばやつとしたり、明るさを感じなくなったりとバリエーションが加わってきた。

三回電車を乗り換えようやく甫の車までたどり着いた。甫は修一がまだ目を気にしているのを心配してアパートの前まで車をつけた。

「おい、修一、大丈夫か？」

「おう・・・偶にあるんだ。でも一晩寝ると戻るんだ。大丈夫・・・すまん。」

「うん・・・ならいいけど・・・」

「じゃあなあ・・・」

そういうと修一はドアを開けゆっくりと車を降り頭だけまた車に戻して甫に言った。

「なあ甫」

「なんだよ。」

何を話すのかと甫は少し目を大きく開いて修一を見た。

「お前も、大村・・・何とかせいよ。」

「何だよお前、帰り際に。ハハハ・・・」

「おい、まじめに言ってるんだ。」

「おう・・・」

「お前は人を弄ぶような事するやつじゃないけど・・・逆にお前から見てると苛々するよ。」

「お前が言っな・・・うん・・・分かった。ちよつといろいろ考える事があつてな。」

「そつか・・・大きなお世話だったらすまん。」

「いや、そんな風には思わないさ。・・・ただな・・・」

「ん？なんだ？」

修一は右目を擦りながら、次に発する甫の言葉を待った。

「いや・・・いいや。また今度話す。とりあえず今日は休め。」

「おう・・・分かった。またな・・・」

そういうと修一はできるだけ音がたたないように車の扉を閉めた。ブツとクラクションを鳴らし甫の車が発進した。時間も遅く、車のドアを閉めるのにも気を使っていたのにクラクションを鳴らされ
ては修一の気遣いも意味が無い。

「馬鹿。うるせーっつーの・・・。」

小さくつぶやいた後、静かに笑みを浮かべた。左目で甫の車が去るのを見届けてからくりと体を回転させ部屋へ向った。安アパートには階段付近に外灯はなく月明かりと星の明かりで地面と階段を見分けていたが、片目だけではそうもいかず、手探りで階段の手すりを探し、左目で階段の段差の具合を確認した。一段一段足で確認しながら登り終えドアの前までたどりついた。

「鍵、鍵と・・・」

ポケットから鍵を取り出したまでは良かったが片目ではピントがずれて鍵穴に入らないこの辺かと何回か鍵の先で鍵穴を探り鍵を開け、ドアノブを捻りドアを開けた中に入った。暗闇がいつもより怖く感じ、急いで蛍光灯をつけようと手探りで紐を捜している時だった。

「うつつ・・・痛てえ・・・うつつ・・・」

激しい頭痛が修一を襲った。痛みは長く続く事は無かった。痛みを感じているうちに意識が遠のいて行ったからだ。修一はその場にバタリと倒れた。修一のポケットに入っている携帯がみずきからの電話をしきりに伝えていることも修一には分からなくなっていた。

発覚

「あん・・・もう！・・・。参ったな・・・」

みずきの親友、宇都宮礼子はオフィスにある自分のデスクで15インチのモニターの前で格闘をしていた。試薬メーカーのクレームで礼子の会社で発売したクライアントとの受発注システムで約二千種の薬品のうちの三十九種類の発注がうまくいかないのだ。病院や企業がその三十九種の薬品を試薬メーカーや問屋に発注がかかると、別の薬品に振り変わってしまい、発注したものは全く別の薬品が届いてしまうというクレームが来たのだった。マスタ、又はそれを読み取るプログラムであることには間違いがないのであるがマスタの中の約二千種類の薬品を調べるだけでもかなりの日数がかかってしまう。幸いにもこの三十九種類は特別な薬品ばかりで月に一度か二度発注するものばかりで、礼子の会社の製品の製品を使用しているクライアントはその三十九種類のやり取りは電話で発注する事で凌いでいた。クライアントに対しては二週間ほど時間をもらえる事になってはいるが、当然普通なら一ヶ月はかかるという問題だった。礼子は今週に入って朝七時にはオフィスに入りこのシステムの不具合と格闘していたのだった。もう朝から七時間同じ姿勢のまま没頭していた礼子の腰が悲鳴を上げていた。

「イタタタ・・・ツ・・・」

椅子に座ったままゆっくりと背骨を伸ばそうと背伸びをしながら時計を見た。

「えっ・・・！こんな時間かぁ・・・。」

時計は午後二時十八分を指していた。気づけば昼食も取っていない。「こんな生活じゃぁ・・・お肌もぼろぼろになるわ・・・」

ふと隣の男性先輩社員を見ると机の上でうつ伏せになるような格好で眠っていた。このクレームに対処しているチームは五人。連日遅くまでの残業と早朝出勤では途中の居眠りで睡眠時間を取らないと

やっていけない。企業側が残業代を削らずに支払ってくれるからやってられるが、そうでもなければ辞めてやる、さすがの礼子も心身共に疲労困憊になっていた。遅めの昼食とを取ろうと席を離れようとした時にキーボード脇にある携帯電話がバイブを響かせて礼子を呼んだ。またクライアントからの催促の電話かと思い、携帯電話を取ると眉間に幾分しわを寄せながらディスプレイを開いた。

「あら!？」

一瞬驚いて受話ボタンを押した。

「もしもし? 珍しいわね、こんな時間に。」

「ごめんね。今大丈夫?」

「うん。いいタイミング。今から昼休みを取ろうと思ったところ。」

「え? 今からなんだ・・忙しそうだね。」

「今ちよつとね。うちの製品のシステムがトラブル起こしてて、クレームとリカバリーでもうくたくたで・・ハハハ」

「そつか・・じゃあまたにしようかな・・?」

「ううん! いいよ。ちよつと気晴らしもしたいし。相手がみずきなら丁度いいもん。」

礼子は携帯を右耳と右肩で挟みながら軽くデスクの上を片付け出かける準備をした。近くにいた同僚に仕草でお昼に言ってくることを告げ、再び右手に携帯を持ちながらオフィスを出た。

「んで? どしたん?」

「あのさあ・・・」

「どうしたのよ?」

電話に出たときよりも小さい声で言いにくそうなみずきに幾分心配になった。

「・・・」

「ん? どした?」

「うん・・・あの・・なんかね。引つかかる人がいるの・・」

「何!? ストーカー?」

「ううん。そう意味じゃなくて・・気になる人って言うとき少し行き

過ぎのような気もするし．．なんていつていいか分からないんだけど．．。」

礼子は直ぐにみずきの言いたい事が分かった。まさにピーンと来たというのはこういうことかと礼子は思った。

「．．．そっか．．．。」

「私の言いたいこと分かるかなあ．．．？」

「他の人にはわからないと思うけど．．私には分かるよ．．みずきはいつもそうだもんね。そういう話し方する時って、本当は自分の気持ちに気づいてはいるんだけど、自分じゃ否定しちゃうって言うか．．．ね？でしょ？」

「そうなのかなあ．．．？」

「またそうやって．．！」

「ごめん．．．なんか良く分からなくて．．もやもやしてて．．．
「はいはい！分かりました！ハハハ。ねえみずき．．．？」

「別にいいじゃん、アイドルが恋愛したって。桐生に帰ればただのみずきだもの。何か恋愛しちゃいけない理由でもあるの？」

「だから恋愛つてとこまで行ってないの．．．。」

「もう！．．分かった。んじゃ言い方がえる。みずきにも心が休まる場所があつたっていいじゃない？それがどんな人だって。でしょ？もやもやするなら別に直ぐに結果や形を出さなくてもいいじゃない？経過観察つてやつかなあ．．。」

「経過観察かあ．．。」

「うん、自分の気持ちに気づくのに時間がかかるのがみずきの癖なんだから、みずきが自分を受け入れないと．．．。」

「そっかあ．．．うん．．．。」

「ちよつと待っててね。」

「うん．．．ごめんね．．．。」

受話器の向こうで礼子は何やら注文をしている様だった。きつと近くのファーストフードにでもはいったのかなあつと察した。礼子はトレイの上に乗せられた遅めのランチをテーブルに運び椅子に座つ

た。これでゆつくり話ができる。

「みずき。」

「ん・・・？」

「私みずきにあんまり頑張れって言ったことないよね？」

「うん・・・そうだね。」

「みずきに頑張れって言うのと、何も疑わずに真っ直ぐ頑張っちゃうからさあ。だから自分の気持ちまで追い込んでゆつくり向き合えないのはどうかなあって、いつも思うよ。」

みずきが電話の向こうで静かにすすり泣いている様子が伺えた。

「・・・うん・・・ありがと。礼子。」

「ねえみずき？それでどんな人なの？業界の人なの？」

「ううん、全然・・・病院で働いてる人なの」

「病院・・・？この前入院した時に知り合ったの・・・？」

「うん・・・。」

「お医者さん？」

「ううん・・・違うの。細胞とか血液を顕微鏡で見てる人」

「そっかあ・・・。久明会病院かあ・・・。」

みずきが入院した頃、礼子は福島県会津若松にある病院の電子カルテ導入のために出張していて、みずきに見舞いに行くことができなかった。入院した頃の話ということを耳にした時、みずきに対し見舞いに行けなかった事に対し申し訳ない気持ちがまた少し振り返してきた。

「実はさあ、うちの受発注システム久明会病院にも入ってるんだ。」

「・・・え？・・・うそ・・・ほんとに？」

さつきまでシクシク泣いていたみずきの様子が一变し、小さく驚きの声を上げた。

「連絡は取ってるの？」

「うん。でも時間が全く合わないから・・・私も撮影で最近では夜中とか明け方になっちゃうし・・・仲代さんは仲代さんで夜勤とか当直とかで忙しそうで・・・夜中メールすると翌日返信が来たりと

か・・・昨日は電話したんだけど・・・出て貰えなかった。」

「フフ・・・ナカダイさんって言うんだあ？」

「・・・うん・・・」

礼子の口から改めてナカダイという響きを耳にするとみすきは少し恥ずかしくなった。礼子は何かを思いついたように笑みを浮かべ、軽くコーヒーを啜った。窓をみると、いつも見ているかえでの木に秋の気配を感じていた。

約一ヶ月後　十一月二十五日

病院祭も無事に終了し、病院は、気温が下がってきたせいで増えてきた患者を迎える時期となり、九月、十月よりも外来診察ブースはごった返していた。

「おい！修一！いるかあ？」

午後の山場を終えた甫が検査室に入ってきた。

「おい。ここだあ！」

パソコンに隠れて顕微鏡を見ていた修一が大きく手を振っている。

「どうだ？目はまだかすむか？」

「うん・・・変わらない。」

「標本見るの止めたら？こんなときぐらい。」

「うん・・・でもこの患者さん夕診に結果聞きに来るらしくてさあ・・・」

「」

「そつか・・・」

あれから一緒に酒を飲むたびに目をぱちくりとさせる修一が心配になり甫が切り出したのだった。

「診てもらった方がいいんじゃないのか？」

「うん。でもなんとなく気が引けてさ。」

「でもさ……。ずっと続いてるだろ……」

甫はデスクに座り顕微鏡を見ている修一を見下ろし、深くため息をつきながら腕組みをした。

「お前、病院で働いてるくせに医者にかかるの嫌いだもんな。厄介なことに頑固だし。」

「……るせえよ……。」「修一は小さくつぶやいた。

「修一、今日勤務は？」

「泊まり。甫は？」

「俺も……。じゃあさ……。今晚夕診終わったら、CT撮ってみな
いか」

「……。。。」

修一は会話をしていた体制を崩し、俺は忙しいんだと言わんばかりに、再び顕微鏡をのぞき始めた。甫は顕微鏡を眉をひそめて覗き込んでいる修一に再び話しかけた。修一は何も答えなかった。

「いいな？機械落とさずに待ってるから。じゃあな！」

甫が視界から消えたのを確認しまた顕微鏡から目を離れた。

「フー……。。。」

今度は修一が深くため息をついて後頭部に両手を組んで天井を眺めた。

午後八時、部屋の照明を半分消した放射線科室にコツコツと足音が近づいてきた。シャーカステンで今日入院したばかりの患者の胸部エックス線を見ていた甫が足音に気がつき振り返った。

「よう……。」

修一は白衣の両方のポケットに腕を突っ込み、ばつ悪そうに挨拶をした。

「フフ……。諦めたか。お前にしては素直だな。でもいー回撮った
という方がと思うよ。」

「おう・・・頼む。」

「んじゃ、早速やるか」

甫はボンと修一の肩を叩き修一が歩いてきた逆方向へ向いCTの操作デスクへ向った。修一もトボトボと甫の後を追って歩いた。撮影室の扉を開け中に入れと甫は促した。修一は白衣を脱いでケーシーだけの格好になって中に入りCT台の上に横になった。

「分かっていると思うけど・・・頭動かすなよ。」甫はそう言いながら修一の頭を固定した。

「うん・・・。」修一はむすつとした顔で返事をした。おもちゃを買ってもらえずに泣きながら駄々を捏ねるが、結局買っては貰えずにへそを曲げた子供の様になっていた。甫は頭を固定し終わると撮影室に修一をひとり残して、操作デスクへ向い扉を閉めた。ウゴカナイデクダサイという機械のアナウンスがなると修一の頭はドーナツ型の大きな筒の中へ入って行った。そのせいで修一からはガラスの向こうで操作をしている甫の姿は確認できなかった。甫はモニターで自分の頭を確認しているはずだ、写真が出来上がる前に甫がなんと言うか不安だった。

撮影はほんの数分で終わった。甫は再び撮影室に入り修一の頭を固定している器具をはずしに向った。修一にかぶさるような感じで甫が現れた。甫は無言で器具をはずし始めた。

「甫、どうだった・・・？なんかあったのか？」

「・・・お前も一緒に見る・・・」

「そつか・・・」以外に冷静な自分がいると感じた。

再び二人は放射線科の中央にあるデスクに向った。甫は無言で撮影フィルムの印刷の作業を行っていた。修一はデスクには座らずに、勝手に冷蔵庫を開けてコーヒーマシンのシヨート缶を取り出し、プルトップを空けながらダルそうにデスクへ向った。静かな部屋にフィルムを吐き出す機械音だけが響いた。四つ切のフィルムを三枚もって甫が戻ってきた。甫はシャーカステン照明をつけ、カシャン、カシヤンとフィルムをはさみ始めた。

「見てみるよ・・・」修一の方へは振り向かずフィルムを睨んだまま修一に話かけた。修一は何も言わずに靴音だけを響かせて甫の右側に並んだ。

「・・・これじゃあ・・・目も霞む訳だ・・・」

写真には脳の中心と後頭部の一番外側の辺りに、いずれも人差し指の頭ほどの白い影が映っていた。通常画像診断は放射線科医師が行うが、技師レベルでもこのくらいの大きさの腫瘍は判断がつく。問題はこの腫瘍が何かということだ。甫は話しにくかろうと、修一は自分で自分の画像について勝手な憶測を並べた。

「はーん。脳腫瘍かあ・・・俺見えなくなっちゃうのかな。圧排じゃ無くて、視神経を取り込んでいるなら腫瘍を剥離させるのは難しい。ん？・・・」

「お前・・・ぼけてる場合かよ・・・。」

「・・・おう・・・すまん・・・」

二人はしばらくフィルムをじっと眺めていた。しばらくすると修一は先にデスクに向かい椅子に座った。

「そつかあ・・・それでか・・・」修一は腕組をして頭を幾分左後ろに傾けながらデスクの上にある四角い置時計をボーっと見つめていた。甫もシャーカステンの照明を切り、ゆっくりと修一の前に座りため息をつきながらゆっくりと座った。

「・・・診てもらえよ・・・」

「・・・。」

「お前！いい加減にしろよ！」

甫は声を荒げた。

「もういい・・・」

修一を説得するのをやめ首にぶら下げてあるピッチでまだ常勤医が院内に残っているかどうか病棟中をかけようとボタンを押し始めようとしていた。

「・・・待てよ・・・分かったよ・・・。」もう諦めたように修一は小声で言った。そういうと再びシャーカステンの照明を点け、自分

のいくつも輪切りにされている頭の写真を見ていた。その顔、その目はさつきとは違い険しい表情になっていた。まるで戦国時代の武將が川向こうにいる敵陣を威嚇するような鋭い眼光になっていた。まるでこれから戦いに向うような、そんな覚悟をうかがわせていた。「初めて俺の存在を認めてくれた人がある。俺の存在を励みにして毎日がんばって笑顔を絶やさないで頑張っている人がいるんだ・・・俺が自分の居場所だって言ってくれたんだ。・・・倒れるわけにはいかないよ。」

「・・・ああ・・・そうだよ。修一。」
「・・・」

室内喚起のファンの音だけが響いていた。やがて、修一はシャーカステンの照明を消し、立ったまま両手をポケットに突っ込みデスクに尻だけ乗せる感じにもたれた。甫は修一の脇にある椅子に腰を下ろした。

「明日、脳外科の前場先生来るよな？」
「ああ、診察が終わるとこの部屋で患者の写真を全部目を通すからな。」

「分かった。じゃあここで写真見てもらいながら診察してもらおう。いいかな？・・・甫。」

「・・・当たり前だよ。」

「・・・騒がれたくないから、写真の名前の部分消しておいてくれないか？」

「テープでも貼っておくよ。」

「悪いな・・・。」

「おう・・・あのさ・・・。」

「ん？」

「俺に礼とか・・・言うな・・・。」

「ふん・・・うるせえよ。・・・じゃあ・・・俺・・・部屋にもどるな。」

「飯は？・・・ってそんな心境じゃねえよな・・・。」

「うん・・・すまん。」

「いいよ。分かった。」

「じゃあな・・・。」そういうと修一はデスクから立ち、背を向けてとぼとぼと靴音を響かせて歩いていった。甫は黙って見送るしかなかった。

検査室に戻ると修一は、すべての機械のシャットダウンを始めた。きわめて機敏な動きで手際もよく、急かされている仕事でもなんでのないのに短い距離を小走りで走りてきぱきと動いていた。どんなに動いても、たくさん動いても、脳にあった二つの腫瘍の画像が頭から離れなかった。一台一台洗浄をかけ、残検体を冷蔵庫にしまい、明日採血予定の試験管を準備して病棟に運ぼうと廊下に飛び出し、エレベーターに乗り五階まで上がった。エレベーターを降りると廊下の照明は消されておりナースステーション明かりが煌々と点いていた。ナースステーションへたどり着くまでに病室で眠っている患者の様子が伺えた。この病棟は痴呆患者も多く、ベッドからの転落などの対処が必要なためドアを開けっぱなしにしてある部屋もある。心電計のモニターの音、人工呼吸器が酸素を送り込む乾いた音、いろんな音が修一の鼓膜を揺らした。ステーションには誰もいなかった。修一は黙って中央にある作業台の上に採血管の入ったラックを置いた。

同様に四階病棟にも採血管を置き三階へ向った。ナースステーションには看護師一人と、看護助手がステーションの奥で、フリーザーの中の氷をゴム製の水枕へ入れていた。修一がフラツとステーションの中に足を入れると、人影に気づいた看護師が声をかけてきた。

「ナツカダイサーン！」カルテ書きをしながら修一の名前を呼ぶ香坂幸子がそこにいた。

「・・・よう・・・。」

「あら？お疲れのようね？」少し小首をかしげて修一を見た。明らかに顔色が悪い。職場で何かあったのかと思っただが、敢えて詮索は

しないでおこうと思った。

「これ、頼むな。」

「うん。あら？明日採血少ないわね。」

「ああ。そうだな。」返事が無機質な修一が心配になり差しさわりのない質問をした。

「どうしたの？なんかあった？の？」

「いや・・・最近寝不足でさ・・・。」

「ふうん・・・そっか。」

「じゃあ。」

「うん。」修一はくりりと翻り検査室へと向っていった。幸子は修一が見えなくなるまでその背中を目で追った。

検査室に戻ると洗浄を終えた機器類の電源を落とした。時計を見るともう午後十一時半を回っていて、いつものペースではなかった。当直の業務にＣＴの撮影は含まれていない。甫のところでは結構話をしたんだなと思った。一通り点検を終えて検査室の照明を落とした。今日はどうせ眠れないとは思ったが、とりあえず仮眠室へ向いごろりと横になった。カチカチという時計の音がやけに気になった。秒針が規則正しく刻んでいくのをずっと見ていた。不思議と眠気が来たことに修一は抵抗はせず、修一は眠りについた。

しばらくして何か胸に熱いものを感じた。何やらいがらっぱい感触があり軽く咳払いをした。しばらくは治まるが、しばらくするとまた起きてくる。胸の辺りに何か引つかかるものを感じ、今度は両手で口を覆い大きく咳払いをした。

「コン、コン、ゲホ・・・ゲホ・・・ゲホ・・・」口の中から何か手に吐き出された感触を覚え、両手をそつと口から離れた。照明を落とした部屋でも、両手に吐き出されたものが血塊であると認識するのは星の明かりでも十分だった。

「まさか・・・嘘だろ・・・。」

修一は頭の中が頭が真っ白になった。というより全身が冷たくなつたという方が適切な表現かもしれない。修一は脇にあったティッシ

ユボックスからティッシュを取り出し自分の吐いた血塊をすぐに包んで仮眠室を飛び出した。すぐさま検査室の鍵を開け病理検査ブースへ飛び込んだ。

「シャーレ！」

実験台脇にあるシャーレを血だらけの手で取り出し、その中へティッシュに包まれた血塊を入れた。

「・・・マジかよ・・・」

何かを思いついたわけでもなく、自然にピンセットで自分の吐いた血塊をほぐし三、四枚スライドガラスに塗りアルコール液へ浸した。しばらく時間を置いて流しにある小さな水槽に水を流し、血塊のついたスライドガラスをアルコール液から取り出し水槽の中にポチャンと浸した。修一は細胞検査士として自らの体のシグナルを確認しようとしていた。細胞検査士が細胞を鏡検するには、幾つかの工程を経て細胞を染色する必要がある。いつもの作業とは違い、最初から最後まで緊張の糸が緩むことが無かった。標本が仕上がるまでに三十分は掛からなかった。染色を終えると、カバーガラスを被せ、顕微鏡のステージに置いた。すぐさま修一は顕微鏡を覗いた。標本はさすがに赤血球がたくさん観察され、白血球、組織球などさまざまな細胞が目に入ってきた。視野を左、また左と送り異常な細胞を探った。やがて、ステージを動かす左手がぴたりと止まった。レンズを見る修一の右目から一筋の涙がこぼれた。

「・・・うそ・・・だろ・・・」

肺がんには幾つか種類がある。しかしいずれにも属さないものであった。本来細胞は細胞質とその細胞質をつかさどる核とで成り立っている。正常な細胞は、核はきれいな円形を保っており、細胞と細胞の大きさも比較的均一でなければならない。しかし、修一から吐き出された血塊中の細胞は核は、でこぼこと異形を持ち大小さまざまな大きさで、逆にスライドグラスから修一を睨み返していた。さらにその細胞質には本来あまりありえない様相を呈していた。細胞質は本来染色液の作用で、きれいなオレンジ色や薄いピンク色、緑

色、黄緑色を呈しているのが普通だったが、修一の細胞は薄く緑色に染まっではいるが、茶褐色の顆粒状の物質がちりばめられている。修一はこれがメラニン顆粒であろうと確信した。修一のひじが諤々と震え始めた。背筋に汗が流れ、呼吸が荒くなっている。鼓動が激しくなり気が遠くなってきた。力が抜けた修一はその場の片付けもせず仮眠室へと戻った。小さなベッドに横になると、薄っぺらい布団の中に全身を潜り込ませカタカタと体を震わせていた。恐怖がおかしくなりそうだった。涙が後から後から流れだし、ただ怖くて仕方なかった。枕元で鳴り出した携帯電話の着信音でハツとして幾分正気に戻った。みずきからの電話だった。

「もしもし・・・？修ちゃん？」

「あ、ごめんごめん・・・今片付け終わったところでバタバタしてて・・・。」

「あ、まだ仕事だった？ごめんね。」

「ううん。大丈夫だよ。」

「忘年会までもう少しだね。修ちゃんの病院の職員でもないのに凄く楽しみで・・・この前、カオさんにあまり現場で騒がないでよって怒られちゃった。」

「うん・・・。」修一はギターを修理に行ったときにかかっていた辻本佳織との会話を思い返していた。みずきには今の自分の状況は絶対に話すことはできないと思い、あるはずの無い元気を振り絞った。

「修ちゃん？どしたの？」

「ううん。何でもないよ。忘年会ね、この前委員会の代表だけにみずきの話してさ。すごい驚いていたけど当日、みずきが会場に現れるまで絶対に口外無用ということでいろいろ打ち合わせしたよ。こっちの準備は万端だよ。みんなきつと喜ぶよ。」

「うん！でね・・・。」

しばらく、みずきのはしゃぐ会話がつついた。今日は当直であることはみずきに伝えてあり、みずきは久々電話ができると楽しみにし

ていたのだった。みずき・俺怖いよ・といっってしまったらどれだけ楽だろう。みずきは涙を流しながら自分に話かけている修一の様子など全く気づいてはいなかった。月は雲に隠れ、また星明りだけが修一を優しく照らしていた。

覚悟

翌日、修一は甫の待つ放射線科に姿を見せなかった。通常であれば、当直者は翌日の半日の勤務を終えて帰宅となる。修一が来ない事を不思議に思った甫は検査科のスタッフに修一の所在を聞いて回ったが、急用が出来て朝九時に帰宅したという。さらに検査科技師長の話によれば急に数日の有給休暇の申請を出してきたという。日頃滅多に休みの申請もしない上に、去年も有給など使ったことが無い為、よほどの急用かと特別に許可したという話だった。甫の脳裏に良からぬ事ばかりがよぎっていた。頭の中を何も整理できぬまま半日撮影業務に追われた。勤務が終わると、昼食も取らずに外来待合室へ向い大村桃子の姿を探した。カウンターでキョロキョロしている甫を見つけ、桃子の方から甫に声をかけた。

「もしかして？私をお探しですか？」の声に甫は反応的に振り向いた。桃子はお昼に上がろうと丁度カウンターを離れようとしていたところだった。

「ちよつと・・・」甫が手招きをして桃子を廊下へと誘った。「先に行つてて。」と一緒にお昼に上がろうとしていた看護師達に声をかけて小走りに甫の方へ向った。

「実はさぁ・・・」の一言から昨晚の出来事を桃子に話して聞かせた。桃子は何処でもない一点を見つめながら、何か考え事でもしているかのような顔で甫の話を聞いていた。

「・・・心配ね。どうしょ・・・」やがて甫と同じ不安が桃子の頭を支配した。

「綾部さん、仲代さんの実家とか連絡わからない？」

「わかる。でも、下手に電話して心配かけたく無いよな・・・」

「そっか・・・」腕組をしていた桃子の右手が自分の顎へと移り、右手の人差し指が伸び右の頬を触れた瞬間、甫が放射線科へと走った。

「どうしたの!？」桃子は甫の後を追った。あわてて進入してきた甫に他の放射線科スタッフは一瞬驚いたが、侵入者が甫と分かるとまた意識を仕事に戻した。桃子も放射線科に入りかけたが、また戻って来るのを予測し廊下で待つことにした。一分も経たないうちに甫が飛び出してきた。右手には携帯を持っていた。

「修一からメールが来てる。」

廊下では話が出来ないと、日頃は使用していない“あの第二救急室”へ向った。数分なら誰も来ないだろうというところさの判断だった。「で、なんて？」扉が閉まるなり桃子が聞くと同時に甫はディスプレイを開け、桃子に呼んで聞かせた。

「えっと・・・(甫、昨日はサンキュー。ちょっと行きたい所がいくつかあるので、出かけて来ます。心配すんな。また連絡する。申し訳ない。）・・・だって。・・・ちょっと待って・・・」

そういうとすぐさまその携帯から修一へ電話をかけた。電源が入っていないのか、全くつながらなくなっている。二、三試みてみるが、修一につながることは無かった。“心配するな”の修一からのメールに少し安堵したのか、甫の顔は幾分表情が解れていた。

「どうする？」自分の携帯電話を桃子に手渡し、メールを読んでいる最中の桃子に問いかけた。

「・・・信じるしかないよ・・・」

「信じるってお前・・・」

「大丈夫よ。きつと。」

「・・・なんで分かるんだ・・・?」

「いくつか行きたいところがあつて・・・また連絡するって言つのは・・・目的があるって事だし・・・達成できたら連絡するって事だよ・・・大丈夫だよ。」

「・・・」甫は無言のまま腕組をして繭をひそめた。桃子は何度も何度もメールを読み返している。フーツという甫の深いため息を聞いて桃子はディスプレイを閉じた。

「ね?」ニツコリと微笑む桃子に「うん・・・」と小さく頷いた。桃

子は甫の携帯を返しながら甫に付け加えた。

「本人が一番不安だと思う。自分の頭に影があつて、眼が霞むとかの症状が出てたりしてればなおさらよ・・・電話はつながらないかも知れないけど、メールなら読んでもらえる機会があるかも知れないから、送つて見ましようよ。」

「うん・・・そうだな・・・俺たちが修一を追いついたら・・・まずいよな。」渋々甫は答えた。二人は数十分第二救急室で修一を気遣う話をした後分別れた。桃子は昼食を摂りに6階の食堂へ、甫はロッカールームで着替え帰途に着いた。

同じ頃、修一は三軒茶屋にある東関東細胞センターの自動ドアをくぐつていた。

「さてと・・・」小さく息を吐いてある人の下へ行つた。ある人とは修一の細胞診指導医、林小太郎であつた。細胞検査士は指導医の元、細胞診業務を行っている。細胞検査士が怪しいと疑つた細胞は必ず指導医の診断を仰がなければならない。最初は白い扉であつたのだろう。古い歴史がこの扉をベージュ色に変えたのだ。扉に張られている白いプレートに明朝体で“細胞診鏡検室”と書かれている。コンコンとノックをして中へと入った。幾度となく訪れている修一はその扉の向こうの顔ぶれを想像するのは容易なことだつた。

「おお。いらつしゃい。電話は携帯からだつたのか？」

「はい。電車に乗る寸前にかけました。」

「そうか。まあお座りなさい。」そういうと林は修一を、端が切れてスポンジが飛び出している椅子に座れと促した。修一が細胞検査士を志した頃、勉強のできる施設が近くには無く困つていた時に、うちで勉強したらどうかと話を持ちかけてくれたのが林小太郎だつた。幾分小太りで頭は白髪の方主頭で丸い老眼鏡を首からぶら下げている。修一は三度目の試験でようやく合格をしたが、それを喜んでくれたのは同じ徳明会病院スタッフではなく、この林小太郎だつた。すでに定年は過ぎているが、今では正職員ではなくアルバイト

として勤務しているのであった。

「先生お変わりないですか？」

「何言つてんだ。この前来たばかりじゃないか。」

「あ、そうでしたね。ハハハハ。」

「ハハハ・・で？今日はどんな症例かね？」

「はい・・これなんです。」そう言うと修一は一回り小さなA3サイズの紺色のビジネスバックからケースを二枚手渡した。ケース一枚に標本が二枚入っている。修一は渡しながら標本に関する説明を始めた。林はケースを開けながら修一の話に耳を傾けた。

「三十一才、男性、主訴は頭痛、目のかすみ、やがて頭痛のおきる間隔が早くなり、しばらくして血痰を喀出。標本はその喀痰です。頭はCTを撮った結果、腫瘍が二つ見つかりました。」修一は昨晩からの自分の体に起きた出来事を、さも患者症例の様に説明した。「三十一かあ・・若いな。肺がんの脳転移ってところか？でも君がそのぐらいでここには来ないよな。」そう言いながら林は四枚あるうちの一枚を顕微鏡のステージに乗せた。

「はい・・とりあえず見てみてください。」

「ほほう・・・核異形が強いね。ん？・・・ん？あれ？・・・」（やっぱり・・・）修一は自分と同じところで林の手が止まったのだらうと推測した。

「やはり・・ですか？」

「うん・・・メラノーマかもしれんな・・珍しいな・・この患者皮膚には？」

「あ・・いえ・・そこまで確認は・・・」できていなかった。自分の体にそういう箇所があるのかどうか確認していなかった。そこまですで頭が回るほど冷静ではなかった。恩師に自分の病名を客観的に言われた今でさえ、恐怖を感じる顔色をごまかすのに必死だ。今見ている標本が修一のものである事など全く知らない林は淡々とコメントを続けた。

「メラノーマは進行が早い。特殊染色を施して診断を確定する必要

もあるが・・・私的にはこれで診断確定だな・・・そうか・・・三十一か・・・若いのにかわいそうだなあ・・・」

「はい・・・」林は修一に対して接眼レンズから目を離さないまま“この症例”に関してコメントを続けた。修一が持ってきた標本四枚すべてに目を通し、やがてパチリと顕微鏡の照明を落とした。

「まあ・・・こんな感じかね。学会でも発表できるかも知れんな。」
「そういうと修一が持ってきた検査結果報告書にサインした。

「今日は休みなのか？」ボールペンをぱちりと鳴らし芯を格納した。

「ええ。まあそんなところです。」

「メシでもどうだ？」

「ありがとうございます。しかし、この後この結果を病院に行って報告しなければなりませんから。」今日だけは早くここを立ち去りたい気持ちで一杯になっていた。

「うん。分かった。」そういうと林は見ていた標本をケースに戻し修一に手渡し、腰を上げた。

「先生？」修一はケースを受け取りバックへ戻しながら林に話しかけた。

「ん？何かね？」

「先生も体には気をつけてくださいね。先生がいないと、私も困ってしまいますから。」

「ははは！私は大丈夫だ。病気のほうが逃げていくよ。ありがとうございます。」

「いえ。」修一はニツコリと笑顔を見せてぺこりとお辞儀をした。二人はたわいも無い会話を交わしながら部屋の出口まで来た。

「では、先生。いつもありがとうございます。また、よろしくお願ひいたします。」

「いやいや。今度は時間を作って来なさい。たまには一杯付き合ってくれ。」

「はい。ありがとうございます。あまり飲み過ぎないように。」

「はいはい。気をつけます。」そういうと林はドアノブを捻り修一

を送り出そうとした。

「じゃあ・・・失礼します。」またぺこりと頭を下げた。

「はい。気をつけて・・・。」修一が背を向けて二、三步歩き出すのを確認してから林はドアを閉めた。窓際にタバコの火をつけたまま灰皿に乗っていたのを急に思い出し、あわてて窓際に向かい手を伸ばした。その瞬間、窓際のカラーボックスの上に置いてある灰皿を取りそこね吸殻で一杯の灰皿が床に落ちた。甲高い音と共に灰皿は真つ二つに割れた。慌てて腰を屈め灰皿を拾い上げた瞬間、さっきの標本の事が頭をよぎった。

「・・・まさかな・・・。」ポツリとつぶやくと、床に散らかった吸殻を拾い集めた。

修一はセンターの門まで来ると都会の狭い空を見上げながらゆつくりと大きく深呼吸をした。不思議と昨晚の様な恐怖心は消えていた。時間を確認しようと携帯電話を開いた。メールの着信が3件あったが、おそらくすべて甫だろうと予測するのは簡単だった。敢えてメールは確認せず時間だけを確認した。

「さてと・・・」時計は午後二時を回っている。少し長居してしまった。修一はその足でお茶の水にある中古ギターを販売している店へ向った。お昼を取るのも忘れまた電車に乗った。御茶ノ水駅に着くと修一はとぼとぼと歩き出した。東京というとはとても住もうとは思えない、修一は都会に来るたびに毎回そう思った。辺りをキョロキョロ見回しギターショップが立ち並ぶ商店街を探した。「あまりキョロキョロすんなよ！田舎ものだと思われだろ！」いつだか甫にそう言われたのを思い出し一人でプツと吹いた。別に道を下調べしたわけでも無く、ただゆつくりといろんな道を歩いて店を探した。少し細めの歩道に入ったところで店頭でギターを並べている商店街を見つけた。

「路上にギター置いてんだ・・・マスターのところでは考えられないな・・・」

都会の店は決まって敷地が狭い。ほとんどの店はギターを店の外にも展示している。いくつか店を吟味して見た。一軒アコースティックギターが数多く展示してある店を見つけ中の様子を伺いながら中に入った。

「はい・・・いらっしやい・・・。」

店員は修一の顔も見ずに、パイプ製の丸椅子に座り脚を組んで雑誌を読みながら無愛想に答えた。パンクバンドでもやっているのだから右半分は長髪、左半分はスキンヘッドに近い頭をしている。こめかみの辺りに何やらタトゥーが入っていて英語の文字が書かれているが修一にはどうでも良かった。店の中は狭い割にはいくつものギターが並んでいる。どれもこれも中古とは思えないほど手入れ、修復がされていた。その中に一本濃い茶色、というよりはほとんどこげ茶色に近い色をしたギターに修一の目が止まった。

「すいません。」修一はパンク野郎に声をかけた。

「・・・。」表の車の音がうるさいのか店員は修一の声に反応せず、ひたすら雑誌のページをめくっている。

「あの！これ見せてください。」やや大きく声を出して言うてみた。

「はえ・・・なんすかあ？」

「これ。この濃い茶色の・・・。」

パンク野郎は面倒くさそうに雑誌を丸椅子に置いて立ち上がりツカツカと靴を鳴らしながら修一に近づいてきた。脚には鋭角に尖った革靴を履いている。これで蹴られたら腹に刺さりそう、修一は思った。

「・・・はえ・・・どうぞ・・・。」

ギタースタンドからギターを持ち上げ、修一にぶつきらばうに渡した。

「これ、メーカーは何？」

「これっすかあ・・・こんなんどのメーカーでも無いっすよ・・・こっちより、あの辺の方がいいんじゃないっすか？」パンク野郎は反対側に並んでいる有名ブランドギターが並ぶ辺りを指差した。

（こいつ、爪が全部死んでるじゃないか）すべての爪に真っ黒のマニキュアが施されているのに初めて気づいた。

「いや・良いんです。ちょっと貸してください。」

「・・・どうぞ・・・」ぶっきらぼうに答えるところりと背を向けてまた丸椅子に座り雑誌をめくりだした。修一は立ったままヘッドからネック、ブリッジへと目をやり隅々まで見た。これから修復する予定のギターかと思わせるほどのおんぼろぶりだった。修一はニコッと笑った。

「すみません！これください。いくらですか？」

「まじっすか？そんな音なんか出ねっすよ？」

「いいよ。これで。音は出るよ。十分だ。」

「あんた。変な人だね。」

「ハハハ・・・そう？でもこれでいいの。いくら？」

「一万二千円。」さすがに安かった。店側は売ればラッキーぐらいの物なのかも知れない。

修一はお金を渡すとギターが包装されるのを待った。やがて狭い店の奥からパンク野郎が出てきた。

「はえ・・・どうぞ・・・あ、後・・・うち保障とかやってないんで・・・よろしく。」

「ああ。別にいいよ」何かあればマスターのところに持っていく。いちいち東京まで来たくは無い。修一はギターを手に取り店を後にした。

修一が当直明けの日から休暇を取り始めて二日後の夜、雨の携帯の音が鳴った。缶ビールを二本ほど空けているところだった。ディスプレイを見ると修一からだった。ごろりと横になっていた体を起こしてテレビのボリュームを下げて電話に出た。

「もしもし？」修一のばつ悪そうな声がぼそそと聞こえた。

「・・・お前・・・心配してたんだぞ！」

「すまん・・・」

「今どこだ？」

「帰ってきてる。自分のアパートだ。」

「電話してもでねえし・・・メールも返信ねえし・・・どこ行ってたんだ？」

「ちよつとな・・・それで・・・甫・・・俺の写真見せたのか？」

「ああ。お前には無断だったけど、昨日な、前場先生が勤務日ではないのに、気になる入院患者の画像を見せてくれて病院に来たから、ついできて言ってみてもらったよ。お前の名前は伏せておいたけど・・・」

「で？なんて？」

「腫瘍だろうけど、どこか他の臓器からの転移かもって言ってた。」

「そっか・・・さすが前場先生だな。」

「・・・医者褒めてる場合じゃねえだろう・・・」

「うん・・・実はな甫。」

「うん・・・何だ？」

「もう俺は手遅れだ。」

「なんでそう決める？分からんだろ？」

「俺さ、お前にCTとって貰った後、宿直部屋で喀血したんだ・・・」

「え！？本当かよ。」

「ああ・・・それでな・・・」修一は自分の喀出した血痰を標本にしてからの一部始終を甫に話した。甫は驚きを隠せなかった。

「メラノーマって、悪性黒色腫の事だよな。」

「ああ・・・極めて悪性だ。おそらく俺の頭はその転移だ。当然肺にも行ってる・・・」

「そんな・・・お前よく他人事みたくなえんな！」

「馬鹿！俺が怖くないとも思ってたのか！」修一は今まで我慢していた恐怖心を爆発させ、声を荒げた。甫は黙ったまま聞くしかなかった。

「俺だつて怖いさ！当たり前だろ！怖いよ！死にたくないよ！ふざけんなよ！何で俺なんだよ！」

「だよな・・・すまん・・・修一・・・」

「・・・」二人は受話器を持ったまましばらくお互い何も話さなかった。甫の部屋の目覚まし時計の秒針がかすかな音を立てて時を刻んでいた。背を向けていた扉が小さくノックされるのを聞いて甫は耳に携帯電話を当てたまま振り向いた。今の状況も関係なく部屋の扉が一方的に開けられた。

「綾部さん！仲代さんから何か・・・」大村桃子だった。静に！と言わんばかりに甫は唇に人差し指を当て眉間にしわを寄せながら桃子を見た。桃子は甫の電話の相手が仲代修一だとすぐに察した。

話は綾部から後で聞こうと、その空気を壊さぬように静に甫の右斜め向かい側に座った。

「・・・大村か？」冷静さを取り戻した修一が話し始めた。

「ああ・・・」

「すまん・・・もう切るわ・・・」

「いいよ。気を使われても気持ち悪いだけだ。」

「これから死ぬ男に気持ち悪いはねえだろ・・・」修一は小さく呟いた。

「バカかお前は・・・で・・・これからどうしたいんだ・・・？」

「やれることを・・・出来ることを・・・悔いなく・・・やって行きたい。俺らしく生きて行きたいし・・・ベッドに括り付けられるのは嫌だ・・・」

「・・・でもさ・・・修一・・・」甫はなんて言っているのか分からなかった。桃子は隣で一点をボーッと見つめながら二人の会話を聞いていた。

「俺さ・・・」甫の会話をさえぎるように修一は話し始めた。

「ん・・・なんだ？」

「この前中古の楽器屋でアコースティックギター買って来たんだ。」
「そっか・・・忘年会用か？」

「ん・まあ・そう言う訳でもないんだけどな・。片隅においてあった、なんだか誰にも買ってもらえそうにもないようなギター買ってきた。昨日マスターのところで手直ししてもらった。」

「何でまたそんなギターを買ってきたんだ？」

「なんかね・もう一度ギターとして音を鳴らされたいんじゃないかなあ・。つてさ。なんとなくそんなギター探してみたくなった。復活ってやつかな・。」

「復活・。かあ・。。」

「今からみずきの曲を練習しないと・。楽しみにしてるんだ・。彼女・。」

「彼女には状況を話してないのか？」

「うん・。最近は夜遅く電話で話が出来ることあつて・。でも、楽しそうに身の回りに起きたこといろいろ話してるのを聞いていると・。さすがにね・。俺・。そういうみずきが好きだから・。俺自身の事で曇りを作りたくないって言うか・。。」

「でも・。いいのか？一番大事な人じゃないか・。。」

「うん。話すときは俺が自分で話す。だからみんなは・。黙ってほしい。」

「うん・。・。て言うか・。話すときが無いしな・。。」

「ハハハ・。そつか。だな・。。」
「甫は頭をぼりぼり掻きながらつぶやくように言った。」

「修一、明日は仕事来れんのか？」

「おう・。・。とりあえず行くよ。」

「・。・。院長に相談してみよう。修一のこれからを・。ベッドに縛られない方法をさ。」

「うん・。・。分かった。じゃあ・。・。もう寝るよ。なんだか疲れた。」

「わかった・。・。じゃあ明日。」

「うん・。明日。」
「修一からの電話はそれで切れた。話が終わり、携帯のディスプレイを閉じるとすぐさま大村桃子が始めに問い始め

た。

「・・・ね・・・何だつて？」

「・・・うん。・・・」そう言つとしばらく俯いたが、ここで桃子に話さないわけにもいかないと一部始終を伝えた。メラノーマの名前が甫の口から出た瞬間、桃子は甫から目をそらし目を泳がせながら口を両手で多い、目にいっぱい涙を浮かべていた。

翌日、奥の顕微鏡の部屋に修一の姿があった。何とか頑張つて顕微鏡を覗いていたが、さすがに右目が利かない。時々目を顕微鏡から離し両目を硬く瞑つて目の疲れをほぐした。さすがに後輩検査技師が修一の様子がおかしいのに気づいて、後は自分がやるからと休むように促した。何とか昼休みまでこぎつけたが昼食を摂る気にもなれず、休憩室でスタッフと話す気にもなれず、顕微鏡のある机から離れることもせず、椅子に座ったままボーっと時が経つのを待つていた。そんな時、甫の呼ぶ声で我に返つた。

「修一・・・」

「おう・・・いろいろ悪かつたな。」

「おう・・・ほんとだよ・・・」

「ハハハ・・・やっぱりお前は良い奴だ！」

「何だ？お前？ハハハ・・・まあ良いや。後で院長の所いくぞ。」

「うん。分かつた。」と返事はしたが、甫がその用事で来たようではなさそうだった。甫に連れられ一人のスーツ姿の女性が部屋に入つて来ていた。彼女は修一の顔をずっと見つめている。その視線がさつきから気になって仕方なかった。

「で、修一・・・こちら」やっと甫に紹介されると、その女性は待つてましたとばかりに一歩前に歩み出て、ぺこりと修一に向つて一例した。

「こちら、うちのオーダーリングシステムの会社の方・・・お前を紹介してくれつて。」

「あ・・・そう・・・」修一は不思議そうな顔でその女性を見なが

らゆつくりと椅子から立ち上がり（ども・・・）と心で良いながらコクリと頭を下げた。

「じゃあ・・・後でな・・・」甫はそういうと右手を上げて修一の前から去った。スーツの女性はありがとうございましたと言わんばかりに去っていく甫に向って頭を下げた。一呼吸置き、さてと言うようにニコリと笑みを浮かべながら改めて修一にお辞儀をし、内ポケットから名刺入れを取り出すと一枚取り出し修一に渡した。

「私、”メディカルオープンシステム”の宇都宮礼子と言います。」

「あ・・・はあ・・・」名刺と彼女の顔を確認するとさらに付け加えた。「検査科内は・・・今のところ不具合は解消されてるので・・・特に問題は・・・ないですけど・・・」

「はい。今日は薬剤科の受発注システムの件でお伺いしました。」

「ああ・・・そうですね・・・で・・・俺に何か・・・？」

「いや・・・その・・・私・・・みずきの同級生なんです・・・」

「え！？・・・みずきって？」修一は本能的にみずきとの事を隠そうとした。

「フフフツ・・・大丈夫です。みずきから全部話は聞いてます。そこかあ・・・あなたがナカダイさん・・・」そういうと今度はにんまりと笑った。

「・・・そ、そうですね・・・あの・・・口外は無用で・・・」

「分かってます！大丈夫！私も気をつけてるんです。彼女と一緒にコンビニへ行くのだって相当気を使っし！でもそれが私も楽しくて！」

「あ・・・うん・・・そうですね・・・ハハハ・・・いや・・・何て言ったら良いのか・・・」

修一は恥ずかしげに笑った。幾分気分が解れた。

「ちよっとお茶でもしますか？何か買ってきます。」彼女は気さくで活発そうだった。話が盛り上がりでもして声が大きくなったら大変だと思い修一は礼子を廊下へと促した。検査科を出て人通りの少ない場所まで行くと礼子にここで待つようにと言って、自販機でコーヒ

ーを買い、走って彼女の元に戻った。

「ちよつと外出しましょうか？」修一はコーヒーを渡し、喫煙場では誰かがいるだろうと屋上へと誘った。修一の考えをすぐに察した礼子は「はい！」とすぐさま返事をして修一の後について歩いた。

エレベーターで最上階へ昇っている最中、彼女の顔をちらちら見ていた。修一の記憶の中に、確かに宇都宮礼子の記憶があつたのだがそれがどのシチュエーションなのか、なかなか思い出せずにいた。いつも遅く感じていたエレベーターが今回だけはやけに早く最上階まで上がったような気がした。さて屋上まで着いたのは良いが、彼女は何の話をしに着たのか、予想するのを忘れていた。修一は黙って屋上入り口まで案内し、無言で重い鉄の扉を開いた。

「まあ！すごい！いい眺め！」そこからの風景を見るなりとっさに感嘆の言葉を吐いた。会ってまだ十分も経っていないが、彼女は活発な人そうだということは容易に察することが出来た。

「で？さて、俺に何か？」不思議そうな顔と、慣れない作り笑いとして顔が引きつっていた。その顔に礼子は一瞬吹きそうになった。訳は分からないが、先にみずきから話を聞いている自分の方が修一より優位な立場にいるような気がしておかしくてならなかった。

「いえ！特に話があるとかそんなんじゃないんです！ただみずきから“ナカダイさん”っていう名前が良く出るようになったもんで、どんな人かなあって。」

「そ、そうですか・・・」修一は少しほつとしたような気持ちになった。その様子に礼子は一言問うた。

「すいません・・・別にからかいに来たとかじゃないんです。」

「あ、いえ。すいません。そうですか・・・あなたがお友達の・・・」

「みずき、私のこと何か言ってます？」

「ええ、何でも話してきて、同級生だけどおねえさんみたいな親友がいるって・・・名前は聞いてなかったけど、話した感じであなただと直感しました。きつとあなたに違いない。」

さっきの硬い表情は消えやわらかい笑顔が戻ってきた。

「そうなんだあ・・・！」ニッコリ笑ってそう答えた。屋上の見晴らしの良い場所まで来るとプラスチックで出来た白いベンチに案内し、右手でどうぞと表現した。

「ちよつと甘いかなあ。良かったら飲んでください。」さつき手渡した缶コーヒーを飲むように進めた。

「あ、はい！いただきます。」二人は礼子のいただきますの声を合図にプルトップを開けた。

「そっかあ・・・」修一は少し気を許したのか、言葉使いが緊張感のないものになっちゃった。

「はい？」礼子は修一が何か自分に言いたいことがあるのかと予想していたように感じ修一に言った。

「いえ。マネージャーさんと同じようなことをいわれるのかなあってね・・・。」

「ああ・・・辻本さん？でしたっけ？」

「宇都宮さんも会ったことあるの？」

「ええ。一般人では私が一番多く会ってるかも。みずきと三人で食事したこともあります。で？何か話したんですか？」

「うん・・・前にね。みずきは立場が普通の女の子と違いますからって・・・。それで宇都宮さんにも同じ事言われるのになって・・・ちよつと思った。」

「あ・・・そうだったんですか・・・」礼子は修一から視線をそらし遠くに見える赤城山を見ながら大きく息を吐いてまた一口缶コーヒーを啜った。

「私はその逆です！」元氣良く言葉を放った後、少し驚いた表情をしている修一を隣で感じつつ、屋上から見える山々を見渡ししながら続けた。

「私はその逆です。みずきが私に男の人の話をするのはあまりありませんでした。って言うか、タレントに成るくらいだから、高校の頃もいろんな人から声をかけられたりはしてたみたいですけど・・・」

でも・・・あの子ちょっと疎いところがあつたりして。フッフ・・・恋をしても自分で気づかなかつたりするところもあつたんです。仲代さんの話がみずきの口から出るようになって私は直ぐにみずきの心が動いてる事に気づきました。でも当のみずき本人は全く気づいて無くて。っていうかごまかしちゃうんですよね。」

「そうなんだ・・・」修一は照れくさそうに笑った。

「ええ。だから私は逆にみずきをお願いしますって言いに来たというか・・・正直みずきがどんな人を選んだのかっていう興味本位のところもありましたけど・・・へへ・・・」

そういうと礼子はぺろりと舌を出した。また一口、コーヒーを口に
して修一に話した。

「仲代さん・・・みずき今凄く楽しそうって言うか・・・いきいき
いしてるって言うか・・・私、今のみずきをずっと見ていたんです。
きつと、今の彼女にとって仲代さんが居場所なんです。だから・・・
まあ・・・いろいろ大変かと思うんですけど・・・そばにいてあげ
てください。おねがいします。」そういうと礼子はコクリと頭を下
げた。修一は照れくささと、自分が思う波野みずきに対する考えを
伝えなければという気持ちとで少し頭が混乱し瞬きが多くなった。

「あ・・・えつと・・・」何かを言おうとしてる修一に下げた頭を
戻し様子を伺った。修一はベンチから立ち上がり金網に近づきなが
ら話を始めた。

「今放映しているCM・・・知ってる？」

「え？CM？」

「ほら、化粧品の・・・」

「あ、あのファンデーションのCMですね？みずきがやってる。も
ちろん知ってます。」

「あのCMで、最後に男優さんが彼女の頬にキスをするでしょ？」

「・・・ええ・・・ですね。」

「最初の頃、自分がまさかあの波野みずきとメールしたり、電話し
たりなんて・・・思っても見なかった。」

「ええ・・・」

「その頃は、嫉妬なんて無かったんだ。画面に映る彼女の顔見て、とても信じられなくて・・・うれしいのと、素の彼女の気持ちを知ることが出来たのと・・・元気でいきいきしてる彼女が見られればいいと思っていたんだ。でも・・・。」

「でも・・・？」

「いいなあ・・・って」

「え？」

「仕事とは言え、男優さんはみずきに触れることが出来る・・・。眼差しを感じることが出来る。同じ空気が吸えて、同じ空間にいて、笑顔が見れて・・・。」

「・・・そっか・・・。」

「自分の中で、彼女に望むことがどんどん積みあがって来てしまってるって言うか・・・。そんな大した望みなんかじゃないんです。キザかも知れないけど・・・彼女の瞳の中に俺の顔が映ってくればいいんです。無理なことは分かっているんだ。最初はこんなに苦しくなかったんだ。でもね・・・宇都宮さんの話を聞いて安心しました。」

「え？」

「みずきの口から俺の話が出てるって聞いて・・・気持ちの距離から少し縮めてもいいのかなって。」

「言ったらいいですよ！」礼子は目を大きく開けて言った。

「え？」

「言ったらいいんですよ。会いたって。やきもち焼いたって。」

「でも・・・。」そういうと修一は一気に缶コーヒーを飲み干し、またベンチに座った。

「彼女の立場・・・ですか？」

「まあ・・・。」

「好きな人に思われて、いきいきしない人なんていませんよ！言ったらいいんですよ。その方がよっぽど健康的ですよ。あの子気持ち

の伝え方が下手だから・・・ハハハ。」

健康的か・・・修一は今の自分の状況を思い出した。

「でも・・・いいんです・・・。」

「え？」

「いいんです。俺はいきいき彼女が仕事できてれば・・・もうそれで・・・。」

「でも・・・。」

「いいんだ！」突然修一は強く言葉を発した。

「ごめん・・・。でも俺ほんとにいいんだ。彼女が俺を居場所と思ってくれている。それだけでいい。それに・・・。」

「それに・・・？」

「彼女の人生を俺は背負えないかも知れない。って言うか・・・背負えない・・・。」

「どう・・・いう・・・事？」不安げに修一の顔を覗き込んだ。

「時間が無いんだ・・・。」

「時間が？無い・・・？」

屋上で二人は長い沈黙の時間をどうして良いか分からずにいた。ベ
ンチで話す二人の様子を桃子と甫は後ろで黙って見守るしかなかった。

ファースト&ラストKISS

十二月十四日、忘年会の日が来た。その日、寒さは厳しいものの風も無く穏やかな一日だった。久明会病院の職員253名の職員が勤務を終えると続々と会場にやってきていた。会場は地元の結婚式場を貸しきって行われる。この結婚式場は毎年職員健診を徳明会病院に委託しており、それが縁で病院側は毎年この結婚式場で理事会や忘年会をこの結婚式場へ依頼するようになった。院長の方針で職員が座る席順はくじ引きで決められる。日ごろあまり接触することが無い職員同士が知り合え、交流を図ろうというのが狙いだった。受付で名前を告げると番号が書かれているくじを引き、その番号札のある椅子に座る。これが毎年のルールだった。

仲代修一、綾部甫達は余興でバンド演奏を行うため、舞台袖にある小部屋にいた。小部屋にはパイプ椅子が数脚と会議用のテーブルが二つおいてあるだけだった。

「今となったら、体に負担かけちまう事になっちまったな。すまんな修一・・・」

「いいよ。別に。俺だつてその頃、まさか自分がこんな体になっちまうとは思ってなかったし・・・それにこの部屋の方が俺には心地いいや。ハハハ。」

ギターを膝で抱えながら言った。もともとドンちゃん騒ぎが苦手な修一は、むしろ知った仲間が周りにいる今の小部屋のほうが居心地が良かった。甫がこれ以上気を使うのを嫌って、修一は話題をバンド演奏に変えようと思った。

「なあ？松山は？」

「今トイレ・・・」

「でも・・・時間経ちすぎじゃねえか？」

「なんだか髪型が気にいらねえらしいぞ。」

「腹でも痛いんじゃないか？あいつ前も緊張して腹痛えとか言つて

たよな？」

「大丈夫だよ、あいつは。ん．．でも分からんな．．何気に池田えりなが松山が歌うのを楽しみにしてるって話があいつ本人の耳に入ってるらしいから。」

「アハハハ．．．！ならやつぱり緊張してんだ！」

「かもな．．でも修一．．本当に大丈夫か？今」

「大丈夫だよ。もう少ししたら薬飲む。」

「そっか。」今まで笑いと涙を共にしてきた仲間が、これから死に向かつて歩いていると思うだけで甫はいたたまれずにいた。目の前の修一が消えることが想像でしにいた。人前では恐怖心を見せることの無い修一の心情はどんなものかと考えるだけでたまらなかった。

修一は宇都宮礼子と初めて会ったその当日の夜、終業してから院長の下へ向った。院長は修一から事情を聞くと、すぐさま内科医の後藤信二、皮膚科医の新山舞子、脳外科医の前場裕一郎を呼び修一も交えてカンファレンスルームでミーティングを行った。修一は治療方針に関して、電話で甫に言った事を復唱した。四人の医師はそれぞれ「んー．．．」と唸るような顔で話を聞いた。とりあえずその場では皮膚科医の新山舞子が診察をし、その結果でまた検討するということで解散になった。そのミーティングの後、新山は早速修一を皮膚科診察室へ呼び診察をした。大きさはそれほど無いが左足の踵の部分ににじむようなホクロを見つけた。修一が細胞検査士であることを承知で臨床医としての見解を述べた。

「仲代君。メラノーマには診断基準があつてね．．君の踵のこのホクロ．．今の段階でその診断基準が満たされてるの。診断基準はねABCDEまであつて．．AはAsymmetryで左右が非対称の意味、BはBorderで境界が不規則という具合にEまであるの。今の段階でそれらのすべてが満たされているの。あとはこの部分を切除して、病理検査に回してみなければならぬ。当然その段階で検査科のみんなが知ることになるけど．．．どうする

？私の大学で検査する方法もあるけど・・・。」

しかし修一は新山舞子の心配をよそに久明会院内で検査するように告げた。病理検査では“悪性黒色腫”の診断が下され、翌日のミーティングの結果、患者本人である修一の意味が尊重され、投薬治療のみを開始することにしたのだった。忘年会終了後、化学療法の予定が立てられている。四人の医師たちは、なぜ今時分の状況が緊迫しているのにこんなにも前向きなのか知る由も無かった。

やがて松山が部屋に戻ってきた。修一は部屋にある小さな洗面台で薬を飲んでいる。

「やつと決まったか？髪形。」甫がにやけた顔で言った。

「いや・髪型なんて・・・それよりも緊張しちゃって・・・腹痛くなつて。」

「ほらな！俺の言ったとおりだ。」薬を飲み終え、得意げに修一は言った。甫には修一の発するその声がいつもより細かいような感じがした。

忘年会は終盤に差し掛かった。後輩司会者から修一たちの紹介がありバンドメンバー四人は舞台に登場した。人前で弾くのはいいのだが、コピー曲の内容が若者向けの“グレイ”ということに関する恥じらいは、どうやら修一にはぬぐい去れずにいた。舞台に立つと、いつも目になっている職員たちが酔っ払っていて滑稽に見えた。ベース位置の前には大村桃子が、ボーカル位置正面には、松山蓮目的の池田えりなが陣取っていた。

「みなさん！盛り上がってますか！」緊張しながらも松山がマイクで叫んだ。その一声で自分の緊張を解きたいのかもしれない。軽く音あわせをすると、修一がAコードを鳴らし演奏が開始された。シラフで酔っ払った職員を見ながらギターを弾くのは些か滑稽だった。さつきまで緊張していた松山が髪振り乱して歌っている姿が修一には可愛くにも見えた。甫はこれが修一とやる最後の演奏なのかと良からぬと思いながらも脳裏をよぎっていた。

曲は全部で三曲演奏することになっている。二曲目を終えたところ

で、忘年会実行委員長が修一を舞台袖に呼んだ。

「仲代さん。波野さん少し遅れそうです。」

「どうかしたの？」

「いえ、只の渋滞らしいんですが……。でも忘年会終了までには間に合うということです。」

「分かった。じゃあ予定を変えよう！」

「どうします？」

「とりあえず、もう一曲演奏して一旦俺たちは舞台から降りる。本当だったら三曲目の終了時でサプライズゲストっていう予定だったろ？それを一旦仕切り直すことにしよう！」

「分かりました！」委員長はマネージャーに連絡を入れようとすぐさま控え室へと消えた。

修一はゆっくりと舞台まで戻った。たった三段の階段がとてもつらく感じた。甫が心配そうに舞台上から修一の様子を見守ってくれていることに気がつき右手を上げて合図し演奏を開始しようと促した。修一が舞台に立ち再びギターを肩から下げるのを待って三曲目の演奏が始まった。

演奏が終え修一はみずきが入る予定である控え室へ向った。コンコンとノックをして返事を待とうとしたが、中にはまだ実行委員長しかいないだろうという憶測の元、勢いよくドアを開けた。

「まだ着いて……」ない？という言葉を最後まで言い終わらない修一の口元の口角が上がった。

「ごめん！修ちゃん！間に合わなかった！」そこには、ごめんという気持ちと、やっとまた顔が見ることが出来て喜びたいという両方の顔を表現しようとしている波野みずきがいた。

「うつん。……」修一の笑顔はひたすら、ただひたすら優しかった。

「じゃあ、仲代さん。俺はプログラムの変更を司会者に伝えてきます。出番が近づいたらまた呼びに来ます。」

「うん、分かった。」修一の返事を確認して委員長は部屋の外へ出て行った。

「今晚は、仲代さん。」みずきの斜め後ろから辻本が声をかけて来た。

「辻本さん、今回はご面倒なお願い聞いていただいてありがとうございます。」

「いえいえ。それにみずきのお願いでもあるわけですし。」辻本佳織はニツコリと笑った。

「みずきちゃん、私ちよつと事務所に連絡してくるね。」そういうと手帳を開きながら部屋を後にした。

二人きりになった部屋に、二人の幸せそうな微笑が時空を独占していた。

「修ちゃん・・・。」

「うん?・・・。」

「なんか変だね。」

「うん・・・。メールとか電話では話してるのに・・・顔見るとどこから何話していいかわからなくなるね。」照れくさそうに修一は笑った。

「うん、私も同じ。でも嬉しい・・・。」

「うん・・・ねえ・・・みずき・・・。」

「ん?何・・・?」

「今日つてここ終わると・・・その後は直ぐにどこか行くの?」翌日は一般的には日曜日である。

「ううん・・・明日はオフ。一日だけけど・・・一足早いクリスマスプレゼントだって、カオさんが・・・。」

「そっか・・・。」

「ん?どした?」

「この後・・・連れて行きたい所があるんだ・・・。」

「ほんと!??どこどこ?・・・ん・・・でもいい。聞かないでおく。・えつと・・・どこかな?」

「・・・うん。・・・たわいも無い場所だけど・・・。」その時、またあの夜の感触が修一の気管支に起きた。修一は激しく咳き込んだ。心配そうにみずきが問うた。

「どうしたの？大丈夫？」咳き込む修一にみずきは覗き込みながら言った。修一は気づかれまいと咳き込みながら何とか言葉を発した。

「うん・・・ゲホゲホッ・・・！大丈夫・・・ゲホ・・・最近風邪の直りが遅くて・・・ゲホゲホ・・・。」

「そうなの・・・？大丈夫？修ちゃん・・・？」

「はあ・・・はあ・・・うん大丈夫。・・・。」

「無理しないでね。」

「うん！大丈夫！みずきの顔見れたから！ハハハ・・・ゲホゲホ。」

「ほら・・・また・・・。」みずきは自分で持ってきたペットボトルの水を修一に与えた。

「・・・うんありがと・・・。」修一は一口だけゴクリと飲んだ。

「・・・ふふふ・・・。」みずきが照れくさそうに笑っていた。

「ん？どうしたのみずき・・・ゲホ・・・。」

「うん。・・・間接キスだ・・・。」みずきは視線を修一からそらしながら小声で言った。

「・・・。。そつか・・・うん・・・っていうか、そういうこと今・・・言つなよ。」

「だって・・・いいじゃん。フフフ。」視線を修一に戻すと、みずきよりも修一の方が赤くなっていた。咳き込んだせいなのか照れているのかみずきには分からなかった。控え室の中の二人の様子とはお構いなしに無造作にドアが開けられた。

「波野さん！すいません！そろそろ出番です。仲代さんも！」

「おう！みずき・・・行こう！」

「うん！」みずきは満面の笑みで答えた。二人は暗い廊下を舞台袖まで歩いていった。舞台袖まで行くと、そこにはバンド演奏を終えたメンバーと大村桃子、池田えりなが労をねぎらうかの如く一緒にいた。そこに実行委員長に続いて修一とみずきが現れた。

「修一どこ行つて・・たん・・・あれ！！いらつしやい！」甫の視線はあつという間に修一からみずきへと移された。この場で修一と甫、桃子以外は、あのアイドル女優波野みずきが来るなんて事は聞いてなかった。松山蓮はボーカルとして歌い終えた充実感に浸っている感が一気にかき消されて、ただポカンと口を開けていた。池田えりなも同じ顔をしている。桃子はすかさずえりなに言った。

「池田さん！口！口！開いてるよ！ははは！」

「え？あつ！はい！・・・でも！だつて！」

「あはははは！」甫は事情を知らない他のメンバーの顔を見て笑わずにはいられなかった。しかし、この場で盛り上がっている訳には行かない。

「よし！じゃあ俺たちも会場席に戻ろう！じゃあみずきちゃん！お願いします。」

「あ、はい！」みずきはニコツと笑い答えた。甫はまだみずきを見ていたい松山、えりなを押し出すように会場へ続く扉から出て行った。二人きりになった舞台袖に司会者の声が響いてきた。

「では、皆さん！ここでサプライズイベントです！一旦席に戻ってください。」

宴も酣というのだろうか、会場は酔っ払った職員がビールを持って注ぎに回ったり、いろんな仮装をして盛り上がっており、席に座っている者は僅かだった。司会者が何度か同じアナウンスを繰り返し、やっと全員が席に戻るといふ具合だ。せっかく盛り上がっているのになんなんだ！という声も聞こえてきた。司会者はニンマリと笑い呼吸を整えてしゃべり始めた。

「はい。ではみなさんよろしいでしょうか？皆さん今年もお疲れ様でした。皆さんが常日頃頑張っていることは患者さんみんなが思っている事だと思います。しかし、なかなかその声を生で聞くことは出来ません。そこで、本日は皆様にお礼の気持ちを表したいと、患者様を代表してお客様がいらしてます。」

司会者のMCの間に、修一とみずきは幕はまだ開けられていない舞

台上に立っていた。修一の右手にはあの中古楽器店で買った茶色のアコースティックギターが握られていた。左横にはみずきが真っ直ぐ前を見つめニッコリと笑顔で笑っている。

「みずき……。」

「うん？何？」

「今日はありがと……。。」

「ん？どうしたの？変だよ？急に……。ウッフ。」

「いや……。別に……。ただ伝えることは伝えておかないとき。明日伝えようと思ってももしかしたら伝えられないかも知れない……。それがただのありがとでもね。」

修一は笑顔で言った。

「なんで？そんなこと……。。」

「うん？だってほら……。なかなか時間も合わないし、メールや電話だって……。普通の様には行かないジャン……。だから……。。」

「……。うん……。そうだね。でも……。。」みずきの話が終わるのも待たず司会者は会場にみずきの名前を告げた。

「ご紹介しましょう！今日のサプライズゲスト！波野みずきさんです。！」

会場は一気に盛り上がるのピークに達した。うおー！という声とキヤーっと言う声が入り混じりもはや人間の集団ではないような一種の音響のようになっていく。

「じゃ……。はじめるよ……。よろしくねみずき……。。」

「うん！」小さく答えて幕が上がるのを待った。

式場で用意したのか少し派手目の曲が流れ、二人の足元から幕が上がって行った。式場中の照明という照明がこちらに向けられている。さっきのバンド演奏の時にこんなにライトがあっただっていたかなあと修一は思った。

舞台の上には椅子が二つ並んでいた。二人は真っ直ぐ正面に歩いて行き、椅子の置いてある場所から二、三步前にたった。舞台脇からスタッフがハンドマイクを持って、中腰の格好でみずきに近寄りそ

のマイクを渡した。

「みなさん！こんばんは！波野みずきです！」同時に歓声が沸きあがる。職員は全員席を離れ舞台近くまで集まってきた。その集団に混じることなく甫と桃子は部屋の隅で二人を見守っている。

「その節は、本当に皆さんにはお世話になりました。今日は忘年会だと聞きました、みなさんに一言と思つて来ちやいました。」みずきがしゃべるたびに歓声が起こる。隣にいる修一はその状況がおかしくてならなかった。みずきを一人残し、舞台の上にある、向つて右側の椅子に座つてギターを組んだ足の太ももに乗せてスタンバイをしていた。

「私、最近ドラマとか映画とかで皆さんのところにお邪魔していますが、実はCDも何枚か出しています。」という言葉と同時に、酔った男性職員の声で「知ってるー！」「持つてるー！」の声がかけられた。直ぐにみずきが反応した。

「あ！うれしいです。ありがとうございます。」につこり満面の笑みを浮かべるみずき。

「で、今日は一番新しい曲つて思つたんですが、マネージャーさんやここにいる仲代さんと相談して、少し前に出させていただいた曲にしようと思いました。それじゃ、聞いてください。」みずきはそういうと左側の椅子に座つて目で修一に合図した。修一は優しく弦にピックをあてて演奏を開始した。酔っている会場の職員は、さっきのざわめきは嘘の様に静まり返った。八章節の前奏の後、みずきの声が会場を青い泉を持つ森林かのように空間を変えた。また会える、きつとまた会える・・・あなたが発する一声が、笑顔一つが私に大きな力を与えてくれる・・・まさにお礼にはぴったりの曲だともずきは歌いながら感じていた。甫と桃子は遠くで暖かい空気につつまれた二人を見ていた。何とか修一の運命を変えてあげたい、二人の思いは涙となって現れた。事情を知る医師四人も舞台には近寄れず片隅で水割りの氷をならしている。やがて院長は静に会場を後にした。本来五分弱の曲だったが、修一のアレンジで八分近くの曲

になっていた。二人の曲は優しい空間をその場に残すように静かに終わった。職員はスタンディングオベーションでみずきに鳴り止まぬ拍手を送った。みなさんこれからも頑張ってくださいという励ましの言葉を残して、職員全員に視線を合わせるつもりで手を振って幕が下がるのを待った。残り一メートル、五十センチ、十センチと幕は下がっていった。幕が下がるぎりぎりまでみずきは手を振る。女性看護師の中には涙を流すものもいた。忘年会は大成功に終わった。

忘年会終了後、みずきと修一は控え室にいた。部屋にはマネージヤーの辻本と忘年会終了後間もない甫、桃子がまだ盛り上がりが沈まぬままだった。

「すげーな！修一。いつあんなアレンジ考え付いたんだ？」

「いや、いろんな曲聞くとこんな感じだったらどうかあとかいろいろ考えるの好きなんだ。さっきの曲はもともとポップな曲だけど、温かみを出すにはアコースティックがいいんかんあと思ってるね。」

「なるほどね。」大村桃子は大きく頷いた。

「お前結構ロマンチストなんだよな？坊主頭のわりに。」

「うるさいよ。甫に言われたくねえな！ハハハ・ゲホゲホゲホ・・。」

「仲代さん大丈夫？」とつさに桃子が声をかける。

「ハハハ。大丈夫。甫が余計なこと言うからだ！ハハハ！」

「すまんすまん！」三人の会話をみずきはニコニコを笑いながら聞いていた。

「さてと・・。」会話の空気を読まずに辻本が歩み寄りながら割って入ってきた。

「みずきちゃん。今日はこの近くのホテルに部屋を取ってあるの。」

「え・・・？あ・・・うん・・。」

「私は先に行ってるから・・・後からここのホテルに来てね・・。」

「え？」みずきは不思議そうな顔をした。

「この場で今日はオフにします。」辻本は開いていた手帳を閉じながら言った。

「え？いいの？カオさん！」

「何度も言わせないの！その代わりいつも通り気をつけてね。」

「うん！分かった！」横で二人の会話を聞いていた修一は辻本の氣遣いに暖かさを感じた。

「じゃあ！私は先に行ってるね！仲代さん、後よろしくお願いします。」

「あ、本当に今日はありがとうございました。」椅子から立ち上がる修一と同時に、甫、桃子も椅子を立ちぺこりと頭を下げた。辻本は手を振りながら扉の開けて姿を消した。

「んじゃ俺たちもそろそろ！」わざとらしいとも取れる甫の一言に桃子も部屋を出る準備をした。あまりにも不自然な二人に修一が声をかけた。

「なんだよ。まだいいじゃん。」

「おう・・・別にお前に気を使ってるわけじゃないさあ・・・ハハハ・・・ちよつと行きたい所あつてな・・・」修一はそういう甫をきよんとした顔で見ている。

「・・・あ・・・そう・・・変なの・・・まあいいや。お疲れさん。」

不思議そうな顔のまま甫、桃子に挨拶をした。

「じゃあ！みずきちゃん！またね！って私、アイドルに声かけてる！ハハハ！」桃子は賑やかに笑った。

「はいはい、分かったから！じゃあね！お疲れさん！」修一は笑いながら二人を見送った。なにやら二人は慌てて出て行くようにも感じた。二人がいなくなると部屋の中には“もう二人”の修一とみずきが残った。

「ね。修ちゃん。連れて行きたい所ってどこ？」

「あ！うん！じゃあ行こうか！・・・でもどうしよう？。」

「え？どしたの？修ちゃん」

「そのままだと・・・」

「え？」

「そのままだと“波野みずき”がバレバレだよね？」

「フッフ・大丈夫。ちょっと待ってて！」そういうとみずきは控え室の中にあるクローゼットの中に大きなバックを持って消えていった。クローゼットの中でこそそこそ小さな物音が聞こえてきた。みずきは二、三分で出てきた。

「じゃーん！」そういうと着替えた服を両手を開きくりと回りながら修一に見せた。

「これ！私の変装セット！」無邪気に笑って“変装セット”という服装とだてめがねを見てなるほどこれなら分らない、という思いと同時に、なにやらその雰囲気記憶があるような気がしてならなかった。まあ考えるのは後にしようと思速会場を出て修一の車で“連れて行きたい場所”へ向った。二人は会場を出て、車を国道293号線に乗せて走り出した。

「ねえ・・・」

「ん？何？」

「今日は初めてづくしだね。修ちゃんのギターで私が歌って、綾部さんや大村さんと楽しく話して、今だって初めて修ちゃんの車に乗って、ドライブして・・・。」

「うん・・・でもごめんね・・・。」

「え？何が？」

「なんか慌ただしい奴らでさ・・・ハハハ・・・」

「ううん。全然！って言うか・・・私の仕事の事とかは全く気にしないで接してくれるし・・・何だかすごく居心地が良いっていうか・・・。」

「うん。でももうみずきもその一員だよ。」

「え？」

「うん。俺たちの仲間の一員だよ。」

「ほんと！？」

「当たり前じゃん！」

「うれしい！なんか凄くうれしい！」

「ハハハ、そんなに喜んでくれんの？」

「だってさ・・・いつも修ちゃんの下りにいる人たちでしょ？」

「うん・・・そうだな・・・。」

「だからうれしいの・・・。」

「そっか・・・。」

車を走らせて二十分、車は足利市内に入った。市役所脇の小道を抜けて小さな丘へと進んでいった。だんだん道は細くなり道脇にある木々の枝が車のガラスに触れるくらいにまでなってきた。くねくね道を二、三分走らせようやくたどりついた。

「修ちゃん、ここどこ？」

「織姫山だよ。」そういうと修一は車を止めサイドブレーキを引いた。二人は車から降りた。普段は、今停めてある場所で最高地になるが、さらに古墳状の丘がある。そこからは狭い歩道で急な坂になっている。

「みずき。ちよつと頑張つてね。」

「うん。」みずきが返事をする、修一は右手を差し出した。一瞬戸惑いながらもみずきは左手を差し出した。初めて感じるお互いの手のぬくもりに二人の鼓動は熱くなった。二人は少しだけ息を切らせて頂上まで登った。

「うわー！すごい綺麗！！」

丘の下には宝石のような夜景が広がっていた。頭上には満天の星空が二人を照らし、オリオン座が二人を見守っている。

「俺のお気に入り場所なんだ・・・。」

「すごい！私知らなかった！こんな場所あるの。」

「俺いつも忘れたい事とか、つらい事とかあるといつもここに来るんだ。夏にね、この辺りで花火大会があるんだけど、ここから見ると、夜景と星と花火でとてもきれいなんだ。」

「へー・・・なんか私、今日は幸せがいっぱいって感じ・・・」

「そっか・・・良かった・・・座ろっつか・・・」二人は丘の上に腰を

降ろした。

「みずき、ごめん……。俺の左側に座ってくれないかな？」

「ん？いいよ。そつか……。左側が良いんだ？ふーん……。」

まさか、右目が見えないとは言えない。みずきの言いなりに話を進めるしかない。

「うん……。まあ……。」

「ね？修ちゃん……？」

「ん？何？」

「修ちゃんの左側って……。今まで何人の人が歩いてきた？」

「ん……。どうだろ……。？」

「そつか……。」

「……。気になるのか？」

「ううん……。別にいい。」みずきは天を仰いだ。

「いいよ。別に。今この瞬間、隣に修ちゃんがいるし。」

「あの夜以来だな……。」修一は話を切り返した。みずきは視線を星空から修一へ移した。

「ん？」

「みずきが入院して、退屈で病院探検したじゃん？あの夜以来こうやって話すことも無かったし……。」

「うん……。そだね。なんかそんな時間経ってないのに……。なんか懐かしく感じる……。なんでだろ……。」

「綺麗なんだよ。」

「え？」

「その思い出が綺麗なんだよ。俺もそう感じる……。なんか懐かしいって言うか。いい思い出だからあの時のみずきの横顔を思い出すと、愛おしいとの、切ないのと、うれしいのと……。なんかいろんな感情が湧いて来て……。」

「ね……。修ちゃん……。腕組んでもいい？」

「あ……。うん！いいよ……。」

「うん……。」みずきは照れくさそうに修一の左腕にしがみつくと

うに両手で腕を組み、二の腕辺りに、おでこをちょこんとつけた。

「どんなにいい思い出でも、お互い憎みあう様な終わり方をすればその思い出を忘れたくなる。思い出したくなくなる。」修一は星空を見上げながら語り続けた。みずきはおでこを付けたまま目を閉じて修一に話かけた。

「修ちゃん・・・？」

「いつも私・・・メールとか電話では言えないんだけど・・・。」

「ん？どした？」

「たまにね・・・今の場所全部捨てて、修ちゃんのところへ駆け出したくなるの・・・いても立ってもいられなくなる時があつて・・・。」

「・・・。」修一は下唇をかみ締めながら黙って聞いていた。

「私は・・・修ちゃんを思い出にしたい・・・。」

「うん・・・それは俺も同じだよ・・・。」修一は胸を締め付けられる思いだった。丘の上には冷たい風が吹き始めていたが修一の胸は熱く、痛かった。

「大丈夫。思い出なんかにはしないし・・・なつたとしても・・・みずきの胸の中には綺麗な物として残せるようにするよ。俺を信じて。ね？」

「うん。でも・・・。」

「ん？でも？」

「綺麗でも・・・やっぱり思い出にはしたくないよ。ずっと一緒にいたいよ。」

「うん・・・ずっと一緒だよ。俺はみずきの元を離れることはないよ。例え・・・死んだって・・・。」

「え・・・？」

「ううん・・・なんでもない。だから・・・ずっと一緒にいるから、俺の力をみずき自信の力に変えて欲しい。いろんなところで笑顔を見せて欲しい。つまらない心配とかしないで頑張って欲しいんだ。」

「うん。．．．でも修ちゃんは．．．平気なの？」

「ん？」

「修ちゃんは、私に会いたくなってたまらなくなったりとか．．．思ったこと無いの．．．？」

その瞬間宇都宮礼子と屋上で会話した中での彼女の言葉が脳裏を過ぎった。しかし、みずきの仕事の今後を考えると、言葉を選ぶしかなかった。

「あるよ。当たり前じゃん．．．つらい時だってある。でもその苦しみはみずきも同じじゃん？そう思わなかったら．．．つらいだけになっちゃうもん。」

「そつか．．．うん．．．そだね。やっぱり八つも違つと．．．さすがに大人だね。フッフ。」

「あ！今おやじ扱いしたろ！？」

「してないよ！フッフ．．．言われて今思ったけど！」

「うそだあ！今おやじつて思った！だろ？ハハハハ．．．」

「．．．修ちゃん．．．．．」

「何？」

「末永くよろしく．．．」そう言つとみずきは修一の左肩に頬を付けた。

「こちらこそ．．．」修一はうつむき加減に左肩に乗ったみずきの頬を右手でやさしく覆った。少しづつ少しづつ距離を縮め二人の唇が重なった。その瞬間、みずきのコートの肩辺りにについているこげ茶色の汚れが、自分のつけたものだと思つた。修一の見えない右目の目尻から一滴の涙がこぼれた。修一はみずきが壊れないようにそつと抱き締めた。

ジレンマ

忘年会終了後、綾部甫と大村桃子はホテルに向かう辻本佳織を追いかけて急いで忘年会会場を後にした。会場外に出ると辻本は会場へ向うタクシーに乗るところだった。

「すみません！辻本さん！」甫は大声で呼び止めた。辻本はハツとしてタクシーの後部座席に乗りかけた右足を止め、後ろを振り返った。明らかに自分呼びとめようと走ってくる二人が目に入り右足をアスファルトに戻した。

「あら？どうしたの？」二人に呼び止められる用事があつただろうかとキョトンとしていた。

「ハア、ハア・・・すみません。ちょっとお話が・・・ここでは何なので場所を変えたいんですが・・・。」息を切らせながら甫が言った。とは言つても辻本のところには大村桃子の方が先にたどり着いた。相変わらずこいつは俺より足が速いと思いながら辻本に話した。

「ん？あ・・・そうですか・・・。じゃあ・・・どうします？」

「このままタクシーに乗りましょう。辻本さんが止まるホテルのラウンジかどこかでお話しましょう。」

「分かったわ。じゃあそうしましょう。」辻本の下承を経て二人もタクシーに乗りホテルへ向った。(一体なんだろう)という辻本の疑問と共にタクシーは走り出した。辻本はタクシーの中で一体どうしたのかと問いかけてみるが、二人はホテルに着いてからきちんと話したいと、タクシーの中で答えようとはしなかった。

ホテルに着くと辻本は荷物をタクシーから降ろし二人を連れてホテルに入った。着いたホテルは病院から十分ほど離れたビジネスホテルだった。甫は正直巨大な芸能プロダクションのトップアイドル女優がここに止まるのかと少々驚いていた。じっくり聞かなければいけない様な気がした辻本はチェックインを済ませ、荷物を置いて

来るからと二人をロビーで待つように告げた。二人は言われたようにロビーで待つことにした。エレベーターに乗って辻本が上階へ上がってから降りてくるのに十分はかからなかった。

チャームと同時にドアが開き、中から辻本が出てきた。服装は何も変わっては無く、本当に荷物を置いてきただけなんだと桃子は思った。

「ごめんなさい。お待たせ。じゃあそこで話しましょうか？」辻本が指差す先にはコーヒーラウンジがあった。

「はい。そうしましょう。」甫は桃子を連れてラウンジへと向った。ラウンジへ向うと辻本はコーヒーを、甫、桃子はアルコールの飲んだ後にコーヒーは注文できず、アイスウーロン茶を注文した。時間も遅いため客は三人以外誰もいなかった。

「で・・・？何でしょ？お話って・・・」改めて辻本が切り出した。甫は伝えなきゃいけないことがあるのは分かっているが、これから自分が話すことに関して、辻本がどんなリアクションを取るのか想像できず、第一声に困った。

「え・・・あの・・・」困っているところにコーヒーとアイスウーロン茶が運ばれてきた。甫は間合いが取れたと感謝し、ウェイターが飲み物をテーブルに置き立ち去るまで待った。氷の音を残してウェイターが去った。

「実は修一の事なんですが・・・」桃子はそう切り出した甫の隣で、辻本の様子を見守った。

「仲代さん？」

「はい・・・。」

「仲代さんが・・・どうしたの？」

「・・・。」甫は口ごもったが、数秒後覚悟を決めて着実な口調で話し始めた。

「辻本さん、修一はもう先が長くありません。」

「え？・・・どういうこと？」辻本は甫が何を話そうとしているのか掴めず聞きなおした。

「長くないって・・・？どういうこと？」

「数カ月後、あいつは・・・。」死ぬという言葉は使いたくなかった。甫自身、修一の死が近いことをまだ受け止められているわけではなかった。しかし、伝えるには話すしかなく小さな声で言った。

「数カ月後・・・あいつは・・・この世からいなくなります。」

「・・・え？・・・。」ようやく辻本は二人が話したいという部分の核心を理解した。

「彼は、手遅れの病気を抱えています。間違いなく、俺たちの前からいなくなってしまうんです。」

「え、そんな。どうして・・・どうしてなの。・・・その事・・・彼自身は・・・？」

「当然知ってます。あいつ自身が自分の目で確認して、あいつ自身が俺たちに伝えてきました。」

「そんな・・・。」

「・・・間違えないそうです。今、うちの医師四人が治療している最中ですが・・・あいつ自身がベッドに寝たまま死んで行くのは嫌だと言って・・・薬だけで対応していますが・・・」

時期に寝たきりになるのは間違いないんです。」

「ごめん・・・ちよつと・・・私混乱してるわ・・・だって今日もあんなに・・・。」

「ええ・・・みずきちゃんの前だし・・・結構無理してると思います。・・・あいつ腫瘍の一部が視神経を圧迫していて右目がかすんでるはずです。」

続けて甫は今までの一部始終を辻本に話して聞かせた。

「そうですか・・・みずきはそこ・・・。」

「知りません・・・修一はまだ話をしていないようです。彼女が仕事で笑顔を作り難い状況を作りたくないようで・・・俺たちにも何も話してくれるなと釘を刺しました。」

辻本の脳裏には以前修一と自分との間で交わされた電話での会話が過ぎっていた。自分が仲代修一を苦しめているようで、胸になんと

も言えぬ痛みが広がっていた。

「・・・私・・・前に仲代さんとみずきとの交際について・・・意地悪な小姑みたいな事を言っちゃしまったことがあって・・・。そして彼・・・絶対みずきのマイナスになるような事はしないからって・・・もし、いけない事があれば言ってくれて・・・そう私と話したことがあって・・・ああ・・・私、どうしょ・・・。」

「いえ、そんなことあいつは気にしてません。それに、辻本さんが釘を刺さなくなっちゃってあいつはみずきちゃんを駄目にはしれないと思います。」

「ええ・・・話した後、少し後悔したんです。」

「・・・あいつはそういう奴なんです・・・自分の事より、今、自分が大事にしている人を一番に考えてしまっんです。不器用なんです・・・極端に人に振り回されてしまう事もあったし・・・ホント・・・バカで・・・。」甫の顔に優しい笑みが浮かんでいた。桃子はハンカチをもっておらず、テーブルの上においてあったティッシュボックスから一枚取り出し、涙を拭っていた。甫は少し間合いと取って辻本に話を続けた。

「で・・・辻本さんにお願いが・・・。」

「・・・何か私に出来ることが・・・ある・・・？言ってください・・・。」明日・・・みずきちゃんの予定は？」

「ううん。何もないわ。クリスマスに仕事が入っているから・・・今日仲代さんにも会える訳だし、一足早しクリスマスプレゼントっていうことでオフにしてあるの。夕方私が桐生駅に迎えに行くことになってるの。」

「・・・良かった・・・なんだ・・・そうか・・・ハハハ・・・。」

「ん？それだけ？」

「え？あ・・・はい。二人の時間がなかなか持てないみたいだし・・・少しで良いから何か時間を取ってもらえればって思ってたんです・・・。」

「ああ・・・そうですか・・・。大丈夫。明日は完璧オフです。」

その言葉に、少しほつとして二人は俯きながら小さく笑顔を作った。話が一区切りついたのを見計らったように、甫が着ているピーコートのポケットに入っている携帯電話がなった。ディスプレイで発信者の確認をした。

「修一からです。」辻本に一言告げて電話に出た。

「もしもし？修一？どうした？」

「甫、今どこだ？」修一の質問を聞いたとたん、甫は今お前の事情を辻本に話しているとは言えない。桃子に目配せをして後で口裏を合わせるように目で訴えた。

「俺か？今大村とラーメン屋。」

「ラーメン屋？二次会行かなかったのか？」

「おう・・・なんかわいわいやってたら腹減っちゃってさ。」視線を再び桃子へと向けた。桃子は辻本に目線を送った。

「それより、なんだ？今みずきちゃんと一緒なんだろう？どこにいの？」

「ああ。いつもの場所だ。」

「そっか。お前、運転大丈夫なのか？」

「ああ・・・うん。まだ左目あるし。ははは・・・」

「ははは・・・じゃなくてさ。全くなあ・・・」

「うん、でも大丈夫だ。それよりさ・・・」

「なんだ？」

「明日さ、バーベキューでも行かないか？」

「へ？この寒い中？っていうか、明日はみずきちゃんは？」「そういうと甫も辻本に目をやりながら次に修一が発する言葉を予測した。

「うん！明日オフなんだって。」思った通りの答えだった。

「なら、せっかく二人でデートできるんだろ？」

「うん・・・でもさ。一度みんなとどこかへ行くのもいいかなってさ。みずきも行きたいって言ってるし。」

「そっか・・・んじゃ、いいよ。行くよ。ああ・・・良い事思いついた。」

「ん？なんだ？」

「内緒！明日分かるよ！へへへ・・・お前よりみずきちゃんがびつくりするかもよ。」

「ん？ん？なんだ？」

「だから明日だ！」

「分かった。んじゃ明日・・・えつと集合は・・・」

「集合場所はみずきちゃんの止まってるホテル前で良いだろ？」

「うん！サンキュー。みずきもその方が助かるし。悪いな。」

「いやいや！場所はいつものところでいいな？」

「おう・・・あの・・・あそこだろ？」

修一、甫が企画するバーベキューはいつも決まった場所になっていた。技師学生だった頃、おんなつ気の無い二人で行くあての無いドライブに出かけた際、鹿沼市から日光に向う間に通る栗野町の河川敷で、小さな七輪と少しの炭と食料を持ち出し肉やら魚やらを焼いて食べた。その頃二人の間ではそんな遊びが流行っていた。学生の年代ともなれば男は女の尻を追いかけて飲み会だ遊園地だと騒いでいる所だったが、二人にはこのトムソーヤ風な遊びがあっていた。車には必ず七輪と、炭、小さな鉄板、それにタバコとコーヒーがあれば十分だった。行く先々で場所を見つけては車からこれらの道具を車から取り出しトムソーヤごっこに明け暮れていた。二人の会話の間に大村桃子が是非とも話したいことがある風に、電話を代わるとジエスチャーで甫に訴えた。

「すまん修一、大村に代わるな。」

「おう。」

「もしもし、明日、薬忘れないでね？」

「ああ・・・うん。分かった。」

「ハ―イ！じゃあね。綾部さんに代わるね。」

「んじゃ修一、明日お前を迎えに行つてからみずきちゃんのホテルに行くことにしよう。」

「よし。分かった。んじゃ明日。」修一は何かに安堵した様子で電

話を切った。話を俯きながら聞いていた辻本佳織は右手に持っていたコーヒークップをテーブルに置き、甫を見て言った。

「来月からみずきは・・海外でのロケをすることになってるの・・・」
「申し訳なさそうに甫に話した。」

「・・・・どのくらいですか・・・？」

「二ヶ月・・・再来年の一月に封切を予定している映画なの・・・。」

「海外って？どこですか？」両手を膝に置きながら、改まって桃子が聞いた。

「韓国。この前撮影した映画で、あ、みんなでエキストラに参加してくれてた映画でね、監督が、今度韓国のラブストーリーの映画に波野みずきを参加させたいって話があつて・・・。」

「あの日本語の旨い韓国人の監督ですね？」さっきまで修一と話したまま開きっぱなしだった携帯のディスプレイを閉じ、ポケットにしまいながら会話に答えた。

「そう・・あの監督、母親が日本人だからね・・・。」

「そうですか・・・・。でも・・二ヶ月か・・・・。長いですね・・・。」

「・・・・・。」三人は沈黙したままだった。三人の雰囲気など察することも無くウエイトレスが辻本に近寄ってきた。コーヒーのお代わりを勧めに来たのだ。アイスウーロン茶を飲み終えていた二人は、辻本のお代わりのついでにコーヒーを追加注文した。他に客のいないラウンジでコーヒーが運ばれてくるのに時間はかからなかった。三人はそれを察しコーヒーが届くまで話をするのを止めた。お待ちどう様でしたと運ばれてきたコーヒーに一杯目には入れなかった砂糖を入れながら辻本が切り出した。

「やっぱり・・・みずきに話した方が・・・。」細い声で言った。

辻本の顔を見て甫はゆっくりと首を振った。

「修一の意志ですから・・・。」甫はそういうとコーヒーを手に取った。その後、話の内容がはっきりしないまま、三人は暫くラウン

ジに佇んだ。

翌朝、修一のアパートの前に一台の四駆が止まった。修一はエンジン音に気づき彼らが部屋に迎えに来る前に自分から荷物をまとめドアを開けて表に出た。階段を下りる脚に力が無いように感じた。幾分ふらふらする。手すりを伝わりながら降りてくる修一に近寄ろうと甫が階段途中まで歩み寄った。

「オッス！大丈夫か修一？」

「おう・・・ちとふらふらする。最近朝はちょっとな・・・」
「頭痛は？」

「うん昨日帰ってきてから少し痛くなつて・・・でも大丈夫。まだ薬が効くみたいだ。飲んだら治まったよ。」

「大丈夫なのか？本当に？」

「駄目でも行きたいんだ・・・」

「うん・・・よし！今日は楽しくやろうぜ！」

「おう！」

階段を下りながら笑って会話する二人の様子を見て桃子は少し安堵した。やがて二人は車に近づき、甫は運転席へ座った。修一も後部座席に座ろうとドアを開けると、中にいた人物に呆気をとられ暫くドアを開けたまま驚いていた。

「あれー！」数秒目を大きく開けていた目が、今度は目じりにしわがよるほどの笑顔に変わった。

「仲代さん！ご無沙汰してます。」いつもはスーツ姿の宇都宮礼子がそこにいた。

「なるほど！こりやみずきも驚くな。」そついうと後部座席を座りドアを閉めた。

「だろ？」半身だけ運転席から後ろに体を反転させ甫はにやりと笑った。

「でも、どうやって連絡つけたんだ？」まだ笑顔が消えないまま修一は甫に問うた。

「だって彼女、うちのシステムのSEだろ？俺だって名刺ぐらい貰ってるっていうの！昨日彼女の会社に連絡入れてみたんだ。」

「えっ？だってあんなに夜遅くに？」

「ええ。うちの会社は一人会社に宿直を置くことになってて・・・」
「そうそう！んでさ、どうせ宿直の人に聞いても個人情報なんか教えてくれるわけないだろ。だから、またシステムトラブル起きたから担当の宇都宮さんに連絡してくれ！ってちよつといたずらしたんだ。ははは。」

「凄いやね！この人。立派な詐欺師だ。」助手席でみんなにガムを配ろうと封を開けながら大村桃子が冷やかした。

「それで私が綾部さんに連絡を入れて今日の企画を聞いたんです。」

「いや？びっくりした。みずきの前に俺がびっくりした。」

「ははは。俺をなめるな！よし、んじゃ次の餌食の元に向うとするか。」シフトをドライブに入れ車を走らせた。

「っていうかさ、今日はそういう企画じゃねえつつの！ゲホゲホ・ゲ・ゲホ。」

修一が幾分咳き込んだ。

「ほら。綾部さんがくだらないこと言うから！仲代さん大丈夫？」

「ゲホ・うん・ゲホ・大村の言うとおりだ・ゲホ。これは甫のせいだ。ハハハ。」

正直修一は辛かった。いつまで自分の力で歩いたり、呼吸したり出来るのだろう。一人になるとそんなことばかり考えるようになってしまった。みんなと居ることでの不安は少しでも癒され、生きている実感を味わうことが出来た。

次の“エジキ”がいるホテル前に着いた。いつもの変装用のファッションではないみずきが辻本と一緒に待っていた。甫は二人の前に車を停めた。後部座席で修一は礼子に頭を屈めるようにジェスチャーで表現した。そして今度は修一だけが車を降りてみずきの元に向った。

「おはよう！眠れた？」

「うん。ぐっすり。寝坊しそうになった。ハハハ！」みずきはこれ以上目じりが下がらないくらいに目を細めて笑った。

「だって、みずき目覚ましかけ忘れて・・・よかったわ。私が目覚ましかけといて。」辻本が妹でも見るかのようにみずきを見ながら言った。

「ハハ！そうだったんだ。」修一は胸に一瞬痛みを感じたがこらえた。

「仲代さん。みずきなんだけど、今日八時に事務所に戻らないといけなくなつて・・・だから、四時ごろ事務所の車でみんなのいる場所に向うね。みずきを迎えに。」みずきを迎えに・・・か・・・修一は思った。

「そうですか。分かりました。でも場所が分かりにくいと思いますので・・・つじや、こうしましょ。目印になるようなところで待ち合わせましょ。」

「そう？分かった。助かるわ。どこ？」

「今日行こうと思つている場所から少し北へ向うと古峰神社つていう神社があります。そこにしましょ。」

「分かった。ありがと。じゃあ！みずき！行つてらっしゃい！」

「うん！」

「おっと！その前に。朝一のサプライズ」そういうと修一は車の後部を指差した。みずきは、えっ？何？と言わんばかりに車を覗き込んだ。修一は目で甫に合図した。すると車の後部の幾分スモークがかつた窓が機械音と共にゆっくり下がった。

「みーずき！」

「レーーーーコーーーーー！！！」みんなが予測したとおりの驚きの表現がみずきの顔に浮かんでいた。

「えーーーー！！！！なんで？なんで？！！！！うそお！！！！ハハハハ！」

「はいはい！事情は車に乗ってから！さあ！乗った！乗った！」甫は促した。

「うん！」みずきは小走りに車を回り込んで車に乗った。こんなにうれしそうな顔を辻本は見たことが無かった。みずきの後をトボトボ・・・と言つて良いほどの足取りで修一が車に乗り込もうとしていた。辻本は後ろから修一を見守り、昨晚の雨の話を思い返していた。

（・・・仲代さん・・・ごめんね・・・）

辻本は修一の病態に心を痛めるのと同時に、こんなに楽しそうな表情のみずきに刹那ささえ抱いていた。楽しい光景なのに、辛さで目を背けたくもなつた。車に乗り込もうとするはずの修一がくると辻本の方へ振り返りニコつと笑つた。辻本は今作っている自分の表情を把握していなかった。とりあえず笑顔を作るしかなかった。

「じゃあ。辻本さん！行つてきます。それと・・・」

「ん？何？」

「・・・ありがとうございます・・・」

「・・・ん？・・・何が・・・？」辻本は少し背筋がヒヤツとするのを感じた。

「いえ・・・なんか・・・ありがとうございますって言いたかったです・・・じゃあ・・・みずきお借りします。」そういうと今度こそ車に乗り込もうとした修一を、今度は辻本が呼び止めた。

「仲代さん・・・」その声に修一は首だけを振り返らせた。

「いろいろ・・・ごめんね・・・」辻本は静かに言つた。

「・・・え？・・・何がですか？」修一はにこりと笑いながら辻本に答えた。

「うん・・・なんか、いろいろ縛り付けてるみたいで・・・」

（ううん・・・）といわんばかりに笑顔を崩さないまま首を横に振つて、そして車に乗り込んだ。修一がドアを閉めると一度のクラクションを残して五人の乗った車が辻本の前を去つていった。辻本はやつと笑顔を解くのを許された。少しばかりの脱力感が残つた。

「どうして・・・どうして、あなたはそんなに強くいられるの・・・？」

辻本は言葉をポツリ、つめたい空気の中に溶かした。

ノックアウト

五人は栃木県栗野町にある、とある河川敷に着いた。修一、甫を除く三人は、車中で専門学生時代の二人の思い出話を聞かされ、全員で二人の思いでのルートを辿るように河川敷に着くまでの小旅行を過ごした。車が着くと、ここがそうなのかと言わんばかりに女子三人は車を降りて懐かしそうに辺りを見回しながら歩き出した。あの頃と全く変わっていない風景に甫と修一はどことなく安堵した気持ちになっていた。

「へえ・・・ここかぁ・・・」大村桃子は何故か自分も懐かしい気持ちになっていた。

「ねえ！早く始めましょ！二人がしていたトムソーヤごっこ！」みずきが修一へ眼差しを送りながら、いち早く車の中の荷物を取り出そうと小走りに車に舞い戻った。

「よし！やるか！」甫も車に駆け寄って言った。

特別荷物を用意するものは無かった。強いて言えば人数の関係で、昔から二人が使っていた“七輪”では対処できず、桃子の家にあった五、六人用のバーベキューコンロに変わっているくらいだった。食料は“ここ”に来る途中にある小さなマーケットで調達してきた。五人は各々準備を始め、ワーワー、キャーキャーと子供が遠足にでも来たかの様にはしゃいだ。冬晴れの下の誰もいない河川敷。見渡す限りの自然が五人を包んでいる。炭に火が点けられ、串に刺さった肉や野菜を焼き始めた。五人の“真冬の宴”の時間はあつという間に流れていった。熱々の食材を頬張りながら自然と五人は各々のこれまでの自分の生い立ちなどについて語り合っていた。やがてそれぞれの右手は食材から、食後のコーヒーに変わっている。調理をするという役目を終えた残り火は、今度は五人を暖める暖炉と化した。話の中でもみずきの、いや、礼子とみずきのオーディションを受けてから今までの話について、他の三人はとても興味があった。

何しろ“あのアイドル”波野みずきが自ら語っているのだ。話を聞いているうち、修一はだんだん首をかしげながら、ある意味不思議そうに話を聞いている。そして、切り出した。

「あのさあ．．．」恐る恐る話し始める。

「ん？何？」「隣にいる修一を覗き込みながらコクリと首をかしげた。

「うん．．もしかして．．そのオーディション．．一緒にもう一人受けなかった．．？」

「オーディション？．．え？．．．どうして？何で分かるの？」みずきは驚いた。思わず礼子と目を丸くしていた。

「やっぱりなあ．．．なんかすごいね。いろいろ．．．本当．．．ドラマみたいだ。ここ最近のめぐり合わせ．．．」修一は幾分目を細めながら言った。

まだ、疑問が拭いきれないみずきは何で、どうしてと子供のように問うた。

「一緒に受けた子．．藤元沙羅って言わなかった？」

「そうです．．．沙羅．．．」慎重な位に礼子が答えた。

「従妹なんだ．．．って言っても小さいときだけで．．．中学辺りからあまり会った事無いんだけど．．．」

「えーっ！本当！？．．元気なの？今どこにいるの？」みずきはいくつもの質問をまた修一に浴びせた。修一はまあまあという感じでみずきをなだめ話始めた。幾分小さな声だった。

「おばさんに聞いた話じゃ．．オーディションを受けたけど駄目だった。まあそれが引き金じゃないけど語学とモデルの勉強がしたいって行って今パリに行ってるって。」

「単身でか？」甫も興味深々だ。今まで修一からそんな話は聞いたことが無い。

「うん．．．あの子は小さい頃から少し大人びたところがあってね。正月とかでみんなお年玉は大喜びして貰うもんだろ？あの子はいつもいらないうって言ってもらわなかった。何でもそうだった。不必要

なものはいらないうて・・・そんな感じで・・・その頃から大人を冷めた目で見ているところがあった。・・・そっかぁ・・・そうだよ。ね。みずきも宇都宮さんも、二人とも花山高校だものね・・・。みずきといういろ話してるようで、話してないこともあったんだね。ごめんねみずき。ああそうそう・・・。そういえばおばさんが言ってた。受験シーズンに友達同士でオーディションなんか受けてって・・・。結構おばさんは昔から沙羅のやることに關していちいち干渉すぎる所があったりしてね・・・自分の言うことが一番って・・・いつもそんな感じの人だった。沙羅はおばさんの元から離れたかったんじゃないかなあ・・・。っておふくろと話したこともあった。」

「そうだったんだ・・・。」みずきがポソリと言った。

「みずきはずっと気にしていたんです。沙羅じゃなくて自分が賞を捕って、芸能界に入って・・・沙羅はそれを受け止められないで、自分たちに何も言わずに消えたんじゃないかって・・・。」礼子はみずきの変わりに修一に心境を話した。

「うん・・・確かにそれもみずき達の前から消えた理由の一つでもあると思うよ。」

「うん・・・。」みずきは奥歯をかみ締めるようにして返事をした。

「あの子はね・・・。」修一は話を続ける。

「あの子は昔からしつかりしていたね。負けず嫌いなところがあるからね。自分が他の人とは違うって思ってるところがあってね。でもそのくせ世話好きって言うか、黙って優しい事をする事があって。あの子が中学生の頃、段ボール箱に入れられて捨てられていた子猫を一匹だけ連れてくるわけにもいかずダンボールごと子猫拾って来ちゃった事あってね。」懐かしげに修一は話した。

「何匹？」礼子がニコニコしながら聞いてきた。

「五匹。」

「うわ！五匹！」猫嫌いの太村桃子は幾分顔をしかめた。

「今でもその猫はおばさんちに居るんじゃないかな。弱そうなものには黙って直ぐ手を差し出す。そんな子だった。」

「うん・・・わかる。高校の頃は、きつと沙羅にとつては私も子猫に見えたのかも・・・。」みずきが話し始めた。

「沙羅は、私にとつては同級生だけとお姉さんみたいな所があつて・でもあのオーディションでいきなりいなくなっちゃったから・・・そしたら、何時だか雑誌で沙羅がモデルみたいなことやってるのを知つて。その時もびつくりした。」幾分みずきの顔から緊張がとれた。

「常に自分のしたことに自身を持ってないと駄目な子だから、何かをやり遂げたらまたひよつこり現れると思うよ。大丈夫だよ。」修一はニツコリとみずきに微笑みかけた。

「単身フランスかあ？高校出て間もない子がね・・・。」甫は驚いた。「うん。それがあの子のすごいところ。ピンチを力に変える。」

「ピンチがチャンスかあ・・・。」みずきはポツリと言った。

「へえ・・・世の中狭いわねえ！」桃子がおふざけ口調で間を埋めた。

「ほら出た大村桃子のばあさん口調。」すかさず甫が突っ込んだ。

「ば、ばあさん？ばあさんはひどくない？」桃子の反撃に五人は笑つた。五人の宴は楽しく流れて行つた。

「さて・・・そろそろ支度しないと。」甫が切り出した。

「そうだな・・・。」修一は答えた。

「今日は楽しかった。まさか礼子も来ると思つてなかったし、沙羅の話も聞けるとは思わなかった。」満足げなみずきの笑顔に修一は安堵した。来て良かったとみずきの笑顔が証明してくれたのを確認して合図した。

「よし！では片付け始め！撤収！」

「ラジャー！」四人の一致した返事に修一は笑った。

古峰神社に着いたのは午後四時を少し回つた頃だった。この時間に山の中にあるこの神社に参拝するものは無く、駐車場は意味も無く五人の貸しきり状態になっていた。辻本佳織が到着するまでの時間、車の中でまた自然に湧いて出た雑談に花を咲かせた。そろそろ

辻本が来るであろうと察し、みずきが提案をした。

「あの、綾部さん、大村さん・良かったらアドレス交換しませんか？」

「へ？」あっけにとられた甫が目を大きくした。修一いいのか？と言わんばかりにその目を修一に向けた。

「うん。良いんじゃないか？でもみずきに用事があるときは、まず俺を通せよ！ハハハ。」

修一は笑った。

「ばか、そんなの分かってるよ。じゃ無くてさ、辻本さんに聞かなくて良いのか？」

「そうよね。一応聞いたほうが良いんじゃない？みずきちゃん？」みずきを気遣い桃子が助手席から身を捻る形で後部座席へ振り向きながら言った。

「良いんじゃないですか？」隣にいる宇都宮礼子が割って入った。

「だって、今日だってこうしてみずき預けてきた訳だし。ルール守れば心配ないですよ。」

「うん。そう。俺もそう思う。いいんじゃない。」修一は隣にいるみずきを笑みを浮かべて見つめながらみんなに言った。

「一応の事に気をつければ。」修一は一言付け加えた。

「何だよそれ。」甫がバックミラー越しに修一に問うた。

「例えば、携帯電話落としても良いように登録名を変えとくとかさ。」

「ああ・・・なるほどね。で・・・修一・・・お前、みずきちゃんなんて登録してるんだよ。」

「へ？俺？」

「なんて登録してるんだよ？男の名前にしてたりすんのか？甫二号とか・・・」甫は幾分冷やかしか気味に言った。

「お、俺は・・・まあ・・・」

「私も聞きたい！」みずきが修一を覗き込んだ。

「私も聞きたあい！」助手席で桃子がみずきを真似るように聞いた。

「・・・ハートマーク・・・三つ・・・」

「ん？今なんて言った。」

「だから・・・ハートの絵文字三つ・・・で登録してある。」

「ハ・・・ハートマーク！？・・・ハハハ・・・修一・・・可愛い三十親父だなあ・・・」

「・・・」 「みずきが照れくさそうに笑っている。」

「なんだよ！みずきまで笑って！」 修一自身もおかしくなり笑いながらみずきに言う。

「ごめん・・・でも・・・おかしい・・・子供みたい・・・クスクス・・・」

「そうよ、ハハハ五つ星レストランじゃ無いのよ！」 桃子は誰に気兼ねするわけでもなく大声で笑っている。

「あー・・・アハハ・・・ハア・・・おかし・・・お腹痛い・・・ハハ。はいみずきちゃん、赤外線で交換しましょ！」 気の済むまで笑った桃子は早速携帯電話を赤外線受信モードにしてみずきの方へ向けた。

「あ、はい！」 早速みずきは携帯電話を用意した。こうして五人はそれぞれアドレスを交換した。

一台のスモーク貼りを施したワンボックスカーがパッシングをしながらこちらへ近づいて来た。事務所の職員らしい若い男が運転をしていて、助手席には辻本が乗っていた。辻本は小さく手を振りながら、そしてやがて車は五人の乗る車の隣に停まった。四人は車を降りてみずきを見送ることにした。

「じゃあ・・・みずき。また・・・気をつけてね。」

「うん。修ちゃん。昨日今日って楽しかった。」

「みずき。また実家帰るときに教えてね。今度は一緒に帰ろうね。」

「うん。礼子も無理しないだね。綾部さん、桃子さんも・・・サプライズありがとうございました。」

「いや・・・何・・・ハハハ・・・また集まろう！」 甫は頭を掻きながら言った。

「そうね！良いわね！今度はどこか秘密基地みたいな所探しましょうよ！隠れや見たいな所！」 企画好きの桃子が今すぐにでも隠れや

探しに行きそうな勢いで言った。

「うん！きつと楽しそう！」みずきは反応的に答えた。

「みずき、時間。」辻本の気を察したのか修一が車に乗るように促した。

「うん、じゃあ修ちゃん・・。」その言葉を聞いて甫、桃子、礼子は助手席に居る辻本にぺこりと頭を下げて、修一を残して車に戻った。僅かでも二人に会話の時間を持たせてあげようと気持ちが一致した行動だった。みずきは小さい声でも聞こえるくらいに修一に近づいた。

「修ちゃん。」

「ん。どした？」

「帰りたく無くなっちゃった。」

「・・・・・。」修一は愛おしそうに目を細めてみずきを見た。

「嘘・・ごめん。またね。」

（俺だって・・）修一は気持ちを飲み込んだ。

「うん。そうだよ。俺はどこにも行かないし。安心して仕事頑張つて。日本中がみずきを見てるし、励みにしてるんだから。もし気が病んだらいつでも連絡してね。みんなもいつでも待ってるし。」

「・・・・・うん。なんか・・変な感じ・・。」

「ん？」

「うん・・私を見てくれるのは・・修ちゃんだけでいい・・・・・みたいな。」

「・・・・・。」

「最近そんな風にも考えることがあって・・。」

「見てるよ。俺は。」

「え？」

「ブラウン管の中では見れない、みずきの心を見てる。大丈夫だよ。」

「・・・・・うん！ありがと！じゃあ・・私・・行くね。」

「うん。気をつけてね。体には気をつけて。少しでも眠れる時間が

あつたら眠るんだよ。睡眠が一番なんだからね。」

「ハハハ。」

「な、なんだよ。」

「修ちゃん、お母さんみたい。」

「ハハハ。みずきのお母さんにも何にでもなるよ！」

「ハハハ。うん、ありがと。バイバイ。」

車の中で甫と桃子はあえて二人を見ずに俯き加減に会話が終わるのを待っていた。後部座席では礼子が二人を優しく見守っている。みずきの幸せそうな笑顔に、本当にみずきは仲代修一を信頼し、恋をしていることを確信していた。思わず自分まで笑顔になっていた。やがてみずきは車に乗り込んだ。辻本は助手席の窓を開けて四人に挨拶をしてまた窓を閉めた。車は走り出し何回かハザードランプを点けながら走り去って行った。

修一は車が見えなくなるまで右手を振っていた。林の向こうに車は消えていく。修一は振っていた右手を下げ暫く呆然と立っていた。いや、立っているように見えた。やがて修一の両膝がぐくりと崩れ落ち、両腕をだらりと下げたまま胸から頭という順序で地面に叩きつけるように倒れていった。まるでノックアウトを食らって倒れこむボクサーの様だった。修一に異変が起きたのを最初に気づいたのは桃子だった。

「仲代さん！」

「修一！」

タバコに火をつけようとしていた甫は反応的に窓の外にいる全く力の無い修一の姿にタバコをくわえたまま外に飛び出して行った。

「え？・・・仲代さん・・・え？何？」事情を全く知らない礼子はただ二人について外に飛び出すしかなかった。

修一のもとに最初に到達した甫は、修一を仰向けに自分の膝の上に抱き上げ何度も呼んだ。

「おい！・・・しっかりしろ修一！・・・やっぱり無理だったかな・・・おい！修一！」

「え？・・・どういうことですか？」ただ事では無い様子と、甫の言葉から何かの事情を察し、礼子が聞いた。

「事情は後で・・・まずはコイツを何とかしないと。」

「もう呼んでる！」携帯電話を耳に当てながら桃子が甫に言った。

「もしもし！救急車をお願いします。患者は・・・」この辺りには大きな病院は無い。隣の市まで降りて応急処置をして徳明会病院に転送するしかない。救急車が到着すると事情を説明し二次救急レベルの急患を受け入れられる病院に運ぶよう依頼した。救急車に自分の携帯電話の番号を預け、後から連絡が取れるようにして救急車の後を追った。追いかける車中で桃子は徳明会病院に連絡を入れた。電話を受けた松山は驚き、直ぐに院長に連絡を入れた。

四人が久明会病院に着いたのは夜の九時だった。修一は救急外来では無く3階の個室へと直接運ばれた。一過性の脳貧血という事だったがCTを撮った結果、気管支の出血がひどく更に右肺の影が大きくなっている。脳の画像には小さな影が三つ増えていた。甫、桃子、礼子の三人は修一が病室で休むのを確認して、自販機でお茶を買いカンファレンスルームへ話の場を移した。

「礼子ちゃん、実は仲代さん・・・」甫が辻本に話したように、今度は桃子が礼子に話し出した。三人はバーベキューをしたのが少し昔のように感じた。妙な疲労感が三人の心を支配した。

「そんな・・・そんなひどい話・・・みずきも知らないなんて・・・本当にそれでいいんでしょうか・・・」

「・・・。私たちは仲代さんの意志を尊重したいと思っての・・・仲代さんが今一番つらいと思うの。何かいろいろ考えてるに違いないの。だって自分は死んでいくのに・・・みずきちゃん残して死んでいくのに・・・」

桃子は目に一杯涙を貯めていた。

「分かりました。」礼子はみずきの幸せそうな笑顔を思い返しながら、喉の奥を詰まらせて返事をした。修一の様子を確認して病院を

後にしようとまた修一の病室へと戻った。病室前に来ると、静かに入室しようとした三人は息を殺して入ろうとした。ゆつくりと引き戸を開けた。そこには三人が入ってくる様子を、目をうつすらと開けてみている修一の寝姿があつた。

「お・・気がついたか・・大丈夫か修一。」三人はベッドの近くまで歩み寄った。

「・・・・うん・・・俺どうしたんだ？」

「みずきちゃん送った後、倒れたんだ。」

「・・・・え・・・そつか・・・。俺・・・覚えてないや・・・。」

「うん・・・もうしゃべるな・・・ゆつくり休め・・・。」

「うん・・・みんな・・・ごめんね・・・。」

「ううん。気にしないでよ。」桃子が何とか笑顔を作つて答えた。

「じゃあ・・・修一、俺たちもう行くよ。礼子ちゃんも帰りがあるし。」

「宇都宮さん・・・ごめんね。何か変なことになっちゃって・・・。」

「いえ・・・。」

「あの・・・。」修一はまだ何か礼子に話したそうだった。

「はい・・・」自分に話があるとは思わず、礼子は修一を少し不思議そうに見つめた。

「うん・・・甫、少し宇都宮さんと話したいんだけど・・・。」

「うん、分かった。じゃあ俺たち受付前にいるね。礼子ちゃん、話終わったらさっきのエレベーターで一階まで来てね。」

「あ、はい。分かりました。」礼子の返事に甫は頷き桃子を連れて病室を後にした。二人が出たのを確認して改めて話し始めた。

「宇都宮さん・・・ごめんね。本当に今日は。」

「いえ・・・。」

「あの・・・。」

「はい。」

「俺たち・・・前に宇都宮さんとみずきに会ってるんです・・・一年前くらいに・・・病院に運ばれてくる途中・・・夢を見て・・・思い出しました。」

「え！・・・本当に？」

「うん。厳密に言えば・・・俺と君だけ・・・かな・・・。」

「え・・・どこで・・・？だろ・・・。」

「今年の初詣、足利のぼんな寺に行きませんでしたか？」

「はい・・・行きました。」

「そこで誰かにぶつかつたでしょ・・・？」

「あ・・・！」

礼子は修一の話したいことが頭の中で繋がった。

「・・・不思議だね・・・。」

「ほんとに・・・。」

「あの時、一緒に居たのみずきだったんでしょ？」

「はい。そうです。でもあの場で“波野みずきが居る”なんてなると大変なことになると思って・・・適当にあしらうのが先になってしまつて・・・すいませんでした。そうですか・・・仲代さんだったんですか・・・凄いですね・・・。なんかいろいろ繋がつて・・・出来すぎのドラマみたい。で・・・そのことみずきは？」

「うん。まだ知らないんだ。サプライズを残しておきたくて。」

かすれそうな声をやつとつなげて話を続けた。

「宇都宮さん・・・俺の病気の事・・・二人に聞きました？」

「・・・ええ・・・実はさつき・・・。」

「そうですか・・・。」

「・・・・・・。」

「・・・・・・。」

数秒二人は沈黙した。再び話し出したのは修一の方だった。

「宇都宮さん・・・教えて欲しいんです。」

「・・・はい・・・？」

「宇都宮さんはずっと高校の頃から・・・みずきと一緒に居たんで

しょ……。みずきはもうしたら幸せになれるのかな……。今はちよつとだけ女性のあなたにやきもちを焼いてるのかもしれない……。

「私に？」

「みずきと時間を過ごして……。考え方とか癖とか……。ずっと見てこれたあなたに……。だから教えて欲しいんです……。みずきは……。みずきが幸せになっていくには……。何が必要なんだろう……。」

「仲代さん……。」

「……。うん……。？」

「みずきは今すごく幸せだと思います。だから……。少しでも長くみずきと一緒に居てください……。今日だってあんな笑顔……。私、久しぶりに見た……。芸能界の仕事を始めてから、正直精神的に疲れているみずきしか見てなかったような気がします。」

「……。そっか……。俺でも出来ることがあるんだ……。良かった……。」

「“俺でも”じゃ無くて……。仲代さんじゃなきゃ出来ないことです……。」

「うん……。ありがと……。」かすれた声の後ろで消灯台に置いてある修一の携帯電話が鳴った。

「ごめん……。携帯取ってもいいかな……。」

「は、はい……」礼子は携帯電話を手に取り修一の枕元に置いた。修一はゆっくりと布団から左手を出し“左目”で着信を確認した。

「みずきからですか？」

「うん……。」ディスプレイから目を離さないまま小さく返事をした。メールゆっくりと目で追った。礼子はその様子を見守った。やがて修一はメールを読み終わると自身なさそうにかすれ声を発した。

「……。もう……。会えないかな……。」

「どうしたんですか？」

「来月から・・・二月・ロケで韓国へ行くんだって・・・。」
「・・・。」
「礼子は何も言えなかった。」

思い・・・そして、想い・・・

世間は正月を迎えていた。修一は病室でみずきとの始めての出会い、ばんな寺での出来事を思い返していた。

波野みずきは仲代修一の容態など何も知らされることも無くロケ地韓国へと向った。修一がバーベキュー後、久明会病院に運ばれ入院した夜、みずきから来たメールにやっとの思いで返信をした。

S u b j e c t : R e 今日はありがとう。

C o m m e n t : ... そつかあ・・・二ヶ月韓国かあ・・・。じやあまた暫く会えなくなっちゃうね。だから帰りに我がまま言いたくなつたのかな？（笑）。みずき。みずきが帰る時にも言つたけど、俺はどこにも行かないし、みずきが不安がる種なんて何もないよ。だから安心して仕事しておいで。たった二ヶ月だし、メールならネットでもできるしね。俺も仕事、頑張るし！

病床に着きながら、たった数行のメールを十五分もかけて指を動かした。その後、いつもの通りメールのやり取りは行われていたが、毎回の返信が、二通に一回、三通に一回と修一の返信は遅れがちになった。自分の様態を知られまいと、それでも修一は必死にメールを返す。返信の回数に、みずきは少し不満を漏らし始める。修一は当直や残業が重なり最近疲れていると言つてごまかしたりもした。お互いを求めても、お互いの時間と空間は埋めることが出来ない。みずきが韓国でロケが開始された後も、仕事が終わればホテルに戻り部屋の中から修一へのメールは欠かさなかった。

コンコン・・・。

修一の病室のドアがノックされた。

「仲代さん。回診だよ。」ドアから頭だけを病室に入れ覗き込んだのは、看護師香坂幸子だった。以前波野みずきを担当した看護師だ。
「・・・あ・・・はい・・・。」

「どうだい？仲代君・・・？体調は？」香坂がドアを開け、院長が病室の中へ入ってきた。

「はい・・・特に変わりはありません・・・。」

「そう・・・食事は？」

「ええ・・・なるべく食べるようには努力してますけど・・・。」

「痛みは？」

「頭痛と・・・昨日辺りから背中が・・・痛み出してきました・・・。」

「薬・・・変えてみようか・・・？」

「・・・。」

院長は修一の一言一言の返事を身長に耳で拾い上げた。鎮痛剤が効かないようになれば、最終的に麻薬に近い薬を使うことになる。そこまで行くと自分が自分と認識できなくなってしまうのではないかと考えると、修一はたとえ激痛でも大丈夫だと返事をしてしまう。

「大丈夫です。」

「そうか・・・？」

「院長・・・。」

「ん？何だね？」

「私が入院したとき、画像ではどんな感じだったんですか？」

「ん・・・。」院長は小さく唸った。

「脳への転移は、三つから五つに増えている。肝臓にも複数個の腫瘤が認められる。肺は、出血は止まっているものの、いつまた出血するかは保障が出来ない。予測がつかない。右肺に胸水が少し溜まって来ている様だ・・・。」

「そうですか・・・。」

修一の右目は全く見えなくなっていた。

「先生……。」

「……ん？」

「散々治療を経過観察にしてくれと言っておいて、すごく勝手なんですが……。」

「何だね？」

「このまま……後一ヶ月持ちますか？」

「……ん……正直難しい……。でもこればかりは……後は君の生命力だけだ。どこで何が起きるか分からん。延命するかもしれないし、逆に……終わるかもしれん……。」

「ですよね……。分かりました……。」

院長は一通りカルテに記入すると、幾分笑顔で言った。

「じゃあ、仲代君。また午後にも顔だすな。」

「はい。」

院長が次の患者の所へ行こうと香坂を促した。

「じゃあ、仲代さん。また後でね。」

香坂幸子は小さく手を振って院長の後について病室を後にした。

二人が病室を出た後、修一はただボーっと天井を眺めていた。昼間の病院はこんなに静かなものだったのかと少し不思議に思った。

修一はずっと天井をただ見つめていた。ただみずきの笑顔を思い返していた。ふと、今日は何曜日なのかと疑問を持った。仕事もできず、痛みに耐えながらただ別ベッドの上で格闘している修一に今日が何曜日なのか知る必要が無くなっていた。鏡の横にある大きなゴシック体で数字が書かれているカレンダーに左目を向けた。

「土曜日かあ……。」

倒れた翌日、一旦はまだ回復できるであろうと思っていたが修一の勝手な憶測に過ぎなかった。検査結果を院長から告げられ、自分の予想よりはるかに病状は進行している。修一は現実を受け入れざるを得なかった。

何もすることは無く昼食の時間が来る。特に空腹感が来るわけでもない。時計は秒単位で修一にカウントダウンを告げていく。夜に

なるととてつもない恐怖感が襲ってくる。今すぐに死ぬ方法は無いが、震えが止まらなくなり声を出して泣き出したくなる。それでも毎日は昇り、また夜が来る。今、自分は何のために生きているのか分からなくなる。これから死までの間、自分には何の使命があるというのだ。こんな思いが何度も何度も頭の中で繰り返されたりする。そんな時、修一は携帯電話に残されている今までのみずきとのメールのやり取りを覗いてみたりする。自分の生を感じる唯一の方法だった。みんなで行ったバーベキューの際に撮ったみずきとの写真を見る。そこにはニツコリ微笑む修一と、右斜め下でVサインをして子供のように笑うみずきの姿がたった。みずきの存在を感じることで、一時的に恐怖感を脱することが出来たのだった。その時扉をノックする音が聞こえた。

「仲代さん。お昼もって来たよ・・・食べられそう？」香坂幸子がトレイを運び入れながら修一に問うた。

「・・・飯・・・かあ・・・」

「うん・・・無理？」

「うん。でも口には入れてみるよ・・・」

「うん。少しでもね・・・」

香坂は修一をゆっくりと起こし上げると配膳台の上にトレイを置いた。修一は細くなった指で箸を取り食べられそうな物から手をつけようとした。香坂はお茶を入れながら修一の様子を伺っていた。食べようとしているはずの修一の橋は直ぐに止まり考え込む様子があった。

「なあ・・・香坂・・・」

「うん・・・？」お茶を湯のみ茶碗に注ぎいれ、急須を置くと椅子に座り修一の話に耳を傾けた。

「俺さあ・・・やっぱりかつこ良く死ねないや・・・すげえ怖いんだ・・・。」

「うん・・・。」

「でもさ・・・。」

「うん？」

「もつと怖いのはさ．．．．」

「うん．．．何？」

「大事な人を悲しませることなんだよねえ．．．かつこつけてる訳じゃなくてさ．．．」

「うん。そんな風に思わないよ．．．」

「俺がいなくなって．．．その人はどれだけの期間悲しみに縛られていくんだろうって思うとさ．．．」

「でも．．．すっかり忘れられるのも．．．なんか．．．悲しいような気がしない？」そうは言ったものの香坂はどう話をしていいのか分からない。死に直面していない自分が、今の修一にどんな言葉をかけられるんだろうか全く分からなかった。

「いるの？そういう人．．．．」

「うん。なんかさあ．．．．」

「うん？」

「俺分からなくなっちゃって．．．．」

「今の状態も言っていないの？」

「うん．．．．」

「．．．．そうなんだ．．．．」

「うん。」

香坂は次の言葉が見つからない。暫く沈黙が続いた。

「でも．．．．」香坂が話し出す。

「うん？」

「それが、仲代さんっていうか．．．．」

「相手の事ばかりで．．．大切な人のためなら．．．自分の事は二の次って言うか．．．。仲代さんはそういう性分なんだよ。自分が居なくなつた後のことまで考えて．．．。でもその気持ちは、伝わるんじゃないかな．．．いつか．．．．」

「自分の事は．．．あんまり．．．良く分からないや．．．．」

「なんか、何が言いたいのかわからないけど．．．私に写る仲代さ

んは・・そんな感じ。」

「そっか。」

「仲代さんに好きになってももらえる人は幸せだと思うよ。今の彼女だつて、仲代さんの事好きになつて良かったって思うに違いないよきつと。」

「・・・だと・・うれしいけど・・・」一瞬声のトーンが下がった。次の瞬間、修一は激しく咳き込んだ。」

「ゲホ・・・ゲホ・・・ゲホ・・オエエ・・ゲホ・・。」

「大丈夫！？仲代さん！」香坂は背中を丸め咳き込む修一の背中を擦りながら覗き込んだ。口元を覆う修一の手の隙間から血が漏れ出していた。また咯血が起きた。香坂はすぐさまナースコールボタンを押し院長を呼ぶようにスタッフに告げた。

「・・・香坂・・。」

「喋らないで！」

「俺・・・まだ死ねないよ・・・。」

「うん・・。」

香坂は黙つて背中を擦り続けた。

話を聞きつけた院長が再び修一の部屋を訪れた。CTを撮るために修一はベッドごと放射線科へ運ぶように香坂に告げた。エレベーターで甫のいる放射線科を訪れる。

「どうした！？修一！」甫はベッドごと運ばれた修一に、覆いかぶさるようにして言った。

「へへへ・・・また・・・吐いた・・。」修一の説明を聞く前に、顎の辺りに付いた血の跡で、甫は直ぐに察し、日に日に弱っていく修一の様子に見る度に甫は切なくなった。

顔は痩せこけ、目の周りは薄黒く、胸の鎖骨は木の枝の様にはつきり浮き出ている。昨日よりも今日、一日一日の体の衰弱がこれほどまでにはつきりするものか感じざるを得なかった。綾部甫と大村桃子は、修一が入院してから一週間、毎日仕事が終わると病室を訪れていたが、体の具合と修一の心労も考えて間隔をあけて訪問するこ

とにした。二人が顔を合わせるのは三日ぶりだった。

「そつか・・・」甫は小さく返事をする、撮影の準備をしてモニター前に移動した。修一の到着から五分ほど遅れて院長と内科医の後藤信二が放射線科に現れた。撮影室の中にいる修一は、万歳の格好をしながら横になり機械に誘導されて円筒の中に入っていた。

他部署のスタッフも仲代修一が検査を受けていることを聞きつけ部屋に入ろうとしたが、甫がそれを拒んだ。興味本位で友人の体が見世物のようになるようでいたたまれなかったのだ。今修一はどんな思いで病床に臥しているのか、お前たちに何が分かる？そんな気持ちになつていた。検査は淡々と進められた。モニターには頭部から胸部、腹部と順々に修一の断面像が映し出されて行く。右肺は胸水でもはや全体が曇りがかった画像になつている。

「これでは呼吸もつらいな・・・。ん・・・この部分か。出血を起こしているのは・・・。」

出血層は小さなものだった。それが気管支に溜まってくると喀血につながるようであった。

腹部の断面像で肝臓に複数個の影が映し出された。院長と後藤は黙ってモニターを睨み付けた。

「オツカレサマデシタ」無機質なアナウンスが検査の終了を告げた。

「お疲れ。」再び甫が撮影室の中に入ってきた。

「おう・・・。」

修一は小さく元気に返事をした。病衣の袖から見える修一の腕は細かった。

「今日、おふくろさんは？」

「まだ来てない。でも、そろそろ来ると思うよ。」

「そつか。今日大村と部屋行くよ。すぐ帰るから。」

「おう。ありがとう。」

「じゃあ、ベッドに移動するぞ。」

「・・・うん・・・。」

三人がかりで、修一の体をベッドに動かす。

「じゃあ香坂。後は頼むぞ。」

「了解！」

「修一。またあとで……。」

「……おつす……。」

修一のベッドは香坂に押されて放射線科を後にした。病室に戻る途中のエレベーターの中で香坂に言った。

「……香坂……。」

「うん？気分悪い？」

「いや……大丈夫……。お願いがあるんだ。」

「何……？」

「便箋か何か無いかな？」

「レポート用紙ならナースステーションにある。」

「……それでいい……。」

「分かった。後で持っていく。」

修一がベッドに戻ると部屋には母が待っていた。

「修一、大丈夫かい？」

「ああ……。検査に行つてただけだよ。」

「今CT検査に行つてきたところです。」

香坂はこれまでの経緯を説明した。

「お昼に咳き込みがあつて、画像で確認しようということになりました。」

「そうですか……。お世話になりました。」

「いえ……。じゃあ仲代さん。後で持ってくるね。」

「うん。悪いな。」

香坂は頼まれごとを確認すると母親に一礼して病室を出て行った。

「ごはん。食べれたのかい？」

「うん……。少しね……。ってか……。あまり腹減らないし……。」

「そう……。みかんでも絞ろうか……？」

「ああ……。ありがとう……。」

欲しくはなかったが、息子に何かしてあげたいという母心をくみ取

ることにした。母は修一のベッドの横でさつさと用意をした。果物ナイフでみかんを輪切りにしている母に天井を見つめながら話しかけた。

「お袋……。」

「ん？何だい？」

「俺……あまりありがとって言ったことなかったよね……？」
「だったかね……？」

「俺さ……生まれてきて良かったよ……。」
「……。」

「お袋……。」

「何だい……？みかに……集中できないじゃないか……。」
母は涙をこらえるのに必死だった。

「俺ね……好きな人がいるんだ……。」

「……そうなの……？どんな娘？」

「うん。俺の元気の源なんだ……今度……紹介するよ。」

「そう……楽しみだわ……。」母は優しく笑った。

「でも……。」

「何？」

「孫……見せれないな……。」

「……。」

「お袋……悪いな……。」

「出来たよ……。」

「うん……ありがと……。」母はストローを修一の口へとあてがった。

修一が入院してから修一の家は正月どころでは無かった。修一が徳明会病院に運ばれた日の夜、修一の両親は大村桃子の知らせで病院へ駆けつけた。修一の意志だった。直ぐにカンファレンスルームに呼ばれ、院長から仲代修一の今の病状の説明があった。母は一瞬何を聞かされているのが分からなかった。後の瞬間大声と共に椅子から崩れ落ち泣き崩れた。父は母の肩を抱き、今一番つらいのは

修一だと言い聞かせた。その様子を大村桃子から聞いた修一は、両親にすまない思いで一杯になった。

夕食の介助終え、母は帰り支度をする。入院からずっと付き添いたいという母を、修一は家で眠る様に諭したのだった。両親の気苦労を考慮しての事だった。

「修一、じゃあ母さん行くね。また明日来るからね。何か欲しいものは無いかい？」

「うん、大丈夫。」

「じゃあ・・・行くね。」

「うん。母さん、気をつけてね。」

「うん。」

母は小さく頷き、にこりと静に笑った。そして静にドアを閉めて帰っていった。母が帰るのを確認し修一は軽く深呼吸をした。正直、母が自分の為に気持ちが悪く弱っているのを見ているのがつらかった。と、次の瞬間、消灯台の上に置いてあった携帯電話がバイブと共に鳴った。CT検査があったため、いつも枕元に置いておいた携帯電話を香坂幸子に頼んで消灯台に移動してもらっていたのだ。

「・・・」

修一はずっと携帯電話を見つめていた。少しずつ手を伸ばして携帯電話を手にとろうとした。わずかメートルの距離がこれほど遠いものかと感じた。もう少しで届きそうなき病室のドアが、小さなノック音と共に開けられた。

「おい、どうした修一？」仕事を終えてやってきた綾部甫と大村桃子だった。

「・・・あ・・・甫・・・すまん、携帯取ってくんないか？」

「おう・・・分かったから、お前動くな。」

「すまん・・・」

甫から受け取ると、ディスプレイを開いた。

「みずきちゃん？」甫の後ろから桃子が修一の具合を確認するよう

に言った。

「うん。」

修一はディスプレイを見ながら小さく答えた。修一の顔色が悪くなった。二人は静にベッドの脇にある折りたたみ椅子に静に腰を下ろした。甫は小さな声で言った。

「どした？」

「うん……。撮影……。長引いてるらしい。天気が悪くて、本来設定している場面が撮影できなかったらしい……。前からこっちは雨ばかりとか言ってたんだよね……。」

「そうか……。」

「ねえ……。仲代さん。」桃子は幾分はつきりした口調で言った。

「もう、ちゃんとみずきちゃんに話そうよ。その方がいいよ。後でみずきちゃん……。傷つくよ……。きつと。」

「……。」

修一は静にディスプレイを閉じ天井を見つめながら桃子の話を静に聞いた。

「帰って来れないのか？みずきちゃん。」

「うん……。一週間くらい延びるみたいだ。帰ってきてから三日間はオフらしい……。」

「そうか……。」甫の顔は幾分難しくなった。

「大村、俺今は言えないよ。」

「でも……。だって。」桃子はその後の言葉が出なかった。

「みずきはさ……。前に、俺の存在が励みって言ってくれたんだ。

ぱつとしないこんな俺をね……。今の状況を知らせたら、今の撮影だって……。笑顔さえ作る事だって出来なくなっちゃうかも知れない……。悲しい気持ちになっているみずきを想像したくは無いよ。」

「分かったから……。少ししゃべるな……。」甫が間に入るような形で言った。

「ごめん……。仲代さん。」修一の体を気遣い桃子が一言付け足した。

「修一？大丈夫か？」

「・・・うん。ごめんな大村。実際さ・・・俺もどうしていいのか・・・バーベキューの後、まさか二ヶ月海外とは思ってなかったし。」
「だよな・・・。」

「うん・・・。」修一は天井を見つめたままだった。

「実はさ・・・。」修一は話し始めた。

「宇都宮さんから、大村と同じこと言われててさ。この前メールで・・・。」

「そうなんだ・・・。」桃子は少しすまない気持ちになった。

「ごめんな。大村。でもありがたいと思ってるよ。」

「え・・・？どうして？」

「俺の事、みずきの事・・・。みんな心配してくれてさ。」

「・・・そんな・・・調子狂うよ・・・仲代さん・・・。」

「もう暫く・・・よろしくな。」

「バカ・・・何言ってるんだお前・・・。」答えの出ない討論会をしている中、また小さなノック音が聞こえ、静に扉が開かれた。

「仲代さん・・・ごめん・・・遅くなって・・・。」

勤務を終えて私服姿の香坂幸子が修一に頼まれたものを思っ部屋を訪れた。A4の封筒にレポート用紙とボールペンが入っている。

香坂は今自分が入っても良いタイミングなのかどうか一瞬気後れがした。

「お二人さんももうお仕事は終わっただね。」

「おう。お疲れさん。」場の雰囲気に戻そうと甫が香坂を迎えた。

「はい。これ。」

「ども。サンキュー香坂。」

細くなった腕を伸ばし香坂から封筒を受け取った。

リミット

三月四日。波野みずきはソウル市内のホテルにいた。時間は夜九時を回っていた。撮影は本日終了し、無事にクランクアップとなった。撮影は当初一週間近く遅れそうな気配を見せていたが、三日の遅れで済んだ。明日、一日だけ体を休め明後日仁川国際空港（インチョン国際空港）から成田へ飛ぶ予定である。みずきは撮影を終え、一つの大仕事をやり遂げた充実感を、また、今まで感じ得たことのない自信が備わっていた。ただ、撮影期間後半辺りから徐々に修一との連絡が途切れ途切れとなり、喧嘩をしたわけでもないのに、何か不安を抱えながらの生活を送っていた。部屋に着くとふーっと大きく息を吐きながらベージュ色のベッドに倒れこんだ。二、三度みずきの体が小さく跳ね上がった。連日、深夜までの撮影と異国人スタッフとのやり取りで、正直、心身共に疲れていた。そんな折、今日はみずきの泊まるホテルで映画関係者が集まり、打ち上げパーティーが開かれることになっている。足はパンパンに張っているし眠気もピークに来ている。「波野みずき」の最後の仕事は打ち上げパーティーまで続く。

もう一分張り……。みずきは自分に言い聞かせ少しの間目を閉じた。少しうとうとしかけたとき、部屋の電話が鳴った。電話に出るとフロント従業員が話し始める。

「It is an international telephone call for Ms Namino, you. Do you do a filler?」

（波野さん、あなたに国際電話です。おつなぎしますか？）

「Yes. I ask.」

（はい。お願いします。）

もしかしたら、修一かも知れない。きつと撮影がそろそろ終わるか、と電話をくれたのかも知れない。突然の国際電話にみずきの心拍数

は早まった。

「もしもし・・・みずき？」落ち着いた女性の声だった。

「あの・・・」

「私・・・久しぶりね・・・ごめんね。なんの連絡もしなくて・・・」

みずきはようやく声の主に気づいた。

「さ・・・沙羅・・・？」

「うん・・・。」

「沙羅・・・沙羅元気なの？今どこなの？」

「今、日本・・・昨日帰ってきた・・・。」

「そう・・・。」

「みずき・・・ごめんね。なんか・・・変な消え方しちゃって・・・。」

「そんな・・・でも良かった。元気みたいで・・・。そうそう・・・沙羅、私見たよ！沙羅がモデルで雑誌に出てるの！」

「うん。・・・ありがとう。」

「あと・・・沙羅・・・報告したいことがあって・・・実は私ね・・・。」

「うん・・・礼子に聞いた。」

「なんだ・・・そつか・・・いつ聞いたの？」

「昨日成田について礼子に電話したの・・・それで・・・。」

「あ・・・そうなんだ・・・。」

「でね・・・みずき・・・」

「うん？」

「明日、日本に帰ってきて・・・出来れば今日がいいんだけど・・・今すぐにでも・・・。」

「・・・え？・・・どうしたの？」

「うん・・・。あのね・・・。」

「うん。」みずきは少し強く受話器を耳に押し付けた。

「・・・。。。。。」

暫く沈黙がつづいた。みずきはコードを一、二回左手の人差し指に巻きつけた。

みずきが沙羅の電話を受けてから28時間が経っていた。修一の病室では緊迫した状況が続いていた。

「……とうとう……なーんも見えなく……なつた……。真っ暗だ……なんか……おっかねえよ……」

酸素マスクを曇らせながら修一がかすれるような細い声で言った。

「修一！おい！修一！ううう……」

「……甫……いたのか……」

「うん！いるぞ！俺はここに！」ひたすら修一の頭を泣きながら擦る母親の後ろで綾部甫と大村桃子が立っている。院長はしきりに処置をしようと香坂幸子に指示を出している。香坂幸子は泣きながらシリンジに薬を準備している。父親は三人の反対側で修一の手を握り、ただ修一の顔を見つめていた。

「甫……だめだ……ちよつと限界かも……ハハ……ハハ……」

「何言つてんだ……みずきちゃんも帰ってくる！彼女を泣かせてもいいのか！おい……修一！」

「だよな……最低だ俺……」

「バカ……こんなときに開き直るなよ……」

「なあ甫……」

「うん？何だ？」

「大切なものつてさ……結構身近に居るもんだぜ……よく言うよな……無くしてから初めて知るつてさ……」

「……なんだこんなときに……お前……」

「お前にはそうなつて欲しくないよ……甫……」

「うん。分かつてるよ……大丈夫だ……だからお前もさ！」

「すまん……甫……俺さ……」

「ん？何だ……？」

「お互い結婚してさ・・・そんで・・・俺の家族とさ・・・お前の家族と・・・一緒に旅行行ったりさ・・・子供の運動会行ったり・・・」
「ああ・・・そうだな・・・行こうぜ旅行でも何でも・・・」
甫は次々落ちてくる涙を拭うことはしなかった。

三月六日、午後四時十八分。みずきは息を切らせて成田空港から高速バスへ飛び乗り、特明会病院へと向った。心臓の鼓動は高鳴り、涙がとめどなく流れていた。なんで、どうしてこんなことになるのか。沙羅との会話が未だに飲み込めずにいた。高速バス終点からタクシーに乗り換えた。いつもの変装グッズで身を隠したみずきは車に乗り込むや、運転手に行き先を告げ車を飛ばすように頼んだ。
「待ち合わせか何かい？」

「いいから早く！急いでください！」

運転手と余計な世間話をしている気持ちの余裕など無かった。車は特明会病院の玄関に着いた。横付けされた車からみずきは釣りも取らずに飛び降りた入院したときのかすかな記憶だけで病室へと走る。エレベータに向ったがふさがっているのを確認するとすかさず階段方向へ走った。三階まで来るとナースステーションへと走った。看護師の一人がみずきの目的が仲代修一と気づくと

「波野さん！こっち！」

と言ってみずきを病室へと案内した。空港から止まることの無い涙で顔はびしょびしょになっていた。病室まで着くと引き戸の取っ手を握り勢いよく開けた。

「・・・・・・」中には修一の両親、藤元沙羅、綾部甫、大村桃子、看護師の香坂幸子、院長が無言でみずきに視線を送り、沙羅が部屋に入ることが出来ないみずきを向い入れた。力の無いみずきの足が一步、また一步と修一へ歩み寄って行った。

「修ちゃん・・・遅くなってごめんね・・・お土産・・・買って来たよ。雨で撮影が押しちゃって・・・ごめんね・・・」

もはや呼吸の無い修一に向つてみずきは話続けた。

「ねえ・修ちゃん・最近メール・返信遅いよ・
ごはん食べに行こ。明日から暫くおやすみだから・
言つてたジャン・大きな海老フライのお店・ね・修・
ちゃん。」

修一の亡骸を見つめながら話を止めようとしないみずきに両親は修一の手を握りながら涙を流して聞いていた。いたたまれなくなった沙羅はみずきの横に歩み寄り肩を抱こうとしたがみずきはそれを振り払う。

「修ちゃん・早く・行こ。・今すぐ・私おなか・すいちゃったよ・。」

母親は修一の手を離し、みずきを近くへと促した。みずきは両手で修一の頬を覆った。

「修ちゃん・行こ。ね・修ちゃん・ねえ・修ちゃん・ねえ！修ちゃん！起きてよ！ねえ！何で！何で！もう！早く！何でこんなに冷たいの！修ちゃん！わたしを一人にしないでよ！ねえ！修ちゃん！何で何も言ってくれなかったの！ねえ！起きて！早く！起きてよ！ううううううう・やだよ・修ちゃん・やだよ！ううううう・。」

溜まらず大村桃子は声を上げて泣きながらみずきに近づき肩を抱きしめた。もはやみずきは立っていられず沙羅と桃子に抱きかかえられている状態だった。院長は静に病室を後にした。修一の病室から聞こえる悲鳴にも近い泣き声は暫く止む事は無かった。その泣き声を病室の外で宇都宮礼子と辻本佳織は俯きながら聞いているしかなかった。一時間ほど経過し、みずきは沙羅に抱えられながら部屋を出てきた。辻本の前まで来ると、視線も合わせずポツリと言った。

「力才さん・。」

「うん・。」辻本はみずきを力いっぱい抱きしめた。時計は夜の七時半を過ぎた頃になっていた。

修一の遺体は綺麗に清拭され霊安室に運ばれた。ストレッチャーに乗せられた修一を六人は黙って見送った。両親は六人に一礼し修一と共に霊安室へと歩き出した。途中、母親が振り返り六人のもとへ歩み寄ってきた。

「みなさん・・うう・・。今まで修一に良くしていただきありがとうございました。うございました。・・うう。・・波野さん・・忙しいのに・・ほんとにありがとうね。悲しい思いをさせて本当にごめんなさい・・。」みずきは放心状態で母親を見つめるしかなかった。六人は小さくなつた両親の背中を見送った。泣きながら修一の清拭を終えた香坂がみずきのもとにやってきた。

「みずきちゃん・・来て・・。」

みずきはコクリと頷き香坂の後を追って行つた。もはや両足がやつと動いている状態だ。香坂幸子はナースステーションの前でみずきを待つように言うと、自分の机から一つの封筒を取り出し、みずきのもとへ走ってきた。他の五人は遠くからみずきの様子を心配そうに伺っていた。

「これ・・仲代さんが・・。」

「・・え・・？」みずきの目に少しだけ力が入った。

「仲代さんが・・もし・・間に合わなかったら・・これを渡してくれって・・。」

封筒を渡されたみずきは一人で読みたいと思い五人のもとへは向わず、修一と病院を探検した時に座った受付前の椅子に座った。この日初めて涙を手で拭い封筒を開けた。手紙を開くと力の無い、ただどしい文字が並んでいた。

みずきへ

この手紙を読む頃のみずきの気持ちを思うと

俺は申し訳無さでいっぱいです。

こんな事になって本当にごめんね。

自分の病気の事

みずきに何時話をしたら良いのか分からなくなってしまつて・

話をすれば、きっとみずきは悲しむだろうし

みずきの周りの環境を考えると

みずきの笑顔を取り去る原因になることは

絶対にいけない事だと思つたんだ。

だから、俺たちの回りにいる甫や大村、礼子さんにも絶対言わないように

お願いしたんだ。俺よりも、きっとみんなの方が辛かつたんじゃないかな

つて思います。

みずき、みんなを責めないでね。

みずき

本当にごめんね。

人生の最後にみずきと出会えて本当に良かったです。

俺はずっとみずきのファンで、理解者で、そして・・・

みずきをずっと守って行きたいと思っていました。

今の心境はと言つと・・・

映画のタイタニックに出てきたジャックみたいな気持ちです。
かつこ付け過ぎかな。

船が沈んだ後、彼は浮遊物にローズを乗せて助け、自分は冷たい海の中へ。

そのときジャックは、自分の分も君は幸せになるように告げるよね。

みずき。

俺の分も生きてください。

絶対に俺の分も生きてください。

俺の死を諦めにつなげずに

希望に変えて生きてください。

俺は死にます。

でも、みずきが目を閉じて名前を読んでくれれば
俺はいつでも現れる。

だから怖がらないで、俺の分も前に進んでください。

いつかまた・・・

好きな人が出来て・・・

結婚して・・・

子供が出来て・・・

家庭を築いて・・・

孫が出来て・・・

君は俺の分も幸せになるんだ。

未来のご主人には悪いけど・・・
オリオン座の出る季節になったら
少しだけ俺の事を思い出してくれたら・・・
それで俺は満足ですって言うか・・・
我慢する（笑）

みずき・・・ほんとにごめんね。
そして、いっぱいの笑顔をありがとう。

愛してます。たとえ死んでも・・・

修一

P.S. 最後のサプライズです。コートにソースのシミをつけた犯人・・・

あれは・・・俺だった。もつと早くに言えば良かった。
（笑）

もうみずきの涙は枯れ果てていた。ただ果然と、視線は定まることなくただ果然としていた。記憶の中で只只、修一の姿を探していた。

修一が死んでから、四十九日を過ぎた頃。世間では五月のゴールデンウィークでにぎわっている頃、みずきは一人で修一の実家の玄

関先にポツリと立っていた。「仲代」の表札を見つめていた。ゆつくりと目を閉じ、そしてまたゆつくりと目を開けた。そして一度だけチャイムを鳴らした。

「はい……どちら様……」

「あの……波野です……」

「……え……？波野さん？」

「はい、みずきです。」

「あ……はいはい……少々お待ちくださいな……」修一の母は小さく驚くと急いで玄関へ向いドアを開けた。そこには波野みずきが立っていた。

「あ……波野さん……。良く来てくれました……」

「……」みずきは俯いたまま何も言わず立っていた。

「とりあえず……上がってくださいな……狭いところですけど……」

母はみずきの気持ちを察し仏壇の前へと通した。仏壇にはギターを抱えながら笑っている修一の写真があった。写真の前で正座するみずきの後ろに修一の母も静に座った。

「修ちゃん……」線香に火を灯し両手を合わせた。

「波野さん……」修一の母は静に声をかけた。

「……はい……」

「大丈夫……ですか……？」

「……」みずきは何も答えられずにいた。修一が死んでからみずきは体調不良を理由に芸能活動を休止していた。あれだけみずきをもてはやしていたマスコミは、今度はここぞとばかりにみずきを叩いた。「ドタキャンみずき」「プツン女王」「みずき何様」全ての仕事をキャンセルした洗礼を一気に浴びる形になっていた。修一の母はそんな様子を新聞やお昼のテレビで見るたびに心配をしていたのだった。自分の息子を愛してくれた女性を芸能人としては見れなくなっていたのだった。

「波野さん。こちらへ。」

「あ、はい。」

母は二階へ案内した。

「ここが・・修一の部屋です。」

「・・良いんですか・・？」

「どうぞ。見てあげて。って言っても汚いままよ・・フフフ・・。」

母の笑顔に救われ、みずきもニコリと笑った。

そこには小学生の頃から使っていた机、小学校の頃に貰った読書感想文の賞状、プラモデル、ステレオ・・修一の歴史がそこにあった。母は修一の部屋の押入れをこそそやると何冊かのアルバムを出した。

「子供の頃は大人しくてね・・優しい子だったわ。」

みずきは全てのページを捲った。小学校時代サッカーをやっている頃の修一の姿にみずきは静に笑みを浮かべた。スイカ割りでもしたのだろうか、顔には墨で○×を書かれた小学校二年のころの修一の写真にプツと吹いた。

「ああ、それね！私の姉の家に言ったときに浜辺でスイカ割りをしたのよ。あの子何回やっても割れなくてね。終いには顔が真っ黒。」

「あ・・そうそう・・。」一通りアルバムを見せ終わると今度はお茶でも飲んでいくように居間へと案内した。

居間に着くと母親は急須で静にお茶を注ぎすつとみずきの前に出し、改まった顔でこう言った。

「波野さんにお渡ししたいものがあります。」そういつて静に立ち上がると、自分のハンドバックから何やら取り出した。

「これ・・です。」

「え・・あの・・。」それは修一の携帯電話だった。

「・・でも・・良いんでしょうか？・・。」

「・・私・・携帯電話の使い方は良く分かりませんが・・。あの子は、あの子なりに辛かったんでしょうね・・。綾部さんや大村さ

んどのやり取り・少しだけ読みました。あの子はバカです・・・
あなたのような娘さんに辛い思いをさせて・・・でも・・・分かつてあげてください。あの子はあの子なりにあなたの事を・・・」
「そんな・・・私の方こそ・・・何も出来ず・・・修ちゃんには何も返せなかった。」

そういうとテーブルの上にあつた黒い携帯電話を取り、両手で胸に抱いた。

みずきは修一の家を出ようと修一の母に見送られ玄関先まで来た。
「今日は突然お邪魔してすみませんでした。」

「いえいえ・・・何もお構いできないで・・・ほんとごめんね。」

「そんな・・・返ってすいませんでした。でも・・・来て良かったです。修ちゃんの事また少し分かったような気がしました。あの・・・」

「ん？なあに？」何やら言いにくそうにしているみずきに、修一の母は優しく問いかけた。

「また、お邪魔してもいいですか？」

「ええ！ええ！どうぞ！・・・良かったらいつでも来てくださいな。」

母親はニコリと笑って言った。

「良かった。・・・じゃあ失礼します。」

「あの・・・波野さん？」母親の声にまた振り返った。

「はい？・・・」

「これから・・・大丈夫？仕事戻れるの？何も知らない人達が勝手な事言ってるけど・・・」

「フフフ・・・」みずきは笑った。そして少し息を吸うとまた小さく吐き出し、そして言った。

「世間が知ってる波野みずきは、ある一時期から世間が作ったものだから・・・だからその波野みずきがどう歩いていこうとあまり気にしてません。私の気持ちはここにあるから・・・だから大丈夫です。ありがとうございます。」

「そう・・・波野さん、強くなったね。なら大丈夫ね。」

「はい。だって私には修ちゃんが見てくれるし！」

「・・・波野さん・・・ありがとう・・・」

「じゃあ・・・失礼します。」

「気をつけてね。」

「はい・・・。」みずきは暫く歩くともう一回だけ振り返り小さくお辞儀をして返っていった。

その晩、みずきは桐生の家に居た。やっと食事を取るまで回復してきたみずきに母は少し安心した。修一が死んでからというもの、体と心が別々に存在しているように見え、食事もせず、やつれて行くみずきをただ見守るしかなかった。みずきは家に帰るとすぐさま自分の部屋に戻った。時間は夜の八時になっていた。自分のベッドに静に横になると静に深呼吸をしてゆっくりと目を閉じた。すると何かに気づいたかの様に目を開け、トートバッグを開けた。取り出したのは今日預かってきた修一の携帯電話だった。少し気が引けたが、綾部や大村とのやり取りを少しでもだけ覗いてみた。特明会病院の忘年会のやり取り、バーベキュー、そして病気の発覚・・・そのことをみずきに伝えるか否かの議論・・・修一が毎日悩んでいたことが読んで取れた。いくつかのメールのやり取りを見て携帯をしまおうとしたとき、みずきはあることに気づいた。未送信フォルダの中にメールが残っているようであった。みずきは気が引けながらも覗いてみた。そこには、おそらくみずきに送ろうとして書いたのだろうと予測されるメールがいくつも残っていた。

S u b j e c t : みずき

C o m m e n t : みずき。俺病気になっちゃったよ。でも大丈夫だよ。

S u b j e c t :

C o m m e n t : みずき。会いたいよ。

S u b j e c t : みずき

C o m m e n t : 体が痛いよ・・・助けてよ・・・

S u b j e c t : 痛いよ。

C o m m e n t : どうして・・・俺はこんなになっちゃったんだろ・
・

S u b j e c t :

C o m m e n t : 俺・・・怖いよ・・・死にたくないよ！みずき！

一度も病気に關してのメールを送った事が無かった修一は、実は携帯では何度も書いていたが、みずきに送るのを我慢していたことが伺えた。みずきは目に涙を一杯溜めて未送信メールを全て読んだ。溝落ち辺りが少し痛くなるのを感じた。みずき自身の知らないところで修一は一人で戦っていた。決して勝てぬ相手と・・・。それでも自分にはそれを悟られることの無いようにぎりぎりまで頑張つてみずきは想像を絶した。自分は修一に何を残せたというのか・・・。そう考えると、自分は何て小さい人間なんだろうと思わずには居られなかった。みずきは静に流れる涙を拭うことはしなかった。

カルテ「s」

日本中のテレビがデジタル放送に切り替わってから十年が経っていた二〇二一年。久明会病院は開院して十三年が経っていた。開院時は 僅か五名の医師で立ち上げられたこの病院も今では心臓外科、形成外科等の開設で医師数は十四名になり、外来、入院診療は元より在宅診療、在宅介護、癌拠点病院等確実に医療の幅を広げていった。

「桃子！早くしろよ！」

「ちよつと待つてよ！憲太ったらいつんなつても起きないんだもの！だから早く寝なさいって言ったのに。朝ごはん食べてる時間なくなっちゃった！」

「朝寝坊は俺に似たんじゃないぞ！早く！行くぞ！」

「いえいえ違います！あなた似です！ほら！憲太、早く車に乗って！」

「うん！」

甫は桃子との子供、憲太を後部座席に乗せると自分も運転席に走った。桃子は家の鍵を閉めると走って助手席に飛び乗った。甫はエンジンをかけ、軽く一度アクセルをふかすとゆっくりと右にハンドルを切り車を走らせた。

「保育園電話してあるのか？」

「うん！少し遅れますって言うてある。」桃子は後部座席で憲太に靴下を履かせながら言った。

「ママー。今日ね、保育園終わったら大智君が遊びにおいでって言うてるの。行ってもいい？」

「はいはい。いいよ。昨日大智君のママから電話があつたよ。良かったね！憲太」

「うん！」

「大智君んち大丈夫なのか？確かおかあさん仕事してるんだろ？」

甫がミラー越しに桃子に問いかけた。

「うん。今週の日曜日に出勤して今日はその代休なんだって。」

「キヤディーも大変だよな。朝も早いし。休日も出勤あるし。」

「大智君のママもタフよ！」

「みたいだな。お前と組んだらプロレスの最強タッグだ。アハハハハ。」

「まあ！失礼ね。甫ちゃん、冗談が仲代さんに似てきた。アハハハ。」

「そっかな！」三人を乗せた車は憲太の通う保育園へと向って行った。

以前、病院の全体朝礼は毎朝行われていたが、外来患者数の延びにつれてなかなか毎朝行うことが困難になっていった。それでも週に一回、手の空いている職員だけでも朝顔を合わせるようにしようとして、院長が木曜日を全体朝礼の日に設定しのだ。しかし今日の全体朝礼は違っていた。三日前の月曜日に、今週の全体朝礼には出来るだけ参加するようにと、所属長を経由して各セクションのスタッフに告げられていた。

「よし！間に合った！」息を切らせて甫が会場に到着した。

「お、おはよう。今日って何？何か重大発表とかあるの？」甫は、偶々隣に居合わせた香坂幸子に問うた。

「あ、綾部さんおはようございます。特に聞いてないです。主任になるべく出るようにって言われてるだけですから。」

「やっぱそうか・・・。」

「よし！セーフ！あら、香坂さんおはよう。」

二分遅れて桃子が到着した。

「おはようございます。フッフ・・・どうして朝から夫婦そろって汗だくなんですか？」

「もつさぁ・・・毎朝戦争よ！子供を保育園に送るまでは！ハハハ。」

「桃子は軽く眉をひそめながら笑った。朝礼が行われるラウンジには全員ではないが約半数程度の職員が集まっていた。ざわめく会場も院長

の登場が静寂を呼び入れた。幾分微笑みを含んだ顔色で職員の前に立った。軽く見渡し口を開いた。

「皆さん。おはようございます。今日は皆さんに新しい仲間の紹介をさせていただきます。実は、皆さんもご存知の通り皮膚科の新山先生

が今週いっばいで大学に戻る事になりました。それで今日は後任の皮膚科の医師を皆さんに紹介します。」

幾分会场がざわついた。総務課の職員が会場の外へ出て行った。十数秒後再び総務課の職員が会場に入ってきた。職員はすぐさま後ろを

振り返り、こちらへどうぞと言うようにきちんと揃えた手のひらを自分の前に差し出した。肩甲骨辺りまで伸びたストレートの髪を顰甲の

髪結いで一つにまとめて真っ直ぐ前を見て歩いていった。入り口よりも奥に離れていた甫と桃子は医師の後姿だけしか目に映らなかった。

髪の様子や背格好からその医師が女性であることは確認できた。やがてその医師は職員の前に出ると俯き加減で真っ直ぐ立ち、やがてその

顔をゆつくりと上げ、しっかりと前を見た。その瞬間、桃子の目にうつすらと涙が浮かび、甫の口がポカンと開けられた。

「うそ……。」「香坂幸子は桃子の隣で呟いた。

「みなさん。来週から当院で勤務される波野みずき先生です。では先生……。ご挨拶を。」

「みずきちゃん……。」「桃子は涙目のまま微笑んだ。みずきは足元を確認しながらに三歩まえに進み、一度職員をゆつくり見渡しそし

て話し始めた。

「みなさん。おはようございます。この度皆さんと一緒に勤務させていただくことになりました波野みずきです。専門は皮膚科ですが、内

科も診察可能です。一人でも患者さんの役に立てればと思っっています。よろしく願います。」

みずきの真っ直ぐな目はやがて甫や桃子に向けられた。みずきの目に久々に映った二人はみずきの目をも潤ませた。

みずきの挨拶の後、いつも通りの全体朝礼の進行が終わり約二十分の朝礼が終了した。甫と桃子、そして香坂幸子はその場に立ち止まっ

ていた。みずきは再び三人の姿を確認すると小走りに三人に駆け寄った。そして三人の五メートルくらいまで近寄ると静に微笑みながらゆつくりと歩み寄った。

「みずきちゃん・・・！」思わず桃子はみずきの両手を取った。

「おい、もうみずきちゃんじゃないよ！波野先生だ。」

「いえ。いいですよ。みずきで。」

「え・・・でもさ・・・ほんと・・・なんて言うか・・・元気だった？」

「はい。向こうに行く前に、みんなに会ってお話もしたかったんですが・・・みんなに会つと直ぐに甘えてしまいそうで・・・。」

「うん・・・確かにびっくりした。だってアメリカに行くって言うてそのまま音信普通だったし・・・でも宇都宮さんからはいろいろ元気そうな話は聞いていたけど・・・でもまさかこういう形で再会するとは思ってなかったなあ！」甫が一番動転しているようであった。「医者になるなんてね・・・でも、もともと高校も名門出てるわけだし・・・考えてみればアイドルやる前は優等生だったんだものね。でもすごいね。本当にすごい。」

桃子の“すごい”という言葉は全てを含んでの意味だった。名門女子高を出た後、当時一世を風靡するアイドル女優になり最愛の恋人

が亡くなり、マスコミから激しいバッシングを受け、単身アメリカに留学。その後の経過は三人には聞かされていなかったが医師になるのは並大抵のことではない。

「アメリカに行った後・・・どうしてたの？」甫がみんなの聞いたことを代表して質問した形になった。身辺について質問されたのはかつて自分が演じた映画の試写会で今恋人は居ないのかという質問以来だが、今回は全く別のニュアンスが含まれていた。

「ほとぼりが冷めた頃、日本に戻って・・・医学部受けて・・・。」

「あの後、新聞の一面に出たもの・・・波野みずき突然の引退！」とか・・・ニュースにも出たんだよ。」

「ええ。知ってます。カオさんとは今も良いお友達っていうか・・・やっぱり人生のお姉さんみたいな感じで、連絡は取り合っているから・・・日本での事はいろいろ知ってます。アメリカに行っても大変でした。でも、一年もすればだんだんマスコミに追われることもなくなつて。日本を出て二年たったところにこっそりまた戻って・・・。」

「なるほどね・・・大変だったんだね。でもそりやそうだよね・・・んで？大学・・・どこ行つたの？」甫は腕組をしながらみずきに同情しながらも、幾分聞きにくそうにみずきに聞いた。

「北海道の札幌医科大学です。」

「札幌かぁ・・・確かあそこの皮膚科は悪性黒色腫の研究が盛んだ・・・みずきちゃんそれで・・・」甫が感慨深げに言う。

「はい・・・確かに大変でした。大学に合格しても、大学内では冷やかしもあつたりで・・・。」

「・・・よくこらえたね・・・。」そういうと桃子は少し固く唇を噛む仕草を見せた。

「・・・私の心の中には・・・いつも彼の気持ちがあつたから・・・彼が私を押してくれてました。勉強していくにつれ、段々あの頃の彼の状態や私に対する思いやりだったりとか分つてきたりして一時期つらくなったりすることあつたけど・・・でも真正面から受け止め

てくれた彼に恩返しできるのは彼と同じ病で苦しむ人を助けに行くことだと思つて・・・そう思うと身の回りに起きる問題なんて・・・少しも苦にならなくなりました。」

「すごいよ。みずきちゃん。」甫は小さく重く言つた。ふと気づくとみじきの後ろに院長が近寄つて来た。三人がみずきの背後に一礼するのを見て、みずきは振り返り院長の姿を確認すると軽く一礼した。

「はいはい・・・みなさん・・・いろいろ積もる話もあるだろうが患者さんが来ます。そろそろ現場に向かいましょう。」

「あ・・・！すいません。みず・・・じゃなかった・・・波野先生・・・今日はこの後どうするんですか？」

「あ・・・今日は現場をいろいろ見て回ろうかと・・・」みずきは院長の顔に視線を送りながら三人に言つた。

「ハハハ、綾部君。先生は昨日こちらに着いたばかりだからお手柔らかにね。」

「あ、はい。先生！じゃあ仕事終わったらみんなで食事でも行きましょう。」

「甫ちゃん！先生疲れてるよ。」桃子が甫を制止するように言つて聞かせた。

「先生、綾部さんちね、男の子がいるんですよ。」香坂が特ダネを明かすようにみずきに言つた。

「えー！本当！？会いたい！」

「じゃあ！今日うちに来てください！久しぶりにがんばっちゃおうかな！」

さつき甫の言葉に口を挟んだ桃子が、今度は逆のことを言っている。甫はきよんとした。

「あれ？どうしたの？」桃子は平然と言つてのけた。

「いや・・・アハハ別に。そうだ！そうしよう。ね？先生いいでしょ？早めに切り上げれば問題なしでしょ？」

「ええ！行きます！」

「んじゃ香坂、仕事終わったら先生うちにつれて来てくれ。俺たち先に上がって憲太迎えに行つてそのまま買出ししてくるから。」

「はい！OKです。」

その光景を院長は微笑みを浮かべ見ていた。

朝礼の後、みずきは院内を見て回った。自分が担ぎこまれた救急外来。修一と初めて言葉を交わした採血室。その奥にある検査室。当時の技師長は定年退職をしていた。検査科内部に足を踏み入れた。

「すいません。こちらに昔、仲代さんって言う細胞検査士さんいましたよね？」 みずきの言葉に振り返ったのはかつての修一の同僚だった。彼は当時の状況をみずきに話すと病理室へ案内した。

「先生。これが仲代が使っていた顕微鏡です。・・あ・・すいません。ちよつと外来が立て込んでるもんで、戻りますね。」

「あ・・ごめんなさい。ありがとうございました。これからよろしくお願いします。」

「あ、いえ。こちらこそ・・。」軽く会釈をすると男性はまた自分のブースへ戻っていった。みずきは机の上にぽつんと置かれている顕微鏡に目をやった。電源ボタンや視野のピントを合わせるレバーが人の手によつて表面の塗装がうつすらと削れていた。みずきの右手の人差

し指がそれらに触れ、最後に接眼レンズへと移った。このレンズを通して自分の病変を発見したのかと思うと、目に厚いものを感じずにはいられなかった。しばらくあたりを見回すとみずきは静かに検査室を後にした。昼食を職員食堂で終えると今度は病棟へ向かった。療養病棟がある五階には体の不自由な老人や認知症の発症した老人たちがいた。車いすにのつて廊下を移動している老婆が横をすれ違おうとする

みずきに目をしょぼしょぼさせながら手を差し出した。みずきはそれに気づくと両手で、差出してきた老婆の左手を取りながら、目線

を合わせようと老婆の目線よりも下になるようにしゃがみこんだ。

「こんにちは・・・お加減はどう？」みずきはにつこりと微笑む。

「先生・・・先生・・・今日はなあ・・・娘が会いに来てくれるんだあよ・・・もうくるんかなあ・・・迎えに行かないと・・・。」

「ああ・・・そう！よかったですねえ・・・。」

みずきと老婆のやり取りを見て看護師が駆け寄った。

「先生！すいません！佐藤さん。娘さんは三時ごろだから、まだ来ないのよ。もう少しお部屋で待ちましようね。」

「ああ・・・そうかね？じゃあ戻るかねえ・・・。」

「先生すいません。もう朝からこの調子で・・・。」そういうと看護師は車椅子を押し老婆を病室へ連れ戻った。みずきは目を細めて二人の後姿を見送った。そしてみずきはあの部屋へと足を向けた。

三階のナースステーションに行くと香坂幸子がいた。彼女はみずきに気づくと駆け寄ってきた。

「仲代さんがいた部屋は今日は誰もいません。はい・・・これ・・・」
そういうと香坂は特別室の鍵をそっとみずきに手渡した。

「じゃ！先生・・・後でね・・・。」

「うん・・・ありがと。」みずきは礼を言うと鍵を手に特別室へと向かった。

部屋に入るとベッドにはシーツだけが敷かれ、掛け布団と枕はきちんとその上にたたまれていた。部屋にゆっくりと歩み入る。修一の亡骸を見た枕元に立った。あのときの静かな修一の顔が幻のように浮かんで、そして消えた。ゆっくりと部屋の中を見渡した。今度は窓際に向かい、少し広めの窓をゆっくりと開けた。やさしい風がみずきの髪とカーテンを揺らした。目の前には、遠くに富士山を望むことができる。あの時、修一の身の回りの環境など知る余裕などなかった。この景色を修一は見ていたのかと思うと胸の辺りが苦しくなったのと同時に、怖がらずにこの景色を見ている今の自分に時の流れを感じていた。

やがて就業の時間を迎える。最後にみずきは診療情報管理室へと向かった。

「すいません。ここに昔、仲代修一という患者が入院していたと思うんですが・・・カルテとがありますか？」

机の上に足を乗せていた若い男性はみずきの声に気づくと慌てて体勢を直した。駆け出しの診療情報管理士だった。

「あ！すいません先生！よろしく願います。」

「あ、こちらこそ・・・。」慌てて挨拶する彼の姿がとても可笑しかった。みずきはくすつと笑った。

「で・・・患者さんどなたでしたっけ？」

「仲代修一です。ナ・カ・ダイ・シュウ・イ・チ。」

「あ・・・はい。ナカダイシュウイチさんですね？」そういうとさっきまで足を乗せていた机の上にあるキーボードを叩き始めた。

「・・・あの・・・すいません・・・ここにはないです。」

「え？でも確かにここで・・・」

「あ・・・いえ・・・ここには無いというだけです。亡くなった方は別倉庫に保管してあります。」名前を聞きなおしたのと、“無くなった方

”という言い回しで彼がナカダイシュウイチがこの病院の職員であったことを認知していないように思えた。十年の月日の経過を感じさせ

た。彼は裏にある第二カルテ庫へとみずきを案内した。二重の扉でできていた。暗証番号形式らしい。彼はドアノブ上にあるボタンを四回

押した。どうやら四桁の番号か。みずきは頭で勘ぐったが彼に気を使い見ないフリをした。それに気づいたのか彼は言った。

「ああ・・・先生。ここの暗証番号は0514です。院長の誕生日なんです。もし御用がありましたら、ここのキーで0514と入れて

いた

できれば開きますよ。」

説明をしながらこちらへといわんばかりにそろえた左手でみずきを中へ促した。

「えつと・・・この列なんですけど・・・ナカダイ・ナカダイ・・・あ！これだ！あった！」みずきにカルテを手渡すと同時に彼の院内 PHS が鳴り出した。

「あ・・・いけね！こんな時間だ・・・すみません先生、私五時半から会議なんです。ここ開けっ放しにしていきますね。仮に締まっても中

からでしたら開きますから・・・じゃあすみません。・・・あ！もしもし！はい！すみません！今行きます！」

彼は電話でかけてきた相手に詫びながらカルテ庫を出て行った。

「・・・あ・・・どうもありがとう・・・」みずきは微笑みを浮かべながら彼を見送った。みずきのお礼の言葉はきつと彼には聞こえてないだろうと感じた。そして改めて“ナカダイシュウイチ”のカルテに目をやった。

カルテの表表紙には赤の太いマジックで大きく“S”と書かれていた。死亡という意味のステルベンの頭文字だった。みずきはカルテを開いた。そこにはその当時みずきが知り得なかった修一の病態が鮮明に記録されていた。修一の極限の精神状態、施された処置、処方された薬、様々な検査結果・・・どれほどの状態なのかが伺い知ることができる。みずきの涙がカルテを一滴、また一滴とぬらした。「修ちゃん・・・今ならわかるよ・・・つらかったね・・・ごめんね・・・やっとここまで来れたよ・・・あなたのおかげです・・・私・・・いっぱいがんばるね・・・見ててね・・・修ちゃん・・・」あの時の記憶が鮮明に蘇ってきた。五分も時間が過ぎたろうか。遠くから自分を探しているような声が聞こえた。

「あーいた！なんだあ・・・！ここにいたんだ！先生そろそろ行きますよう！綾部さん宅！」香坂幸子が仕事を終えてロッカーに行く途

中みずきに声をかけに来たのだった。みずきは慌てて涙を拭いて振り返った。

「あ！はい！私も着替えて行きます！」

「じゃあ！ロビーで！」

「はい！」みずきはそういうとカルテを持って医局のロッカーに向かった。ロッカーに着くとトートバッグに修一のカルテを大事にしまった。身支度を整え、あの“水色のコート”を羽織ってみんなの下へ走った。肩にはまだたこ焼きのソースが時を越えてもなおそこに残り、みずきと一緒に揺れていた。

（完）

カルテ「s」（後書き）

今回の小説は、この章で最終となります。この物語の中では、恋人との甘い時間がほとんどない状態の恋愛物語となっています。この二人にはいろんな意味で時間がありませんでした。

その中でもつながりを持つと必死にあえぎます。皆さんは。。。どうですか？時間を、命を無駄にしていますか？今居る人は、本当に一緒にいたい人ですか？

あなたが本当に必要としたい人、つながりを持ちたい人、見つめなおしてみては？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0520o/>

「S」（エス）

2010年11月2日02時18分発行